

# 奇譚クラブ

1959年 10月号



連載告白小説 『或る倒錯生活』 西村憲一  
異色創作 『バスガールの運命』 滝畑三郎

奇譚クラブ

昭和三十四年十月号

10

奇譚クラブ

昭和三十四年九月二十日印刷 十月号(第十三卷第十三号)  
昭和三十四年十月一日発行(毎月一回一日発行)  
昭和三十一年四月二十日 第三種郵便物認可

定價二百円

## THE KITAN CLUB

Published Monthly By Tenseisya

Osaka Japan



IBM. 2805



限定版特別号の第二弾！ 全巻に張る美花の香り！

# 緊縛写真と緊縛画集

限定版特別号の第二弾として、お待ちかねの、『緊縛写真と緊縛画集』が完成しました。本特別号は題名通り、絵画と写真にて全巻を構成、定評ある四馬孝氏の筆にて、写真にては不可能なところを描出し、同様に、絵画にては足りぬニュアンスと雰囲気美人モデルの緊縛姿の実に写真に依ってマネヤ諸氏を堪能せしめ得ると自負致しております。華麗な緊縛芸術の殿堂が皆様の手を待ちます。尚書店売りは致しませんので直接本社へお申込下さい。

## 素晴らしい写真集

- 序曲「手吊り」のポーズから（四葉）
- 第二楽章「手吊りと足吊り」（四葉）
- 緊縛感のクローズアップ（四葉）
- 拘束女性の経過（四葉）
- 股間縛り（四葉）
- 麗しき果列（四葉）
- 狂っただ果実（四葉）
- 晒し者なんだ（四葉）
- 腰巻きの乱舞（四葉）
- 女性の歎び（八葉）
- さア、どうでもして（六葉）

- 陳列された女体！（四葉）
- 忘れぬ豊満美（四葉）
- 黒蛇地獄（四葉）
- 女のふんどし（四葉）
- 女のサボータ（五葉）
- 吊り人形の哀歌（五葉）
- 断然、これは凄いの！（四葉）
- 女囚第十四号罷り通る（二葉）

お申込は  
大阪市阿倍野郵便局  
私書函第十四号  
天 星 社 へ

## 四馬 孝緊縛画集

- 1 女体耐久テスト
- 2 女体は美しき玩具
- 3 素晴らしい会食
- 4 人間燭台の実験
- 5 オシメカバーと大きな赤ん坊
- 6 物置小屋の怪
- 7 白いけにえ
- 8 生埋めの私刑
- 9 アクロバットの訓練
- 10 奴隷という責め
- 11 女学生の嫉妬
- 12 水責にあう美女
- 13 回転する女体
- 14 浴場の悦楽
- 15 女の掟（華かなリンチ）
- 16 鞭の御馳走
- 17 三醜女の逆恨み
- 18 淫虐な美容師
- 19 遠慮はいらねえぜ
- 20 狂気の復讐
- 21 女体の荷物
- 22 ヤキを入れてやる
- 23 トランク詰の裸女
- 24 電気責めテスト
- 25 吊し責めにあう美女



定価 五百円  
略号「緊縛」  
各冊限定番号押捺

## ☆懸賞愛読者原稿募集☆

### 規定

- 一、原稿の内容は本誌の掲載にふさわしいものであれば、どんなものでも結構です。
- 二、創作、小説、文庫、研究、物語、告白体験等形式は如何なるものでも構いません。
- 三、枚数は最高百五十枚位まで（四百字詰）
- 四、必ず未発表の作品であることが必要です。
- 五、締切は毎月十日。以後に到着の分は翌月廻しとします。
- 六、入選者は毎月の誌上に発表。賞金は一篇につき二千元以上五万円迄贈呈いたします。
- 七、掲載外の佳作には、本誌三月分乃至一年分贈呈いたします。
- 八、封筒には「懸賞愛読者原稿」と朱記のこと。原稿返戻希望の方は返信料同封下さい。
- 九、発表に支障のある箇所は掲載の際に訂正又は削除することがありますから予め御承諾願います。

天 星 社 編 集 部

## 読者原稿募集

- 【体験、告白、手記】 なたにも一つや二つは必ず思い出とか、体験とかいったものはあるものです。物いおさるは腹をくくるのとえ、どうか皆様の真実の叫びをお寄せ下さい。内容や長短は問いません。採用篇には本誌三月分以上贈呈します。
- 【創作、小説、物語】 一度自分も小説らしきものを書いてみようと思われた方は出来の如何に拘らず御遠慮なく御投稿下さい。但し未発表の自作に限ります。いずれも誌上の匿名は御自由です。採用篇には本誌五月分以上贈呈します。
- 【映画、雑誌通信】 映画や既刊雑誌の中で特に興味をお持ちになった事項がありましたら通信下さるようお願いいたします。映画は撮影所名、題名、雑誌は発行所名、雑誌名、発行年月の明記をお願いします。掲載の分には本誌三月分贈呈いたします。
- 【レポート】 新聞記事（週刊誌を含む）の切り抜き又は感想など皆様の関心をお持ちの事項について御知らせ下さい。掲載の分には本誌二月分以上贈呈します。
- ◎尚、以上の五項目の採用原稿には御希望により編集部作成の各種フォトを贈呈する準備がございます。
- 【読者通信】 編集者、執筆者、投稿者への通信、呼びかけ、前号の批評、希望、感想、思い出話、或は読者相互間の交歓文通、応募、編集上の御意見など忌憚なきお便りをどしどしお寄せ下さい。誌面の許す限りつとめて発表いたします。

## 本誌御購読の榮

- 一月分（1冊）送共V 二百円
- 三月分（3冊）送共V 六百円
- 半年分（6冊）送共V 千二百円
- 一年分（12冊）送共V 二千四百円

本誌は直接郵送による販売を主としておりますので、購読御希望の方は直接発行所宛にお申込下さい。半年分予約の方には景品として大手札型緊縛写真三枚、一年分予約の方には同じく六枚一組贈呈いたします。御予約の方は発売の都度販重荷造りの上急送申し上げます。尚、発行所の旧号は別項記載の通り在庫の上、御注文をお待ちしております。

## 奇譚クラブ 定価 二百円

十月号（昭和34年）：復刊第四十九号  
第十三巻第十三号八通刊第二百二十七号V  
昭和三十四年九月二十日印刷  
昭和三十四年十月一日発行  
編集印刷兼発行人 吉田 珍  
大阪市阿倍野郵便局私書函第十四号  
発行所 天 星 社  
電話 天下茶屋 三六〇七番  
振替口座大阪第五〇〇四二番

郵送金は、事故の際困りますので出来る限り振替、現金書留、又は書留にてお願い致します。切用代用は、八円か十円の少額のものを利用下さい。宛先は必ず標書でつきりお書き願います。尚振替用の方は御申込次第お送りいたします。



# 縛られた女体ばかりの写真集 第一弾!! 限定版『緊縛フォト・アラベスク』

各冊、限定番号押捺 特価 五百円 (送共)

限定版特別号第一集として、最近撮影の新人モデルによる各種緊縛ポーズの中から選集いたしました。題して「緊縛フォト・アラベスク」。文字通り表紙から巻末に至るまで若き美人モデルの緊縛写真ばかりを網羅いたしました。可憐愛すべき緊縛フォト・アラベスクとして、どうか一冊を皆様の座右にお備え下さい。

## 収録内容 二十六項目、写真七十七張

- |                      |  |
|----------------------|--|
| 一、鏡……………愛川 悦子        | 十五、鏡台と腰巻……………花坂 道子                     |
| 二、銘花二輪……………花坂 道子     | 十六、腰巻と鏡台……………花坂 道子                     |
| 三、鉄鎖……………大塚 啓子       | 十七、奇妙な休憩……………絹川 文代                     |
| 四、締縛……………大塚 啓子       | 十八、田代悠子表情集(その二)                        |
| 五、庭園にて……………絹川 文代     | 十九、脱がされた高手小生……………愛川 悦子                 |
| 六、謎の微笑……………田中 芳代     | 二十、亀甲縛り……………愛川 悦子                      |
| 七、田代悠子表情集(その一)       | 二十一、吊責折檻……………村井知可子                     |
| 八、誇る脚線美……………田代 悠子    | 二十二、立木縛り……………村井知可子                     |
| 九、この足どうかしら……………田代 悠子 | 二十三、豊 醇……………愛川 悦子                      |
| 十、裏と表と……………愛川 悦子     | 二十四、乱れ髪三景……………大塚 啓子                    |
| 十一、落陽の丘……………愛川 悦子    | 二十五、椅子と緞轡……………愛川 悦子                    |
| 十二、ボリウムの花園……………大塚 啓子 | 二十六、組上の美鯉……………絹川 文代                    |
| 十三、緊縛感の綾……………大塚 啓子   | 八本限定版特集号は一切書店売りは致しませんから直接発行所宛お申込願います。V |
| 十四、奔放な肢体……………大塚 啓子   |  |

## 臨時増刊 悦特 No 2 定価 三百円

「悦虐小説と緊縛写真」特集号第二集 (略号「悦特第二」)

巻頭の四馬孝画、緊縛絵画から始まって、百十六葉に亘る特写グラビヤ写真、本文の昭和二十八年年度本誌掲載の傑作サド読物と全巻息もつかせぬ充実した、S一過倒の編集により二百頁を擁う妖気は、必ずや皆様の完全に圧倒することでしょう。

### 四馬孝緊縛画集……………

- |                 |                    |
|-----------------|--------------------|
| ◎狂背負い……………◎捕われ人 | ◎深夜の水浴……………◎椅子縛り   |
| ◎腹込む縄……………◎水道責め | ◎あんよは上手……………◎答打ちの果 |

### 悦悦姿態特選集……………

- |                   |                    |
|-------------------|--------------------|
| ◎逢瀬のポーズ……………◎絹川文代 | ◎しづかなる受縄……………◎花坂道子 |
| ◎はかなき悶え……………◎田中芳代 | ◎美囚第十四号……………◎絹川文代  |
| ◎遙姿晒陽……………◎愛川悦子   | ◎悦びの一刻……………◎浜本喜美   |
| ◎被なす白縄……………◎絹川文代  | ◎乱れさく良花……………◎絹川文代  |
| ◎柔肌の喘ぎ……………◎平野笑子  | ◎荒縄と美貌……………◎絹川文代   |
| ◎未知の驚き……………◎岩井知子  | ◎悦虐狂奏曲……………◎大塚啓子   |

### 往年の好読物集……………

- |                           |                     |
|---------------------------|---------------------|
| ◎造形美術……………◎花坂道子           | ◎艶肌の拘束……………◎絹川文代    |
| ◎ロープ・ブラジャー……………◎愛川悦子      | ◎妓の影……………◎泉 辰之助     |
| ◎凌辱の幻想と期待……………◎古川 裕子      | ◎僕の記録……………◎黒井 珍平    |
| ◎くすぐられるよろこび……………◎山本 百合    | ◎キヤメラ愛好会……………◎岡田 咲子 |
| ◎被虐の愛情……………◎若林 啓子         | ◎責 苦……………◎竹谷 十三     |
| ◎アブノーマル・ファンタジー……………◎岡田 咲子 | ◎変の字問答……………◎浮家 鷹三   |
| ◎マダム紅鶴……………◎野村恵美子         | ◎哀艶責め場絵断……………◎岩 広志  |
| ◎蜘蛛と蝶々……………◎飛田 良二         | ◎由紀子のお仕置……………◎大川由紀子 |
| ◎聖面の誘惑……………◎近見 啓          |                     |





# 奇譚クラブ 復刊第四十九号 目次

巻頭 口絵

四馬孝傑作集謎の女医……………四馬 孝・画  
責 絵 二 題……………滝 れい子・画

「城壁に吊られた人質」……………

「山小屋の美人失踪」……………

緊縛フォト「真紅のシユミーズ」……………絹川文代嬢

特種写真「やんちゃな妖女」……………絹川文代嬢

特 種 写 真……………北原 純子・画

「望郷」洗腸マソヒズムについて……………山田那津子……………18

細腰への憧憬（羽村京子さんへ）……………古留 節人……………22

「創作」バスガールの運命……………滝 知 三郎……………24

新稿 ある夢想家の手帖から……………酒 正三……………32

愛好者の記録……………あき・かつこ……………38

創作「孝行息子」（嫁いびり第二話）……………東町 三郎……………40

マニアの独り言……………S・S 生……………49

アブチック・ドリーミング「石を抱いた女」……………雪 俊 遙……………50

夢三夜「第一夜・いけにえ」……………牧 高志……………61

麻生保氏の生活と意見（九）……………麻 生 保……………66

創作 猩紅匪（後篇）……………菅 良太……………70

「緊縛写真と緊縛画集」について……………近 藤 一……………78

本誌百号突記念懸賞募集原稿入選作品……………

鮮血の対決（乳房に火をつけるな・第七回）……………藤 本 仙治……………80

現代マソヒズム芸術時評……………原 忠正……………90

「映画通信」お盆映画の特異シーン……………嵯 峨 美也子……………94

創作「海の灯」……………三 条 卓史……………98

懸賞読者原稿入選作品……………

「秘めごと」……………南 時夫……………106

私のイメージ「マダム」……………近 藤 一……………117

連載小説「或る倒錯生活」……………西 村 憲一……………120

告白「女性切腹についての難感」……………皆 川 波留子……………128

川 柳 雑 記……………三 条 卓史……………131

告白「エネマ・マニア」……………清 水 暗星……………134

「創作」汚辱地帯……………榎 村 奏……………140

忘れ得ぬ被縛女優達……………銀 幕 良夫……………148

告白「自分をハダカにする（最終回）」……………松 井 籟子……………150

懸賞募集（告白と手記と体験）原稿入選作品……………

「私は女性の自刃を見た」……………東 福 次郎……………156

読者通信……………163



臨時増刊号 『サド特集号 第二集』

定価三百五十円 (送共) 略号 (S特第二)

「麗美巻頭口絵、四馬孝傑作画集」

(二十四点)

☆密質倉庫  
☆悪魔のような女

☆吊し責め  
☆乳房責め

「春美の受難記」

☆人間フープ

シリーズ四点

☆檻 禁

☆新品第一号

☆奴隷船

☆嫉妬の鬼

☆妙な吊責

☆地下室の苦行

☆雨中の引廻し

☆苦悶

☆奈落のリハーサル

「被縛女体特選集、グラビヤ写真」

(百九葉)

○絹布と絹肌……田中芳代

○仇姿黄八丈……絹川文代

○飾り人形……大塚啓子

○縄さばき……浜本喜美

○台上的賛……絹川文代

○挑発の笑み……絹川文代

○若妻の秘美……花坂道子

○被襲……花坂道子

○白い若鮎……田中芳代

○深海魚……田中芳代

○麗囚……絹川文代

○哀れなる賓客……絹川文代

○三面鏡……愛川悦子

○豊胸……愛川悦子

「興趣尽きぬS的読物」 書下し読物二篇

私の責画 責めの美人と皮革について……四馬孝

緊縛フオトと緊縛モデル夜話……覆面子白頭巾

南村俊平戯画 猪大人の御乱行

強制女体浣腸機

「悦虐小説と緊縛写真」 特集号

定価三百円 (送共) 略号 (悦特)

「悦虐小説傑作集」

S的作品のエッセンス

雌獣の手記……(近見 啓)

呪縛……(辻村 隆)

妻は縛らず……(岡田 圭介)

悦虐の旅役者……(青山三枝吉)

夕の朝顔……(那須不二雄)

長期刑……(古川 裕子)

続・囚衣……(古川 裕子)

私の思い出……(岡田 咲子)

私の主題……(岡田 咲子)

片耳伝奇……(窪村 弘)

色狼……(児島 光)

縛られた妻以前……(早川新二郎)

女奴隷の手記……(北山カオル)

燭光……(久留木 栄)

受難記……(岡田 咲子)

地獄絵行脚……(長岡愛一郎)

怪奇曼陀羅教……(緑 猛比古)

鉄格子の中に……(小坂多美枝)

「グラビヤ緊縛写真」

百十四葉の傑作

妖精(ニンフ)……木洩れ陽

放謀成敗心

三ツ葉葵のプロファイル……夢

間諜責め

誘拐……競

三処責め

羅致……首

黒タイ

ブレイ……シユミーズ

観念

「四馬孝画責画集口絵」

白魚の悶え……(燐 光)

宙に踊る……(妻は縛らず)

苦悶の前奏……(女奴隷の手記)

アクロバット……(色 狼)

鉄鎖のきしみ……(続・囚衣)

濡れる朱唇……(長期刑)

籠の白鳥……(縛られた妻)

土蔵の花……(夕の朝顔)



# 謎<sup>なぞ</sup>の女<sup>じよ</sup>医<sup>い</sup>

彼女が静かに開けた、その薄暗い室には、奇妙な恰好で吊された白い女体がうかび上ってきた。





# 城壁に吊られた人質



滝  
れい子・画





山小屋の美人失踪



〔緊縛フォト〕

# 真紅のシュミーズ



モデル  
絹川文代







〔特種写真〕 やんちやな妖女







モデル 絹川 文代



# 見 露 諜 間

胸の縄に差し込まれた木刀がこじられると、むっくりと膨れ上った乳房が押し出されてきた。健気な女間諜の運命や如何に？



北原純子・画



新しい文献研究誌

奇譚クラブ

1959年10月号

(第十三巻 第十三号 通刊第百二十九号)







# 望郷

(ぼうきよう)

## △浣腸マゾヒズム▽について

山田那津子

望郷といっても、フランス映画のジャン・ギヤパン主演の望郷(ペペル・モコ)ではありません。私のひそかな希いである「浣腸」にひかれる心と申しましょうか、その様な感じを、一種のマゾヒズムへのいざないとして考えての「望郷」でございます。

浣腸マゾヒズムについての、諸兄姉の本質論、及び種々に発展する幻想に關しましては本誌に既に数多く発表せられ、論争されておりますのに、今更、私が殊更らしく申し上げることはないようにも存じますが、私なりの

考えかた、感じかたというような点を発表させて戴きたいと存じます。結論的には大差のない処に落ち着くとは思いますが、その道程の角度を変えて観ることによって、近代的なマゾヒズムに、新風を送ってみたいと、甚だ潜越な念願を致しております。

以前、どなたかの御発表にもありましたように、アブノーマルと普通いわれる世界の中にも、二通りの種類があると存じます。

例えば、傷つけるとか、必要以上の苦痛を与えるとか、激情の趣くところ、後のことは

余り考えないといいますが、相手を庇わない方法を用いる、極めて程度の進んだ段階がその一つでしょう。

もう一つは、相手も自分も充分に庇って、しかもその中から、サジズムなり、マゾヒズムなりを感じとって行くという、極致の礼賛者からは、生ぬるいといわれるかも知れない一般的な方法でありましょう。

私自身がマゾヒストであるため、マゾの見地からお話しをすすめるより他ないのですが一般的にノーマルといわれている中にも、領



域の中というものは確かにあると存じます。今日のノーマルなモラルは、十年前、二十年前にはとんでもないアブであったかも知れませんが、いえ、確かにそうだといいい切れる事柄も幾例があります。

私達が現在、アブの世界に探求している事でも、将来、その中のある部分は、アブでなくなつて、極く一般的な事柄とみられる様になつて行くのもあるでしょう。私達としては領域を拡めるパイオニアとして、すすんで行くという運命を背負っていることにもなるのではないでしようかしら。

文化の進んだ今日、私達は、何の領域についても、最早、単純な充足や充足感はなり立たなくなっています。動物が食物にありついた時のような、本能的な満足感だけでは、最早、満足感にはならないのです。そこで思索の過程を経て、又領域を拡めて、現実の平常な現象に魅惑的な意味を持たせて、適当に充足感をつくり出さなければならぬのです。

前置きが長くなりましたが、本来の洗腸マゾヒズムの解析に入りましょう。

人間の生活にとって、排泄ということは、極めて当然のこととして、特に面白いとか、興味があるとかいうことではありません。只汗にしても、トイレに於けるそれにしても、目、耳、鼻から排出するものにしても、通常は人目に触れない、という処に、感覚の領域

が特殊に発達した人達にとつて、思わずハッとさせたり、ドキリとさせたりするものがあるのだと思います。

大正時代の文学に散見される思想ですが、風邪引きを装って、頸にホータイを巻き、水薬の瓶を手にして街を歩くのが当時のモダン・ボーイであり、フレッシユ・ハイティーン・ガールであつたようです。これには、人間には粧

えるものに対する一種独特の「ひかれる感情」と申しますか、そういうものがアブ以前の領域に存在することの実証の一例と申せましょう。特にこの場合、より強いものにでな



く、より弱いものに粧っていることに一層ひかれるのではないでしようか。

男性の女装とか、ゲイボーイに対する、旧いモラルからの一応の否定と無関心を示しながらも、内心、秘かに理解し、その存在を容



認される方々は、実際には随分沢山居られるのではないでしようか。これは女性の男装に對する、女性の人気とか關心等とは本質的に異ったものでありましよう。女性が本能的に男性に危惧を感じ、代替的に、異性を同性の中に探求する無理のある姿態よりは程度の高いものであることを、女性の身として辛うじて了解致します。

今、弱いものに対する關心と申しました。しかし、本質的に弱くてはならないのです。本当は病気でないものが、病気を装ったものでなくてはならないのです。ですから、私達が興味をもつものに排便があるとすれば、この過程では健康であつてはならない訳です。常態より少し病的、即ち下痢でなければなりません。けれど、下痢でさえあれば、実際の病気であつてよいかという、それは困ります。そうではなく、粧える病気でなければならぬのです。そこで、粧える病気をつくり出すために、浣腸や色々な下剤の服用、更に実際に腹痛を伴つて、ある程度重症感まで感じ得るものにヒマシ油の大量服用等が考えられてまいります。

又、少し変つた方法としては、人為的に起す軽い寝冷え、つまり大腸カタルを起さない程度の結腸。時には直腸上部だけを拭いや水枕で冷す方法。按腹といいますが腹部を揉む方法等、其の他にも数えきれない位あると

存じます。

尚、他に特別な例として、排泄とは申しませんが、酔つた人などがよく店をひろげる八百屋、即ちモドスという事も挙げられます。これも病氣と関連がありますが、特に女性の場合、體質の關係でもあるのでしうか、乗物に酔い易く、アルコール類に弱く、そのような病氣とはいえない状態で本当に苦しむ都合が男性より激しいと思います。残念なことは、この症状は人為的にこしらえた場合でも、そうでない場合の苦しみと変わらない点です。

私自身としましては、今まで申し上げました、下痢と嘔吐の両症状について特にひかれるのです。勿論、人間はエゴイストの半面をいつも持っていますから、それらの事柄から不潔感を取り去る為、勝手に、病気でない症状を觀念として作り上げるでしょう。前に申しました、粧える美しさにひかれるものと相和して、女性特有の夢を築き上げ、其のイメージを、マゾヒストなるが故に自分自身をモルモット化して、技巧的に適用し一定の症状を作り上げた上で、粧える病める身としての症状を、マゾ的に楽しむという一連の成果を嗜好するものでございます。

浣腸に限定して考えますと、同じ人為的作成にしても、下剤やヒマシ油の服用とは施薬方法の違いが重要な役割果し、そこに

多くの分野のマゾヒズムが豁然として拓けてくるのでございましょう。

施薬の前後に於ける秘密感と申しますか、期待と羞恥、自己反省と自己嫌惡に加えて、孤独な罪惡感のようなものが織り交つたマゾ感があるのです。

期待に属するものとしては、プレイを思い立ったときから、実行までの間は勿論のことですが、日頃、関連のある資料を発見して胸をときめかすことや、その為の器具類を集める時の氣持もこれに属するものでしょう。

施薬については、その人によって千差万別でしうが、自分自身で行う場合と、他からの強制の場合とによって、マゾの分野も相当な開きがありましようし、器具、方法、薬品、量によつても、当然、その効果は變つてまいります。又、その状況、解釈と申しますか、受けとり方によつても非常な相違があるのも当然でございましょう。

効果につきましては、私の体験では、最も簡便であり乍ら、相當に強い効果の期待出来るものに、イチジク浣腸、及びシリンドーによるグリセリン浣腸がございます。成分は多少の差はあるようですが、水とグリセリンが半量宛のようです。イチジクでは二〇CCと一定量であるのに比べ、シリンドーでは薬量は加減出来、相當大量まで可能で、必要の程度で異つてくると存じます。



器具も又、その程度によって変わるのは当然でしょうが、大量が必要な場合、イルリガートルでは一立以上のものは入手にくいかと思えます。ホーロー引きのトイレ用の手洗い等でも利用出来ましょう。

以前に一度、下剤使用の体験を告白致しました事がございましたが、下剤でプレイを致しますと、どうしても普通量より多く服用してしまいますので回復が遅いのですが、終りに大量流腸で洗腸致しますと、嘘のように気



分が良くなります。しかし何れに致しましても、飽くまでも、粧える病いとしてのプレイですので、清潔と滅菌には充分な注意を払うのは当然のことです。

下剤の中、錠剤になっているお薬は、若い女性にとっても、女性によくある便秘症の手当や、又、美容上の必要からも割合になじみの深いものだと存じます。私の勤め先などでも、皆様がよく、下剤をかけたが効き過ぎて体がダルイの」と云うような話をなさってい

らっしゃるのを耳にいたします。私は下剤の服用法については、よく承知してありますので余程、教えて上げたいと思うことがあります。自分がこのような嗜好をもっていることを知られはしないだろうかという心配が先にたって、つい、いい出しがそびれてしまうのです。

下剤は沢山の種類があります。ヒマシ油は即効性があり、多量に服用しますと、一時間余りで効力があらわれますが、飲みにくくもあり、又、性質上、お腹の中をキレイに掃除してしまいます関係で、栄養を甚しくこわし駄のためにも、美容上からも、余程のときでない限り、プレイとしては感心致しません。しかし、特殊なもので乳状、又は錠剤で、整腸するだけで、栄養を害しないのもありますし、用量を増しても下痢にまではならないのもあるようです。

私の使って居りますのは、小型の錠剤で、緩下剤ではありますが、小腸の部分でも少し作用し、主として結腸内で作用して、急激な下痢を起させるタイプのものです。腸全体に作用しますので、効くような服用を致しますと、腸カタルの症状のように、腸に異常な蠕動を感じ、胸が苦しくなっています。これになりますと、既に始まっている下痢は、これを全部体外に排出しないと癒りません。プレイとしては、粧える下痢症状を楽しむ



意識のもとに、服用法に注意して適度な症状をつくり出さねばなりません。一般に空腹時の服用ですと、三、四時間で奏効するようですが、満腹時ですと、八、十時間かかり、一、二回の下痢で効力が失せてしまうようです。ですから、少し続ける場合には空腹時から始めて、以後も適当な施薬を必要と致しま

すが、体重が減ったり、顔にヤツレの出ない様に食事に注意し、特に湯茶を普段より余分にいただくようにせねばなりません。粧える病状を創り出すためのとりとめのない体験を書き連ねました。ひそやかな性向に悩む一浣腸マゾヒストの、やみがたい望郷の念としてお許し下さいませ。

決して「健全なプレイ」と申せません。だれかれなしにお薦めは出来ないでしょう。ですが、本誌の読者中には多くの理解者が居られると存じます。それ故に私は、自身の性向に涙を流すことはあっても、孤独な絶望感にだけは陥らずに生きておれるのです。

(おわり)



## 細腰への憧憬

(羽村京子さんへ)

古留節人

近頃の誌上に、蜂腰やコルセットの記事が全く御無沙汰で落胆していましたが、八月号で近藤一氏が「締め上げる痛み」として触れておられたのは、マニヤの一人として楽しいことでした。K誌が、S、及びMの特殊な世

界、特に緊縛を主なテーマとして掲げておられるのにも拘らず、単に自由拘束の表現、それも上肢、上体の縛り偏重に傾きがちなのは何故でしょうか。女体の中で最も柔軟で緊縛に適し、しかも苦痛に対する抵抗度の高いの

は細腰、即ちウエストであることは誰しも異存がないと思います。それなのに、どうして胴締めに関する嗜好が、盛り上らないのか不思議でなりません。K誌の読者中にも細腰愛好者は相当居られると思うのですが……。

近藤氏の一文中に、羽村京子氏の告白が例示されていましたが、羽村氏に関連して一寸思いついた点を述べてみましょう。

羽村さん！ 貴女はお腹をゴムマリの様に膨らますことが、一番好きなようですから純粹には細腰マニヤとはいいい切れない訳です。しかし、貴女の数々の告白文を拝見しますと、胴をキツク絞りに上げることに、並々ならぬ興味をお持ちのようですね。お腹の括れを縄がちぎれるばかりに絞りに上げ、その上、柱にギリギリに縛りつけたりなさいたね。

又、お腹がどんなに大きく膨れるかを試すと同時に、反対にどんなに細く締めつけられ



るかをも実験なさったことも、よく憶えておられます。貴女は、ご自分のウエイストに布で包んだ針金を巻きつけ、針金が深く喰いこんで五分と耐えられなかった、ともおっしゃいました。

私はあの記事を読んだとき、私自身の息がつまるように感じ、貴女の努力に心から感銘したものです。処で、ウエイスト緊縛の限度、つまり、どの位まで細くなるかということとは、その人の体質、訓練等によって勿論違いました。貴女が試されたという針金の使用は、聊か乱暴に過ぎ、単なる実験としては甚だ危険で不適当だと思います。

なるほど針金ですと、縄や紐と違って弛みなく確実に締めつけられましょう。しかしその苦しさは、貴女のお説を待つまでもないことです。一柳さんの姉上は、ご自分の細腰をギリギリ締めつけられながら括り殺されたいと願望なさっているようですが、物騒なことです。こうなると、もはや「マニヤ」の域を逸脱したというべきではないでしょうか。

細腰マニヤとは、ある程度迄細く締めつけている状態を愛好趣味するに止まり、細腰に限らず他の緊縛にしても、それがプレイとして為される限り、嗜虐にも自ら限界があり、耐え得られ、享楽として受けとれる程度を厳守しなければ意味はないと私は信じていま

す。

細腰美を得るのに最も適した道具は、いうまでもなく砂時計型のコルセットですが、プレイとしては、皮ベルトが最適だと思います。このことは、既に本誌上で、川上明、蜷間洋子両氏によって発表されて居りますが、帯、紐、縄、鎖、針金等と較べ、緊縛の実際的効果からみても、皮膚を傷つけないで、比較的長時間締めて居られる利点があります。

そこで、私は羽村氏に対して、今後プレイをなさるのであれば、危険な針金は止めて、皮ベルトを御使用になるようにと申上げる次第です。

しかし、皮ベルトがいかに締めつけに適しているとはいえず、それ相当の注意は怠ってはなりません。材質の関係が女物は弱いようで、男子用か子供用の、尾錠付の牛皮製品がいいようです。ウエイストの美しさから見れば、五糎以上のものが欲しいところですが、巾広になればなるだけ、緊縛部分が拡がるので、細腰テストには不向きで、一種か二種位のところが適当でしょうが、ベルトが新しくれば皮膚を傷けないように、両フチを丸くならだらかに削り取る位の用心は当然必要です。

それに、尾錠の止め穴に配慮を要します。必ず縦長に切り抜いて置くことです。何故なら、キツチリと締め上げて留めた場合、いざ

外そうとしても、丸穴だと仲々外し難いのです。強く締めれば締まるだけ止金は外し難くなって、ベルトを切断でもしないといけないような危険性も考えられるからなのです。縦長だと、止め外しは容易になるからです。

締め方にしても、色々好みの相違もありましょうが、ベルトを、ウエイストの後から廻して前で締めるのが普通で、一番たやすいのですが、少し厳しく締め上げようとする場合には、括れて縦皺が出来、無用の苦痛が伴って感心致しません。逆に前から後に廻し、腰椎骨の辺りで尾錠を留める、今、流行のスタイル式にすれば、この心配もないようですが、いずれにしても、用心して、途中で皮膚を傷けないようにすることが肝要でしょう。

川上、蜷間両氏の発表された体験では、ベルトを用いて、蜷間氏の場合は、只でさえ細い四十五糎のウエイストを、三十五糎（十四吋）に迄、締めつけられたとのことですので危険性の多い針金より皮ベルトを羽村氏におすすめる次第なのです。

羽村さん！ 大変失礼なタワゴトを並べましたことをお許し下さい。貴女のファンとして、又、細腰に憧れるマニヤの一人として危惧を抱く点について申し上げただけです。心情をお汲取り下されれば幸いです。

(終)



## 創作

## バスガールの運命

滝 畑 三 郎

×月×日

バス会社の専務である、友人のK君に会うのは久しぶりである。規子さんも彼の妻になつてからは、一段と美しくなったものだ。今日は彼女から、婚約当時の打明け話を聞かされて、妙に印象に残つたので、その告白談を書留めることにする。

(規子さんの話)

『とうとう、私バスガールにされてしまいました。つらかったですわ、バスガールの毎日……。この人ったら、婚約披露宴のあとで、「規子さん、花嫁修業は家に来てからゆ

っくり学んで貰うから、式まで僕の会社に勤めて貰うことにするよ。今、会社の空気を吸って置いてくれたら、将来、経営の片棒を担いで貰う時に、どれだけ役に立つかわからないと思うのだ。判ってくれるね。但し仕事は、つまらないと思うだろうが、バスガールを主に第一線を経験、批判して欲しいのだ。えらいとは思いますが、協力して貰えるね。』なんて突然におっしゃるものだから、私ほんとにびっくりして声も出なかった位ですわ。それにこの人ったら真剣な顔で、「頼む」って念をおすんだもの、私、仕方なく「エエ」といっ

てしまったの。そしたら、ひどい人。「来週から早速、寄宿舎に入って貰うよ」だなんておっしゃるの。今考えたら婚約発表の時期だつて、みんな計画的だったのね。

家に帰ってから母に話したら「内田の家柄を馬鹿にしている。規ちゃんをそんなところへお嫁にやれない」ってカンカンだったの。

翌日、貴方が頼みにお出でになるし、お父様までが「この事は早くから聲どのと話がついているのだよ。規子は気儘だから、しばらく社会を教えて貰うんだね」なんて、とりつく島もなくてよ。



この人だったら、私にバスガールの制服を着せて見たかったのよ。私、完全に罠にかかってしまったって訳。観念するより仕方なかったわ。

寄宿舎に入って、初めてお古の制服を着せられ、お師匠さんに大きな鞆をつけたバンドをギューッと締めつけられた時は、ほんとうに恥しかったわ。(ここまで一気にいって、彼女は大きく息を吸った)

でも一番はじめだったのは、乗車勤務について間もない頃、貴方の此家へ出頭を命ぜられたときですわ。お師匠さんから「規子さん、今日は私がお付添いして、専務さんの家へ行くのですよ」といわれた時には、頭がカアッとしましたわ。二人共、制服で、私だけは鞆をつけて勤務時間中の服装で参りました。貴方ってひどい方だと恨みましたわ。だって、此家の女中さんにまで、私のバスガール姿を見せなくてもよかったですように。それにお師匠さんまで「規子さん。バスガイドぶりを専務さんにお見せしなさい。」って、平気な顔で命令されるんですもの。余りに羞しいのと口惜しいので「私、もう帰りますッ」って言うところでしたわ。敏子お師匠さんが、貴方とグルだっことを知っていたら、ほんとうにあの時、うちへ逃げて帰っていた筈です。

(註、敏子という人が彼女の師匠役で、彼女を未来の専務夫人と知らされた上で、教

育係を命じられていた事を意味する。養成期間中、彼女は自分の身上をお師匠さんが知らされていけないと思っていた)

「未熟で羞しいから、後生です、カンペンして下さい」って哀願したのに、お師匠さんは素知らぬ顔で「規子さん。今、勤務時間中よ。バスの中だと思ってやりなさい」って睨むんだし、貴方はニヤニヤして見ているだけだもの……。次は〇〇前、お降りの方はございせんか。車内オーライ」「切符まだの方、お切らせ願います」等と、私、貴方の前で何をしゃべったか、覚えておらない位、あがっていましたわ。

それから、貴方がお師匠さんに向って「ほかでもないが、今度新しい車掌の制服を考えたので、内田君にモデルに来て貰ったのだよ。これが新デザインの服だ。写真屋も待たせてあるし、早速だけれど着換えを差図して貰って、玄關に内田君を連れて来て下さい」っておっしゃって、さっさと奥へ行ってしまわれましてわね。

お師匠さんは、はしやきながら私に着換えを命じますし、その制服というのが従来のものと較べてとても変わった感じで、お師匠さんに鏡の前に立たされて「貴女よく似合うわ」と背中をポンと叩かれた時は、羞しくてもう泣き出しそうでしたわ。新しいユニホームに太いバンド、鞆の姿で撮影を終るまでが、私

には永いつらい時間でしたわ。

けれど貴方だったら、帰り際に私だけと呼んで、やさしい言葉をかけて下さったわね。もしそうでなかったら、私、気が狂っていたかも知れなくてよ。それほど、なぜかしら、みじめな気持ちでしたわ。

(この時の彼女の声は、ときれとぎれで、半泣きの顔は、笑っているようでもあったが、筆者はその顔を直視する勇氣はなかった)

あの日から、私だけが新制服を着せられ、同期生達が皆、同じ服装をするようになってからでも、周囲の視線を感じてそのユニホームに、なかなかなじめなかったわ。

私、馬鹿だったから、貴方の体のいい女奴隷にされてしまったようなものね。でもあきらめるわ。ズルイけれど、貴方がやさしい人だっことを、チャンと知っているから私幸福です。でも、羞しがられるのだけはたまらないの。これだけが、貴方の悪趣味なんだから……。 (ここで、筆者に笑いかけて)

滝田さん。これがその時のポスターです。今では、私も会社の秘書課長に抜擢されて、その昔のバスガールも出世させて貰ったのだから、文句もいえない訳ね。オホホ……』

×月×日

今日は、K君と一杯飲んだ。彼の話は、夫



人の語るところとは、又違った角度で、如何にも彼の面目躍如として面白く思った。そこで、この夫妻の話をうち混ぜて、筆者は一篇の物語りを思いついた。以下は筆者の想像による夫妻の物語りである。

○—○—○

金沢信二郎は、人口二十五万のこの地方屈指の都市であるT市に住み、少壮実業家を志している話題の人物である。八十台をもつバス会社を経営し、他に兼業も何かと多い。その彼が忙しい時間をさいて、今日、郊外のR町に出かけて来たのは、ひそかな目的に胸をはずませていたからである。母の出身地であり、山麓のこの町に一町歩の果樹園をつくらせている信二郎が、R町農業協同組合の名誉組合長に推されている理由は、昨年この組合の大きな不正事件が摘発され、加えて派閥政治抗争が激しいので、白紙の手腕家による財政の樹て直し策として、担ぎ出された為であるが、何しろ名誉組合長であるし、二カ月に一回の役員会以外には余り顔出ししない習慣であった。

組合では、折から農村婦人の改良作業衣展が行われており、四十点ばかりの展示品の中から、この町向きの改良作業衣が審査選定されるのである。バスガール達に制服を着せることの好きな信二郎が、この行事に大きな関心をもっていたのは不思議ではなく、早

速、審査場に案内された次第である。展示場を一巡した信二郎は、生活改良普及員(県の女子職員で、R町を含めたこの郡に駐在させられている)の大川技師に向って

「作業衣は、やはりモデルに着せた方がよくわかると思うな。今日は土曜日だから、昼から組合の女子職員をモデルにして、最終候補作品を四点、着てもらうことにしよう」

などといい出して、今度は、かたわらの専務に対して、モデルにする女子職員を指名しはじめた。

「そうだなあ。田崎君、上田君、高瀬君。ともう一人は……、そうそう、新らしく入ったな」とかいいたなあ」

「内田規子ですか？」

「うん。その内田君と、四人にすぐ着て貰うたらどうか」

「はい。では早速そのように取計らいますよ」

専務が去ったあと、信二郎は首筋の汗を拭き乍ら、規子のキリッとした身体つきと、作業衣を着て、満場の視線に羞しがる模様を想像して、ニコツと思わず笑ったが、素直にモデルを承諾するだろうか、と心配になったので大川女子指導員に、四人の着換を指図するように急がせる事を忘れなかった。

約半時間ほど経った組合の宿直室では、最後まで恥しがってグズっていた規子が、一

番変わった型の作業衣を着なければならぬハメになってペソをかいていた。同年配の女子指導員に、下着の着換えまで指図されて、真報になってうつむいていた規子は、伊予紘で作られたその作業衣の胸に「T県改良作業衣・四号型」と書いた白布が縫いつけられているのにも気がつかなかった程、狼狽していたようである。規子が羞しがるのも無理はない。彼女は組合に勤めてまだ三カ月だし、家は農家でなく、モンペや作業ズボンを穿いた経験すらないのである。

その上、今着せられた作業衣は、シャツスタイルの上衣の裾を、ズボンの中に入れて穿かされ、そのズボンには大きな胸当がついているので、着付けしたところは丁度、紡績の女工のようでもあり、子供用のデニムの遊び着(胸当布がつづいている)を連想させるような作業衣であったから、極度に羞恥心を刺戟されて、顔も上げ得ぬ程の恥しがりようであった。

(註、ズボンに続く胸当の部分には、胸の上部まで覆っており、胸当布の上端にはボタン穴が左右に一つ宛力がられ、下に着込んだ上着の釦でとめる。その他はすべてモンペ式で、モンペの後に縫つけられている紐の代りに、この作業衣ではズボンの後布に赤く、太いバンドが縫いつけてあり、前で締めようになっている。手首、足首にもそ



れぞれ赤い紐がついており、袖口を締めるので活動的で、着る者の心が引締ると同時に、外見は非常に可憐な感じである。やがて、会場の壇上に立たされた規子達を見て、信二郎は笑い乍ら世辞をいった。「皆、よく似合って一段と美しく見えるよ。大川さんも、御苦労でした」



「いいえ、私なんか……。それより審査委員の方達の選定が大変でしたわ。……では、この四点をR町の推奨作業衣に決定してよろしいでしょうか？」

「そうだね。皆さんで真剣に時間をかけられたのだから、これで良いでしょう。だけど、働き着は運動を楽に出来るようでないといか

んから、念のためということもあるうし、モデルの方には御苦労ついでに、このままの姿で少し畠仕事でもやっていただき、作業衣の感想も聞かせて貰った上で、柴刈りの多い家ではこの型、田植にはこの型をという具合に用途別に推奨して、明日から早速に普及講習会でも始めて貰ったら良いと思います」

こんな次第で、モデル達の或る者は背中に甘藷が一杯入った籠を背負わされ、或る者は薪を背負わされる事になり、規子も畠仕事にかり立てられたので、二坪程を耕し終って会場に戻った頃には、そのキッチリした作業衣にはベトトリ汗が滲み出て、慣れない労役というものがどんなに苦しいものかを思い知らされて、反抗する元氣もなく、着心地を訊かれても、写真をパチパチ撮られても、只、グッタリと「ハイ」「ハイ」と答えるばかりの情けない有様であった。

やがて、四点の推奨品も正式決定をみたので、間もなく閉会という時に、信二郎はモデル達の労をねぎらいつついった。「本日は、皆さん方を突然に引張り出して、色々無理を頼みました。その感謝のしるしに、今、着付ていただいているその作業衣を



そのまま進呈致します。これを着た時にはせいぜい家の仕事も手伝って上げて下さい。

この種の作業衣は、従来のモンペや野良着より、ずっと働き易く、又、美しいものですが、その普及は仲々はかどらないのが通例です。で、大川技師さん、どうぞ頑張って普及運動をすすめて下さるようお願い致します。

それから、百聞は一見にしかず、とか申します。大川さんの活動を助ける意味で、明日から半年間、ここに居られる四人の方には、各自、今着ている作業衣を制服として指定しますから、家から着用して通勤して貰います。今日、モデルに選ばれなかった他の婦人職員の方には来夏、同じように協力をお願いする積りです。急に慣れない服を着ることは、羞しいことでもありませんが、皆さんが卒先して啓蒙されてこそ、この運動も延びるのですから、その心構えでどうぞ胸を張って歩いて下さい。」

これで、とうとう親子達は半永久的モデルをいい渡されてしまった訳だ。稀にしか出勤しない組合長の強引なやり方が恨めしく、家へ帰ったら家族の者にひやかされるだろうし、通勤の途々にまで、世間の好奇心の対象にされるのかと思うと、無理強いされた屈辱感で胸が一杯になり、危うく涙をみせるところであったが、親子も仕方なく、すべてを諦めて運命に従った。

親子が信二郎にプロポーズされたのは、このような出来事のあった翌年の一月末のことである。二年程前、町村合併にともなって、近隣数カ村を吸収合併したR町では、今、農業協同組合をも合併しようという気運が高まって来て、各組合とも自己財産の整理に大奮闘で、とりわけ合併後の新組合の主体となるR町農協は多忙で、合併の準備にテンヤワンヤである。

その上、多忙な名誉組合長をいただいている関係上、T市の金沢信二郎の自宅は、このところ経理事務所のような感を呈している。一日の内にT市とR町とを、帳簿を持って何回も往復することが出来たりして、信二郎始め役員一同、大いに不便を感じ出したので、合併準備の済む迄の一週間ほど、雑用兼連絡係として女子職員一名、自宅から直接信二郎宅に通勤させることに決り、結局、組合内で一番簡単な窓口事務を扱っている親子がこの役に当ることとなった。

例の紺紺の作業衣で組合に通勤することに、ようやく慣れては来たものの、その服装ではR町より外に出たことのない親子である。年頃の娘が作業衣姿でT市まで出て来るのだから、随分、羞しい思いをしたことであつたろう。親子は、人にじろじろ眺められるのを意識して、なるべく人眼を避け、罪人のような思いで数日を過して来たが、信二郎宅

への通勤もあと一日で終りという金曜日の夕方、おそろおそろ信二郎に

「明日は土曜日ですし、百貨店で買物をして帰りたいと思いますので、勝手ですけれど、明日一日だけ作業衣を脱ぐことをお許し下さいませんかでしょうか」

と頼んでみたが、信二郎は冷静に、しかも親子が予想もなかった、意外なことをいい出したのである。

「その作業衣姿で賑かな所に出て来るのは、若い君としては羞しいことだろう。よく我慢しているものだ、僕は常々感心しています。しかし、別に悪いことをしている訳でもないし、君は制服として、着ることを命令されているのだから、辛らくても守ってくれなくてはならない。職業はやさしいものではないからね」

「ハ、ハイ」

「けれど、気立の優しい君が、そういう出足のだから、余程のことだろうと思う。願ひにまかせて自由服装にしてあげよう。しかし君だけ特に、という訳にはゆかないから、明日からは四人全部が、自由服装で出勤していいことに変更しよう」

「ハイッ。……済みません。有難とう存じます」

「まだ礼をいうのは早いよ。僕からも頼みがあるんだ。実は、僕は君が好きなんだ。組合



の職員である君に、テレ奥くていい出しにくかったんだが、若し君に婚約者が居なかったら、僕と結婚することを考えてくれんだろうかね。勿論、突然で失礼なことは重々承知している。いずれ、近日中に然るべき人を仲にたてて、正式に申し込む積りだが……。今すぐとはいわない。二、三カ月交際した上で、返事して貰ってもいいんだよ」

「……」

こんなところから、身分も地位もはなれ、二人の私的な交際が始り、それまでは、ただ怖い、意地悪の組合長としか映らなかった信二郎も、規子の眼前に、深い愛情ある頼もしい男性としてクローズアップされて来て、桜の蕾がふくらみ始めた頃には、両家の婚約披露が行われるに至ったのである。

しかし、信二郎には独得の、かなり変わった計画があった。婚約者の規子に、どうして自分の事業を理解し、慣れて貰うかということ、を慎重に考えた末、挙式までの半年か八カ月の期間を、自分の会社のバスガールとして勤務させることに決心した。信二郎は、規子に能力があるものならば、将来、自分の事業の一部をまかせたいと真剣に考えていたが、苦勞を知らぬ女ほど鼻持ちならぬものはない。まして、それでは事業の管理などは考えられない、という気があったので、規子の身分を隠して自分の会社の内容実態を体験さすつも

りであった。

一方、夫婦間については、徹底的に自分の趣味に合せたいし、又、規子が喜んで追従してくれたら、と虫のよいことを考えるのだったが、こういうものか、信二郎は女性のズボンスタイルの制服姿に魅かれるのだ。

披露宴の終わった後で、規子にバスガールとして勤めてくれときり出した時の信二郎は、内心、大いに気がひけて余り旨く説明することが出来なかった。このいきさつについては冒頭の、彼女の打明け話の通りで、当時、規子は数え年二十四才。信二郎は三十才であった。

主人公の規子には、追々、多くを語ってもらうこととして、当時の事情を、規子の教習期間中お師匠さん役を勤めた、庄司敏子の日記によって探ってみることにしよう。

四月×日

突然、専務さんから夕食に招かれた。重大な御用らしいので、営業課の健一さんとの約束を取消した。専務さんは婚約されたそうで相手のお嬢さんに、事務員ならともかく、バスガールを経験させるのですって。いかにも専務さんらしいやり方だとは思ったけれど、びっくりしちやった。で、私をバスガールに復帰させて、内田規子さんというそのお嬢さんの特別教導をさせるんだって。大変なことになってしまったわ。

規子さんが婚約者であることは、君と庶務課長以外には極秘にしてあるから、君もそのつもりでびびり教育してくれ、といわれるのはいいけれど、後のたたりが恐しいな。規子さんてどんな人かしら、きっと美しい人なんだろうな。

今度は大役だけれど、これが済んだら私達共稼ぎしなくても、結婚出来そうだよ。健一さんが、人事係長に抜擢されるなんて、素晴らしいな。専務さんたら「健一君に二人分月給をあげないといかん」だなんて、予想もしていなかったわ。

然し今頃補助教導員なんかに任命されて、皆に変な眼で見られるのは少し辛い。事情を話すことは、口止されているので出来ないし、頼だけど仕方ないな。

(註、信二郎のバス会社では、女子事務員のみがスカート着用を許され、バスガールはズボンが制服となっている。敏子も高卒後、すぐバスガールとして入社し、二年後に庶務課に廻され、現在二十三才。規子より一つ年下である。)

四月×日

今日からいよいよ規子さんの指導に当る。想像以上に美しい人だ。新入者は全部で八人、教導員は主任と私の二人である。

お古の制服を配給して、着付けから指導するが、鞆を下げさせたら、例外なく、皆揃っ



て羞しそうな顔をした。特に規子さんは真赧になって俯いてしまった。ほんとに可愛い人で、専務さんのお気に入ったのは尤もだと思ふ。私も久しぶりにズボン穿かなくてはならず、健一さんに出逢ったらと考えると嫌になった。入社当時を思い出す。

夕方、専務さんから、内田規子訓練上の特別注意事項を示された。

(一) 服装を厳格に注意し、寄宿舎内では就寝中も制服を着用させること。

(二) 体操は、他の者の二倍はやらせ、強健な身体を鍛えせしめること。

(三) 賞罰は明らかにし、失策は厳重に罰して、いやしくも甘える心を持たしめないこと。

規子さん、気の毒だけど明日から絞るから覚悟して頂戴ネ。

—○—

こうして、車掌見習生、内田規子の訓練は当然、他の七名より峻厳に開始された。入所式、練習生心得に続いて練習用制服の配給、自己紹介の済んだ後、寄宿舎の部屋割があった。使用する部屋は五部屋で、見習生番号八番の規子が、補助教導員の庄司敏子と同室、一番の見習生が、教導主任と同室と指

示された。入所当日は、行事も少く、規子もノンビリとした気持ちで、就寝時間を待っていたが、やがて現れた庄司敏子によって、新しい屈辱の一幕が始まるのであった。

「内田規子さん、満二十二才ですね」

「ハイ」

「私は教導員は始めてですし、実際は貴女より一つ年下なの。でも、訓練は厳しくやりま

すから覚悟なさってよ。泣いても笑っても、貴女と私は二カ月間一緒に暮すんだから、よろしくネ。……で、早速ですが、これが明日から二週間の日課表なの。一寸読んでみますよ」

日課予定表

七・〇〇時 起床

七・三〇 体操、駆足、車体清掃(指示





なき場合は作業衣で)

八・二〇

朝食

九・〇〇

講義。(交通規則、服務規程  
機械構造、常識教養)

十二・〇〇

昼食

十二・四〇

乗務実習

十七・四〇

夕食(食後は指示なき限り自由時間とす)

二十一・〇〇 就寝

(備考) 訓練中、見習生の内、教導員の命に反し、又は、極度の不成績者に対しては、教導員より適宜懲戒指導を行う。

「つまり、この備考欄によると、貴女達は、私の命令に絶対服従の義務があるって訳ネ。……そこで、早速に命令するわ。貴女、今日制服を貰った時、真顔になって羞しがったわね。……バスのガールを志願しながら、制服が羞しいだなんて以っての外よ。」

「……」

「だから、早くその気持を消すために、今夜から制服のまま就寝すること。いいわネ。バンドも外してはいけません。……ああそうか、昼夜着通しだったらすぐクシヤクシヤになるわネ。明日、もう一着借りてあげるから、その点は安心なさい。」

規子の胸の中は、表現出来ない情けなさで満ち溢れていたが、——この人は、私と信二郎さんとのことは、何も知らないのだから、

無理はないわ——と諦め、家から持ってきた新しい寝巻を、いとおしむもののようにトランクにしまわねばならなかった。

命じられるままに、制服姿で寝にいたものの、窮屈で仲々眠れない。その気配に敏子は——少しやり過ぎたかな——と心配になって、規子の布団に近より、

「心配することはないのよ。ネ」

と優しく肩に手をやった。あらゆる感情を押し殺して涙をこらえていた規子は、この優しさに却って悲しさがこみ上げ、ワツと泣きくずれてしまった。

こうして始まった厳しい訓練の内、規子に一番こたえたのは、五つも年下の他の見習生と全く同様に扱われることであつた。体操の際の踏み箱でも段が重ねられるに従い、規子は他の見習生と同様には行かなかつた。皆の視線を一身に受けて、何回も何回もやらされて、失敗する度に竹の鞭で軽く打たれた。鞭は気合いを入れるだけのもので、痛くはないのだが、皆からゲラゲラ笑いの対象にされることが、耐えがたい屈恥感を覚える。

やがて規子にとって、長い、辛い三週間が過ぎ、いよいよ車掌見習として本勤務につくこととなった。

規子の車掌生活の滑り出しは、無我無中ではあつたが大して注意を受けることもなく、無事に数日を過し得たが、時々とちつたりすると、客の眼を盗んで後見役の敏子の手が素

早く動いて、ギョツとつねり上げたり、「服装を正しくネ」などという乍ら、客の前でバンドを強く締め直したりされた。

バスの車掌には、不正防止のための鞆交換などの抜打ち検査が行われることがあるが、信二郎の会社では、勤務終了時に、十人に一人の割合で服装検査が行われることになつてゐた。箱の中に赤玉と白玉が九対一の割合で入れてあり、赤玉を引き当てた者が、嚴重な所持品検査を受ける訳である。見習生といえどもこの制度には変りないので、規子も、何時かはと観念はしているものの、そんな検査を受けるのは恥しいと思ひ悩んでいた。

心配事は存外、早く来た。勤務四日目に、赤玉を引き当てた規子は、厠所に曳かれる羊のような思いで検査室に入らねばならなかつた。普通二名である検査員は、その日は敏子一人だけであつたが、上衣のポケットから、規子自身も全く覚えのない百円札が出てきて顔を蒼ざめた。

「規子さん、このお金どうしたの？」

「……」

「黙っててちや判らないわよ」

「……私、自分でもわからないのです」

「まだ他にも隠してるんじゃない？」

「そ、そんなこと……」

スリッパ一枚にされて、詳しく調べられた後やっと許されたが、規子は罪人のような気持でその夜を迎えたのだった。——未完——





新稿

## ある夢想家の手帖から

理念と行為とは性の分野  
 においては等質である

— キント —

沼

正

三

## 第一六章 家畜化小説論

劣等人——この、手と足と一種の脳髓と目と口とを備えた、生物学的には一見、人類と同種と思える自然の被造物は、実は全く異質な生物であり、人類のデッサンに過ぎぬ。

—— ナチス宣伝文書

先ず、マゾヒズム空想における集団ないし制度の意義について考えて見たい。

私は「家畜化小説の登場を喜ぶ」（三一年九月号）において、次の様に説いた——

今までのマゾヒズム小説には（それぞれの独自の価値を認めるにやぶさかではありませんが）おしなべて私には不満がありまし

た。それは女と男の関係が女主人対奴隸という類型を脱していなかったからです。真砂氏の作（「二百字讃歌」「ゲイナスの重石」）では主人の側が複数になり、馬族氏の作（「美しい暴君」「牛乳風呂の饗宴」）では奴隸の側が複数になる、そういった小異はありますが、大同を見ればすべて女主人対奴隸の関係です。それは世間の無数の男女結合の中から選ばれた特殊な一対なので、その限り女が男に加える凌辱には自ら限界があります。二人きりの時、いくら犬や馬にしたとて、それが世間一般に通用するわけではないので、根本においては女は男に人格を認めないわけにゆきません。叙述の上では女が男の意志を圧伏して責め虐げる様に書かれていても、その前提が動かない限り、本質はサド・マゾ・プレイを合意でやっているのと大差ないことになってしまいます。



そして、この場合、何より嫌なのは、女の側に罪障感が免れ得ないことです。(中略)これが私には不満でした。

この罪障感を生ぜしめない為には男が本当の家畜になるしかありません。本当の馬なら人前で乗り廻せます。本当の犬なら平気で打てます。あの慎ましやかな「細雪」の雪子でさえ、兎の耳なら足の指で搦むのです。サド・マゾ・プレイの不純な遊戯感の家畜と飼主との間には生じようがないのです。家畜になりたい！

然し、私達は人間の身体をしています。馬や犬への転身空想に喰い足りぬ私達は、結局「人間の肉体を備えつつ、しかも家畜と同様に扱われる存在」にならねばなりません。人間家畜こそが私達の理想です。——これはマゾ・プレイで犬や馬になることではありません。彼が人間家畜たることは、彼女だけでなく世間からも、そう扱われるのでなければならぬからです。そして、これは「制度として人間の家畜化が認められた社会」を想定することを意味します。ここでこそ彼は完全に人格を無視せられた存在になり得るのです。……(後略)

凌辱の公然性への要求は、こうして優劣二階級の制度を願望するに至る。然し、これだけではない。この願望を生じるには、もう一つの理由があるのである。

マゾヒストの心裡に潜む劣等コンプレックスは、自虐的に自己卑下の状態に身を置くことを空想する。その空想——白日「夢」——において、ある種の検閲による合理化(フロイトは無意識の欲望が「夢」に登場する際の検閲を説く)が——不自然な劣等感を否定し消滅せんが為——行われる様に思われる。元来、劣等感は、ある人と対等の存在でありたいという基本的要求が達成できぬことからす

る欲求不満のコンプレックス化したものであるから、不自然な劣等感を消滅させようとすれば、対等者要求を持たなければ良いのである。相手の優越性を積極的に肯定するなら劣等感の問題にはならない。この積極的肯定を効果的に行うには、相手と自分を優劣秩序のある二集団の各々に所属させるのが一番容易である。兵隊だった私は同僚に対して劣等感を感じることはあっても、将校に対しては感じなかった。黒人奴隷は白人に対して劣等感を感じはしなかったろう。マゾヒストの白日「夢」は、こういう位置付けによって、自分の劣後的地位を演繹し、「だから卑下状態は当然なので劣等感の必要はないのだ」と説得しようとする。この「劣等感否定の為の劣後性肯定」という心理過程——一種の弁証法的心理操作であるが、無意識の自己欺満でもある——からも優劣二集団の制度が要求されるわけなのだ。

これには両面がある。「制度的に固定した劣位集団への所属」を「集団内空想」と「自己が所属する集団の制度的劣位化」を「制度化空想」と、名付けよう。両者は対応の関係にあるが、機能は異なる。

集団内空想の好場面は、奴隷制小説である。奴隷は制度的に家畜と同じだ。主人公は奴隷化されることによって、人間家畜集団に所属するに至った主人公に感情移入している読者は、これによって家畜化願望を満喫し得る。ゴーチの奴隷制小説(第七章題辞及び本文参照)は、この効果を狙ったものだ(附記第一)。

制度化空想の方は、人類より高等な生物(他星人)による人類の家畜化を扱った空想科学小説によって典型的に実現される。SFのマゾヒストに対する意義は主として、ここに存する。然し、これに



つては別に一章を予定することにして(附記第二)、本章では「人間による人間の家畜化」を考えて見よう。勿論「個人による個人の家畜化」では問題にならない(これはサド・マゾ・ブレイ)。そこで民族とか人種とかいう人間集団が登場する。「人種による人種の家畜化」である。これを特に「家畜化小説」と呼ぶことにしよう。本誌上にしか見られない特異な作品群といふことができる。

家畜化小説は概念上、当然に白人崇拜と結びつくものではない。現に、その先蹤となった土路草一氏「潰滅の前夜」は、飼育者として白人種でないY国人を想定していた。本来サド小説であり、単に凌辱の公然性の要求からの制度化だけが必要だったからである。然し、その土路氏でさえ、続編では白人種的なヒロインのリーレを出し、次いで「魔教園」においては、飼育者として白哲のユーマ美女を登場させている。これは、家畜化小説と白人崇拜との密接な関係を示唆するものだ。

その他のマゾ派の作品は言うまでもない。小説ではないが、麻生和夫氏は「家畜化小説を喜ぶに共鳴して」の一文で「白人種が大和民族を家畜とした」第七天国を夢想しておられるし、真木不二夫氏は「黄色オラミ誕生」において、女権国の支配者たる女人達を「ぬけるほど肌の白い」と形容し、日本人がそこで家畜として飼育させられ「黄色雄畜」となる有様を描こうとされた。私の「家畜人ヤプー」は、汚物愛好とスクビズムとを主要表現とする各種マゾ願望をよこいとし、これを貫くに信仰化した白人崇拜思想のたてい、を以てしたものである。——凌辱の公然性だけなら、単に家畜化で足る。飼育者はアイヌ人でも朝鮮人でも良い筈なのに、そうならないのは、マゾヒストとしての白人種への劣等感、白人崇拜という観点

からは——劣等の否定即肯定などを意識したかどうかは別論として——「自己の属する集団(日本人)の制度的劣位化」の思想が飼育者としての白人種を要求せざるを得なかったからだ。

別の言い方をすれば、この白人種優越、西洋文化支配の世界の現実が、既に一の制度と言ひ得るもので、日本人たる私達は、「制度的に固定した劣位集団(有色人種)への所属」の意識を、制度化空想以前に集団内空想(実は現実だが)としてマゾ的に楽しんでいるので、その制度化が家畜化小説となる時、白人種を飼育者とするのは当然のことなのだ。前章に見た様な白人種の有色人種畜類観、その現実が有色人種の側のマゾヒストにおいて、容易に白人種の家畜たる有色人の思想を生むのだ。

つまり、日本人マゾヒストの白人崇拜は、有色人種を白人種の家畜とする空想に、その最終最高の表現を見出すのである。

最後に、忘れてならぬのは、日本敗戦後の白人国家による占領である。家畜化小説の心理的基礎は右の様であっても、現実こういう作品が書かれ得た動機には、占領による劣等感の強化確認があったらう。先の麻生氏の文もそれを語るし、私自身の心理を反省して見ても、外地で捕虜として覚えた、ある一人の白人女性への隷属感が復員後、急速に畜生種族意識に膨れ上って行ったことを想起するのである。例えば、前章の小説「山椒魚戦争」を続んだ時の私の反応は、一つの家畜化小説の構想であった——日本の敗戦による民族の家畜化……チャペクの考えたヴィーナス・レガッタが日本人の曳舟者によって行われるのだ。水泳国日本を代表し、世が世ならオリンピックの華とも謳われるであろう泳ぎ手達は、米国の富豪や英国の貴族達の令嬢、令夫人の所有物として、素肌ナンバーの烙印を



押されて畜舎に飼育され、平底の貝殻舟を三人一組で曳かされる。号砲一発、手綱に操られ、鞭に励まされつつ、ビキニ・スタイルの美女の乗る舟を曳くことに全能力を傾け、それぞれの主人を優勝させてヴィーナスの賞を得させることに生甲斐を感じながら泳ぐ沢山の日本人……幻想の中に、私はそのレガッタを、ありありと観覧したのだった。……「ヤプー」執筆の前史である。

附記第一　ゴータの読者は本来、ドイツ人である。黒人種を軽蔑する北方人種を讀者として予想していた点、私達日本人には共感し得ぬ効果も計算されていたろう。例えば、「ネロ令嬢」では、白人がヒロインの奸計によって執奴にされる（混血黒奴と身代り）。この場合、その執奴集団に対して同じ有色人種たる私達の感じる感情移入はドイツ人讀者には期待できないが、それだけ、黒人種の仲間入りさせられた白人主人公への感情移入——従って屈辱感——は強烈であろう。

附記第二　空想科学小説については、旧第八三項で詳述したところを参照されたい。旧第八四項であげた例「ペット・ファーム」は、他星人が地球人類を愛玩動物の生餌にする話で、ちよつと凄じ過ぎるから、典型的な家畜化の例をあげておく。Robert Abernathy の「アル・バード」(ASf. July, 54)——生態学的統制による生物ピラミッドの頂上に位するセガス星人が、その星に住む山ねずみ風の獣の天敵として地球から原始人類を移入する。適応性と狩猟の能力を買われたのだ。そしてジャングルの中で飼育せられる。言葉が喋れることは、セガス人には「我々の必要に応じる様に行動を支配できる」点で、本能動物より有利だとされている。……筋書としては、この人類がセガス人の予想より以上

に進化してしまうのだが、女権国家セガスの女生物学者が、この飼育人類の女神となって登場するなど、マゾヒストを楽しませる。他にも Fihn O' Donnevan「アングル・トムの星」(Galaxy Dec. '54)など、この種のものは枚挙に遑がない。

## 第十七章 混血への妄想

一八六〇年の合衆国センサスによれば、ネグロの総数は約四四四万人であり、うち白人との混血は五八万八千人となつてゐる。これが南部紳士諸公のひかえ目に見た行状決算表である。

——山本幹雄『アメリカ黒人奴隷制』  
前章で敗戦と被占領からのマゾ空想を記したが、これがいつも家畜化に向つたわけではない。南方で西洋植民地土民の状態を見て来た私には、日本がその様な植民地になるといふ程度の制度化でも、十分のマゾ的昂奮に値した。

南方で私の見聞し認識したところでは、征服者は被征服者側の男性を人間扱いしない時にも、女性に対しては欲望を感じるものであった。そして、復讐した私の前には、GIの腕にぶら下るパンパンの姿があった。男について家畜化さえ空想し得たとすれば、女についての媚婦化空想はより容易であった。そこには深刻な三者関係のマゾビズム(旧第九七項、第一〇一項、第一〇二項)が感じられた。当時、私の心を占領した混血への妄想を記して見よう——

無条件降伏(何とマゾ的なことばよ!)をした祖国、日本は米国の属領にされる。完全な植民地化によって朝鮮、台湾、満州、南方等での過去の日本の悪行が贖罪させられるのだ。

先ず、日本語が公用語として禁止され、次にあらゆる出版のロー



マ字化が行われる。仏印の安南人が漢字の使用を仏政府に禁止され、過去の文化伝統を失った植民地人となった様な現象が期待される。勿論、あらゆるマス・コミは厳重な検閲制で、白人支配の批判は絶対に許されぬ。学校教科も統制される。子供達は植民地英語で説明された白人のスーパーマンや白人の月光仮面の漫画だけで育ってゆく。

日本人という呼称は公的には土民（原住民）と変る。米本国からの知事が行政権、裁判権を統轄し、本国人は特権的法律で保護される。行政司法機構の末端には、土民の下級官吏が採用されるが、彼らは精神的には本国人的で、土民の利益は考えない。下級警察官としては特に朝鮮人を優先的に採用する。彼らの日本人への敵意を利用する為だ。

工業は破壊され、本国製品の市場にされる。日本全国はフジヤマ、サクラ、ゲイシャを売物の観光地化して来る。観光用道路の土木工事が失業者の大群を吸収する。土産品としての真珠と漆器と絹織物が植民地ジャパンの特産品になる。農地は没収されて本国人に分配されるが、新地主は、小作人になった土民達、即ち今迄の耕作者に農地を桑畑にし、養蚕専業にするよう命令する。昔、台湾で甘蔗栽培が強行された時のように農地が潰される。食糧自給が出来ないから、本国でなら家畜の飼料になる余剰農産物の輸入に依存する。一部上流階級を除いて国民の大多数は極貧に陥り、下級労働者になる。ハウスの召使などと言った恵まれた地位には、志願者が殺到する様になろう。

ゲイシャハウス（白人専門娯家）が全国都各市にできる。急増した白人旅行客の安全保障の為、土民が白人を傷害すれば、未遂でも

死刑になるが、逆に白人は、故意に殺した場合以外は、土民を手に掛けても罰金で済む、という法律が出る。乱暴しても罰金を払えば良いので、白人の中には罰金を娯家の玉代同様に考えて一般家庭を襲う者が出る。そこで、その結果生れた混血児には、補償として罰金をプールした中から育児資金が出ることになる。だが、生れた子は白人の父とは無関係とされるのだ。

混血児は、一般土民に対して特権的に扱われる。一般人が小学校迄なのに対して上級学校に進めるし、白人子弟の様な自家用車は無いが、スクールバスで通学して、一般の徒歩通学者に対して優越感を持てる。掃除当番も小学校の間は、白人並に免除される。（然し、大学は東京に一つしかなくて、ここには在留本国人子弟しか進学できないのだ。）社会に出て、白人よりは低い、一般土民よりも高い地位、会社なら係長から課長次席、軍隊なら下士官といった地位が約束されるし、一般に許されぬ不動産所有や営業の名義も、本国人ほどでないが、条件付きで許される。一般人とは格段に高い生活水準が混血児であるというだけで期待できるし、それも白人の血が多く入る程高い水準に上れるのだ（日本人の血が十六分の一あつても、混血児籍で、市民権は取れない）。

混血児階級が確立すると、差別待遇も三分化する。汽車、飛行機、劇場等の座席の一、二、三等がそれぞれ本国人、混血児、一般土民用となる。今迄土民には入場を許されなかった公園、ゴルフ場等も、二、三流のものは混血児なら許可される様になる。（例えば東京タワーの様なものでも、土民は駄目だが、混血児なら中段展望台まで昇れるのだ）混血児たちは自分の中の白人の血を誇りとし、土民を軽蔑する。本国人階級に次ぐ日本の上流階級は彼らによって



構成されてゆく。

そうなる、白人は愈々あこがれの的になるし、混血児を持つことが親にとっても生活の向上を意味するから、既婚未婚を問わず女性、潜在的洋娼意識を持つに至る。白人の男にとっては日本女性、よりどりで、抵抗される（罰金を払わねばならぬ）恐れは皆無になる。段々、贅沢になって、最上級の美女を何人も現地妻として持つ男が出て来る。女達には白人の現地妻になることが第一の玉の輿だが、上流階級の女性——彼女等は一般土民の男なんか全然、問題にしない——以外は、仲々この幸運には恵まれない。貧民子女の登竜門はゲイシャ・コンテストで、十人に一人の難関を突破してゲイシャとなり、運が良ければ落籍される。というのが、彼女等の願いのだ。白人の子を宿していれば、結婚相手は沢山見つかる。混血の児を生むということが大した持参金なのだ。勿論、唯の土民よりは混血児の所に嫁したがる。

ゲイシャになれなかった平凡な女達も、土民の男を夫にしているとは言え、白人を憧れる気持は強いし、混血の子を持つことは有利だから、夫も妻が白人に接することを嫌わぬ。白人の男に対する限り、貞操という観念は消滅した。白人用ホテルには、その地区のコール・ガールの目録が備えられるが、土民の男達は妻や娘の写真をそれに進んで掲載して貰うから、白人旅行者にとっては、その地区の全女性は選り取りである。婦人の服装は白人を楽しませる為、キモノになり、自家用車族（本国人）には恰好な狩猟の獲物だし、娘を伽させたい為喜んで泊めてくれる土民の家ばかりだから、元気の良い白人青年なら、大いに異郷を楽しみつつ無銭旅行できる。

男は農奴と化し、女は娼婦と化す。哀れな植民地土民日本民族も、こうして次第次第に混血児を増してゆくのだ。土民達は自分の

子孫の体内に白い血が交ること、少しでも人権を回復できる様にと、それを最大の希望として労働生活を送るのである……

植民地、日本の妄想場景は、この位にしよう。制度化空想及び三者関係の味を解せず、不快の感を懷かれた方はマゾ読者中にも少くあるまい。然し、久米正雄の日本米州論や志賀直哉のフランス語国語論が堂々と雑誌に載った時代に、白人崇拜の一マゾヒストが、この様な空想でマゾヒズムを楽しんだということは、精神病理学的記録として意味がないでもなからう。

人種混血の現象を広く研究したシュトラッツは、北歐人種の体格骨相が有色人種に対して優性の遺伝形質となることを断言している。（「女体の種族美」女体美大系第三巻訳書）。白人種による日本人種改良論を唱えた森有礼の考え方は誤ってはいなかったのだ。体格のみでない。黒人の真黒な肌さえ、何代か白人の血を入れてゆくと白人並みに白くなる。私達の黄色い皮膚なら、それほど代を累ねなくとも、可成りのところまでは変るだろう。

終戦後、占領軍の行状は——勿論、怪しからぬ「大男」達の暴行沙汰は少くなかったが——中国や南方での日本軍の実態と比較すれば、最上級の軍紀厳正ぶりであった。この厳正ぶりが、戦後の混血児の数を僅か十数万（実数不明だが十五万ないし二十万人といわれる）に止めてしまった。しかも、この中には黒人との混血児が含まれるから、白人の血を将来の日本民族に注いでくれる数は更に、ずっと減る勘定になる。残念である。もっと徹底的に植民地化してでも、混血児を増したかった。それによって日本人種改良の実が上るのだのに——三者関係のマゾヒズムを味わいながら私は、そんな愛国的妄想に、ふけたのであった（附記）。

然し、混血によって白人への劣等感が取り除けるものかどうか？



白人の血を交えたことによって、却って純粹のブロンドの高貴さが——丁度、米國黑人や南米混血民の様に——痛感される結果になりはしないか？これには私も確答を与える勇氣がないのである。

附記 混血児の問題は、直接には彼等の母であるパンパン達の無智と貧困から来る社会問題であるけれども、その本当の深刻さは黒人との混血児の将来にあるので、白人とのそれには、そんなに悲観することはない。施設の児ではないが、ミッキー・カーチ

スの成功は彼等の将来に希望を抱かせる。少くとも都会の人士は、白人との混血児に対して閉鎖的でない。眠狂四郎は白人との混血児だとされ、それがプラスになっている。マリアンヌちゃん、ドナルド坊や、生みの親育ての親の子争いが生じた事件は「可愛い」白人との混血児なればこそ起ったので、黒人との混血児だったら、映画「キクとイサム」「名づけてサクラ」の主人公達の様だったに違いない。

# 愛<sup>マ</sup>好<sup>ニ</sup>者<sup>ア</sup>の記<sup>ノ</sup>録<sup>ート</sup>

— M 同好の方々に捧げるページ —

とやま・かづひこ

## (105) お二人の自転車

六月十九日の昼さがり。デパート、上野松坂屋のショーウィンドは、黒山の人だかり。何事か、とのぞいてみたら、美しい自転車が二台陳列されている。説明ボードに曰く——皇太子さまの御結婚を祝って、これと同じ品が献上されました——。

(106) オシメ  
文芸春秋六月号二八二頁に、かづひこの心

御紋章入りの立派なものである。高貴のひとつとなられた妃殿下が、颯爽と風を切って走られるお姿も想像出来る。

かづひこは、その自転車のサドルを羨望を眼でみつめながら、いつまでも立ちつくしたことであった。

をチクリと刺す紹介があった。

——ダンチ族を相手に「オシメ洗い所」なる珍商売が出現、干し場のない主婦たちから喜ばれ繁昌している。営業許可はクリーニング業の一種だが、汚物を出すというので清掃法の規則をも適用されているが、ダンチ族のなかには赤ン坊のオシメにまぎれこませてオトナ用を洗わせている不心得者もいるそう——。

最後の二行にご注意。オトナ用とはどういうものか知らないが、かづひこにとってこの小文は、楽しい夢を与えてくれるのである。

## (107) ビデ

ずっと以前になるが、沼氏が「ビデ」について詳しい話を紹介され、文中『人間ビデ』という、吾々にとっては素晴らしい新語を教えてくださいが、六月二十六日付の「日本観光新聞」には、「ピロウな話」とタイトルをつけ



て、このビデのはなしを紹介してあるので、ここにスクラップしよう。

——ところでビデの話にもどうだろう。パリはおろか、多分ヨーロッパの大部分のホテルがそうだろうと思うが、部屋にはかならず便器が一つ設えられてある。少し良いホテルなら屏風で囲んであるが、安ホテルではむき出しだから、ちよつと寝返りすると鼻先にこの便器が見える。高級ホテルならば袋を添えて、これはご婦人だけのためのものでという貼紙がしてある。つまり男には関係のない代物だというわけであるが、——略——前方に穴が二つあいていて栓をひねると、お湯か水か好きなものがシュッと飛び出す仕組になっている。——略——

### ミスをやらかす日本人

ところが日本人は不幸にして、ビデの用法を学校で習わなかったばかりに、大部分の旅行者がこれで大失敗を演ずることしばしばである。というのは、これを洋式の便所ぐらゐに考えて、ここで大便をしたが最後、いくら水を流しても容易にその固形物はなくならない。この春パリに來た日本のさる偉い人がこれをやって、主人を呼びつけて、この便所は故障しているではないかといって叱りつけたそう。主人が何と答えたかは知らないが、しかしどう考えたかは容易に想像することが出来る。また別の

ある偉い人が、通訳からこのことを聞かされて、あわててマツ棒で固形物を小さくついで、三十分もかかってようやく溶かしてしまったという逸話もある。

考えてみると実に人騒がせなものを作りだしたものだ。それでも外国の生活に少しでも馴れたつわものになると、ここにお湯をためて洗濯をする。そうすると高いクリーニング代が節約出来る。これが平気で出来るようになる。と外国旅行も一人前である。ただ顔をふくハンカチだけは、どうもここでは洗う気になれないものだそう。

——以下略——

### (108) ごうもん

七月七日の読売新聞朝刊から。

『ごうもん』というアルジェリア戦争のときのフランスの首都パリ、フレーヌ拘留所における拷問の実相をバクロした出版物が、フランス政府の手によって押収されたイキサツを外電として報じているが、その一節。

——このほどパリの警察は「ガングレーヌ」(傷あと)という本を発売後二十四時間押収したが、それでもやはり遅すぎた。この本は昨年十二月パリの警察に逮捕された五人のアルジェリア青年がうけた拷問のもようについての、物すごい簡潔な報告である。

彼らの話は、パリのフレーヌ拘留所から官辺の目をかすめて伝えられたものである。彼ら五人はひどい拷問をうけてFLN(アルジェリア民族解放戦線)の共犯者の名前ばかりか、彼らが相談をかけたシンパのフランス人の僧や弁護士の名前までもいへと責められたが、そのもようが詳細にのべられている。アルジェリア人は動物のよう丸裸で棒くいにくさりでつながれ——中略——連続的に電流を通された。さかさづりにされて、水や汚物や小便の入ったバケツの中に頭をつっこまれたものもある。その間、尋問者たちはゲラゲラ笑っていたという。——以下略——

まことに以って非人道的な、身の毛もよだつ恐ろしい行為である。かつてドイツのナチスでもこれに近い拷問を行ったという記録を読んだことがある。

わが国でも、江戸時代に「尿問」という汚物利用の拷問があったと聞くが、洋の東西を問わず、また今昔にかかわらず、汚物というものには重要な役割を承っているらしい。

もし、取調官が若く美しい婦人なれば、そして、その婦人自らのそれを用いての拷問なれば、かつひては自白を強要される被告に喜んでなるであろう……とひそかに思うのだがこれも幻想の一つか……。



創作 = 嫁いびり第二話 =

# 孝行息子

——東町三郎——





## (一)

一夫は、隣室の妻と母親の声で、床に入っても眠れなかった。妻のミサ子は、姑のお藤の前に坐って、裁縫をしているのだ。それは毎晩の事であった。裁縫の師匠をして身を立って来ただけあって、一夫の母お藤は、この仕事では実に、厳格であった。

「お母さま、出来ました。」

ミサ子の涙に、うるんだ声が出た。先刻から何回も縫い直させられているのだ。

「どれ……まあ今度は、どうにか人様にも見せられますね。しかし、これでは家に来るお弟子さんの中で、一番下手な山川さんよりも出来てないからね。お前は、一夫の嫁ですからね。こんな下手では、困ってしまいますねえ。」

お藤の静かだが、底に冷たさを持った声が出た。

一夫は、もう直ぐに妻が裁縫から解放されるのと思って、隣室との間にある襖から流れて来る細い光線を見つめながら待った。

ミサ子の片づける音がしていた。

十一時を時計が打った。

「ミサ子。今夜は、お風呂がなかったの、まだ、マッサージをしませんでしたね。ここにいらっしやい。」

お藤が、切り口上な調子でいった。早く、

夫を失い、女手一つで一人息子を大学迄出して、貧しさと斗って今日の生活を叩き出したお藤は、大変なしっかり者で、五十五になっ

ていたが若々しく、丈夫そのものであった。

「ハイ。只今……」

「さあ、着物を脱いで、そこに横になるんですよ。私が、マッサージをしてあげるからね。もう来月は、臨月でしょう。風邪をひいたりされては、こちらが困りますからね。皮膚を丈夫にする事が何よりですよ」

一夫は、がっかりした。これから、妻のマッサージが始まるのでは、何時になったらミサ子が母から放してもらえるか解らないと思

った。

「では、お母さま……お願い致します。」

ミサ子の優しい、沈んだ声が出た。

一夫は、そっと床を起き上った。そして、音のしないように、隣室との間の襖の前に立って内部を覗き込んだ。

長火鉢の前に、母親のお藤が坐っていた。その横の畳に、ミサ子が仰向けに寝ている。

下半身は母の毛布で包まれている。今迄、お藤の命令で、固く締めていた帯の跡が、何本も線になって見えていた。

お藤は、乾いた手拭を両手に持ち、嫁の張り切ったハダをゴシゴシとこすり始めた。

「こうすると、赤ちやんが生れてから、授乳しても肌が丈夫になって、お乳もたっぷり出

るのですからね。」

お藤は、息子にも、他人にも、嫁をマッサージする事を自慢にしていた。「お嫁さんを大切にすること」と一般に思われていた。息子の一夫も、お藤を信じ切っていた。当のミサ子でも、お藤の本当の心を知らなかった。姑が、こうしてくれるのは、親切からだと思っていた。だから、相当、痛い目に会わされても、じっと我慢しているのがあった。

お藤は、力をいれて摩擦した。ミサ子の白い皮膚は血行がよくなり、桃色に美しく輝いていた。

「アッ……お母さま……もう、痛うございませう。アッ……」

お藤は、ミサ子の声など聞えない風で、ゴシゴシとこすり続けた。お藤には、お藤の考えがあった。お藤は、ミサ子の若々しく美しいハダが、心から憎いのであった。こうしてマッサージをするのも、本心は親切からではなかったのだ。

一夫は再び、そっと床に入った。

一夫が、ミサ子と結婚したのは、一年ばかり前の事であった。見合結婚だったが、一夫は彼女を一目で気に入った。瞳の黒々としてパツチリした目をして、やや、オデコではあるが、可愛らしい唇を持った娘で、瘤せ型で細っそりしているが肉がしまり、一夫の好み



のタイプであった。足も、スナナリとしていた。一夫が、ミサ子を気に入ったより以上にお藤が気に入っていた。今時の娘にしては珍らしい、優しい静かな娘だよ」と、お藤は大いに結婚に乗り気であった。お藤が、ミサ子を嫁にと思ったのには、深い考えがあった。その理由の一つに、ミサ子は両親に早く死に別れ、系類が少い事であった。お藤は、この娘を嫁にしたら、息子を取られる心配はないし、自分の思う通りに嫁を教育出来ると思ったからであった。

ミサ子は、夫を愛していた。幼い頃から苦労した割に、ミサ子は世間知らずの娘であった。始めて、自分の夫としての男性である一夫に、心の底から仕えた。また、姑であるお藤を、本当の母親とも思って、どんな事でも母親を立て、ハイハイと従って来た。

一夫は、母親ッ子だった。だから、世界中で、自

分の母親ほど立派な女性はないと信じているのだ。女の様に色白で弱々しい一夫は、一にも、二にも「母さん」であった。だから、母

さんの気に入った嫁を買ったので、この上もなく満足し切っているものであった。一夫の事を、近所の人々も内弟子達も、よい意味でも悪い意味でも「孝行息子」と呼んでいた。実際、一夫の母親に対する態度は一種の病的なまでの尊敬と愛情を持っていた。

「母さん、お芝居の切符が手に入ったから、一緒に見に行きましょう。」

等と、嫁のミサ子に留守させても、二人で芝居見物に出掛ける程であった。

母親のお藤の方でも、嫁が来てからでも、一夫の世話は自分で一手にやっつて、ミサ子には手もつけさせないのだ。ミサ子は今では、その事も諦めていた。しかし、人にいえない淋しさと屈辱を感じていた。

お藤は、誰にも嫁のミサ子を大切にしている事を自慢にした。





「何しろ、仲の氣に入った嫁ですからね。私は、こんな嬉しい事はありませんよ。またミサ子も本当によい嫁で、私のいう事に一度だって逆らった事がないんですからね」

お藤は、会う人毎にいった。

「ミサ子は胸が細くて、洋装が似合いますからね。お嫁に来て、胸が太くなっちゃった、なんて事がない様に、コルセットをつけさせたり、美容体操をやらせたりしています。若い人は、スタイルが大切ですからね」

実際、お藤はミサ子に固いコルセットをつける様に命じたり、朝、晩、欠かさず美容体操をさせたり、食べ物事まで細かく命令したり、世話をやいたりした。そのためミサ子は随分、人知れず苦しんでいるのであった。妊娠してから、妊婦は脚氣になるといつて、お藤はミサ子だけに麦飯を食べさせ、小豆がよいといって小豆を毎日、食べさせたりした。そのため、ミサ子は長い間、下痢に悩まされているのだった。

お藤は巧妙な嫁いびりを計画しているものであった。毎日のマッサージにしても、そうであつた。嫁の若々しい肌を、お藤は憎しみをこめて、血のにじむ程にこする時に、何ともいえない喜びを感じているのだ。だからお藤は、生れる子供を大切にするのだという表面上の理由で、必要以上に固く腹帯を締めさせたり、胸をギリギリと白布で巻かせたりして

いるのであった。

「アッ……お母さま……もう、カンニンして下さいまし……アレー……」

ミサ子は、悲しげに哀願するのであった。

一夫は、そうした妻の悲鳴を聞いても、何とも思わなかった。昼の仕事の疲れで、トロトロしながら聞いていた。

そして、大抵の時は、妻が床につく迄に深い眠りに落ちていた。

## (二)

一夫が翌朝、目を覚ました時には、もう妻のミサ子は起きて、台所で働いていた。一夫は、大急ぎで服を着替えて、

「おはよう、母さん」と茶の間で、ニコニコ顔で件を迎える母親と一緒に食事をした。そして大急ぎで玄関に出た。玄関には妻のミサ子が鞆を持って、しよんぼりと立っていた。可愛い顔は、やや蒼白く元気がなかった。

「いつてらしやいまし」と丁寧に送り出す妻に、一夫は一言でも優しい言葉をかけてやりたい気もしたが、廊下に立ってこちらを見ている母親の姿があるので、それは止めて、誰にいうともなく「今夜は、夜勤で遅くなりますから……」といっただけで家を出た。

一夫は、角を曲るとき、後を振り返った。妻のミサ子の姿はなかった。新婚当時、手を振って夫を送ったといつて、母親のお藤は、

ミサ子を激しく叱った。

「みつともない。毎日、夫が出かけるのに、まるで長の別れの様に手を振って、なんですか。一夫も一夫です。」

それ以来、ミサ子は夫を送り出して、玄関から一歩も出なかった。夫が出掛けると、ミサ子の前には、一日の仕事が山の様に待っていた。それほど広くない家だが、掃除だけでも大変だった。廊下は、ピカピカと磨き上げねばならないし、玄関は水を打って、塵一つない様にしなければならぬのだ。それに、何人かの裁縫の弟子が、十時頃にはやって来る。それまでに、掃除は終わっていないなければならないのだ。

「ミサ子、今日は、お店に品物を納める日ですからね。私は午後から出掛けますよ」

お藤は、ミサ子呼びつけていった。お藤の出掛ける日は、ミサ子にとって決して、閑な日ではないのだ。何故なら、お藤は出掛ける日に限ってミサ子に、日常の仕事の他に、多くの別の用を命じるのだった。ミサ子が身重であろうと、問題にできなかった。その日も冬物の洗濯をあれこれと命じた。

「お師匠さん、お早ようございます」

若々しい元気な声と共に、一番弟子の狩野春枝が、男の様な足音をして、茶の間に入ってきた。

「まあ、春ちゃん。早いね」



お藤は目を細めて、この娘を迎えた。肉づきのよい小肥りのこの娘は顔は美しかった。「ねえ、お師匠さん。私、困った事が出来てしまったのよ。それで、相談したいんでこんなに早く来たのよ」

クックツと含み笑いをし、この娘は足を投げ出して、横坐りに坐った。丸顔で、笑うとコケテシユな笑窪が浮んだ。

「私、今度、伯父の家を出ようと思うの。お師匠さん、お願いなの。こちらに私を置いて下さらない？ 田舎に帰るのはいやだしさ。今年一杯は、ここでお針を覚えたいしね。」

「それはいいよ。春ちゃんなら、私は喜んで置いてあげるわ。今、お針を止めては駄目だからね。何しろ、家の弟子中では、春ちゃんが一番腕があるし、もう近く、独立出来るんだから。だけど、どうして、伯父さんの家を出るんだね。喧嘩したの？」

お藤は、お茶を入れながら、可愛がっている弟子の方を見た。

「喧嘩したってわけじゃないのよ。ホラ、小母さんに、何時か話したでしょう。伯父の長男の勉強で不良がいるって、あれがさ……ウフ……とても、いやらしいのよ。それで……伯父とも話をしたのよ。一日も早く、家を出た方がいいだろうって……」

「そうかい。私の方は、賛成だよ。その方がいいとも。春ちゃんは綺麗だから、男は黙っ

てやないものね。」

「フン……だけど。私は、あんな不良は大嫌いなものよ。じゃあ、小母さん。ここに置いて下さるわね」

春枝は甘い調子で囁く様にお藤にいった。

「ええ、承知しましたよ。二階が一間あいてるんだから、どうぞ。間代なんかいらんからね」

「そんな事ないわよ。私、チャンと普通のお代は払うわよ。私、これでお金持ちなのよ。今日、移って来ていい？」

「今日？」

さすがのお藤も、目を丸くした。

「ええ。私、嫌となったら一日も嫌なのよ。荷物なんて、大してないから。お願いしますわよ！」

そういうと春枝は、お藤の出したお茶にも口もつけずに、立ち上った。

「ミサ子！ ミサ子さん。あのね、すぐに、お二階を掃除して。今日から、春枝さんが来るから……」

「オホホホ。若奥さん、驚いたでしょう。どうぞ、よろしくね」

春枝は、背のスラッ和高い体を、一寸曲げて明るく笑った。年は、ミサ子と同じ二十四才だが、春枝はミサ子に比べて、ずっと大人びた感じであった。娘なのに、人妻のミサ子よりも、奥様、奥様した様子をしているのだ。

小肥りで、着物を着ているためかも知れないが、美しい容貌には、男を魅きつけるコケテシユなものが流れていた。お藤の弟子の中で一番年上だし、仕事も達者で、お藤のいない時には、師匠代りもするというしっかりものであった。

狩野春枝は、この家に移ってから、一週間にもならないのに、もう、この家の家族の一員といった風に振舞っていた。彼女の明るい性質と心臓の強さが自然にそうさせたのだ。春枝は、利功者であった。早くも、この家の空気に同化して、お藤に気に入られる様に何彼と気を配った。そして、お藤が、嫁のミサ子を心から可愛がっているのではない事を見破った。春枝は、限らない軽蔑の目で、ミサ子を見下していた。春枝が、そうした態度を取る事をお藤は、痛快そうに見ていた。また、春枝は、ミサ子の夫を誘惑してみたいという心が動いた。ハンサムな一夫に対して、春枝は、機会ある毎に、自分の美さをチラッと見せる遊びに、夢中になり出していた。

「若旦那、済みませんけど、一寸、この鏡の位置を直して下さいませんか？。ここだと、暗くて、よく見えませんの。」

そんな事をいって、湯上りの体に、長襦袢をかけ、美しい襟足をたっぷりと見せた姿で一夫を呼びに来たりした。人のよい一夫は気軽く、春枝のために用を果してやった。



「ねえ、若旦那、私、こんな所にほくらがあるのよ。いやですわね」

などといいながら、なまめかしい身ごなしで胸を開いて、ふっくらと豊かな胸のふくらみを僅かに覗かせたりしては、

「オホホホ……恥しいわ」とコケテツシユな声で笑って、大げさに胸を合せるのだった。

一夫は、女性といつては、唯一の妻ミサ子しか知らなかった。女遊び等をする男ではない彼には、春枝のそんな嬌態は、始めての大きな誘惑であった。妊娠以来、妻にさえ触れる機会がない彼は、ゴクリとつばを呑んだ。気の小さい彼には、積極的に、春枝に向って行く勇氣もなかったのだ。彼は、春枝の誘惑に悩み続けていた。

ミサ子が、お産のため、入院したある晩の事であった。お藤は、出掛けていた。一夫が会社から帰って来ると、春枝が、美しく化粧して迎えた。二人は、夫婦の様に合い合って食事をした。食事後、春枝は、風呂場に立って行ったが、すぐ湯殿の方から、かん高い呼声がした。

「若旦那、一寸……」

一夫は、読んでいた本を伏せて、湯殿へ行った。

「何んですか？……」

一夫は、湯気で曇ったガラス戸の前で、顔を赤くしていった。

「私、石鹼を忘れちゃったの。取ってよ……」  
石鹼箱は目の前の棚にあった。一夫は、ガラス戸を開けて、手首だけ入れて、タイルの床に石鹼を置こうとした。

「持って来てエ……」

甘い声が湯気の中でした。

### (三)

ミサ子は、可愛らしい男の子を生んだ。母子共に健全で、間もなく退院して来た。お藤は、初孫に夢中だった。子供の可愛がり方は全く、異状そのものであった。

「一夫の子供ですから、私が育てますよ」

そういつて、母親であるミサ子には、指一本触れさせないのだった。

「腹は借りものと、昔からいますからね。お前のような若い者に、大切な孫の世話はさせられません。」といて、片時も、手離さなかった。健康なミサ子は、あふれる程に母乳が出たが、お藤は、一郎に飲ませる事を許さなかった。そして、人工栄養で自分の手で育てるといい出した。

「この人は、脚気だから、やってはいけません」とお藤は、息子や人々に宣言した。

ミサ子は、始め必死に反対したが、夫の一夫までが、夢中でお藤の説に賛成したので、仕方なく黙ってしまった。

子供が生れる前と、ガラッと変って、お藤

は、露骨な態度で、嫁いびりを始めた。

お藤は、孫の愛情が母親に移るのを極度に怖れた。だから、ミサ子が、一郎を抱いて牛乳をやる時でさえ、一時も目を離さなかった。お藤は、昔、大名の乳母が、覆面をして乳をやるのは、後になって子供が乳母を好きにならぬためだとかの本で読んだのを思い出して、ミサ子にも、子供を抱く時、黒い布で目から下を包む様に命じた。

それ以後は、一夫が遅い日の夜など、この家の茶の間では不思議な光景が見られるのだった。

覆面をして一郎を抱き、牛乳瓶を持って授乳しているミサ子を、お藤と春枝がニヤニヤ笑いながら眺めているのだ。ミサ子の白布でキリキリと巻かれた胸には、何にも優る素晴らしい母乳が一杯に満ちているのに、ゴクンゴクンとミルクを飲む一郎の可愛い口を見ているミサ子にとって、母親として、それは何よりも苦しい気持ちにさせられる責苦だった。

ミサ子の前には、姑の蛇の様に冷めたい目と春枝の軽蔑した瞳が、面白そうに自分を見ているのだ。ミサ子はホロリと涙を落した。ミルクを飲み終った一郎はスヤスヤと眠る。それを、お藤は、大事そうに、抱き取って、床に寝かせるのだった。万一、反抗でもすると、最近では、気狂いの様になってお藤は、彼女を折檻する事が多くなった。



彼女は我子さえ、十分に世話の出来ないのが堪らなく情なかった。

「……」

「何て、顔をするんだね。いやなら子供を置いて出て行ったらいいんだ。子供を生んだらお前なんか用なしの女さ。何が悲しいのさ。こんな事で涙が出るのかい。本当に痛い目にあわせてやろうかね。春枝さん、この人を縛り上げて下さいな。」

お藤の言葉で、春枝は、大喜びで立ち上った。二人は寄って、たかって彼女を後手に縛り上げ、そして、二人は、満足する迄、ミサ子を抱いたり、打ったりするのだった。

「お母さま……済みません。もう、決して、お言葉に逆いしませんから……」

ミサ子があやまる迄、折檻は続けられるのだった。

「私達のした事を一夫にでも話したら承知しませんからね。解ってるだろうね。」

「ハイ、お母さま……」

「そんなら、今夜は、これで許してあげよう」

こんな光景は、暫々繰返されるのだった。

一夫は、最近、母親の嫁いびりの事を薄々は気がついていたが、知らぬ顔でいた。ミサ子は何もいわないのをよい事にしていた。彼の心には、妻に対して、済まないと思う事があったのだ。それは、春枝との事であった。

遂に、春枝の誘惑に負けて、ズルズルと深みに引っぱり込まれてしまった一夫は、決して春枝を愛してはいないのだ。美人には違いないが、大胆で明け放しの春枝を彼は好まなかった。それよりも、じっと涙ぐんでいる妻のミサ子の方が、どんなにか、彼の心を捕えるのだった。だが、そうした彼の気持とは反対に、行動は、春枝との仲を深めて行った。

春枝の目から見ると一夫は、全く、遊びの相手なのだ。彼を、自分の美の前に跪かせるだけで楽しいのだ。ミサ子から、夫である男を奪うだけで、大いに満足感を味わっているのだ。彼女は、恋の勝利者のように得意であった。この可愛らしい人妻を苦しめられるだけ苦しめてやる事に無上の優越を感じていた。だから、お藤と心から一緒になって、行動するのであった。

「一夫さん、遅かったのねえ」等と春枝はミサ子の目前で夫婦気取りのベタベタした態度を示した。そうした時、一夫の困った顔が、又、春枝には面白くて仕方がないのである。

お藤は、ミサ子と息子の仲を引裂くのは、この時だとばかり、ミサ子を自分の部屋に起居させ、一夫を二階に追いやった。それは、一夫が

「赤ん坊が夜、泣いてうるさい」と一言喋ったのをよい事に、

だものね。二階で寝た方がいいよ。春枝さんの隣の部屋なら静かだよ。」

お藤は、内心大喜びで早速に実行させたのだ。こうする事によって、第一、嫁いびりも一晩中出来るし、ミサ子の体に少々位傷がついても、一夫には知れないと思ったからであった。事実、そうなってからは毎毎の折檻がやりよくなった。深夜でも気が向けば、手軽に苦痛を与えることが出来るようになったのだ。

「もう、グウグウ眠ようと言うのかい！」

そう言って、お藤は、ミサ子の布団をはねた。驚ろいて起き上ろうとするミサ子の黒髪がぐっと掴まれた。

「いいえ、お母さま、まだ、眠っておりません」

「そうかい。じゃ、こうしたら痛いからね！」

「ハイ。痛うございます。」

「これでは、……」

「アッ……」

「私が憎いだろう。殺したい程憎いだろう。」

「いいえ、……お母さま……」

「お前は、クリスチャンだったね。汝の敵を愛せよっていうのかい。フン、憎いなら憎いと本当の事をいったらどうだい。」

「私、悲しうございます。」

「そうだろうさ。亭主は、別の女に取られてね。お前なんかを愛してくれないもの。」





「いいえ、夫は、私を愛しておられます。」

黒い大きな瞳を輝やかしてミサ子はいった。

「へエー、大変な自信をお持ちだね。」

お藤は、嘲笑的な調子で、嫁を顔を睨みつけながらいった。一言毎にグイグイ引き絞られる頭髮の、抜けるような痛さをこらえてるミサ子の顔が、お藤には心から憎くなるのであった。それでも平気な顔をして逃げ出さないでいるのかい——と腹が立って来たお藤は、髪を放してミサ子の一方の手を掴み、逆にねじり上げた。それでもミサ子は、黙って姑のなすままになっていた。お藤はカーッと訳の分らぬ血の狂奔するのを覚えて立ち上るなりミサ子の体を突きとばすように倒して馬乗りになった。お藤は、腹を立てると、夢中になって、無抵抗のミサ子を責めつけるのだった。

「お前の顔等、見るのも腹が

立つよ。」と例の黒覆面を頭からかぶせ、後手に柱に縛りつけて、一晚中放って置いたりする事も度々であった。

そんな時でも、ミサ子は、翌朝、誰にも訴えなかった。やや元氣のない蒼白い顔で、黙って、日常の仕事を始めるのだった。お藤もお藤で、平素の様に、口やかましく叱りつけるだけであつた。だから、春枝以外の女弟子達も、世間の者も、まさか、お藤の嫁いびりが、そんな所まで進んでいるとは知らなかったのだ。

#### (四)

世の中は、お藤の思う様にはいかないものだった。というのは、腰の落ちつかない春枝は、ちよつとした事で一夫と喧嘩をして、家を出て行ってしまった。春枝にしてみれば、一度、男を誘惑してしまえば、もう、その男に興味はないのだ。始めから、一夫の様な弱々しい男は、好きになれなかったのだ。

「何さ、あんたの様な女の腐った様な男は、ないわよ。口惜しかったら、奥さんを追い出してごらん。出来ないんだらう。孝行息子なら、孝行息子らしく、姑の嫌いな女を出したらいいいじゃないか。」

「母さんは、あれで、ミサ子が嫌いじゃないんだよ。」

一夫は、弱い声で反対した。



「へエー、好きでいじめてるかい。それじゃあ、変態だね。」

「母さんの悪口はやめてくれよ。」

何時になく、一夫は怒った顔をした。

「変態だから、変態というのさ。第一、この家の者は、皆、気遣いだよ。女房がいびられているのを承知で、何もない亭主。いびられて、ピイピイ泣いてる癖に、逃げ出す事も出来ない女房」

「ミサ子は、僕を愛してるのだよ。」

「もう沢山。聞くのもうんざりだわ。私が好きなら、追いかけておいで。私は、もう一日もこんな家にいたくない！」

春枝は、来る時も早かったが、出て行く時も素早かった。お藤が止めるのも聞かずに、荷物を纏めて、サッサと出て行ってしまったのだ。

春枝がいなくなったからといって、お藤の嫁いびりは、決しておさまらなかった。寧ろ他人の目がなくなったので、何時でも好きな時にミサ子を泣かす事が出来た。

一夫は、春枝に逃げられた事が、大きく心に響いた。彼は自信を失うと同時に、女に理由のない憎しみを感じた。そして、その憎しみを哀れな妻のミサ子に向けた。自分でも不思議な程に意地悪な男に変わった。彼は母親がミサ子を折檻するのを前と違った目で見出した。そして、自分でも、妻の体を苦しめる事

に興味を覚える様になったのだ。彼のこの変化を一番喜んだのは、母親のお藤だった。彼女も、もう、息子の目の前ででも、嫁いびりを何の気兼ねもなくやれるのだった。

こうして、この親子は心を合せて、ミサ子を苦しめる事を何よりも楽しみとしていた。会社から帰って、食卓につきながら一夫は母親が妻に灸を据えてるのを、ニヤニヤしながら眺める。ミサ子の、畳に伏し、歯を喰いしばって熱さを耐えている姿は、今迄、妻に感じた事のないものを発見したような気がするものであった。呻めく様な泣く様なミサ子の低い声が、この惨忍な親子の心を宇頂天にさせるのだった。

「母さん、もっと大きなのを据えてやって下さいよ」

一夫は、ギラッと目を輝やかす。

「そうだねえ。もう、この位ではこたえないらしいものね。」

そういつて、お藤はモグサ箱を引寄せるのだ。

「お母さま……カンニンして……」

とミサ子は、怖ろしそうに、両手で胸を押さえた。

「生意氣をいうな。夫の命令だぞ！」

一夫は、怒って立ち上ると、妻の両手を背中ではね上げた。

「あなた……」といいかけるミサ子の口に、

一夫は手拭を押し入れ、紐で猿轡をした。

お藤は、息子が嫁いびりに参加する様になってからは、安心して一夫に嫁を返すことが出来た。隣室から聞える息子に苦しめられているミサ子の泣き声は、お藤にとって、自分で責める時よりも、何か満ち足りたものを覚えるのだった。

(ウフフ……やってるね。一夫も、よく私の気持が解る様になったものさ)とお藤は、ニコニコしながら眠る事が出来るのだ。ミサ子は、どんなに夫から責められても、それが愛情の表現と信じていた。だから、夫の命令に何の抵抗も示さなかった。彼女は、どんな事があっても、夫の愛を離すまいとしていた。

ミサ子は、日に日に瘦せていった。それでも、彼女は、夫の虐待に耐えていた。親子に夜も、昼も責められてるミサ子は、もう何の気力もなかった。今では、外に出る力もないのだ。お藤も、ミサ子の哀れな姿を世間の人の目に触れさせたくないため、買物はすべて自分がしていた。そして、家に来る弟子達も、全部廃止して、他人が家に入る事を嫌った。

夜が来ると、この家の中には、地獄の光景が展開されるのであった。ミサ子の悲鳴が近所に聞えない様に、金属の猿轡も用意されていた。ミサ子が苦悶にのたうてばのたうつ程



## マニアの独り言

S・S 生

先日、夕食後窓辺に寄って涼をとっていると、裏から隣家の娘さんがやって来た。

「おじさん、これ直してくれない？」

先月号にチョット紹介した例のバレリーナの娘さんである。心易だてらか、職業柄慣れているせいか、うら若い乙女が、肩も露わなシユミーズ一枚で、片頬に可愛いエクボをみせて断りもなく上り込む。いつものこと乍ら、おじさん、なる呼びかけに、内心少々不満を感じながらも口には出さず、差し出された物を見ると、スダレの巻上器である。御存知だろうが、簡単な金具に細い綿ロープが通っていて、引張るとスダレが巻上り、チョイと右へ寄せると、ロープが溝を外れて、金具の中のプラスチックの軸の角によって留まる仕掛になっている新製品(?)で、私の家で使っているのをみて、隣家も買ったという代物である。

「留まらなくなったのよ」

というので、金具の中を見ると、その筈だ。留め角がとれてしまっている。

「これは駄目だ。随分乱暴に引いたものだな。こわれてるよ」

「そうお、やっぱり駄目？」

バレリーナー嬢、ケロリとしている。私の返すのを受けとって、長い綿ロープをクルクルと自分の掌に巻きつけると、家内を相手にしてペチャクチャやり出した。二、三日前から少し体の具合が悪いとかで、勤めを休んでいるそうだが、クリームがどうの、口紅がどうのと話している姿は、一向具合が悪そうでもない。その内、彼女は掌の綿ロープを、のぼしてみたりチョイチョイと引張ってみたり、ムキ出しのسنナリした腕に巻きつけたりし出した。家内との話に気をとられての無心なしくさなのだが少し離れて見るともなく見ていた私をハッとさす程、その綿ロープは彼女の腕に深くくびれを作っているのだ。自分で何気なく締めるのだから、勿論痛くはなからうが、私の眼には痛々しげに映る程、ブツクリと両方に山をこしらえ喰い入って、乙女の肌の柔軟さを誇示しているようだった。睡っている子を起すようなことを……と内心舌打をしながらも、私は眼をそらすことが出来なかった。ある夏の夕べの一刻のことである。

親子の折檻も激しくなっていくのだった。

こんな事があってから暫くして、近所の人々の密告で、この世にも怖ろしい折檻の事実が警察の耳に入った。警察は、一応、親子を呼び出して調べたが、二人は、虐待の事実を認めたが、その罪は自分にある、と、互に主張して、係官を困らせた。一番、困った事は当然の犠牲者ミサ子に、母子を訴える気が全くないのであった。

「みんな、私がいけないからなんです。私が至らないから、お母さまや夫に叱られていただけなのです。虐待だなんて、そんなことはされた覚えはありません。たとえ近所の人々の方がどんなことをいわれたとしても、それはその方の月並みな考えだと思っています。夫は誰よりも私を愛してくれまして、お母さまは私を立派な嫁にするために一生懸命になっただけで下さるんですもの、私は世界一幸福な女だと思っています」と。

結局、嚴重に母子を訓戒して、警察は手をひいた。果してこの事で、お藤の嫁いびりが治るであろうか、これは大きな疑問である。

一夫は、あんなに妻を苦しめていながら、愛している事では変りないし、又、ミサ子も少しも夫や母を恨んでいないとあっては、開いた口がふさがらないと近所の人々は、眉をひそめ噂し合っているのだった。

(終)





△アブチツク・ドリーミング△

# 石を抱いた女

雪 俊 遙



「お呼びでございますか」

文京映画株式会社の演出家、今野五郎は三宅社長に呼ばれて社長室に出頭した。

「いやあ今野君。まあ掛け給え。今度の君の作品は大分当つとる様だな。今、『映画週報』の興行成績を調べてみたんじやが、二位の近畿映動の奥田監督作品をぐんと引離して、圧倒的な売上を上げている様じやよ。」

「ハ、おかげ様で……。」

「やっぱり柴田喜代子を大胆な逆隣にした、あの見せ場が物を言った様じやな。ウン。」

「そうでしょうね。奥田君の方も、畑蘭子を隣にしてみせていましたが、両手を上げさせて、胸と足に縄を絡ませただけのありふれた隣ですからねえ。もう此の頃のお客さんは目が肥えてしまつて、あんなのは何とも思いませんよ。」

「それに畑蘭子は年じやしな。美人で名も売れとるが、それだけに監督としても思ひきつた真似は出来んし。どうじや、君。わしは此の機会に、柴田喜代子をヒロインにして大いに珍しい責め場を演らせて、彼女を売込んでみようと思つとるのだが、君の意見はどうかね。」

「ハア。実はこちらからお願いしてみようかと思つていた位です。湘南映画や国際キネマなどは、桑田深雪や吉原マユミの様なグラマ―を売出そうとしている様ですが、何といつてもこれからはサディズムの時代ですよ。不肖私も、いささかそういうことは研究している積りですから、一つ思存分やらしてみせて下さい。」

「フム。それを聞いてわしも満足じやよ。それで、今度の企画も時代物じやったな?。」

「ハア。十六世紀ハンガリーの、有名な血の伯爵夫人を、日本の中世に移して映画にしてみたいと思つてます。」

「フーン。いっそ、日本に移さずに、白人女ばかりを使つて出来んもんかねえ。」

「さあ。私もそこまでやれたら本当に嬉しいんですが、今の日本では一寸無理ではないかと思ひます。ファッション・モデルのエレーヌ・イギヤンに、ストリップパーのミス・アンバー、ジプシー・ライオン。あとは演劇好きの女子学生が五、六人動員出来れば精一杯ですからね、なにしろ。」

「わしがハリウッドの社長だったらなあ。ええ今野君。大分古い映画だが、ヴィクター・フレミングの『ジキール博士とハイド氏』じやったか。当時随一の女優イングリッド・バーグマンと、最高の美人スター、ラナ・ターナーが、裸でヒイヒイ泣きながら馬車を曳いて走らされている場面があつたのう。スペンサー・トレシイ氏のハイド氏にビシビシ後から鞭で打たれてのう。無論、裸といつても肩の辺しかうつとらなかつたが観客にはちゃん裸の想像を与え、る様に出来ておつたわ。馬車のガラガラ走る音と、鞭のビュシツ、ビュシツ、という音にバーグマンとターナーのキャアキャアという悲鳴が入りまじつて、全く素晴らしい場面じやつた。わしも映画会社の経営者なのじやから、何とかしてハリウッドの一流女優を使つて痛烈な責め映画を作れんものかと、それこそ、一晩寝ないで悶々としたもののじやつたぞ。」

「ハア。私も当時まだウブな大学生だったので、大変なショックだったのを覚えています。」

「君はまだ若いし、鬼才と謳われる程、映画の演出技術には優れた男じや。一つ君の力でわしを世界映画界に進出させて貰えんかね。」  
「いや、そう大きな期待をかけられても困りますが、とにかく今迄の日本映画には見られなかつた様な、変った責め場をどんどん発表



して行きたいと思つてます。社長も一つ、映倫の改訂の方で充分手腕を発揮なさつて、私の仕事を助けて下さい。お願い致します。」  
「うん、その方は大丈夫じゃ。君の今度の作品が出来上る頃までには、女優の責めに限つて、画面の美しさを損わない限りではどんな風に責めてもよい、という、わしの永年の主張が明文化されている筈じゃよ。」

「それを聞いて安心致しました。」

そこへ美しい秘書が紅茶をいれて持つて来た。応接用のテーブルは低いので、頭を下げる様にして茶碗を下す度に、濃い藤色の、ピタッと胴の緊ったワンピースの襟もとがあいて、白い胸の肌が、コルセットのところまではだけて見える。ふくよかに盛上った胸のあたり、細いコードでも縛り上げられたらしい縄目のあとが、二本並んでキッチリと赤く凹んでいるのが、若い映画監督の目にとまった。

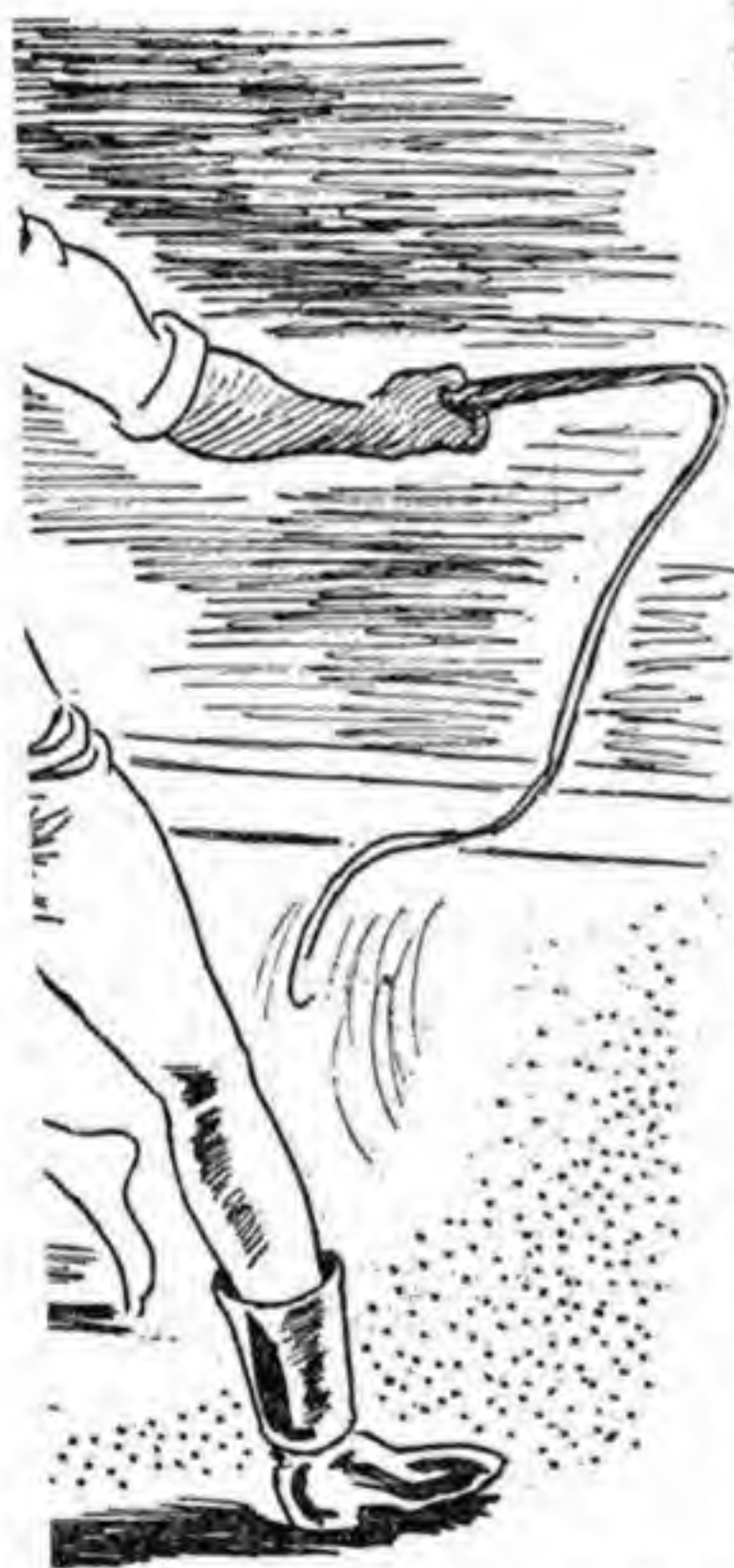
顔を上げた秘書は、射る様な青年の眼差しに視線をぶつけ、見る見る赧くなつて、美しい顔を繊細に歪めると、藤色のドレスの裾を動かしながら部屋を出て行った。

社長は素知らぬ顔で葉巻をくゆらしていた。

## 二

一生のうちに六百人の下女を虐殺したといわれる。血の伯爵夫人。エリザベト・ナダスデイの生涯を脚本した『流血城』は、それから数日の後にクランク・インした。

助監督時代からユニークな脚本を書いて注目されていた今野五郎が、監督昇進三本目にして、いよいよ取



組んだ本格的な責め映画だというので、スタジオ内は早くも大変な評判。しかも、クランク・インして最初に撮ったシーンが、僻地の豪族、灘須家の農場で、五人の女奴隷が、牛馬の様な拘束具をつけられて、むき出しの背中をビシビシと鞭で叩かれながら、鋤を曳いて働かされている場面だというのであるから、意識の古いスタジオ・マンなど、すっかり肝を潰してしまった。

「あゝあ。可哀想に、ニューフェイスの清水サユリを見ろよ。お腹にあんな革帯が喰い込んで。ア、又ぶたれた。本当にぶたなくなつたていいだろうになあ。」

と、女優達に同情している老人がいるかと思うと、

「やっぱり今野先生はやる事が違うなあ。新人ばかりを五人集めて、人間用の馬具をつけて、白昼、鞭で叩きながら働かせる。どうだい。凄いいメージじゃないか。」

と、目を輝やかせている若い裏方もいる。

注目の喜代子は、腰元の扮装で、五、六人の同僚と出を待っていた。

「オイ。ここへ雨を降らせてくれ。」

今野監督のキビキビした声が飛ぶ。

こういう場合になると、俄然はりきつて来て動作まで小鹿の様に敏捷になる監督が、喜代子は好きだった。

三人の助手がホースで雨を降らせた。

清水サユリ達の悲鳴が一層迫力を増して来た。

「まあ、あんなにずぶ濡れにされてしまった。怖いわ私。」  
喜代子の隣で、クリスチャ



ンの満井美佐子が、ガタガタ震えている。

「意気地なしねえ。もうじきあんたは、ホラ、溝口先生の『山椒大夫』に出て来たみたいなの、板の首枷をされて、舌を抜かれるのよ。今からそんなじや駄目じゃないの。」

ストリップパー上りの若山久美が、目をキラキラ燃え立たせて、満井をからかっていた。

久美の役は、同じ腰元でも、女主人に絶対忠誠で、外の女達を虐める役なのだ。

此の久美にしる、主人公のお鈴の方になる、戦前派スターの新渡部末子にしる、虐め役に選ばれた人は、実際の責め場になると、不思議に、気持良さそうに目を光らせているのだ。やっぱり解るのかしら。偉いわ、今野先生って。とんだ所で喜代子は感心していた。

でも最後には、途中で虐殺される喜代子の弟になる伏野弥太郎が野武士の首領になって灘須家を滅し、若山と新渡部は、手足の指を切落されて火焙りになることになっていた。

「それだってきつと、今野先生のことだから、相当リアルにやるに違いない。その時はどんな顔をするかしら」と、喜代子は奇妙な期待で胸がふくらんで来る様だった。

やっと釈放されたサユリ達が、イ、イ、イ、イ、イッ。と泣きなが



から駆け込んで来た。

「喜代子お姉様。」

まだ十九才の可憐なサユリは、雨と、大きな目から溢れ出て来る涙で、顔をクシャクシャに濡らせて、喜代子に訴える様な視線を向けた。蠟細工の様に肌目の細かな、というより寧ろ、肌目がないといった位スベスベした肌には胸にも、二つの腕にも、ひじにも、締めつけられた革帯のあとが赤く窪んでいる。

扮装さえしていなかったらきっと喜代子にしがみついてワンワン泣いたに違いない。映画雑誌のカメラマンが、よい獲物とばかり、そのサユリにさっとカメラを向けた。「辛かったでしょう、サユリちゃん。早く控室で傷の手当をして貰って、洋服着換えなさい。」

「ハイ。」

サユリは裸の背中を見せて吸り泣きながら走って行った。白い背肌、鞭のあとが何本も、みみず脹れになって赤く盛上っていた。ぶたれなかった部分の肌は、水に濡れて白く光っている。トリックの雨水は、女奴隷の腰をおおった短い腰布をグッシヨリと濡らして薄い白布をベッタリとサユリの体にはりつけていた。

「へへッ。清水君。いい体してるじゃないか。」



名傍役の馬さんがわざわざ追って行って、サユリの背を、ピシヤピシヤと平手で叩いたので、皆が一斉に笑った。サユリは火がついた様に泣きながら、あわてて逃げて行った。

喜代子がキッと馬さんを睨んでいると、

「ヨーシ、カット。サアここで柴田君の腰元が登場。お怒りに触れて折檻を受けるわけだ。オーイ、柴田君はどこだあ。」

凜とした監督の声が喜代子の耳を打った。喜代子はハツとして、一寸目をつぶった。気を落着けてから前へ進み出た。

「ハイ先生。ここです。」

ガヤガヤ騒がしかった野次馬がシーンとなつて、一斉に、清楚な腰元姿の喜代子に目を注いだ。

### 三

『流血城』の最大の見せ場である喜代子の俵吊りは、それから三日後のどんよりと曇った日に、文京映画のオープン・セットで行われた。

奥方の惨虐行為に見かねた喜代子の腰元、香取が召使達を煽動している所を、久美の仄香にみつけれ、裏庭へ、後手に縛り上げられて引立てられて来るところから、その日の撮影は始った。

カメラの傍に座って助監督に縛られていると、

「駄目よ、そんな生ぬるく縛っちゃ。もっときびしく縛らなきや詰らないじゃないの。」

久美が傍で気持良さそうに助言している。

やっと縛られたと思うと、又すぐ縄を解かれ、着物を剝がれて俵へ入れられるのだ。

「いいかい。ここがいい所だからね。柴田君が俵へ片足ずつ入れる所は後から。腰まで入れたら、パンして、今度は前から撮る。いいね。じゃ柴田君は着物を取って」

もう仕様がなかった。喜代子は真赧になって、着物を脱ぐと俵の前に立った。

三人の腰元が俵を立てて口を開く。

「ハイ、右足を入れて。両手で俵の縁を掴んで。そうそう。新渡部君は、スタートがかかったら、その鞭で柴田君の背中を叩いて、早くお入り」と催促する。わかったね。」

「背中ですか？ 背中だけじゃつまらないわ。」

「じゃ君の好きな様にし給え。さて、ここから始まります。五、六回、練習をして、それから本番に行きましょう。」

こんな調子で、俵へ詰められる前に、喜代子は、何十分も、羞しい姿を皆の視線の前に晒していなければならなかった。

やっと、首枷の様に穴をあけたさんだらばっちで、肩に蓋をされると、俵に荒縄をかけられるのが、又大変。

女手には無理なのを、どうしても腰元達が縄をかけるシーンを入れるのだ、と、監督自ら縄のかけ方の指導である。

横にころがされて、俵の上から縄を廻しては、足で抑えて、グイッ、グイッ、と力一杯縄を締める。俵を立てて、細首のすぐ横へ、何回も縄を当てて浮上ったさんだらばっちを抑える。又ころがされる。喜代子の柔肌に薬がチクチク突き刺さる。締上げられる縄目のきびしさに息も詰りそうだし、身体はむれて、べっとり汗が噴き出て来るし、前向きにころがされた時など、泥の上に顔を押しつけられるし、我慢強い喜代子もすっかり音を上げてしまった。

「ああ疲れた。一休みしようや。」

今野は俵を起してチョコンとカメラの前におくと、ハンカチで顔を拭い、ついでに泥と汗ですっかり汚れた喜代子の顔を丁寧に拭いてくれた。

窮屈な俵に詰められた情ない姿のまま、秘かに愛している青年監督の、甘い香水の匂いのするハンカチで顔を拭かれているのは、嬉



しい様な、悲しい様な、妙に切ない気持ちだった。俵から首だけ出した姿のまま、喜代子はポロポロ涙をこぼした。

それからが大変だった。喜代子はかつらを取られ、長い髪の毛で松の下枝に吊されてしまう。

「アアアッ。ウウッ。痛いッ。痛ッ」

助監督が俵から手を離すと、忽ち喜代子は悲鳴を上げた。

「柴野君。暴れちゃ駄目だ。ジッと我慢して。暴れると毛が抜けて下へ落ちるぜ。」

今野の声も、苦痛に悶える喜代子の耳に入ったかどうか疑わしい。目と眉を烈しく吊りあげ、唇を歪め、歪んだ口をヒクヒクとけいれんさせながら、喜代子は、イーッ、イーッ、イーッ、とむせび泣いた。どんな惨めな顔になっても、頭髪で吊られる女の宿命というか、あさましい責め顔は正面に向けたまま、そむけることも、うつむくことも出来ない。

「ヨシ。本番スタート。」

声と共に、三人の腰元が、大きな十能で赫赫と熾った炭火を運んで来ては、俵の下において行く。俵の中に熱気がしみ通り次第に熱くなって来た。

「ホホホ。謀叛人はこうして成敗するのじや。よく見ておきやれ」  
お鈴の方の末子が、長刀のさやで、髪の毛吊りの苦痛に喘いでいる喜代子の身体を、ぐうん、ぐうん、と押して、ブランコの様に左右にぶらぶらさせる。

「キイーッ。キイーッ。助けてよッ。痛ッ。痛痛ッ。」

喜代子の悲鳴はもはや脚本を離れて、脚本以上に凄艶なものになっていた。

#### 四

伊豆の熱川温泉のホテル。二人の男が廊下でバッタリ出逢った。

「やあ今野君。」

「ア、社長。これは意外な所で。週末のお休みですか。」

「君は脚本の執筆かい。」

「ハアそうなんです。次は現代物をやってみたいと思ひまして。」

「君は脚本を書く時は女の子を傍に置いて、いろいろと責めながら書くというじゃないか。インスピレーションを得る為と、実地研究の為に。どうせそれはうちの子なんじゃろ。一つわしにだけ、そこん所をロード・ショウせんかい。……あ、いやいや、その代りといっちゃ何だが、わしの方も手土産を持って行くよ。勿論女の子のね。いい子だぜ、君。」

「ハア。しかしそれは、お互の私生活ですから……。」

迷惑そうな今野に構わず、社長はさっさと自分の部屋に取って返して行った。

今野は一寸廊下に佇んでいたが、仲々社長が来ないので、自分の部屋へ戻った。きびしい猿轡をかけられて、後手に連縛されている半裸の美女二人の前においた机に向って座ると、

「弱ったなあ。」

と言いながら、書きかけの原稿用紙の上に、ふけをぼろぼろ落している。

「オイ、今野君居るかい。」

「ハアどうぞ。鍵は外してあります。」

入って来た社長は、片手に大きなトランクを提げていた。

「ヤアこれはこれは。果せるかな柴田君だな。ハハハ。そう羞しがらなくてもいいよ。もう一人は、オイオイ、頭を上げ給え。」

羞かしそうに、美事に脂肪の乗った丸い肩まで赧くして、下を向いていたもう一人の娘が、思いきった様に顔を上げた。

「ヤ、何だ君は。上野君じゃないか。」

縋帯の様な細い白布で、頬が二つにくびれる程強く猿轡されて、





人相さえ少し変っていたが、少しきつい目をした、色白のあけび型の顔は、粉れもなく、東京へ残して来た秘書嬢の顔なのだ。

「ワッハッハッハ。今野君。負けたよ、君には。」

「ハア。済みません。」

「何。済むも済まんもあるか。何事も君の芸術の為だからなあ。と言っても、わしの女を片端から縛られてはわしも困る。まあこれからは事前に一言相談してくれ給え。」

「いや片端からだなんて、そんな積りではないんです。只……。」

「只……。」

「ハア。此の上野さんは僕の今度の映画のヒロインのイメージにぴったりなんです。それで、こうして縛った姿を見ながらシナリオを書いていたのですが……社長に逢って決心がつけました。一つ此の上野さんを、次の映画の主役に抜擢させて頂けませんか。」

「ウン……しかし上野君は芝居の方は素人だからねえ。」

「いやその点は大丈夫です。私と新渡部君がうまくリードすれば一応はこなせる筈です。」

「ふうん。上野君はどういっとる？」

「是非やりたいと言っているんです。」

「本当かね。君に拷問されて、泣き泣き承知したのと違うか。」

「じよ、冗談じゃありません。」

「ワッハッハッハ。文字通りこりゃ冗談じゃよ。」

「じゃあ、お許し頂けますか。」

「よからう。君に仕込まれれば、彼女の折檻のレパートリーも増えて、わたしも先行、愉しみじゃよ。うんと変った責めを一つ仕込んでやってくれよ。ワッハッハッハ。」

「ところで社長。あの大きなトランクは一体何ですか。」

「うん、そうそう、忘れとった。早くあけてやらんと、チューチューが窒息し死んでしまうがな。」



「チュウチュウ。」

「そうじゃよ。わしが最近、苦心の末、やっと飼慣らした可愛いチュウ公を見てやってくれよ。」

三宅社長が大トランクを座敷の真中へ搬び込み、喜代子のすぐ前で、パチンパチンと金具の音をさせて蓋を開いた。上野秘書も怖いものみたさに、胸をねじって、喜代子の、ソーセージの様に括られた二の腕の横から、猿轡の顔をのぞかせている。

「アッ、社長。これは……。」

チュウ公とはよく言ったものだ、と、今野は感心してしまった。大トランクの中には、ギリギリ一杯の大きさの針金の檻が詰っていて、檻の中に窮屈そうに身をかがめて、四つん這いに詰められている女。

檻の針金が、餅網の様に、肉付きの良い肌に喰い入っている。鼻の孔に嵌められた大きなイヤリング。それを掴んで、社長がぐつと引張り上げる。鼻中隔を丸くせり出す様にして、鼻で吊上げられる女体。鼻筋がピンと高まり、顔から、ふくよかな胸までが、みるみる赧くなった。

「満井君じゃありませんか。」

「アッハッハッハ。今野君。わしもいい腕じゃろ。此のアーメン女優をこれだけに仕込んだんだからなあ。上野君を取られても怒らんわけがこれで解ったろう。アハハハ。ソラ。鳴け。チュウチュウと鳴け。鳴かんか。」

短気な三宅が、太い右手の人差指を拇指で丸めて、盛上った美佐子の鼻中隔を、ピンピンと弾く。美佐子は、澄んだ目から清らかな涙をポロポロこぼしながら、チュウチュウ。チュウチュウ。と蚊の鳴く様な細い声。

「もっと大きい声で。ソレ。」

ピン。ピン。チュウチュウ。ピン。ピン。……。

三宅はアッハ、アッハと笑いながら、美佐子の鼻環を掴んで、檻ごと仰向けにひっくりかえしたり、頭を下にして逆さに立てたりしながら、面白がって、清純なクリスチャン女優にチュウチュウ鳴かせて愉しんでいる。それは全く、鼠を騙る猫のように、残忍で執拗な虐め方だった。

## 五

「今野先生の浮気にも呆れたものねえ。」

撮影所の廊下の隅で、新渡部末子が傍役の馬さんをつかまえて話している。

「最初が喜代ちゃんて、次が上野さん。此の前は満井さんでしょ。今度は久美ちゃんが虐められる役よ。此の所、文京映画の目星しい美人は軒並被害者よ。喜代ちゃんはおんまり虐められて、すっかり身体をこわしちゃったんですってね。」

「今度は誰の番だか知ってるかね。お末さん。」

「知るもんですか、そんなこと。私でいいことだけは確かだわね。」

「ニュー・フェースの清水サユリさ。あの喜代ちゃんと同郷で後輩の……。」

「マサカ、あんな乳臭い子。」

「と思うでしょ。それが年増の自惚というものですよ。男って奴はね、満開の花よりは開きかけの花、それよりもまだ固い蕾の方に、ムシって、メチャメチャにちぎってやりたい欲望をそえられるんだぜ。それに、肌のなめらかさからいったら、サユリ位の子はいないしね。ま、そんなことよりも、レッキとした確証が上っているんだから仕様がないうさ。」

「なにさ、その確証ってのは。」

「昨日ね。中野の凌雲館という高級ホテルへ、社長がサユリを連れておしのびで入って行くのを、偶然、俺見ちゃったんだよ。ここは



各部屋に鞭と鎖が置いてあるんで、その道の人達にはよく知られて  
いるホテルなのさ。勿論、赤坂の待合みたいに固い人の紹介状でも  
なきや、始めての客なんか玄関の中へも入れやしないよ。社長は前  
から、上野君や柴田君を連れてよく行ってる所さ。つまりね。社長  
が、社長の権威とか、金とか、スターの地位で釣って、ニュー・フ  
エースを仕込んでおいて、それから今野さんの方へたらい廻しして  
いるんだよ。」

「マア。そんな便利な所が戦後はあるのね。私みたいな戦中派の青  
春は本当に詰らなかつたわ。」

さりげなく言ったが、末子の目がキラリと異様に光っていた。  
そこへ、

「いやだあ、遅刻しちゃったわ。」

噂の清水サユリがいそいでかけこんで来た。

キラリともう一度目を光らせて、控室の方へ走り去って行くサユ  
リの後姿を見送って、末子は、馬さんを誘い、  
「少し油を売り過ぎたわ。」

と、あわてて、今野組のセットへ戻った。

セットの中はまるで拷問部屋の様だ。薄暗い天井には、むき出し  
の、大小さまざまな照明燈が不気味にぶら下っている。片隅にはあ  
りとあらゆる責道具が、山の様に積重ねてある。

カメラの前には、短かく鋭い棘が一杯に植えてあるベッドがおい  
てあって、何と、半裸にされた若山久美が、後手に縛られて、針山  
のベッドの前に立たされている、縄尻を持つ満井美佐子と上野絢子  
が、時代劇に使う棘の生えた刺股や袖搦で、素晴らしい肉体美を誇  
るストリッパー上りのグラマー女優を、そのベッドの上に追い上げ  
ようとしている。勝気な久美も真蒼になって、科白は震えるし、目  
は恐怖ですわってしまっている。皆息を詰め、シーンとして、此の  
拷問場面の成行きをうかがっていた。

「駄目だ、駄目だ。若山君。いいかい。君はいつも虐め役をやって  
いる残酷な女優、満井君はいつも責められてばかりいるおとなしい  
クリスチャン。ファンの頭の中には、もうそういう固定観念が出来  
ているんだからね。虐め役が虐められ役に廻り、虐められ役が虐め  
役に廻る所に、此の場面の面白さがあるんだよ。虐め役らしく、私  
められる時も堂々と、こんな拷問台なんか何さ。寝てやるから、私  
の身体の上にもう一枚棘のついた板をのせて、サンドウィッチを作  
るといいわ。」と喚叫を切らなきや駄目なんだよ。その後が凄絶な責  
め場になるからこの映画が活きるんだ。ソラ、ボアゴベアの、鉄仮  
面で、水責めされたバイシン夫人が、今度は私の肉を焙って、皆  
さんでお食べになるとよろしいわ。と言うだろう。あの意気が出な  
きや、新しい責めの味にならないんだよ。」

むし暑いセットで何十回となくぶっ続けにやり直しさせられて、  
久美の身体は、汗でビッシヨリと濡れてしまった。肌を琥珀色に光  
らせて必死で演技する久美は、その苦痛に酔った様になって、次第  
に目がキラキラ光って来た。

獲物を狙う猛禽の様な鋭い目で冷静に、じっとその時の来るのを  
待っていたらしい青年監督が、ピッと笛を呼いて凜然と宣言した。  
「ヨーシ。じゃ本番、行きましょう。短い棘だから、仰向けに寝る  
分には、少し位血は流れるかもしれないが、命には別条ない筈だけ  
ど、それにしてもやり直しはきかないんだからね。若山君が棘の台  
の上に寝たら、あとは全部ぶっつけ本番だよ、失敗しても代役はき  
かないんだ。いいね。」

## 六

「ヤア君。弱ったことになっちゃったんだよ。」  
熱川温泉のホテル。風通しの良い廊下を背にして、清水サユリを  
四つん這いにさせた人間椅子の上に、体重二十三貫の巨体を、ドッ





コイシヨ、と腰掛けると、三宅社長は、ワイシャツの釦を外して、  
 バタバタと扇子で風を入れた。

「ヤッパリ駄目だったですか？」  
 向い合って満井美佐子の背中を椅子にしているのは、言うまでも

なく今野五郎。風通しのよい窓際の柱に、足を宙に浮かせて縛りつけられている若山久美の、鼻に通された風鈴が、微風に揺れて、涼しそうな音色を聞かせている。

「どうも新渡部の奴が、凌雲館のD・P・E部に手を伸して、わしがあそこで撮った、久美や喜代子の写真のネガを、すっかり握っちゃったらしいのだ。人権問題だということで、映画週報にはバクロされるし、映倫では追求されて四面楚歌だし。国会にも喚問されかねない状況になったらしい。ことあれかしと始終目を光らせている同業の連中が相手では、わしも氣骨が折れるよ。どうやら、パーグマンとラナターナーを裸に剥いて馬車を曳かせる夢は無期延期ということになったらしいのう。ワッハッハ。」

「では、やっぱり私は一時会社を退かせて頂きます。」

「ウン。君には済まんがそうしてくれんか。少いが、これは退職金だと思っておいてくれ給え。競争の烈しい映画界で、責め映画を封じられると、わしのこれから先の経営も楽ではないのう。新渡部も此の機会に近畿活動へ移ってしまっただし。」

「あれも酷い女ですな。どうしてこんなことをしたんでしょう。自分だって、若い女優の責めを偷んでいた癖に。商業主義が女優を殺す。なんて、大論文を新聞社にばらまいたりして……。」

「なあに、あれも内心は淋しいんじゃない。いくら昔の人気スターでも、齢を取ると段々男が相手にしてくれなくなるし、主役はどんどん新人に奪われるし、嫉妬とヒステリーが嵩じてやったことじやろう。今の所世間じやあすっかり正義派扱いじやがな。此のニュース・ヴァリユーをネタに、最後の一花を咲かせようという魂胆もあったかもしれない。……マ、そういうわけで、折角君に仕込んで貰った女優達も、今うかつに手放せんのでな。君につけてやるわけにも行かんが、あの上野君だな。アレはもともと女優でもないし、役者稼業にそう未練はないそうじやから、よかったら連れて行き給え。」



「ハ、有難うございます。しかし私は映画の鬼ですから、映画も作れないのに、只漫然と女の子を責めているのは退屈でかいません。こちらの退職金の方だけ頂いて浪人させて頂けば結構です。」

柴田喜代子は身体を傷めてから、茨城県の故郷へ帰って、短かかった女優時代の思出を胸にしまって、ひっそりと暮らしていた。

彼女の家は農家だったので、昼間は彼女が一人で留守番をしていた。或日、表で彼女の姓を呼ぶ声があるので、不自由な足を、松葉杖でやっと支えながら出てみると、今野五郎が立っていた。

「マア先生。……どうぞ。どうぞお上り下さい。」

「暫く。身体はどう。」

「ええお蔭様で。でもこんな身体になってしまって、もう先生のお役に立てないんですもの。それだけが悲しいでございますわ。」

「新聞で読んだよ、君のこと。僕に石を抱かされて足の骨をくじいたくせに、恨みがましいことは一言もいわずに、やめても私は文京映画の女優だったのですから、文京映画が世の指弾を浴びている時に、一緒になって物を言う気持にはなれません。と、一切記者の誘導に乗らなかつたらしいね。立派だったよ。」

「お賞め頂いて嬉しうございます。」

「僕は昨日会社で辞表を出して来たよ。」

「マア。」

「ハハハ。当分浪人さ。その足ですぐ君の所へ来たんだ。真先に君に逢いたいと思ってね。考えてみれば、君には気の毒なことをしてしまったね。誰もが未来の大スターと騒いでいたのに、その洋々たる前途を、僕が無理矢理潰してしまった格好なんだからね。」

「いいえ、そんなこと……。そんなこと、もうどうでも宜しいです。だって……。」

「だって……。」

「だってそんなこととは較べ物にもならない位、私の人生にとって大切なものを、先生から教えて戴いたんですもの。」

「そうかい。君もそう思っていてくれたのか。僕も同じ様なことを君にいいに来たんだよ。そして出来れば一緒に暮らしたいと思って。」

「マア。……でも先生はいけませんわ。東京にいらつしやれば、満井さんや上野さんみたいな、お綺麗な方がいらつしやるじやありませんか。今の私はもう、石を抱かされたり、足で逆さに吊るされたりすることが出来ない身体になってしまっているんです。」

「酷いことを言う。男だって君。形だけのサディズムの満足よりももっともって大切なものが人生にはあるんだよ。」

言いながら今野は喜代子の手をとって引寄せた。崩れる様に投出された女の、自由の利かない脚の上に、喜代子の頬を流れた熱い涙が滴り落ちた。

「僕はね柴田君。一つの信念を持って今までサド的な映画を作ってきたんだ。君達には気の毒だったが、女を責めることによって秘められていた女性の美を外面にひき出して、新たな美の分野を拓めると共に、拷問の持つ恐しさ、その行為が如何に背德的なものかという世間を訴えるのは、サド映画以外にないという信念をネ。……ところが、世間の人はそうは受取ってくれなかった。」

「……………」

「……フッフフ、つまらぬグチが出ちまったネ、もうよそう。残念乍ら現在の世の中では我々の主張は理解して貰えないのだから。当分は、君という宝物のもとで謹慎して、今迄のゆき方を反省してみたいと思うんだ。ネ、柴田君……いいだろう？」

「嬉しいわ。もう先生は、映画監督になんか、ならないで下さい。」喘ぎ喘ぎそう言って、喜代子は涙に濡れた目でニコリ笑った。



# 夢 三 夜

## 第一夜 — いけにえ —

(東映作品・蜘蛛の巣屋敷より)

志 高 牧

こんな夢を見た……

部厚いフサ付の襖をやっとの思いで開けると、また同じような襖が部屋の向うに建付てある。こんな奥へ足を踏み入れたらどうなるだろうか、と最後の襖を恐る恐る開けると、右の隅が急に階段になって、どうやら地下の穴倉へ通ずる入口にたたらしく途端に足が震えて来た。手をかけた襖には三つ葉葵の紋がついており、入口の柱の金具にも葵の刻印がある処を見ると、どうみても、ただのお屋敷ではなさそうである。選りに選って禁制の



江戸城奥深く忍び込んだものらしい。

あたりはやつと物が判る位な薄明りで僅かに無雙窓から洩れる斜の光が唯一の頼り。

入口の柱を掴んで中をのぞき込んだ時に何処からか人の声が聴えたが、すぐシーンと静まり返った。兎に角、背中には分不相応な護身の一刀を背負っていることだけは確かなのだから、よしんば曲者が現われたとしても即座に立廻られる心構えはとくに出来ているつもりだ……と云い聴かせたにも拘らずこの地下へ通ずる坑道の入口に突立って、ひどく思索し始めた。

一体この坑道は何んだらう。これ以上無理強いして中へ入れば、先はどうせ狭くなってくるに違いない。そのうちに見方によって入



口の壁が揺がって来るような気がした。

忍込むとすれば今のうちである、これを外すしたら二度と入る機会はないであろう。思い切りよく手を前へ出し、頭を縮めるようにして中に入ってみると、途端に足下の階段がずうっと奥の方へ遙かに続いて、不思議なことに上下左右の壁は荒けずりのままである。大かた築城の折、工事を急ぐの余り仕上げを怠ったためであろう。いよいよ以て江戸千代田城に間違いはない。すると三百年の苔むした臭いが鼻の先まで匂って来た。

何かありそうだ。いや必らず何かあること



を予想して、なおも用心深く進むと急に甘酸っぱい風が頬に当って、指先や掌に何んとも形容の出来ぬ水滴のようなものがべったりとつき始めた。瞳孔を一杯に開いて、よく見ると真珠のような光を放った水が、まるで毛のような細い陰花草の葉の茂みの間からポタポタと溢れていた。その前方に白木の丸い扉がぼんやりと見える、どうやら三百年の謎を秘めた魔境に近ずいたものらしい。

顔を近づけると扉はギイッーと独りでに開いた。扉から二、三間の処で道が左右に分れ、分岐点から全く対照的に開放された。しかも明か明かと照り出された部屋が眼に写ったのである。光の全く透らない地下深く、誰がどうして工夫したものであろうか。その光には宇宙を測る光年を想わしめるものがあつたのだ。部屋の中は殊の外よく見えた。向って左の部屋は右の部屋の副部屋が控えの間でもあろうか。白く光った蓮の花の後に仏壇まがいの祭壇が設けてあり、五つならんだ位牌のうち塵にまみれ字の霞んだものはすでに虫に蝕われた跡があった。享年没の処をみると糸、さわ、その、ちかい、とみ……とやっと判読出来たが

『これがここで、いけにえになった腰元の名前だよ』と誰かが耳元で教えて呉れた。腰元のいけにえ。そうだ、それに間違いはあるまい。その証拠に……とまた別の声がし

た。



『ホラ、あれがその女達が着ていたきものなのだ。一つ一つこうして長持ちに入れてある。嘘だと思ったら手に取って御覧。先ず、これが矢絣の表着。続いて絳の長襦袢……』しかし、そのいずれも流石に色が褪せて、弾力性を失っていた。何んだか古着屋の店頭で、多分死んだであろう娘の着物をぼんやり品定めするような感じがした。すると突然、右の部屋の方が急に騒々しくなった……。

男が五人。覆面しているから武士とも三



下野郎とも判別はつかないが、黒一色の群れに囲まれ邪慳に突飛ばされながら、青い水色の裾を曳きずって曳き出される女の姿が眼に留った。

両手をひしと縛られた女——腰元なのである。成程、今斯うして徳川三百年の星霜の中に活躍した御殿女中のうちの一人が眼の前に



在って、妖しい姿体をみせているのだ。どういふ仔細なのだろうか。いや事の次第はどうでもよい。どうして後手に縛られてこんな処に現われたのだろうか？

『そりや、こうさ……』と頼みもしないのに黒頭布の中の一人が乗り出した。

『その前に、お前さんは余つ程女の縛ったのがお好きと見える。好きなものは見せぬとは云わぬ、よく見るがよい。どうだ、女の後手はこのように厳しく縛めてある。可哀いそうと思わぬか。そうだと、由来縛られた女と云うものはみじめなものだ。腰元の身元を教えろって？、それは申せぬ。アハハハ……ミイラだと申すのか？ 馬鹿を申せ。これッこの通りこの腕とい肩の肉付と云い、トテモ素晴らしい娘さかり。勿論死んでは居らぬ。正真正銘の生きた人間様なのだ。……名前は雪とか申したなア』

『ヘイ頭ッ。左様で……』

『処で……だ。大膳所からの催促は未だ参らぬか。いや、その前に殿の御容体はどうじや喃。お齡を召したとも思われぬ殿に、それ薬石、ヤレ渡来の妙薬を……とおすすめた挙句がいけにえ祈願となる。大きな声では云われぬが祈願とは真赤な嘘。射止めた熊の胆が何んとヤラ、実はのう……誰にも口外するでないぞ。若い女御の生胆を煮つめて差上げるのじやよ。馬鹿を申せ、ここは地下百尺の始



末処だ。煮たきの料理は最前申した大膳所で万事……お判りかのう？ アハハハ……、いや、こう申しているうちに殿はお逝れ遊ばすやも知れず、これ、供の者、腰元雪の位牌と衣装箱は如何した？ そうか、そうか、早々ともう左の控えの間に。ウム、真新しく立派じや。大儀大儀……』





『殿ッ、も早や猶予ひなりませぬ 一刻も早よう』

『殿などと申す者は誰じや。余は殿ではない、ただの頭じや。皆の者の長じや。シテ、この腰元はどのようにして始末をするのじや』

『嫌やんなっちやうナ、何んでだらしないお頭様なんだろう。訳はねえじやねえか。縛った女の縄尻を柱にくくりつける。気が遠くならうとする時に喚めかねえように二つ折に折った白布でしっかと猿轡を咬ませる。』

たったこれだけの事で、糸、さわ、その、ちか、とみ、の先立腰元連中はぐったりした処を南蛮渡来の匂い薬を焚いたから堪らない。

時計の針がぐるっと廻らネエうちにバタリと倒れたって仕組なのさ。

あッ、いけネエ、誰やらこの仲間の中にスパイが混れ込んでいる。女を加えて六人の足跡に今一人の足跡がある。御油断召さるな、おのおのがたッ。それッ……』

スパイ搜索も大切だろうが女の始末も急がねばならぬ。供の一人が包の中から何やら鈍物を取り出して火打石をカチカチと鳴らした。白い煙が勢いよく噴き出して来た。とてもゆらゆらと揺れて漂うような優雅な煙ではない。

万が一、正体が暴露した時は背負いの護身刀を抜けばよいのだ。抜く段取りをしながら哀れにも後手に縛られた腰元の前に置かれた香炉からの白煙と、次第に血の氣を失って行く女の顔とを見較べているうちに、裾にかくされている女の膝が小刻みに震えて来た。恐ろしい毒性の煙——青白色の煙が女の方にたなびくにつれて裾前からとき色の長襦袢が次第に喚み出して行く……余程苦しいに違いない。

『美女の断末魔と云うのはこのことだろう。どうじや、絵になりますかな』

『のんきな事を云ってる場合じやありませんぜ。どんどん薬粉を焚いて女を眠らせなくちや……スパイは必らず女を攫って蘇き返えさせるのでありましよう故』

と殊勝面をした黒頭巾が、もったいをつけ

一人のいけにえの女——黒の立矢の帯を大中に結んで、青い水色地に朱の紅葉ちらしの腰元衣裳、殺すに惜しい美形である。

『頭数を勘定してみる。ひい、ふう、みい……五つと、おかしいナ。女を加えて六人なら初めっから同じだ。こうつと……』







『お頭ッ、女の白足袋の先がピクピク痙攣を起していますぜ。参った証拠でがしよう』  
『旦那ッ、女の額の色が紫から青銅色に変わっていきますぜ』

と色んなことを云っている。江戸城内が東海道は雲助の屯るする街道筋に豹変した訳でもあるまいに。

『そのうちに濡れた絹をさくようなうめき声と共にドタリ……と倒れる音がした。』

おお、何と云う無残なことをしやがるんだ



ッ。とうとう氣を失ってしまったじやないか。いや、殊によると死んだのかも知れない、死人の肉は山の熊だって喰らいつきもしねえ、それを物好きに重体な殿が、まさか……嘘にきまっている。そんな馬鹿なことがあつ

て堪るかってんだ。頭が旦那で親分と来りやどう弁解しようとかこの座で指揮を取った奴は殿御当人にきまっている。いやそれに間違いはない。

『おッ、そのへナチヨコ殿様め。女をこのようにして、いやさ、弱い者いじめをいいことに、側女、腰元を後手に縛り上げ、処もあらうに城内深く、しかも地下牢で、群る夏の蚊ならいざ知らず、飛べねえように羽を折りいぶし麻薬の責め殺し。その上、ほざいたセリフは効いたふうに、夜店のヤキトリじやあるめいし、女の胆が若返りに効くとなりやあ、いい眼の保養をして、ただで芝居を観たと同じじさ。おッ、とっつあん、余んまり、ふざけた真似はよしなさいぜ』

『ふざけた真似はおよしなさいって……こんな虫喰いの雛人形は困りますよ。てんでどうも売れませんので、どうぞお引取りなすって下さいまし』

年に一度の蔵の大掃除をしたのはよいが、序でに屑屋に払おうとした先祖代々のガラタ物に混じってポロボロの女の人形——よく見ると五匹の蜘蛛が丸い巢を作って住んでいた……。

(第一夜 終)



## 麻生保氏の生活と意見

(九)

麻 生 保

## K誌最近号について

多忙にまぎれて半年以上も怠けてしまいましたが無論、毎号愛読してありますし、少しづつではありますが資料の蒐集にも心がけています。

最近の白眉は何といっても沼正三氏の「手帖新稿」です。特に旧手帖では比較的少なかった「馬願望」についての何章かは、麻生は貪るように読みました。いずれも同氏の深い学識と豊富な経験とを語らざるはなく、あらためて氏に敬意を表します。実は「馬願望」は、こっちが本家だぐらいの気でいたのです

が……。

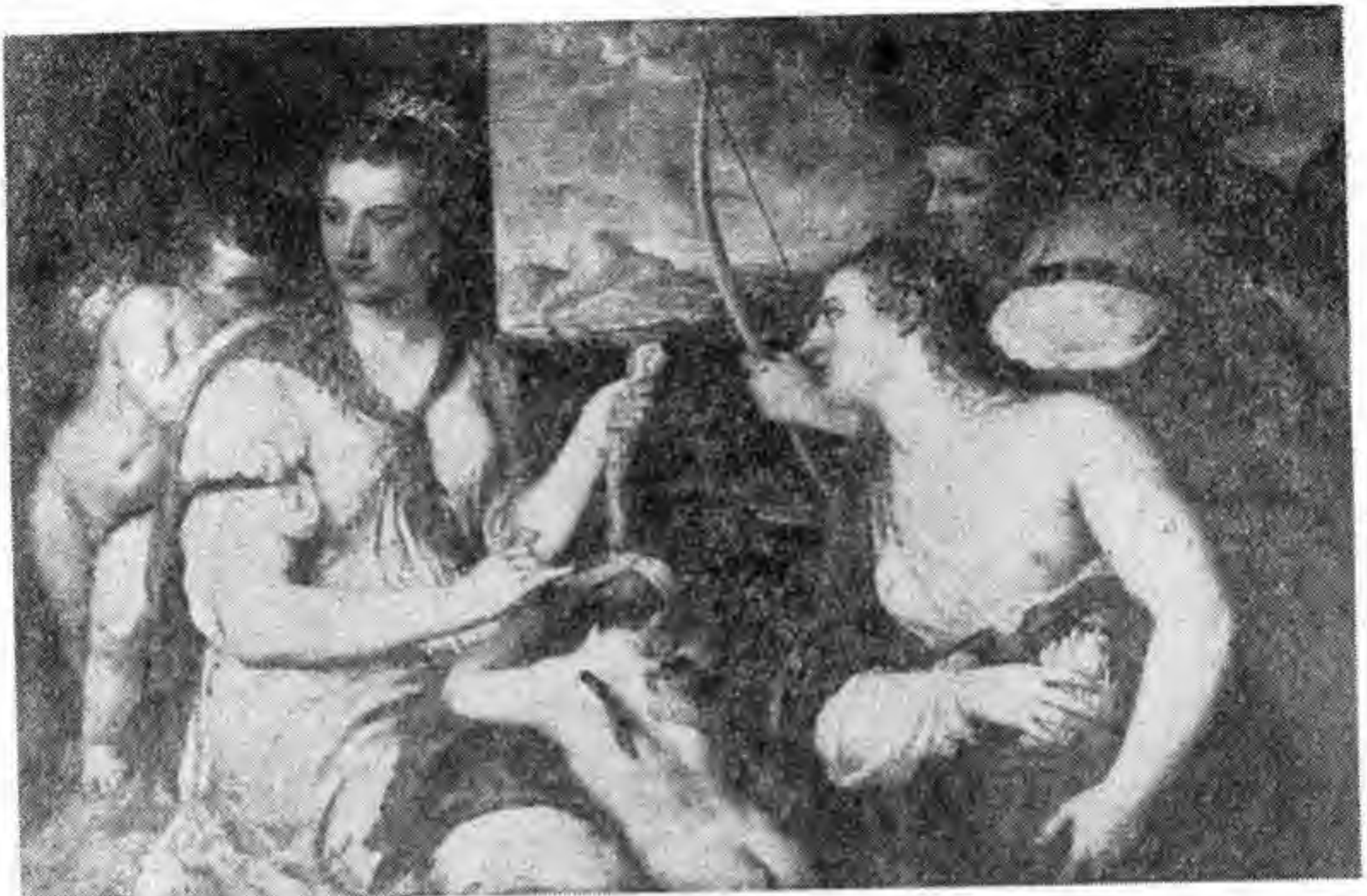
ところで「ロシア踊子の回想」ですが、平場競走のところも訳出していただけでないでしょうか。障害物競走のシーンを紹介して下さい。それは感謝に堪えません。それについても平場競走のくだりが読みたくてなりません。ぜひお願いいたします。

「馬化」するための手段としては、沼氏をはじめ馬場氏、山本氏などが色々な方法を考えて居られるようですが、なかなか厄介なことです。乗杉夫人は人間ならば約二貫目の荷物を背負ったに等しいといっているらしいですが、何といっても駿馬ならざるか、弱き男性

では、思うように体力がもちません。馬場氏のマゾヒズム百景のカットや「ダイアナ夫人未亡人期その二（一九五七年十二月号）」の挿画、更に内田武男氏が「一禪亭雜記」にも書いておられたヘコの間競走、更に旧号における口絵などにいくつかありますが、麻生の方法を参考までに一寸御紹介しましょう。

先ず膝について四つん這いになります。麻生は体力が弱いので膝をつかないと脚が三分も持ちません。手の方も同様で、手ばかりついては手首がもちませんからヒジまでつくのです。そして背中が水平になるように安定のよい低い椅子か又は坐ぶとんを重ねた上に手





とヒジを支えます。

この方法の最大の短所は、その場所を動かすことが出来ないことにあります。しかし長所は腰のバネをフルに利用することが出来るので、速度感が素晴らしいことと、かなり長時間、堪えられることでしよう。そして速度の調節が自由に出来ることです。ノロノロと這い廻っているのは、それだけでもう精一杯です。それから騎手の鞭の強さの度合を鋭敏に反応出来ません。この方法によれば真に「馬化」し、ギヤロップしたり並足をしたり一切、鞭と手綱の指示によって細かく使い分けことが出来ません。騎手にとっても、いちばん乗馬の快味に近いもののようです。ただし拍車の使用は流石に不可能です。

つぎに沼正三氏にサディステインとしての「ヴィナース」について御高教をいただきたく思います。浅学な麻生のうる覚えですが、軍神マルスがヴィナスから臀を鞭打たれる神話があります。そして女性美、即ち女性しよ

のシンボルであるヴィナスの仕業なるが故にその鞭打ちによって木石の軍神マルスが愛を知ったというのです。又、ローマのボルゲーゼ美術館にティツィアンの「ヴィナスとキューピッド」という名画がありますが、これはヴィナスの御供をしている二人の子供のキューピッドが、あまり悪戯をするのでヴィナスが折檻している構図です。このヴィナスは、ほとんどジュノーのような貴婦人に描かれ、一人のキューピッドを縛っています。こっちを向いた小さなお臀は、つぎの場面では鞭打たれることでしよう。もう一人はベソをかきながら許しを乞うていますが、どこか少し甘ったれています。右にいる二人は、キューピッドから取上げた弓と矢を持っています。このヴィナスの顔には威厳と、そして母性的な慈愛とが同時に漂っており、豊満でありながら、いわゆるグラマーガールではなく描いているので一寸、興味をひかれました。

鞍良人氏の「馬化白書」は、KK誌のみならず内外の文芸作品から、どんどんスクラップされるように希望します。

藤山秀緒さんの「落穂集その一」にソニア王女なる人物が現われますが、全く麻生の憧れの的であるソラヤ皇后（一九五七年十二月号参照）を想わずにいられません。藤山さんも彼女の瀟々しい乗馬服姿は、さぞお好きです。お、アルデエリアのアイシヤ姫



のことも、いつか紹介したく思っています。市田健次郎氏の「女水兵哀史」は、大変に興味深く読みました。麻生にとってマゾヒズムは、時に傍観的サディズムになり得るという事を示唆されたからです。市田氏の文中にあった「女奴隷と同年配位の貴婦人型の女性に彼女をいじめさせ、自分はその貴婦人の身内の男性として鷹揚に傍観すること」は、麻生にとっても望ましいことなのです。

麻生は乗馬女性を見るのは勿論、大好き。

特に美しい女騎手からピシピシ鞭打たれ、血が滲むほどの拍車をいれられながら調教を受けたら、障り飛びをさせられている馬を見るのは、とりわけ嬉しいのですが、その際「麻生が馬でありたい」という気持が八十パーセントをしめています。しかし同時に、それを単に美しい光景として素直に眺める事も出来るようです。又、麻生がその女騎手に恋をして「彼女のものになりたい」ひいては「彼女の身内(の)でありたい」という気持も時には動きます。令嬢にいいめられている女中や書生女教師に叱られている女生徒(又は男生徒)など眺める場合も同じです。とはいえ、傍観的サディズムとはいいいえ、この際、麻生の興味を唆るのは、女同志か女性が男性を(又は馬や犬など)いじめるのは全く不愉快ではありません。してみると麻生も男性のはしくれですから、これは傍観的サディズムではな

くて傍観的マゾヒズムというべきようです。それなら何も不思議はないようです。そして市田氏は、いじめられる側の女性に惹かれこそすれ、いじめる側の貴婦人には積極的な関心を示されないようですから、麻生と全く逆になるわけらしいのです。以上は、市田氏の意図を全く無視した麻生流の解釈ではありますが、一寸感想まで――。

### 「愛の喪章」マリ・アンヌ・デマレ作

新庄嘉章訳・平凡社発行

現在、簡単に入手出来るから筋などについて書く事は避けるが、この中の女主人公、クリステイヌは、全くマゾヒストの理想像であろう。「十六才」のベルも我々にとって嬉しい存在だったが、何といってもベルは、サディステインというよりも単に無邪気で少し我ままな少女という感じだった。しかしクリステイヌは二十五才という年齢からいっても、無分別からくる気まぐれや我ままではなくて、もっと本質的にサディックである。彼女は乗馬が大好きであるが、彼女の乗馬ぶりは全くすごい。彼女の妹で、これは又、きわめて淑やかなイリスが姉の噂をして、こうい

う。「私は馬は好きです。でも馬を酷使するのはいや。でも姉は馬の持つ力だけを知り、それを利用するのです。そして長い馬上散歩や駈

足が好きです。姉ときたら、まるで馬をいたわってやる気がないんですもの」

ユーグという男は、金髪で背の高い青い瞳のクリステイヌを一目みた時、崇められ乍らも、どこか恐いところのある北欧の女神ヴァルキューレを連想する。(ヴァーグナーの楽劇に出てくる武装して馬に跨った女神ブリュンヒルドは、ヴァルキューレの長で、ドイツのマゾヒスト達の渴仰的である)

クリステイヌは、こういう。

「私がクルトとの馬の駈けっこで勝とうと思つて馬を鞭で、ひっぱたくものだから」

「馬は力というものの価値を認めてくれる動物よ。そこが猫や犬と違うのよ。あなたに一度お見せしたいわ。私が、うまやに入つて行くと三頭の持ち馬が、どんな風に私のそばにやってくるか。三頭とも蹄を鳴し、駈けっこに選んでもらいたいと、じれったがるの。だからといって私、容赦しないわ、ぜったい」

このくだりは全く「ダイアナ夫人」そのままである。麻生ならずとも、クリステイヌに選ばれた馬になりたいであろう。どれほどその駈足が長く辛いものであるとも、どれほどクリステイヌの鞭が激しく痛いものであるとも、いや、そうであればあるほどそれは喜びであり生甲斐なのである。

ユーグとクルトはクリステイヌを争つてピストルで決闘し、クルトは重傷を負う。決



斗の直後、ユーグは森で乗馬姿のクリステイヌに出会う。

「朝の微風に長いたてがみをなびかせた灰色の馬にまたがった彼女の姿は、いつもより一段と魅力的にみえた。……クリステイヌは凛々しい乗馬服姿で、彼女は魅惑そのものだった。……（麻生註、このあたりの描写は、やや作者、デマレ女史の偏執が感じられるようにも思われる）」

ユーグから決斗の様子をきいたクリステイヌは笑って「私、クルトもあなたも、お二人とも退屈になりだしたのです」などといいユーグの求婚にはピシッと鞭の一打ちで答え「結局、あなたは私の退屈さまし。私は自由よ」と叫んで馬で走り去ってしまう。

ユーグは探検家であり大旅行家である。彼は失恋の痛手を癒すために日本へ来る。

……だが、ひとり異邦に逃れて、すべてを忘れようとしたのも、あだな望みだった。アジアの東の列島の上まで飛んで来ても、クリステイヌの金髪の乗馬服姿は夢の中にまで現われた。山といえは火山で、泉といえは硫黄くさい間歇温泉のこの国で、颯風の吹きすさぶ空の下を、地震で倒壊した村に向って楽しげに馬を駆って急ぐ彼女の姿が見えてくるのだった。……

このあたりは麻生には余り関心ないが、沼氏の興味を持たれるところのものである。

特に「たのしげに」というあたりに……。

ユーグは、日本で坂教授から日本の神話をきく。スサノオノミコトのくだりでユーグは感動する。彼はスサノオノミコトの荒々しい残忍な行動のくだりをききながら、突然クリステイヌを思い、そして彼女から鞭うたれたことを思い出すのである。

麻生はこれを読んで、沼氏のヤブーの古事記解釈の大蛇退治を思い、偶然（恐らく）の暗合に一驚した。

結末は平凡といえは平凡であるが、とに角一読をおすすめしたい。

### 「足袋」三橋一夫作 ロマン・ブックス

講談社発行

極めて真面目に、しかも純粋にマゾヒズムに取組んだ作品だが、どうも、あちこちにきいたような話が出てくる。何だか本誌の体験小説のサワリを集めたような感じである。片輪の老マゾヒスト、坂巻広蔵は、うまく描けているが、学者の夫人で美しい貴美子と、ニヤケ男、白倉絲助が、いささかアイマイである。一つにはスリラーめかした設定が、わざわいしたのかもしれない。しかし何というても、マゾヒズムの純度と濃厚さにおいては、近頃の作品では、その比をみない。

ただ文体に品がなく、すべてが野暮ったく薄汚いので麻生の趣味ではない。

### 「右近龍」 村上元三

サンデー毎日連載

この作品は直接、マゾヒズムに関係なさそうだが、美しい一場面であった。やや旧聞に属するがサンデー毎日、二月十五日号に水戸光圀の異母妹、総姫が馬に乗って出場する。総姫は今年十六才、ことに美貌で……乗馬も巧みで、ときどき馬に乗ったまま大手門から城下へ走り出て町の者たちをびっくりさせ……てきばきと物をいい、老女や侍女たちを叱りつけ……

といった具合である。

芦毛の馬が一回こちらへやってくる。乗っているのは髪をうしろへ束ねて垂らし、男のような馬乗袴をはいた総姫だった。……馬場の柵の外まで総姫は馬を走らせてくると、馬から降りようとした。その前に藤井紋太夫は馬を煽って柵の外へ出て鞍からはねおり、総姫に手をかそうとした。

「要らぬことを」

息も切らさずきびしい声でいったかと思うと総姫は鞭で紋太夫の手を叩いた。「ハッ」と急いで後へさがり紋太夫は頭を下げた。総姫は鞍からおりと柵の方へ歩みよった。紋太夫が総姫の馬のくつわを押え、手綱を柵に結びつけたが総姫は振返っても見ず、光圀に向って一礼した。……総姫の白い額に、きらきらと汗が光っているのが美しく見えた。馬上の女性から鞭で打たれる！

これ以上に素晴らしいことが、この世の中にあるだろうか？



# 創作 猩紅匪

後篇  
菅 良太



## 鬼哭丘の晒台

(一) 木樵小屋

さうさうという遠い溪流のせせらぎの音を

夢うつつの中で聞くともなく聞いていたが、それがだんだん近よって来たように感じられて、沖操縦士は漸く長い昏睡から覚めた。

煤けた天井、崩れかけた壁、薄暗い部屋。彼は、喪心直前の記憶が脳裡をよぎり、思わ

ず、床から跳ね起きようとした。

「おゝ、気がつかれましたか」聞き慣れぬ支那語が土間に積まれた薪の陰から聞えて、ヒヨイと立ち上る人影があった。彼はハッと緊張した。

「長い時間、気がつかれんので心配しとりましたが、よかったよかったです。」

年令は六十にもなろうか。それでも元気そうな老人だった。好人物らしい顔に浮ぶ心から嬉しそうな笑顔は、沖の胸裡の緊張を解きほぐすのに十分だった。

仲は、老人の心尽しの粟粥をすゝり乍ら、絶えず微笑を漂よわせながら語る、老人の話に聞き入った。

彼等の愛機が敵弾を受けて火を吹いた時、彼は落下傘を用いて下降するよう、荒尾中尉から命ぜられた。彼は燃える機外に脱出はしたが余りに低空であったために、傘の開くまでに山腹の樹枝に叩きつけられ失心したのであったが、それが却って幸いし、奇蹟的な九死に一生を得たのであったが、枝にひっかかった



まま人事不省の彼を、この小屋へ運び入れて看護してくれたのがこの木樵老人だったのである。

彼の一番気掛りな、荒尾中尉のことは判らなかつた。彼等の搭乗機が、山間の雑木林で燃え尽してしまつた以上、恐らくは、気の毒だが……と語る老人の口調は重かつた。

翌日、夕方頃になると、日頃の鍛練のお陰か沖の若い体軀は逞しい回復力をみせていた。

街に薬や食物を買入れに出ていた老人が、その回復力の早さに驚きと喜びを表しながらポロ布の包みを差し出した。

「今のう。大人のおつれの、そのう、形見みたいなんでも残っちゃせんかと思つて例の場所まで廻つてみたんじやが、飛行機の焼け残りが少しあるだけじやつた。で、諦めて帰ろうと雑木林の外れまで来たところが、木の根っこにつまづいて転んだんじや。そしたら、大人。転んだ拍子に、木の洞に押し込んであつたコレが眼についてノウ。大急ぎで隠し持つて帰つて来たんじやが……」

沖はそこまで聞くと大急ぎでポロ布をはねとばした。現われた物は正しく日本陸軍の軍用靴。しかも、中の書類は紛れもなく、荒尾中尉の心血をこめた、敵要害の偵察報告書、並びに重要記録等であつた。

見る見る沖の眸に涙がこみあげて来た。感

激にふるえる手が、しつかと老人の手を握つた。老人は大きく頷いた。

「ありがとう」

「やっぱり、おつれのものか？」

「そう、そうなんだ。間違いない。……これが機体から、そんなに離れた場所に隠してあつたとすれば、中尉殿は生きていられるに違いないんだ。」

「うーん。すると……」

「どうした？」

「いや、街でな、隣りの山の本樵仲間に出合つたんじや。その話で、猩紅匪の砦に日本の将校が捕虜になつた噂があるとかいうとっだがナ。わしや、大人のおつれはテッキリ、あの飛行機と一緒にお気の毒なことになつたとばかり思い込んでたもんで、そこまで思いつかなんだが、すりや、その捕虜ちゆうのがそうかも知れませんぞ」

これを聞いた沖の顔色がサツと変つた。

猩紅匪。その名は沖も本隊で度々耳にしてゐた。匪賊とはいえ、馬鹿にならぬ兵器と勢力を持つて、日本軍の作戦を妨害している一団とか。

「そうだとすりやあ、大変なこつた。奴らはどんなことをするかからねえ。大人、早う本隊へ帰りなせえ。そして、強い討伐隊でも出して貰うように隊長さんに頼まなけや」

老人は急に気が気でない、という素振りを

し出したが、

「いや、俺はどうしても、中尉殿を救い出さねばならんのだ！」

とキツパリいい切る沖の態度に、驚いたようにじつとその顔を覗めていたが、やがて、何か決心したように、大きく幾度も頷くのだつた。

## (二) 貴様と俺

荒尾中尉と沖との、肉身にも優る緊密な戦友愛は、三年前、沖が若い練習生として所定の航空学校に入隊した際に萌芽した。

沖の教官として指導に當つたのが当時の荒尾少尉だつた。荒尾は無口で一見近づき難い峻厳さを持っていたが、軍務を離れると、別人のような明るい磊落さがあつて、部下への思い遣りも人一倍深かつた。教導には容赦のない厳格さで、少しでも練習生が怠ると、びしびし罰を加えたが、事後はカラッとして「こんな事を二度と俺にさせるな」と、肩を軽く打つのが常だつたので、練習生達からは兄のように慕われていた。

そんな荒尾に、特に沖が親しみを感ずたのは、彼に、鹿児島島の母が土地の菓子を送ってくれた時だつた。その裾分けのつもりで、当日、日直の荒尾の許に持つて行った。

「ホウ、お母さんが？ フーン、それは折角のものを済まん」



荒尾は、澄んだ瞳をクルクルさせて、嬉しそうにこの真心の紙包を受取って開いたが、「ウム？これは懐しい。沖、貴様も鹿児島出身か？」

と、十字の島津家定紋を形どった田舎菓子に、さも懐しそうな眸をこらすのだった。同郷出身と聞いて、沖の荒尾に対する敬慕は一入深まった感じだった。二人は官位を忘れて、郷里の思い出話を時を過した。早く母親を失った荒尾は、母のある沖を羨しがり、「親孝行をしるよ」「大事にしるよ」と幾度か繰り返したものであった。

これを機会に、二人の親密度は深まったのだが、公私を混じることのない荒尾は、沖に対しての教導には却って厳格さが増したようであった。ビンタも容赦なく飛んだ。しかし沖には、その厳格さが嬉しく、ビンタの痛さも却って快よく感ぜられる様になった。

ある夏の日曜日だった。沖が溜った洗いものを持って洗濯場に行く途中、廊下で荒尾に出逢った。

「オッ、丁度いい。といっちゃ悪いが、貴様済まんが頼まれてくれんか。当番兵にいい忘れとったんだが、下着の汚れものが溜ってしまったんだ。」

勿論、沖は欣んで荒尾の部屋にその洗濯物を貰いに行った。彼はその日、外出もやめて念入りに、幾度も幾度も荒尾の下着類を洗う

こと楽しんだ。

翌日の夜、キレイにアイロンを当てた洗い物を持って、荒尾の部屋に行った沖は、恐る恐るいった。

「教官殿、洗濯物を持って参りました」

「オウ、済まん。ホウ綺麗になったナ」

「誠に申し訳ないんですが……」

「ウン？」

「実は………揮を一本、干場で紛失してしまいました。代りに、新しいのを入れてありますので、お許し願いたいのでありますが……」

「何？紛失したと？。フム………ま仕方あるまい。重要書類でなくてよかったナ。ワッハハ………、しかし、以後、ボヤボヤすることのない様に注意しろ。官給品だったらどうする。いいな」

「ハイッ」

「代りのやつというのは持って帰れ。どうせお母さんが送って下さったのだろう？」

「ハイ、然し、それでは自分の気が済まんで、是非、お使い願いたくあります。」

「………そうか。それじゃ俺もおっかさんが縫ってくれたと思って大事にするか。ウン有難う」

沖は、冷汗をかいて自室へ引上げ、問題の紛失した筈の揮を、自分の更衣箱の底深くしまい込んだのだった。

月日は流れた。沖は厳しい荒尾の教導によって、軍人精神に徹した逞しい下士官として航空学校を巣立った。荒尾も又、浜松航空隊に転任し、更に関東司令部に移って行ったが二人の間には絶えず文通が続けられていた。そして、ペンを通じて二人の師弟愛というか戦友愛というか、その仲はますます親密度を加えていったのだった。それから一年後。沖が航空本部付になった際に、同じく荒尾も転属して来たことを知って躍り上って喜んだ。

「貴様とは、よほど縁が深いんだナア」という荒尾の言葉に、

「ハア、これから死ぬまで一緒だといいいのでありますが………」

沖は頬を紅潮させて答えた。

その後は、戦線への出勤も一緒だったし、荒尾中尉の搭乗機の操縦者には決して彼が選ばれるようになった。

貴様と俺は同期の桜、同じ航空隊の庭に咲く。咲いた花なら散るのも同じ………」

沖が口癖のように、この歌を口誦み出したのもその頃からだった。

### （三）黄老人

鮮かに回想のフィルムが、沖の脳裡に過去を映し出す。彼は、狂しい程の危惧と慕情を荒尾の面影に感じて、身を悶えた。

「わしも、大人の手伝いをさせて下せえ」



先刻、あれ程熱心に荒尾救出の無謀を思い止ませようとしていた老人が、キッパリした口調でいい出した。

「?.....」

「二人で力を合わせてやりやあ、出来ねえこともありますまい。」

「しかし、これは命がけの……」

「勿論!」

「……貴方は、敵国人の俺にどうしてそれ程までに尽してくれるのか?」

沖は、驚きと、ある意味での疑惑をこめて問い返した。じつと彼を睨め返す老人の瞳にうっすらと涙が滲んでいるのを見て、沖は意外な感に打たれて声を呑んだ。

「わしにも、生きていれば大人と同じ位の年頃になる伴があったのですが……」

老人はシンミリと話し出した。

村でも有力者といわれる程の物持ちだった。耕地も相当所有して、一人息子と平和な何不自由のない暮しを営んでいたが、その息子が、猩紅匪の連中にそのかされ、甘言をもって仲間に曳き入れられたのだ。息子が山寨に走ってからは、毎日のように、匪団の仲間と称する一団がやって来て金品を要求し、拒絶すると息子の命が危いと脅迫する。長年の汗と脂の結晶は見る見る内に絞りとりられて耕地まで手離した。その頃になって、入山以来一度も顔をみせなかった息子がヒョッコリ

帰って来て、全然知らなかったと激怒し、止めるの振り切つて、頭目に談判するといつて出掛けて行ったが、翌朝、見るも無惨な死体となつて戸口に投げ出されているのを発見した。老人は口惜し涙にくれながら、調べられるだけ調べた結果、伴を殺したのは匪団の蒼童だと判明したが、老いの腕ではなんともならず、怨みを呑んで、この山に籠って木樵生活に入つた。

「その蒼童という奴に怨みを晴らすまでゆかずとも、せめて、猩紅匪の奴らの鼻をあかすことが出来たら、死んだ伴も喜んでくれるでしょうからノウ」

老人は、そう眼をしばたたかせ乍ら、語を結ぶのだった。

翌日、山泊いの小道を二頭の馬に荷を積んで、親子ともとれる木樵姿の二人が、朝霧について黙々と行く姿がみられた。

#### 四鬼哭丘

匪団の山寨のふもと、老人の元いた村に入ると、老人の知己は多かった。さり気なく訊く老人の言葉に、村人は、山寨での出来事の噂を手柄顔に話して聞かせた。

捕虜が今日、鬼哭丘で晒刑に遇うそうだという話は、二人に救出の手段を計画させるに非常に役立つたのだ。二人は勇躍して鬼哭丘へと向つた。

鬼哭丘——山腹の平地を利用した昔からの処刑場。そこには古びた刑架の残骸が幾本となく残っていた。森の野鳥が、刑屍をついばみ、鬼哭啾々という語句そのままの妖気が、人々をしてこの名を呼ばしめている。

その中には、木の香も新しい刑架が一本、高々と組み立てられてあつて、周囲に粗い鉄柵が張り廻らされていた。一隅に幾張りかの天幕が張られてあるのは、番人のためのものであるうか。既に柵の周囲には多くの見物人の姿で埋まっている。

「いくら支那服を着て変相していても、日本人と中国人とは相違がある。気をつけて下せえよ」

老人は、そういつて沖を自分の背中から出ただけ隠す様にしながら人垣に混り込んだ。

しばらく経つと、向い側の一劃が崩れ、わいわいと罵声が上つて、醜勇の立て札に続いて、六尺縦一本の偉丈夫が高手小手に縛められて曳き出され、刑場の中央に突き倒された。

「オウ!」思わず身を乗り出す沖の両肩を老人が力一杯引戻した。

やはり、やはり中尉殿だった。

沖の胸は、喜びと悲しみで一杯になった。キャンブから七、八名の人影が出て来た。豊艶令の場違いな、なまめかしい姿もあった。中の一人が、ツカツカと荒尾の傍へ寄る



なり土足をあげて、荒尾の首筋をぐいと踏み  
 蹴った。そしてその儘、観衆を見廻した。

「あれが蒼竜だ！」

観衆のあちこちで囁きが洩れる。老人の眼  
 が、ランランと憎悪の光を湛えて来た。

「この男が、お前達の敵である。憎い日本軍  
 の将校である。」

蒼竜が大声で群衆に話しかけた。一瞬、観  
 衆は静まり返った。

「わが軍は、お前達民衆の為に損害をかえり  
 みず、日本軍と戦い、そしてこの男を捕える  
 ことが出来たのである。諸君はわが猩紅匪軍  
 に感謝しなければいけない。この男は、強情  
 な奴で姓名すら名乗らないが、中尉であるこ  
 とだけは判明した。偵察機に依って、中国軍  
 に不利な行動をとり、著しい損害をこうむら  
 す為に働いていった憎むべき敵国人である。  
 我々は中国民衆に代って、この奴を諸君の面前  
 で刑を執行しようとするものである。」

ウワーツ。と歓声が上る。蒼竜は得意そう  
 に胸をそらせ、荒尾を強く蹴とばして、

「オイッ、もう一度訊くが、貴様はどうして  
 も軍機を白状しないか？」

「くだい！早く処刑しろ」

荒尾はカッと眼を見開き、キツパリといい  
 切って蒼竜を睨みつけた。

「そうか。それなら公衆の前でもう一度、お  
 前の踊りを見せて貰おう」

憎々しげに足蹴にして、傍の邱に目配せし  
 た。邱が三人の男に指図して、地上に四本の

杭が打込まれ、勿ちの内に荒尾はその杭の間  
 に四肢を伸して吊り上げられた。地上に背中

がすれすれになるように吊られた荒尾の口に  
 無理矢理、漏斗が噛まされ、邱が、運ばれた

バケツから、ひしやくに扱んだ水を一々観衆  
 に示しては荒尾の口へ流し込んだ。凄惨な水

責めだった。沖は堪り兼ねて飛び出そうとし  
 たが、老人の腕の力は意外な程強かった。

「どうだ？まだ白状する気にはならんか」

蒼龍がのぞきに来たときには、邱の持つバ  
 ケツは殆んど空になっていた。

荒尾は大きく肩で息をし、流石に苦しそう  
 であった。その牀に、蒼龍の手の鞭が激しく

音を立てた。観衆の中から、ヒステリックな  
 引きつった様な、若い女の狂気じみた笑い声

が気味悪く聞えた。恐怖を無理に笑いでごま  
 かした笑声だった。

グッタリした荒尾が地上に降された。両手  
 と両足がそれぞれ括られて、ズルズル刑架ま

で曳きずって行かれ、両足首の縄が刑架の横  
 木に投げ掛けられた。その縄が引かれるにつ

れて荒尾は無惨に逆吊りとなった。そして又  
 激しい鞭の雨が飛んだ。死んだようになって

いた荒尾が苦し気に宙に跳く。口からガバカ  
 バと吞まされた水が吐き出された。さながら

や処刑ではない。嗜虐の徒の惨忍なリンチな  
 のだ。

沖は無念の涙を流して眼をふせた。老人が  
 強く手を引いて人垣から沖を曳き出した。刑  
 場から少し離れた木立に入って、

「ひどい事をする奴らだ。大人、口惜しかろ  
 うが、ここが我慢のしどころですぞ！もう少  
 しで日が暮れる。それまでの辛抱じや。……  
 それにしても、あのお方はずいぶん我慢強い  
 お人じやノウ……」

と、感嘆を洩らし乍ら、慰めるのだった。

それから三時間も経った頃、ボツボツ帰る  
 見物人が出て来て、二人のいる木立の前を通  
 るのを見た。老人は沖を制して、單身刑場へ  
 走ったが、すぐ引返して来て、

「今日の晒しは済んだらしい。明日改めて晒  
 しに掛けた上で処刑することになったそうじ  
 や。あの大人は、あれから直ぐ穢になつて晒  
 されたそうじやが、今、柱から降されていな  
 さるワイ。」

と耳打ちした。沖はホツとして、

中尉殿、自分が必らずお救い致します。も  
 うしばらく頑張つて下さい」と心の中で呼び  
 かけ乍ら、刑場の方を睨みつけていた。

## (五) 刑場の夜

無気味な夜鴉の鳴き声。幾人もの血を吸つ  
 た処刑場、鬼哭丘の夜は地の底のような静け





さだった。平地の一隅に張られたキャンプから洩れる灯が三つ、適当な間隔を置いて並んでいた。監視に当る者達の幕舎である。

「誰だ！」

歩哨の誰何の声が鋭く響く。

「今晚は。どうも御苦労さんで御座りますじや」

「お前は何者だ！」

「ヘエヘエ、わしや、一寸蒼竜様にお願いがあつて来たもんですが……」

いいながら近づいて歩哨の手に幾許かの紙幣を握らせた。

「ウン？そうか、でも少し待っとれ」

歩哨は相形を崩して

そういうと、キャンプに入ってしまったが、しばらく経って出てくると、「入れ」と合図した。

「そうですが、いやどうも有難とうござんやす」

深夜の訪問客は、重そうな袋を担ぎ直して示されたキャンプに入った。

「どなた様もお疲れさまで……」

「俺に用のあるというのはお前か？」

「オウ、貴方様が蒼竜様でございますか、どうも、夜遅くお疲れのところを……」

「頼みというは何だ」

「ヘエ、わしは隣村に住む百姓ですが、日本の将校が捕まって晒されると聞いて、わざと出掛けて来やしたが、何せ、おいぼれのことと、ここへ着いたのがもう日暮れでございますましてなあ」

「頼みというのを早くいえ」

「ヘエヘエ、それであな、麓の人に聞いたところでは、今日の晒しは済んだそうでござ

います、捕虜はまだ明日も晒されるそうで蒼竜さまが指揮なさるということと……」

「じれったいオヤジだ。頼みというのとは一体何だ！」

「ヘエヘエ、その頼みというのは……」

まあこのオイボレが、お土産に持って参りましたお酒でも……」

老人は担いで来た袋から大きな酒瓶を幾つか取り出して、何やら紙包みを添えて差出した。蒼竜は、傍の邸と顔を見合せてニヤリとした。



「そうか、氣の利いたことをするオヤジじやナ。では早速に一杯」

蒼竜等は意地汚なく、金包みを懷に押し込んで、舌なめずりをした。

「へエ、沢山持って来ましたで、他の方にもどうぞお配りを……………」

「ウム」

彼は歩哨を呼んで、幾つかの酒瓶を他のキヤンプに配るように命じた。

「……で、蒼竜さま、捕虜は何処に……………」

「その隅に、毛布でくるんだ箱のようなものがあるだろう。その中に押込んであるワ」

「ホホウ、左様で……………実はナ蒼竜さま。わ

しの婢と伴が、北支で日本軍のためになぶり殺しにされてナ。わしだけ命からがら逃げ出して来たのござえますが、日本兵が憎う

て憎う……………こんども、貴方方が日本の

将校を捕虜になさったと聞いて、矢も楯もたまらなくなつて……………」

「わかった。つまり、処刑する迄に一度、恨

みが晴らしたいというんだナ」

そういう蒼竜も、邱も、ガブ呑みした酒が

もう相当に廻っているらしかった。

「へエ、そう願ひしたいものでがす」

「よし。諾いてやろう。どうせ明日は命の

ない奴だ、存分にやれ」

そういつて、自分で立って行つて、片隅の箱らしい物の毛布をはねた。下には荒木を組

んだ小さな檻があつた。中に昼間の姿の儘の荒尾中尉が後手に縛られまゝ、丸くなってギユウギユウ押し込まれているのだ。

「畜生！ひどい事を」老人は眼を覆いたくな

る氣持を、辛うじて押えた。蒼竜はトロリと

した眼をニヤリとさせて、荒尾を檻から引き

出した。窮屈な姿勢を長時間とらされていた

荒尾の全身はしびれきっているらしかった。

「オヤジ、さあ、打つたと蹴るなど、好きな

ようにしていいぞ」

と蒼竜は老人を願つていった。

「へエ」

老人は、ついて来た杖を握つて荒尾の側へ

近づき、振り上げた。荒尾がパッチリ眼を見

開いて、ぐつと老人を睨んだ。老人は思わず

後ずさつた。

「ワッハハ……………」

蒼竜が面白そうに笑つた。

「オヤジ！何だ、その恰好は。縛られた奴に

睨まれただけで怖いのか」

「へエ、どうも年を取ると駄目でございます

ナア」

「ハッハハ……………意久地なしだナ。貸して

みる、こいつはナ……………」

蒼竜は老人の手から杖を引たくる様を取る

と、酔にふらつく足を踏みしめて、荒尾の傍

らに仁王立ちになった。

「明日は決別の刑というやつを行うのだ」

「決別の刑？」

「そうだ。ズタズタになつて死ぬ奴だ。だか

ら、一寸も遠慮は要らん。こうして存分に殴

りつけてやれ！」

ビシリッ！鈍い音を立てて、荒尾の脇腹に

杖が振り下された。

ビシッ！ビシッ！続けざまに杖が風を起し

荒尾の見事な体軀が苦しげに跳く。

「あゝ、わしに、わしにやらして下され。」

老人が慌てて蒼竜にいった。

「うん？やるか。よしやれ。怖がることはな

いぞ。遠慮なく恨みを晴らせ。……………アア。

オヤジ、あの酒はよう廻る酒じやノウ。睡と

うなつて来たぞ……………」

見ると邱も、座つたまま、コックリ、コッ

クリ船を漕いでいる。老人はニヤリとした。

入れて置いた眠り薬が利いて来たらしい。

杖を取り直した老人は、突然、蒼竜の頭に

強たか一撃をくれた。

「グッ！」と、奇妙な声を立てて崩れ倒れる

蒼竜。老人はランプをフツと吹き消した。

と、それが合図であつたのか、外では、地

面から湧き出したように、突然黒い影が躍り

上つて歩哨に襲ひ掛つた。キラリと闇の中で

光るものがあつたかと思うと、歩哨が声もな

くのけぞつて倒れた。

老人の待つテントへ、風のように跳びこん

で来たその黒い影は、氣を失っている蒼竜と



眠りこけている邸の二人を素早く縛り上げて猿轡を嚙ませた。

「黄老人、息子さんの仇の蒼竜はどうする」

「……………」

「殺るか？」

「……気を失っている奴をやったとて、息子は生き返って来ねえ。日本軍の力で正々堂々とやっつけて下せえ。……………それより早く！」

「ウム！」

沖だった。沖は手早く荒尾の縄を解いて、

「中尉殿！沖です。しっかりして下さい」

「何！沖？」

驚く荒尾に毛布を着せて、沖は荒尾をしっかと背負った。

眠り薬の酒に正体を失っているのか、他のテントはこの変事にも気付かぬ氣に音もなかった。沖達の影は吸われるように闇に消えていったのだった。

## 六湖畔の誓い

それから二日目の夜明け。沖と荒尾は対岸に見える城門に、日章旗の飾っているのが臨める大きな湖の畔りに、疲れた身を憩っていた。老人はもういなかった。再会を固く約して昨夜別れたのだ。老人の教えてくれた道は間違いない、人眼を避けて本隊に辿りつけたのだ。

「中尉殿もう大丈夫です」

「沖！」

二人は改めて手を握り合った。

荒尾は沖の着ていた支那服をまとい、沖は墜落当時の軍装に帰っていた。

「あの老人はいい人だったナ」

荒尾は遠くを眺めながらいった。

——日本と中国が、手をとり合って平和なおつき合いが出来るように一日も早くなって欲しいものですじや。わしは平和になってから死にたいと思うとりますのじや——。

荒尾大人、あなたはいい部下を持ってお倅せじや、沖大人は、わしの倅の生き代りのような氣がします。どうか、いつまでも可愛がってあげて下されよ——。

沖は別れ際に、涙を浮べてそういった黄老人の顔を、眼を閉じて思い出していた。と、腰の軍刀がスツと引き抜かれるのを感じた。

「ナ、何をされますッ！」

ハッと眼を開いた沖は、咄嗟に荒尾の右腕にむしやぶりついた。

荒尾が、抜いた軍刀に素早く、支那服の破れ布を巻いて逆手に握り、自分の腹に突き立てようとしているのだ。

「沖！頼む、見逃してくれ。俺はどうしても生きて隊へは帰れん！」

「そ、そんな馬鹿なことが……」

「いいや！日本軍人が、しかも将校たる俺が

敵の手に捕われ、死に優る屈辱に耐えて来たのは、どうにしかして偵察の結果を隊に報告せんが為だった。報告書も貴様も無事で、しかももう帰隊したも同然の今となっては、俺の使命は果し得たことになるのだ。沖、武士の情ということがある。黙って俺に死なせてくれ！」

荒尾の声音は火を吐くようだった。

「いけません！」

沖は必死になって、軍刀をもぎ取った。

連日連夜の苛酷な拷問は荒尾の体力を著しく損っているのだ。

「沖！恨みに思うぞ」

「中尉殿、真の武士道は生き抜くことだと思います。匪賊に辱かしめられた荒尾中尉は鬼哭丘で死んだのです。偵察機に乗っていた荒尾中尉は沖と共に敵中を脱出して、只今帰隊したのです。真の勇者はあらゆる苦難を乗り越える筈です。死ぬことは卑却者のすることです。中尉殿、中尉殿は卑却者になってもいいといわれるんですか！」

沖の語尾は涙で濡れていた。荒尾の瞳にも涙が一杯だったが、その首はだんだんとうなだれていった。

沖がにじり寄って荒尾の手をとって強く握りしめた。荒尾が眼をあげて、その手を握り返した。男と男の誓いが無言の内に固く交わされていた。



## 限定版特別号・第二集

## 『緊縛写真と緊縛画集』について

近 藤 一

大きな特色は、フोटが横型に組まれていることと、絹川文代集ともいうべき彼女の活躍ぶりでしょう。

従来の縦型に比べて、手頃な大きさと女体の表情がタツプリ愉しめることは成功でした。只、表紙が縦のために何となくそぐわない感じですが、今後、研究を積めば改善されるでしょう。ただ、保存の都合もあり、とじ方は今まで通りにして欲しいと思います。

絹川文代さんは表紙からその艶姿を示しており、フोटの大半を独占する程の可愛がられ方ですが、こういう集中は兎角マンネリ傾向を見せ、モデル嬢の寿命を短かくするものですから、愛読者中にファンを多く持っている絹川さんをツブさないように、心して歎きたいと思います。

表紙。日本式ローマ字や、写真の写の字など一寸気になりますが、恒例の表紙で結構でした。フोटの絹川さんも、猿轡、紐、姿態バックなどがよくマッチした作品で、表紙にふさわしいムードを醸しています。

画集。四馬氏の画風は、各種のアイディアを盛り込むために、女体のプロポーションがともすれば崩れてしまうのですが、「耐久テスト」の脚などは立派でした。やはり見る者をしてヒロインに親近感を持たせることは必要ですから、手や足が無闇に細長いのはおか

しいと思うのです。「素晴らしき会食」の縛りつけられた喉の柔かさ。「アクロバットの訓練」の弾力ある握やかさ。「女学生の嫉妬」の清純。「水責にあう美女」の無残。「鞭の御馳走」の華麗。「三醜女の逆恨み」の壮観。「狂気の復讐」や「女体の荷物」から感じられるムンムンするような女の匂い等々が、適宜な解説に飾られて特に強く私の印象に残っています。

写真。「手吊り」の四態は仲々に面白いものでした。表情といい、体の描く曲線といい誠に軽妙で、(二)の場合、ウエストの括れが減じた処や、眼の表情など良かったと思います。「逆手吊と足吊り」の(一)などは絶妙の責めフोटで、彼女はさぞ苦しかったろうと同情を禁じ得ません。(二)では踵を上げて欲しかったと思いますが、風変りな吊り方ですし、(三)の逆吊りは幻想を呼ぶ作品でした。「緊縛感のクローズアップ」と「拘束女体の経過」では、はっきり見える絹川さんが、肩の辺りやヒップの辺りに驚く程のヴォリュームを持っていて飽きさせません。丸味を一層増した肩の美しさ、項垂れて柔らかな情感に溢れる背面の表情など、やはり抜群です。「股間縛り競艶」「麗わしき系列」は同じようなポーズの集成で、美しいことは美しいのです



が、焦点がややぼけた感じで残念でした。

「狂った果実」は(二)と(三)のロープ縛りのものに実感がありました。「晒し者なんだワ」の

(一)が素晴らしく、晒しものにされた女体の表情も巧みでした。(二)は拙く、反抗とも自棄と

もつかぬ演技ですが、(三)の美しさは格別です。失礼ながら今迄これ程、聖らかな彼女を

見たことがありませんでした。本誌八月号百三十二頁の利用フォトも美しいと思っていた

のですが、この彼女では当然でしょう。一転して「腰巻の乱舞曲」と「女の欲び八態」は、

いかにも見事な女の表現です。冷やかな美しさが特徴だった彼女が、ここまでの柔らかなみ

と哀れさを表現するようになったというのは、フアンの一人として、欲びでもあり、同

時にまた何とも云えぬ寂しさを感じます。洋装のトップモデルの彼女が、和装に於いても

花坂道子さんと並んで最先端をゆくのは楽しい極みです。「さあどうでもして！」も良い

作品でした。こういった諦観の中に勝負を表わすのは、萩千恵子さんと彼女ぐらいのも

ので、現在では独壇場という処です。視線のやり場、首から体の線の流し方、脚や足指への力の入れ方など心憎い程なのです。「陳列

された女体」の見事なこと、正に絶頂というに

値いする女盛りですが、それだけにフアンの一人として彼女のこの美しさが、より長かれと祈るものなのです。

「忘れぬ豊満美」「遅ましき倒錯」「黒蛇地獄」と、三つのテーマのもとに、大塚啓子

さんのヴォリウムが登場しますが、絹川さんの肩の辺りの美しさに対して、大塚さんの

ヒップの素晴らしさは勝るとも劣らぬものですから、ポーズもその点の考慮が必要だと思

います。彼女の難は脚にあるのですから、両脚を揃えて伸ばすなどは御愛嬌に過ぎません。

立姿も大して意味はありません。むしろ、本格的な吊りに活用するか、容赦のない海老縛

りを施してみたら、彼女の最高傑作になるのではないでしようか。「忘れぬ豊満美」の

(二)。「遅ましき倒錯」の(一)と四。「黒蛇地獄」の四など、その意味で佳作だと思います。

絹川さんの「女のふんどし」「女のサポーター」は、彼女に男役のような風貌を求めた点で、及び大塚さんの「吊り人形の哀歓」は

四を除いて成功作品だと思います。

愛川悦子さんの唯一の作品「断然、これは凄いだ！」は驚くべきものです。このロープ

と狼嚙を平然と受けていられる感覚は、鈍いというのか、マゾヒスティンの故なのか、正

に凄いいものです。こういった反応の示せる彼女も確かに貴重な存在ですから、恐怖の拷問とか、戦慄の残虐刑という様なシリーズの主役に当てたら、成功するのではないかと思います。

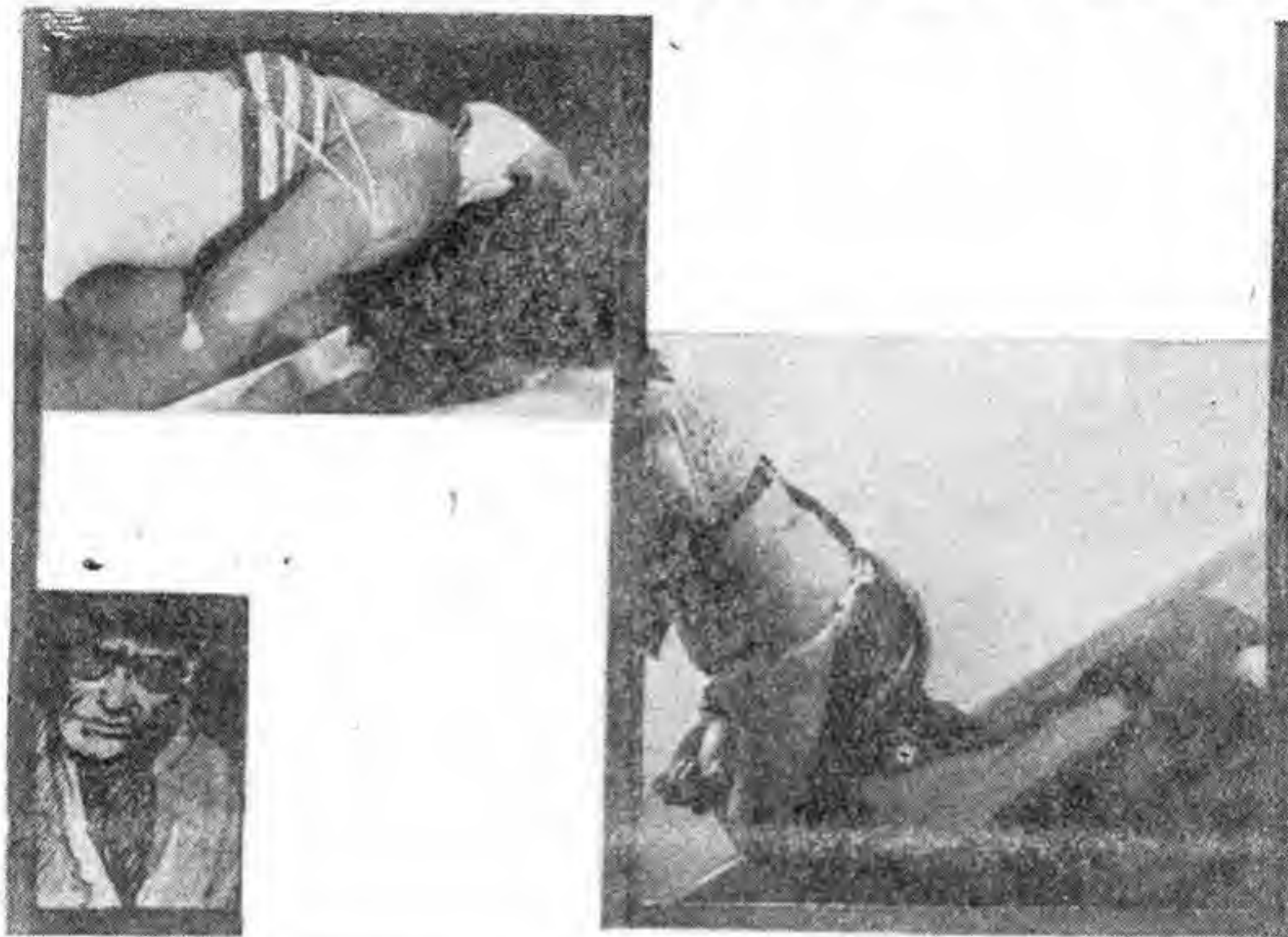
最後のしめくりに絹川さんの「女囚十四号罷り通る」が来たのですが、美貌だけにこの女囚物は彼女の独壇場でしょう。只、罷り通る」とは何を意味するのでしょうか。彼女の作品が多かったという意味でしょうか。もしそうなら、絹川文代は「女囚十四号」となる訳ですが、これは素晴らしいと思

います。立姿にも晒し者になっている女の哀感があります。膝についているものには夢があり、幻想があると思います。この「女囚」に私は心から愛しさを感じますから、今後も大いにフアンに代って容赦なく、存分に活躍させてやって戴きたいと思います。

裏表紙。大塚さんのようですが、面白い作品です。風変わりな拘束で晒し者にされた女の美しさが溢れる清潔な作品でした。

以上を総合して想うことは、第三集「女体緊縛グラフィック」の発刊が待たれ、さぞ大きな感動を与えてくれる作品として誕生するだろうということなのです。





本誌百号突破記念懸賞募集原稿入選作品

# 鮮 血 の 対 決

乳房に火をつけるな・第七回

藤 木 仙 治



## 新しい恐怖

「——順吉、金次、仕事がある。ちよっと、こっちへきてくれ」  
奥室から、王竜元が呼んだ。

「へい」  
テーブルに足をのせて、拳銃を磨いていた男は、顔をそろえて中国人のボスの前に立った。

「——三人の女を、ここに置いていては、まずくなつた。そのわけはわかっているな？」

「へい」

わかっている。このままでは、かならずこの竜一樓へ、哲夫が襲撃してくるにきまつているのだ。

ボスの裏切りに、烈火のように怒った哲夫が、妹の真紀子と愛人の美佐を取り戻しにやってくる。

星島大五郎とおなじく、こんどは王竜元も哲夫の拳銃に命を狙われる運命になった。

だが、王竜元は大五郎ほど哲夫の復讐をおそれてはいない。王竜元の背後には、彼を守る巨大な暴力の組織があった。

「今夜、二人であの女たちを、港のれいの倉庫へ運んでおけ。いいか、気をつけてやるんだぞ」

「へい。——とすると、あの三人の女、日本からおさらばというわけ？」

金次が、眼をまるくしてきいた。

「うむ。あさつての夜、香港ゆきの貨物船が港を出るんだ。それにのせていく」

「旦那は？」

と、きいたのは順吉だ。

「おれもついでに、その船でむこうへ連絡に帰る。こっちでの仕事

も一段落したからな」

「美佐と真紀子が、みやげというわけですね。マダムはどうするんです？」

「桃華か？ そうだな、途中、東シナ海の鯨にでもくれてやるか」

王竜元の命令にそむいて、哲夫によるめいた桃華である。この冷酷非情のボスは、冗談でなく、甲板の上から、桃華の身体を海中に投げこむだろう。

「すると、この龍一樓の店は、どうなるんです？ かんじんのマダムがいなくちゃア……」

こんどは金次がきいた。

「すこしの間、お前たち二人にまかせよう。一カ月もたてば、またおれが香港から、新しい腕ききのマダムをつれてくる」

「へえ——」

夜、一時をまわると、この南京街、月光町も、やっと酔客たちのざわめきから遠去かる。

順吉と金次は、三人の女をとじこめてある奥の密室へいった。王竜元に命じられたとおり、港の倉庫へ運び移すためである。

女たちは、それぞれ厳重に手足を縛られたまま、板敷きの床の上に、ぐったりと身を横たえていた。さすがに、ありあわせの衣服を与えられていたが、深夜から曉方の気温の冷えに、三人ともその身体を、ひしと寄せあって暖をとっていた。

背中あわせになって、うしろ手の結び目を解こうと努力したのだが、男の力で念入りにいましめた縄は肌に喰いこんで、すこしのゆるみもみせない。

爪がはがれ、指さきの皮膚がめくれても、縄目のかたさは、まるで針金がよじれて組まれているかのようだった。

「かわいそうによ、縄にしめあげられた腕が、紫色になつてるぜ」  
金次が、ちかちかと眼を寄せてのぞきこみ同情をみせていった。



「金次、おねがいよ。ここからあたしを逃がして。そうすれば、のぞみどりの金をやるよ。あたしはダイヤでも金でも、たくさんもっているのよ」

桃華の眼が、金次をみあげて哀願した。

「いけねえ、いけねえ。おれはその手を喰って、前にひどい目にあっているんだ」

金次は首をすくめ、大げさに手をふった。せっかく誘拐してきた大五郎の娘の千絵子の縄を解き、一緒に逃げたあげくにつかまり、ひどい私刑にあったことを思いだしたのだ。その傷が、まだ背中に大きく残っている。

「こっちのお嬢さんは、まさか死んじまったんじゃないだろうな」

つぎに真紀子の顔をのぞきこんで、金次がいった。真紀子と美佐には、もう口をきく元気がなかった。ぐったりと眼をとじ、死んだようになって、たがいに身を寄せあっていた。生きていることは、胸にかかった縄に締めつけられているふくらみが、かすかに息づいているので知れる。

「さあ、口をアアンとあきな」

順吉は、手をのばすと、いきなり桃華の鼻をぎゅうツと、つまんだ。

「ああッ」

呼吸が苦しくなつて、口をあけた桃華の、その歯のあいだにポロ布がぎゅうぎゅうと押しこまれた。その上から、さらに手拭いで猿ぐつわを噛ませられる。

「む、む、む……」

首を左右にふつてもだえたが無駄であった。完全な猿ぐつわに、もう声がでない。

「かんべんしなよ、マダム。これからすこしばかりドライブだ。途中で悲鳴でもあげられると困るンでね」

つぎに、美佐と真紀子の顔をぐいと仰むけにし、おなじく鼻をつまんで口をひらかせ、ポロ布を押しつめて猿ぐつわを噛ませた。女たちの息は、いっそう苦しくなり胸のふくらみは、せわしく、はずんだ。

「さあ、車まで歩いてくれ」

順吉は、女たちの足の縄だけを解いていった。

「歩けなかったら、おれが抱いていってやるぜ。遠慮なく、だつてしな」

と、いやらしく笑うのは金次である。

三人の女は、よろめきながら密室をでた。

龍一樓の裏口に、びたりと横づけになっている車のなかに、いやおうなしに押しこまれた。

（これから、どこへ連れていかれるのだろうか……）  
女たちは新しい恐怖におののいていた。

### 埠頭の目撃者

深夜の市街を風のように横切つて、二人の男と三人の女をのせた車は、十数分後には、巨大な倉庫の建物が、黒々と建ちならぶ港の一劃に到着した。

埠頭G区第十七号倉庫――

ここが、貿易商の名目で、王龍元が常時、使用している倉庫である。

「――着いたぜ、兄貴」

ハンドルを握っているのは、金次である。

「よし。女たちをおろそう。お前はドアの前に立って、あたりを見張っていてくれ」

順吉は、ポケットから鍵をだし、通用口になっている、くぐり戸の錠をあけた。



美佐、真紀子、桃華の順で、つぎつぎに車から引きずりおろされそのくぐり戸から倉庫のなかへ連れこまれる。

湿ったカビくさいような匂いと、ひえびえした空気。

パチリと電燈のスイッチがひねられる。にぶいあかりに照らしだされた倉庫の内部は、不気味な静寂がただよっていた。

大きな木箱やら、むしろ包みが、うず高く積み重ねられている。

最後に、金次がはいってきた。

「誰にも見られなかっただろうな」

順吉が、念をおした。

「真夜中だぜ、兄貴。倉庫の前には、野良猫が一匹通りかかっただけだ」

「そうか——」

順吉の眼が、鋭く光った。

金次が、三人の女の縄目を点検した。だが点検する必要はなかった。

女たちの背中にまわされた手首は、たかだかと重ね合わされ、縄は寸分のゆるみもなく、両手首を縛りつけてあった。

二の腕から胸へ、胸から背中へと、三重四重にまわされた縄も、肌とのあいだに指一本ねじこむ隙もないほどにきびしいものである。

それだけに、女たちの苦しみは容易なものではなかった。感覚はとうに麻痺して、わずかに残った気力だけで、かすかな息をかよわせているようだった。

金次は、女たちの縄尻を、木箱の周囲にぐるぐると巻きつけた。

「誰の眼にも触れねえ、こんな岸壁の倉庫にとじこめられるなんてずいぶん可哀想な話だぜ」

さすがに金次は、痛々しいという顔で三人の女を見くらべた。

だが、しかし——。

この暴力的な行動を、むかい側の倉庫の蔭に身を寄せて、凝視し

ている者がいた。

縛られた三人の女が車からおろされ、つぎつぎにくぐり戸から倉庫のなかへ押しこまれていくのを、月あかりにすかして、べつの二人の男が見ていたのだ。

「——兄貴、いま倉庫のなかに連れこまれた女、あれは社長の奥さんじゃなかったかい？」

背の低い小さな男が、もう一人の男にささやいた。

「うむ。おれにもそう見えた。それだけじゃねえ。もう一人の女はたしか哲夫の妹の真紀子だったぞ」

声を殺してささやきかわすのは、星島組の幹部、ズル松にチビ啓だ。

「だとすりや、こいつはたいへんなことだぜ、兄貴。社長の奥さんと哲夫の妹が、どうしていまごろ、こんなところに？」

「うむ。しかも縛られてな……」

ズル松も首をひねった。

この二人は、今夜、密輸の洋酒の荷揚げで、この港までやってきたのだ。いま、岸壁から数ダースの洋酒を車に積みこみ、帰途につこうとしたとき、ひよいと、順吉、金次の奇怪な一行を眼にとめたのである。

「どうします、兄貴？」

「きまってるア、奥さんを助け、真紀子をかっさらうだけだ」

「だ、だいじよぶかい？」

「どうやら、哲夫の姿はみえねえようだ。あいつのハジキさえ用心すれば、あとはそんなに腕のたつやつもいるめえ」

ズル松とチビ啓は、背広の内側から、そろりと拳銃をぬいた。

ここで、美佐と真紀子を奪い返すことができれば、たいした手柄になる。

女たちが連れこまれた倉庫の通用口に、ズル松とチビ啓は足音を



忍ばせて近寄った。

腰をかかめて、鉄の扉を押す。

ギギギ……と十センチほどあいて、中からにぶい電燈の光りが洩れた。

中腰のまま、拳銃を握りしめ、そのわずかな隙間から、内部のようすをうかがうズル松とチビ啓であった。

### 不 意 撃 ち

ところが、そのとき、その倉庫の中でも意外な光景が展開していたのだ。

三人の女は、頑丈な木箱を背に、足にも縄がかけられ、まるで荷物の一種のような無残な姿でくくりつけられた。

「さあ、兄貴、仕事は無事にすんだぜ。帰ろうか」

手についたゴミを、パンパンと払い落として、金次がいった。

その金次の前額部に、いきなり、ガツンッ……と、順吉のもつ拳銃の台尻が打ちおされたのだ。

「ぐぐッ……」

とうめき、金次はもろくも膝を折ってぐずれ倒れた。

「すまねえな、金次。お前がいては邪魔なんだ。すこしのあいだ、そこで眠っていてくれ——」

順吉は、拳銃を腰のベルトにおさめ、三人の女の前に寄った。



「むむッ！」

と、身をすくめておののく女たちに、順吉は白い歯をみせて微笑した。少年のような愛らしい笑顔だった。

「おどろかなくてもいい。おれが助けてやる。——おれはきのうから、王龍元を敵にまわして、哲兄貴の味方につくことにしたんだ。今夜ははじめっから、あんたがたを助けるつもりでいたんだ。このままいけば、あんたがた、あさつての晩は香港いきの船に積みこまれてしまうんだぜ」

順吉は、ポケットから飛び出しナイフをだすと、女たちの縄を切りほどこいた。

肌身に喰いこんだ固い縄を切るのは、思ったよりもむずかしい仕事だった。三人の手足が自由になるまで、たつぷり五分間ばかりかかった。つぎに猿ぐつわをはずしてやり口の中につめたボロ布を吐きださせた。

「哲兄貴は、いま箱根早雲山のホテルにいるんだ。三人とも、おれがそこへ連れて行ってやる」

緊張した順吉の表情に、嘘らしいものはなかった。身を責めつづけたいましめの縄から解放されたよろこびに、女たちは腕をさすり、手首を揉みほぐした。

「さあ、早くしなよ」

順吉は、女たちに手をさしのべ、肩を貸して床から立たせた。

このときである。

「おっと、そうはいかねえぞ」

星島組のズル松とチビ啓が、銃口をピタ



りと順吉にむけて背後から現われたのだ。

「うッ、きさまらは誰だ！」

順吉は、愕然として棒立ちになった。

「誰でもいいさ。おれたちはその三人の女のうち、二人だけを頂戴すれば、それでいいのさ」

ズル松もチビ啓も、この順吉とは一度逢っているはずである。

三日前、芝浦の埋立地で、千絵子と真紀子を交換したとき、銃火を放ちあったのだが、あのときは月夜とはいえ真夜中、しかも離れていたため顔を見きわめることはむずかしかった。

「あッ、お前たち、鶴松に啓介！……」  
美佐がさげんだ。

真紀子もこの二人は知っている。自分をジャズ喫茶の「ドンヌ」から誘拐し、キヤパレー「ダスカ」の地下室にとじこめて、さんざんの屈辱と苦痛を与えてくれた男たちだ。

「奥さん、お迎えにまいりました。といっても、こいつア、まったくの偶然だったんですがね。へへへ……」

ズル松が、唇をまげて笑った。

その一瞬の隙をみて、順吉の手がすばやくベルトの拳銃にかかった。

だが、ズル松の眼と手に油断はなかった。

ブスンッ！——

消音拳銃が火をふき、順吉の脇腹に弾丸がぶちこまれた。

「むむッ！」

順吉の背が、とびはねたようにまろくなり、前のめりに倒れた。



脇腹からあふれでた血が、みるみるうちにコンクリートの床を濡らした。

「馬鹿野郎めが。おとなしくしていきや、こんなよけいな血を流さずにすむものを——」

さあ、チビ啓、ほんやりしていねえで、早く真紀子を外にひきずりだせ！」

思わぬ殺人を眼の前にして、四肢を硬直させていたチビ啓は、ズル松に叱咤されると、ハッとして真紀子にとびかかり、身体を抱きすくめた。

「あれえッ！」

野獣の体臭が襲いかり、真紀子は抵抗した。

「へへへ……。真紀子、おめえとはどうも縁があるなア」

チビ啓は真紀子の片手首をつかむと、ぐいとうしろにねじあげた。身体の小さいくせに、女に対してはむやみと馬鹿力をだす男だ。真紀子の抵抗はむなしかった。

せっかく解き放たれた両腕は、またぐいぐいと背中にねじあげられ、真紀子は頸を前につきだしてうめいた。

（ああ、また縛られる！……）

そう思ったとき、真紀子は氣を失った。

一難去って、また一難——という形容があるが、十九才の乙女にとっては、あまりにも執拗な恐怖と苦痛の連続であった。

魂ぬけて倒れかかる真紀子の身体を、ズル松は大手をひろげて抱きとめた。

「兄貴、この女はどうします？」

チビ啓が、木箱のかけでおびえている桃華を顎でさしていった。



「置いていけ。よけいな女にかまっているひまはねえ。ぐずぐずしている、また哲夫がとびだしてくるぞ。早くずらかるんだ！」

五分後――

美佐と真紀子をのせたズル松の車は、深夜の横浜を、一路東京にむかって走りだしていた。

### 縄 目 の 痕

「――ほう。美佐と真紀子を、哲夫の手から奪い返してきたのか。そいつはでかしたな」

星島大五郎は、でっふりと肥えた腹をゆすって、布団の上に起きなおった。

ここは杉並善福寺――大五郎の私邸である。

ズル松は、横浜から運んできた密輸の洋酒を、銀座の「ダスカ」におろすと、美佐と真紀子をのせたまま、まっすぐにここまで飛ばしてきたのである。

睡眠中を起こされた大五郎の不機嫌は、ズル松が得意げに報告する言葉をきくうちに、たちどころに消えた。

これは、まさしく大手柄であった。

――真紀子をこっちの手におさえておけば、いくら復讐鬼と化した哲夫でも、うっかり拳銃もむけられない。

大五郎は、寢室をでると、美佐と真紀子の顔を改めに奥座敷へ足を運んだ。

真紀子は、もう息をふきかえしていた。

二人とも死人のよう蒼白な顔色で、畳の上にくずれた花びらのように坐っている。左服がひどく乱れ、胸からは白い隆起がのぞき、裾は大きく裂けて、膝の上までが白々とむきでている姿は見る者によつては異常なエロチシズムがあった。

「美佐。ふふふ……。やつれたな。哲夫のやつにさんさん可愛

がってもらったか」

頭から美佐を見おろし、大五郎の眼には複雑な色がかんた。

（この女を家に入れてまる三年。もう飽きているはずなのだ。だが四、五日離れていたあとでこうして眺めると、またべつの色気が感じられる。……）

すると、嫉妬の念が、むらむらときざしてくるのだ。

（哲夫に呼びだされて、ノコノコとこの邸を出ていった女――。当然、こいつはあの男から……。いや、おそらく自分からすすんで身をまかせたにちがいない。うぬ！……）

怒りがこみあげてきたが、大五郎はじっと胸をおさえた。

思いきりぶちのめし、折檻してやりたい。

真紀子ともどもに責めあげて、哲夫の居どころを白状させ、こつちから逆襲にでて、あの始末にわるい復讐狂を、殺してしまうことも考えられる。

だが、いまは美佐も真紀子もひどく弱っているようすであった。

大五郎は、美佐の服に手をかけ、べりべりとひきむいた。白いたおやかな胸がむっちりとあらわにされた。その豊かなまるみの上下に、紫色にしみついた縄の痕があった。

つづいて、真紀子の服にも手をかけ、荒々しくひきむいた。

「ひえッ」

と小さな悲鳴をあげたが、すでに抵抗する気力はなく、大五郎の手によつて上半身がむかれた。わずかに前にかがんで胸を両手でおおったが、その白肌には、美佐とおなじく一目で縄の痕とわかるむごたらしいアザが、なまなまと残っている。

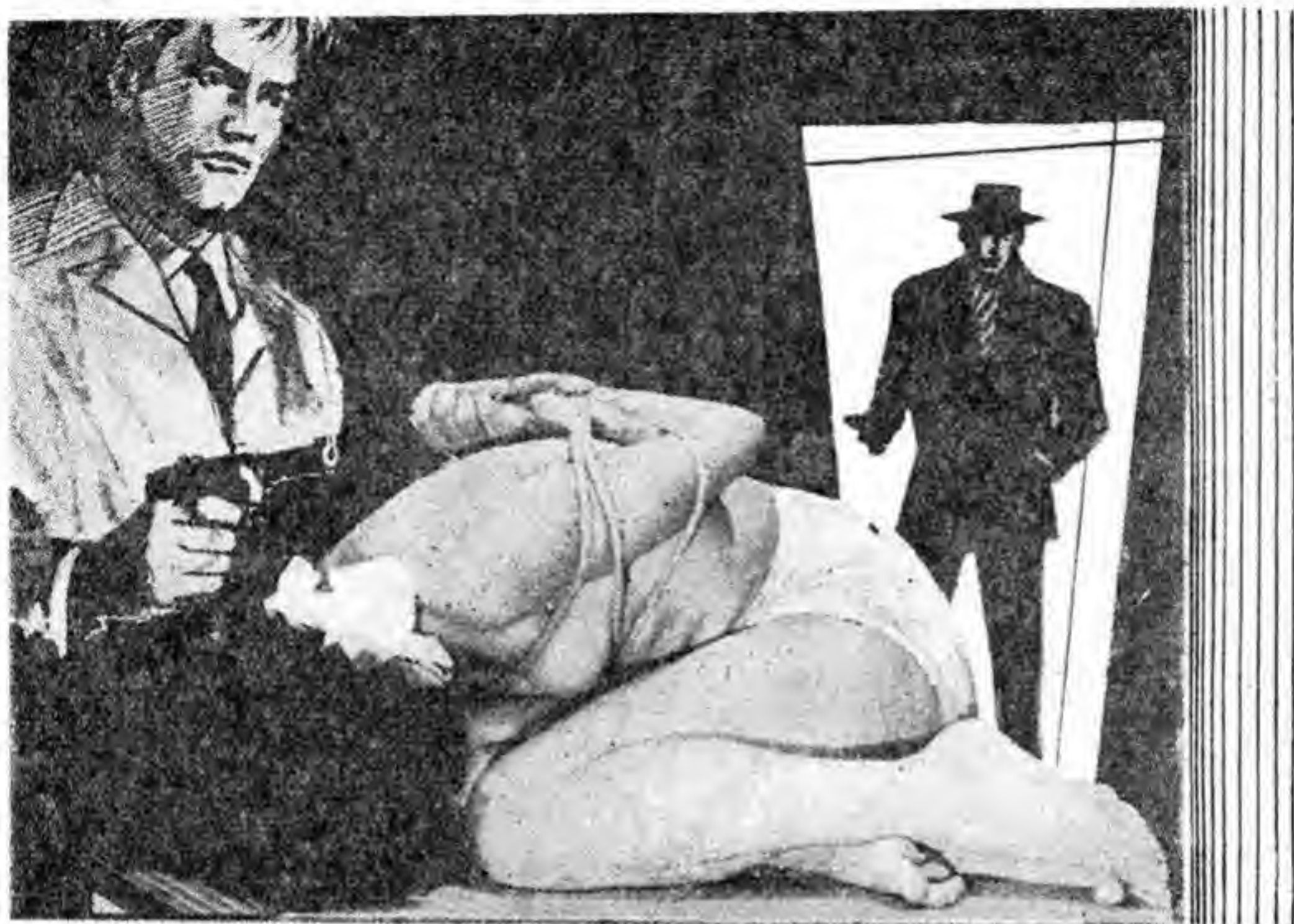
（ふうむ？……）

大五郎は、眉の根にふかい縦皺を寄せて考えた。

「わからん……」

哲夫が、なぜこの二人に縄をかけるようにしたのか？……





この現象は、大五郎にとって、不思議なことであった。

(この痛んでいる身体を費めたら、死んでしまう……)

すこし休養を与えて、肌についた縄目を消してから、新しい縄目をつけてやる……

五郎は、そう思いついた。「おい、風呂をわかして、この女二人をいれてやれ。充分に氣をつけて、逃がすんじゃないぞ」

下男代りの子分にいいつけて、大五郎はまた自分の寝室にもどった。

と——娘の千絵子が、ピンクの派手なパジャマ姿で現われた。

「なに、パパ。うるさいわよ、真夜中だっていうのに……。目がさめちゃった……」

ふくれ面で、上着の衿から手をいれて、首筋のあたりをボリボリかいている。

「美佐が帰ってきたんだ」

大五郎が、うるさげにこたえた。

「まあ、ママが？」

千絵子が、好奇の眼を輝やかせた。もっとくわしい事情をきく姿勢で、大五郎の膝のそばに寄ってきた。

「うるさい。真夜中だ。寝ろ。話がききたければ、明日の朝、美佐からきけ」

大五郎は、やや怒声を発して千絵子を追い払うと、枕に頭をのせた。

キリキリとくびれるほどに縛りあげられた美佐の美体。光るような白い肉体美が、しめつける縄の苦しさに七転八倒し、しきりに助けを求めている夢をみた。

(くそッ、おれのほかに美佐の身体に縄をかけたやつは、どこのどいつだ!……)

大五郎は、夢のなかでも嫉妬し、くやしさにわめいた。



真紀子をオトリにして哲夫を呼び寄せ、その胸板に、弾丸を何発も何発もぶちこむ場面になった。胸から真ッ赤な血がブクブクとあふれて、哲夫の苦悶の表情がクローズアップして大五郎に襲いかかった。

## 血 の 対 決

一方、埠頭G区第十七号倉庫にのこされた順吉と桃華は――。

「マダム……マダム……」

血だらけの顔をあげ、順吉は虫の息で桃華を呼んだ。苦悶の形相で、咽喉をせいせい鳴らしている。

「順吉……順吉！」

桃華も、だまってみてはいられなかった。自分たちを助けだそうとした男である。

自分の着ている服をひき裂き、血まみれになった順吉の腹に、力いっぱい、ぐるぐると巻きつけた。血止めのつもりである。

「こうしておいて、早く医者へいくんだ。こんなところで死ぬのは馬鹿らしいよ」

桃華は、順吉の耳もとに口を寄せ、はげますようにいった。

「す、すまねえ、マダム……。哲兄貴は早雲山の雲海荘というホテルにいる……。そこへ行って、この、ドジな始末を報告してくれ」

順吉は、気丈にも片膝をつき、よろよろと立ちあがった。

「あたしが一緒に、医者をさがしてやる」

桃華は、順吉の脇の下に肩をいれた。

「いいんだよ、マダム。おれは、もう助からねえ……。だが……。死ぬ前に……。やらなくちゃならねえ……。仕事……。ある」

順吉は、桃華の腕をふりほどいた。

よろめきながら、倉庫を出た。

おびただしい血が、彼のあとから、ポタポタとしたたりおちた。

桃華は、呆然と立って見送るだけである。順吉の姿は、凄愴であった。外に出た順吉は、倉庫の横に置いてある車に、這うようにしてのった。

気を失うまいとして、必死だった。

ハンドルにしがみつき、アクセルを踏んだ。車は走りだす。

はげしい苦痛と出血に眼の前がふうツと暗くなり、ハツとして頭をふり、またハンドルをつかみなおす。

――キャンキャンキャンキャン！……

悲鳴をあげて、野良犬が一頭、タイヤの下敷きになった。

（くそッ、死ぬものか！……）

鬼のような形相で、順吉は歯をむきだし、全身でハンドルをまわした。

十数分の後、月光町龍一樓の裏口に、のめるようになって車はとまった。

背をまるめ、顎をつきだし、片足ずつをひきずるようにして、順吉は龍一樓の中に踏みこんだ。

めざすは王龍元の部屋。

今夜の首尾をきくために、ボスはまだ眠らずに待っている筈だ。順吉は、身体ごとドアを押した。

「おお、順吉、帰ってきたか。――金次はどうした？」

いいかけて、王龍元は、順吉の脇腹からにじみでている、おびただしい血糊に眼をみはった。

「どうしたんだ、順吉、その血は！……」

それにはこたえず、順吉の白い顔に、ねじまがったような微笑がうかんだ。

「旦那――いや、麻薬ボスの王龍元……。きさまは、きさまが香港から運んできた麻薬で、いままでに、幾人の日本人を苦しめ、地獄に突き落としたと思うかね？……」



順吉はベルトにさした拳銃を握りしめた。

「なんだ、どうした、順吉！」

「おれは、ヤクザだが、日本人だ……どうせ死ぬなら、お前を殺してから、死ぬよ……それが……おれにできる、たったひとつの、いいことなんだ……」

それが、順吉にのこされた最後の力だった。

銃口を王龍元の胸もとにつきつけ、思いきりひきがねをひいた。  
ダダアーン！……

王龍元は、それをおしとどめようとして、両手を前につきだしたまま、弾丸の衝激に、ガクンッ！と身体をけいれんさせた。

「ぐぐぐッ……」

口から血泡をふきだし、眼も鼻も口も極端にひき寄せたまま、王龍元は、にぶい音をたてて床に昏倒した。

同時に、その上に折り重なって、順吉も倒れた。

王龍元は、床に爪をたてて、なおもがきまわったが、順吉はすでに息絶えていた。  
(未完)

# 〔新版〕袖珍女体緊縛分譲写真集

Y組六十集 大名刺判(9×6.5寸) 印画紙焼付

各組一枚一組(全部送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 一組一枚   | 八〇円   |
| 五組五枚   | 三〇〇円  |
| 十組十枚   | 五五〇円  |
| 二十組二十枚 | 一〇〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 一四〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 一七五〇円 |
| 五十組五十枚 | 二〇〇〇円 |

|    |          |        |
|----|----------|--------|
| Y1 | 全裸荷造棒しぼり | (大塚啓子) |
| Y2 | 乱れ黒髪裸見本  | (大塚啓子) |
| Y3 | 観念した胡坐   | (大塚啓子) |
| Y4 | 見事な飾り物   | (大塚啓子) |
| Y5 | 浴室股間縛り   | (大塚啓子) |
| Y6 | 麗しの緊縛裸像  | (愛川悦子) |
| Y7 | 逆十字後手縛   | (愛川悦子) |

|     |           |         |
|-----|-----------|---------|
| Y8  | 裸身の補われ人   | (愛川悦子)  |
| Y9  | 逆エビ後手足吊り  | (愛川悦子)  |
| Y10 | 全裸ねの縛り    | (田中芳代)  |
| Y11 | なまめかしき緊縛  | (花坂道子)  |
| Y12 | 全裸フトンむし   | (大塚啓子)  |
| Y13 | 蒲団裏裸またぎ   | (大塚啓子)  |
| Y14 | 初々しき裸全身像  | (岩井知子)  |
| Y15 | ヌード股間しぼり  | (絹川文代)  |
| Y16 | 全裸脚掌股間縛   | (絹川文代)  |
| Y17 | セーラー後手吊り  | (川辺紗登子) |
| Y18 | 庭園ヌード縛り   | (絹川文代)  |
| Y19 | 全裸全身軀目慢   | (愛川悦子)  |
| Y20 | 豊満双丘くらべ   | (愛川悦子)  |
| Y21 | 追いつめられた裸女 | (愛川悦子)  |
| Y22 | 遅ましきヒップ   | (愛川悦子)  |

|     |           |         |
|-----|-----------|---------|
| Y23 | 大の字晒し     | (絹川文代)  |
| Y24 | 縛り正面正坐    | (絹川文代)  |
| Y25 | 胸のポリウム自慢  | (愛川悦子)  |
| Y26 | 魔人受難の巻    | (益田房子)  |
| Y27 | もつこれで許して  | (益田房子)  |
| Y28 | むしられたスロース | (花坂道子)  |
| Y29 | 全裸縛りの全身   | (平野笑子)  |
| Y30 | 鎮座する縛り女神  | (平野笑子)  |
| Y31 | 囚女後手柱縛り   | (大塚啓子)  |
| Y32 | 全裸強列股間縛   | (絹川文代)  |
| Y33 | ベッド縛りのポーズ | (絹川文代)  |
| Y34 | 開股一番一直線   | (絹川文代)  |
| Y35 | 縛り腰巻色模様   | (絹川文代)  |
| Y36 | 亀甲股間縛正面   | (絹川文代)  |
| Y37 | 全裸椅子またぎ   | (田原美佐子) |
| Y38 | 妖艶闊のしぼり   | (田原美佐子) |
| Y39 | 椅子またぎ裸後手  | (田原美佐子) |
| Y40 | 強列第手首細締   | (田原美佐子) |
| Y41 | ハタカ縛り人形   | (絹川文代)  |
| Y42 | 濃艶ハタカ縛り   | (絹川文代)  |

|     |           |         |
|-----|-----------|---------|
| Y43 | あられもなき開股  | (大塚啓子)  |
| Y44 | 全裸変形股間正面  | (大塚啓子)  |
| Y45 | 後手立木吊り    | (村井知可子) |
| Y46 | 全裸後手壁ハリツケ | (愛川悦子)  |
| Y47 | 全裸寝台離脱責め  | (花坂道子)  |
| Y48 | 振袖令嬢後手責め  | (花坂道子)  |
| Y49 | 長襦袢後手しぼり  | (花坂道子)  |
| Y50 | ワンピース縛り   | (花坂道子)  |
| Y51 | 手吊り裸身の乱舞  | (絹川文代)  |
| Y52 | 柱縛り観念の図   | (絹川文代)  |
| Y53 | 不行儀姿態の美   | (絹川文代)  |
| Y54 | カメラに晒す全裸  | (大塚啓子)  |
| Y55 | 緊縛女体の開陳   | (絹川文代)  |
| Y56 | 膨隆突出した臀部  | (絹川文代)  |
| Y57 | 前手錠全裸像    | (大塚啓子)  |
| Y58 | 股間縛開股の絵   | (絹川文代)  |
| Y59 | 聖壇のさらし者   | (絹川文代)  |
| Y60 | エビ責めの表情   | (絹川文代)  |



# 現代マゾヒズム芸術時評

原 忠 正

復刊第百三項

出版物「黒いオベリスク」上下二巻

„Die Schwarze Obelisque“

(Erich Maria Lenard)

エリッヒ、マリア、レマルク著

山西英一訳

私達の記憶から急速に消え去りつつある第一次世界大戦が、世界の人々に与えた精神的打撃は、はるかにその規模を拡大した第二次のそれよりも決定的なものであった。世界が二分されて戦うという有史以来の事実、おびただしい物資と人的資源の消耗、これら僅か四年間の戦争によって蕩尽された貴重なもの

は、かつて戦われた数知れぬ戦争の何れにも見出せない程、歴大なものであった。泥沼の様な戦局が、独乙の内部崩壊によって終り、世界が救世主に対する如くに渴望した平和が訪れたが、そこに見出されたのは、大戦以前のよき時代の平和でなかった。そこに在るものは、以前とは全くその質を異にした社会であり、異った魂を持った人々の群であった。戦争は、奥太利、洪牙利の連合王国の解体と、プロシアの全欧に対する支配の終焉を齎らしたただけではなかった。人々が疲弊した眼をあげて世界を見渡した時、そこには英国の一植民地の後身であった新大陸が、その富

と驚嘆すべき繁栄を背景として、経済的な支配を全世界に拡げつつあった。一方、極東には、漁夫の利を得た有色帝国が、アジアの盲腸の如くうずき始めており、黄禍の恐怖は再び人々の心の中に着実に発芽していった。全歐洲は疲弊し、彼等が全力を尽して戦った後に得たものは、実に、全欧それ自らの衰亡以外の何物でもなかったのである。この様な不安の社会には、早くもベル・エポックに熟し切った頹廢が、妖しい芽を出し、先ず芸術や哲学の世界に、その烈しい繁殖の地を見出した。ゲオルク・グロツス、ルドルフ・シュリヒテル、エゴン・シイレ等の画業が迎えられグスタフ・マアレルやリヒアルト・シュトラウスの音楽が異様な世界を開拓した。風紀は急激な男女の不均衡と為替相場の激動によって紊乱その極に達した。この「黒いオベリスク」は、実にこの様な時代を背景として、その中で生活する微風にさえも揺れる鋭敏な感受性を持つ若い男女を描いている。かつて、「凱旋門」「生命の火花」によってナチスの抬頭と、その暴力的で規則正しい支配を描いたレマルクは、ここに自らの生涯の終り近く、その暗黒の支配の前夜を描き、自らの育った暗鬱な、しかし懐しい時代を描いた。私は、すでにオスヴェンシウム（アウシュヴィッツ）ダッハウ、ブーヒェンヴァルト、ベルゼンについて、又ドロテア、ピンツ、イルゼ・コッ



ホ、イルマ・ギーゼ等について余りに多くを綴って来た。だから、ここで再びナチス・ドイツのKZ（強制収容所）に於ける人間対非人間の残忍と淫虐とについて詳述しようとは思わない。只、レマルクの殆んどすべての作品が黒い制服によって象徴されるSS（ヒトラー親衛隊）の淫虐性を帯びた絶対的な支配の妄想から脱却し得ていないことを、予め注意を喚起しておきたいと思う。

此の「黒いオベリスク」では、その変身は断片的に十四章の始めから「鉄の馬」という愛称の職業的女主人（所謂、職業ドミナ）として登場し、極めて間接的に語られている。けれど私は、むしろ「鉄の馬」を、その様な政治的配慮を除いて、そのままの意味で採り上げ、職業ドミナについて併せ述べようと思う。

筆者は、曾って本欄で一九三〇年代、発行の仏誌「ヴォアラ」に掲載された職業的女主人に関する記事と写真とを紹介したことがある。しかし、それは単にドミナの存在を示したにとどまり、その実体、その実況を示すものではなかった。これに反し、ここに登場する「鉄の馬」はマゾヒストにとって魅惑的な一面を具体的に示すのである。それは或る種の人々にとって、理想的なものであるかも知れない。

若い童貞の詩人オットオは、未完の自作の

詩「魔性の女」を完成する為に、実際に女体を知らねばならぬと友人達に打明ける。友人達は女郎屋にゆき、マダムと相談して、オットオの相手に魔性の女の具象化である筈の「鉄の馬」を撰ぶ。全く幼心なオットオの前に現われた最初の女性に、レスのついた長靴をはき、ライオン使いの着る様な衣裳をつけた「鉄の馬」なのである。遊びの途中で、オットオは驚いて逃げ出してしまうのであるが、私はこの部分で此の種の女性の値段が具体的に記されている事に注目する。鞭打と特殊な長靴の観賞、三十分の談話の代金は三百万マルク、即ち大正時代の三十七円五十銭が要求される。しかも此の値段は可成り良心的なものであると断っている。十円札一枚で芸者をあげて騒いで飲んで遊んでお釣の来た時代の三十七円五十銭が、如何に高価なものであるかは想像するに難くない。その高価な料金を支払っても常に客を持っていた事は、我國の現状に鑑み甚だ興味深いものがある。我國でのアブニストの大部分が、安易且つ安価にしかその対象を求めないこと。むしろ金銭的に利益を希望している厳然たる事実には私は、屢々驚かされて来ているからである。特にマゾヒストにその傾向が多いという事実は一体どう説明したらよいのだろう。この高貴な病は無限の財宝を悉く投入して始めて得られる処のものを最終の目的としているに

違いない筈なのだが。それとも人々は、投書や告白文に過大の言辞を弄する事に自慰的な満足を見出しているのだろうか。当時の三十七円五十銭は現在の貨幣価値に換算すると約二十万円にも匹敵しようか。その半分の、十万円でも鞭打と観賞に支払い得る人が一体何人いるのだろうか。私は、昭和三十年の初め、本誌がやむなく休刊した時の状況を想起する。我が國の偏向性愛者の土性骨が全くなかった事は誠に情ない限りであった。当時、敢然と立って出版社を弁護したのは、実に春日ルミ氏一人だったとは、まことに寒々しい限りではなからうか。現在、私は多くの偏向性愛者を知っている。しかし其の中で「鉄の馬」によって満足を得られる人は僅か数人を数えるのみである。私は、このレマルクの新作の中で、この部分に至ったとき、さすがマゾホの故國なりと感嘆した次第である。ヒルシュフェルト博士のうけた迫害やその悲しむべき末路を顧みて私達は、もっと強く、特殊な嗜好の存在の理由と価値について心を堅持せねばならぬと思う。余談に拂りすぎた。本題に戻って、娼家の料金に関連する「鉄の馬」の言葉によって私は、もう一つの新らしい知識を得た。

いま、お尻まで届く様な長靴が一体いくらすると思うの？ 三百万だって安すぎるのよ。即ち、各種の衣裳、靴、鞭、其の他は夫



々使用する種類によって料金の算定が異なるということである。此の事はフェティシストの心理を巧妙に擲んでいと思う。フェティシストにとっては、相手の女は問題でなく、着衣や靴等の当人の対象物（フェティシズムの対象物）のみが対象となつて、感覚を刺激するのであるから、ひざまでの長靴をはけばいいから、太股までのものでいいから、乗馬靴でいいから、「九尾の猫」でいいからといった具合に料金が定められることこそ最も合理的な形であるといわねばならぬ。それを「鉄の馬」は、すっきりときめているのである。蓋し、当代一の「マゾヒストの夢想的」の面目躍如としている。

レマルクは他の作家のそれとは異り、体験者の文章として書いていく様に思われる。私達の琴線に触れる想いのするこの数頁は、「痛ましきダニエラ」の中で「金髪の子ガ」の出現する部分と同様に光彩を放っている様に思われる。忽然と「鉄の馬」は、長い金髪を豊かにたらしめて、そのすんなりとした美しく長い脚に、底までみがき抜かれた様に光沢を放つ長靴をはき、手に太く長く、かたく編みこまれた革鞭をダラリと床にたらしめて、皮肉な嘲笑を交えたほほえみを浮かべながら、立ちほだかっている様である。独乙人のいう「鉄」はビスマルクの鉄血の鉄である。ヒトラアの鉄である。それは征服者、勝利者の強固

な意志の象徴である。そして、作者レマルクは鉄の意志を代行するSSによって為された淫虐の犠牲を自分の肉親によって支払っている。

しかし、政治的な説明は暫らく措こう。私達は、「鉄の馬」によって、十分この作者を読む価値を認めることが出来るのだから。

#### 復刊第四項

##### 「チエコ国立サーカス」

先般、来日して反響を呼んだポリシヨイ・サーカスよりも、実質的に遙かに大きな規模と、豊かな内容を持つといわれているこのチエコ・国立サーカスには、甚だ残念なことにイリナ・ブルジーモヴァ女史、マルガリタ・ナザローヴァ女史、或は、タマラ・ブスライエーヴァ女史の如き、高名な調教師は含まれていない。ただ、ここに取り上げるのは、一行の中に、団長シュプカ氏の夫人が、調馬師兼騎手として参加している為である。西班牙速歩を、その典型とする各種の高等馬術が、馬の本能に反していることは勿論である。特に、狭いリングの上で、完璧に演技されるこれらの馬術がその完成に至る経過で、如何に多くの本能の矯正が行われて来たかを想像することは難しいことではない。この点こそ、我々の興味をひくところである。私共は、すでに「サーカスの其人達」というソ連映画で

マルガリタ・ナザローヴァが虎を調教する様子を知ることが出来た。そして、更に加虐の対象として適切である馬に対して、シュプカ夫人がどの様な教育を施したかは、極めて想像しやういところである。七月一日から都内で披露されるシュプカ夫人の馬術は大いに興味深いものと思われる。

#### 復刊第五項

##### 米出版物「ヒトラーの火葬」

オルガ・レンギル著

(HITLER'S OVEN: Olga Rengyel)

(米国ポケットブック、アヴオン社刊 T213)

著者オルガ・レンギル（女性）がベルゲン・ベルゼン、アウシュヴィッツ、ブーヒエンヴァルト等の収容所を転々として、九死に一生を得て生き残った、その体験記。或る程度の粉飾は見られるが、決してフィクションではない。時間的経過、登場人物等はすべて、他の資料と合致するし、特に、個人的に典獄医師、看守等について述べた部分は信頼するに足りると思われる。

その一部、イルマ・グリーゼ（イルマ・ギーズ）と誤伝された人と同一人らしい。）についての描写は甚だ詳細である。特にその後半、読物として十分に觀賞に耐える部分をここに意訳しておく。

「ビルケナウの収容所に勤務していたイルマ



グリーゼはブロードの悪魔と呼ばれていた。

收容所に收容されている者達全部は、彼女を非常に怖れていた。しかし、彼女は本当に美しい女だった。私は、彼女から虐げられた経験をもっていたが、それでも、彼女は、私がこれまでに会ったどんな美女よりも美しい女であることを断言出来る。私達に対して、イルマの鞭打は、極めて気紛れでその上に残酷だった。或る日、私は、彼女の専属になっていた洋裁師(女性)につれられて、イルマの自室を訪ねた。

「イルマ・グリーゼはひどいサジストなのよ」と洋裁師は私に囁いた。兵舎の木造の壁越しに、閉ざされたイルマの自室の扉の中から私は、唸り声やうめき声と共に、鞭の唸る音をきく事が出来た。内部では誰かがひどく鞭打たれている様だった。

丁度、小さな穴から私は室内を覗くことが出来た。イルマは、一人の半裸にされた女の髪の毛をつかんだままソファの方に近付いて行った。イルマは、ソファに坐り、女の髪の毛を高く上げながら、片手に持った鞭の柄をそろそろと女のお尻の方に下げてゆく。到頭女は、イルマの前にひざまずいてしまった。

コム・ヒール!と、イルマは、私には見えない方の部屋の片隅に向って叫んだ。再び、「こっちへおいで!こない心算なのかい?」という乍ら、イルマは、手にした鞭を振り

上げながら、女を足許につきこらばせるのだった。

その時、私の視界に入ってきたのは、ジョルジアンと呼ばれていた若い、逞しい青年の姿だった。彼は、信じられない位立派な体格の持主だった。元来、ジョルジア地方は、体格のよい、美男子の産地として有名な地方だが、彼はその典型の様な美男子だった。

彼は天井に届きそうに立派な背丈をしていた。長期間に渉る飢餓と虐待にも拘らず、彼の逞しい胸部は、運動選手の様に逞しかった。彼は衣類を脱がされてゆき乍ら顔を伏せていたが、その表情は実に魅惑的だった。このジョルジア人の青年の事は收容所全部の者の口から口へと知れわたっていた。

彼は婦人收容所の道路を修理する作業についていたのだった。今や、彼はその目のあたりに、一人の可憐な、清純なポーランドの娘がイルマの鞭の唸りの下にひざまずいているのを見たのだった。

この場面について、更に詳しく書く必要はない。私達はその後に行った出来事を十分に想像することが出来る。

イルマは其の日、この男性の典型の様なジョルジア人を見た。そして、かつて東洋の支配者がそうした様に彼を自分の玩弄物にきめたのである。イルマは、彼を自室に来る様に命じた。ところが長い物禁生活や、イルマの

怖しさを十分知っていたにも拘らず、彼はその命令に服する程誇りを失っていなかった。イルマはその罰として、彼を従わせる為に、彼が愛していたこのポーランド娘を自室で鞭打ち、辱かしめる場面を彼に見ることを強要したのだった。

私は、アメリカの読者にとって、こんな非常識なことは信じられないだろうと思う。しかし、これは事実である。私の一語一語は厳密に正確な意味で真実なのである。一度びアウシュヴィッツで、イルマ・グリーゼに接する機会を持った者には、これらの出来事が、一つ一つ実感をもって迫るのである。

幸か不幸か、看守が近付いて来たので、私は、この出来事の結末を見ることは出来なかった。私達は、イルマが、呼ぶのを待たねばならなかった。

やがて、扉が開いた。最初にジョルジア人の青年が出て来た。私は、この時の彼のうるんだ憂鬱そうな、暗い眼付や、様子を忘れることが出来ない。

つづいて、ポーランドの娘が現れた。全くひどい有様だった。彼女の肌には赤いみみずばれがつけられており、その顔を横切って、鞭が切り裂いていた。あのサデスチックなイルマは、女性の顔に対しても容赦しないのだった——以下略——この文中に「その後に行ったことは想像出来る」とあるが、その部分



は、別の書物(S.S. in Einsatz)に出ている。筆者は自己の経験から、断言することが出来る。イルマ・グリーゼこそは、単なる血に狂った殺人狂ではなく、サジステインであった。イルマ・グリーゼの美醜について、かつて麻生保氏が異説を立てた。イルマ・グリーゼについて再び、説くことはすまい。イルマ・グリーゼは、誠に美しい女性であった。この本の著者は、グリーゼが、SSの制服と長靴を脱ぎ、ウキーンとパリに店を構えていた洋裁

師の手になるエレガントな衣裳をまとったのを見てこう書いている。「彼女は、パリやロンドンにこのまま連れて行っても美人として騒がれるだけの美しさを十分に持っていた。繰返していうが、イルマ・グリーゼは、その悪鬼の様な所行にも拘らず、私の見た最も美しい女性であった。」

デイスチンの中で最も美しい女性である。サタディ・レビュウ・オブ・リタレイチュアが本書についていう様に、「如何なる人も想像することの出来なかったナチスの收容所での怖ろしい飢餓、日常の行事となった鞭打考えられぬ淫好——それは正しく地獄の絵である。」

そして、その中に、鞭を振っていた一人の美少女イルマ・グリーゼは、ナチスと関係なく、サド・マゾヒズムの世界での得難き人物の一人である。

#### 復刊第百六項

#### 「親衛隊の悪虐」他

東独伯林、プログレス出版局刊他  
(S.S. in Einsatz)

東独のみならず東欧の出版物は甚だ僅少しか輸入されない。しかも、その多くは社会科学、政治、一般科学、等についての出版物である。従って、これまで写真の一部を除いて本欄に東欧の書物が紹介されたことはない。ところが本年五月、一挙に数冊の強制收容所の記録が輸入された。勿論、筆者は強制收容所のすべてが、或いは大部分が、サド・マゾヒズムに関連があるとは考えていない。それは、サド・マゾヒズムについての必須条件である、淫好の要素が欠けている行為が多いからである。私は、淫好の欠けた残忍さを極度に嫌悪している。従って、ここに挙げた各書

## 映画通信

# お盆映画の縛りシーン

## 嵯峨美也子・記

お盆映画となれば、時代劇は東映の東映を始め、大映、松竹、それに新東宝など時代劇の大当りで、楽しい縛りシーンが大いにファンを喜ばしてくれる。

まず東映では、市川右太衛門二十五本目という「旗本退屈男・謎の大文字」で、新登場の青山京子のヒジ鉄砲のおせんが、退屈男の危難を救いにとび出そうとするので仲間の堺駿二らに縛られ「お殿様が……」

と身もだえをする。この縛り方が一寸変っている。後手縛りにして、その二本の縄じりが床の間の上の柱につながれている。一寸、吊り上げの形で、中腰にでもなれば苦しそう。退屈男シリーズでは、いつも誰かが縛られる。ひばりが縛られたこともあった。

ひばりといえば、千恵蔵と初顔合せの、「江戸つゝ判官とふり袖小僧」で、ふり袖



小僧に扮する美空ひばりが荒縄で縛りあげられ、仲間と一緒に押入れにはうり込まれる。一寸リアルな縛りだ。そしてラストは義賊として大立廻りの末に捕えられるが、どういふ風に捕縛されるか、沢島監督の演出が楽しみ。

大友柳太郎の「快傑黒頭巾・迅雷篇」ではお馴染み花園ひろみのお美津、松島トモ子の友之助ら姉弟が、幕府方に捕えられて人質にされる。今度は縛られて船で運ばれる。このシリーズ中では千原しのぶ、田代百合子らがよく縛られている。

大川橋蔵の「紅顔の密使」では、橋蔵の小田武磨も捕えられ、最後には眼を焼かれるという、一寸ファンには顔をそむけたくなる残酷シーン（ピリタ・マチュアの「熱砂の舞姫」と同一シーン）があったが、藤木の実改め一条由美、毛利菊江も縛られて馬上で運ばれたり背中合わせに縛られたりして、最後には二人の縄を大木の枝にわたし吊り責めの上、ムチ打たれるなど、一寸スゴイところを見せた。

大川恵子も「姫君一刀流」で、男装したり、芸者になったり、五変化の大奮斗の末捕えられ、後手に縛られて庭に引き据えられるが、大立廻りの末に捕えられたのにも拘らず、着くずれ一つせずに縛られているのは奇妙な感じだ。

ひばり・浩太郎の「そよ風日傘」では、田中春男が妹の着物を持ち出すために、女中を縛り上げて猿ぐつわをかませるシーンがある。縛られる女中役は新人だけに、仲々熱演していた。

次は大映に移ろう。伊藤大輔監督のお盆映画「ジャン・有馬の襲撃」、ファストションが、十人の日本人がイベリヤ風に目隠しのまま銃殺されようとする場面。「女と海賊」で暴れ廻った弓恵子。今度もポロボロの着物で柱に縛りつけられる。胸をひろげさせたりして伊藤監督の演出も慎重。体当り演技は見ものだ。

勝新太郎の「鳴門の花嫁」では、毛利郁子もよかったが、中村玉緒の縛られ姿もよかった。玉緒は、「濡れ髪三度笠」でも、淡路恵子と一緒に縛られるが、淡路の縛られ姿も仲々妖艶だった。

松竹でも「鬼夜叉姫」佐乃美子が長襦袢一枚のあらわな姿で、柱に縛りつけられ鞭打ちの折檻を受けるシーンがある。彼女は「七人若衆誕生」でも石子詰の刑にあう場面をみせてくれたが、仲々いたただける。

浩吉の「伝七捕物帖・幽霊飛脚」ではベテラン嵯峨美智子が、伝七の女房お俊に扮しての艶やかな縛られ姿。定評に違わぬ美しさを見せてくれる。

についても、必ずしも、全部をすすめるわけではなく、むしろ、私として、頁を繰る事のおそろしい様な部分もある。

けれど、整列した女看守達、鞭を持つことを習慣としていた女性などを見たり、読んだるとき、私は、この最新の生きた実証を紹介せざるを得ないのである。彼女等に於いて、潜在的な淫好が、残酷行為と純粋な刑で結びついている。特に、メエヴェス、マルシヤル、コッホ、グレーゼ等の女性は、世界中にその悪名をとどろかせたが、一方、私室に於いて、サド・マゾヒスティックな傾向を歴然と示していたことが認められる。そして、彼女達が、女子同性愛の常習者であったために、その残忍行為は、両性に対して、烈しく展開されている。この傾向は、所謂、職業的女主人と称する人々に共通に見られる傾向である。ともかく、興趣の深い写真二〇〇枚以上を含むこれらの記録は重要且つ貴重なものであるといわねばならぬ。

他の数冊は左に原名を記しておく。

- (1) Ota-Krauss = Erich Kulka, "Die Todesfabrik,"
- (2) Bruno Baum, "Niederstand in Auschwitz,"
- (3) Geralee Reitlinger, "Die Entlösung Hifers Versuch der Ausrottung des Juden. (Eusops 1939-45)"
- (4) Gerald Reitlinger, "Die S.S. Tragödie einer Deutschen Epoche" 以上



海

の

灯



三 条 卓 史 作 画

理枝がこの小さな島の小学校へ転勤して来  
てから、早や二カ月近くになる。

喧燥な町から通れるような気持ちで、自分  
から志望して来た僻地である。白い砂浜に寄  
せる波。岬の黒々とした岩肌。澄み切った蒼  
空。すべての風物が彼女の心を落着かせてく  
れるに充分であった。

ある土曜日の午後、理枝は砂浜に引揚げら  
れた漁船に腰を下して、じっと考えに耽って  
いた。

トントントントントン、と、のどかなエン  
ジンの音を響かせながら、沖を白い貨物船が  
走っている。

母を喪ってからの三年間、理枝は父と二人

で淋しいながらも和やかな生活をして  
していた。それが昨年の夏、父が  
後妻を迎えてから理枝には耐らな  
く不快な日が続いた。彼女の新ら  
しい母は、おせんという仲居をし  
ていた女で、後妻に迎えたとい  
うよりも、むしろ押し掛けて来た  
という恰好であった。

理枝の父は、この島の東北にあ  
たる備後の港町で、木造船の工場  
に働いていた。それが、ふとした  
事から同僚と一緒に飲みに行った  
小料理屋で、おせんを知り、いつ  
のまにか、ずるずると深間に入っ  
て行ったらしく、ある日、理枝が  
学校から帰って来ると

「わて、今日からあんたのお母さ  
んになったんや。仲良うしてや」  
と大阪弁でいうと、それなり家  
に居付いてしまった。

亡くなった理枝の母は、昔の土  
族の出とか何とかで、誠に貞女風の女であっ  
たから、おせんの一挙一動は、理枝には何と  
もいえない卑雑なものに思われた。

おせんは早くから銭湯へ出掛けて行って、  
帰って来ると母の遺して逝った鏡台の前へべ  
ったりと坐って、諸肌を脱いで肩のあたりに  
まで白粉を塗り立てた。理枝の母は、美顔水



以外の白粉などをつけているのを見た事もない。ましてや諸肌脱ぎの姿など、想っても見ない恰好であった。

理枝は夕食が済むと、さっさと二階へ上つて、生徒の宿題の点をつけたり、明日の授業の調べ物をしたりしていたが、おせんは毎晩のように父に酒をすすめ、自分も一緒になつて飲んでいた。暫らくたつと

「ねえ、あんた」

と鼻声で父を誘うような声が聞えて来る。小さな父の叱声に似た声に続いて、尚も甘えかかるような囁きの気配が感じられるのだ。

理枝は両耳を塞ぎたい気持で、急いで参考書を伏せると、次の間に敷いてある蒲団の中にもぐり込んでしまふのであった。

それは、ある雨の降る夜のことであつた。

理枝は学校の帰途、久し振りで友達の家へ寄つた。家に帰つたのは十時前である。家では、おせんが一人で酒を飲んでゐた。

「あら、お父さんは？」

と訊くと

「ああ、今夜は会社で宿直や。今頃は固い蒲団の中で寝てはるやろ」

といったが、つづいて

「あんた、まあ此処へ坐りいな。ちつと話してもしまほ」

と食卓の前を指した。

「ええ」

理枝が仕方なく、そこへ坐ると

「あんたも一杯どう？」

と盃を差し出した。

「いいえ、わたしはお酒は駄目ですの」

理枝が慌てて手で遮ると、

「さよか、ちいとはお酒も飲めるようになっておかんと、恥かくこともあるけんとなア」といつて独酌であふつた。

「なア、理枝はん。今夜はお父さんが留守やよつて、あんたと、ゆっくり話をしようと思つてるのや」

おせんは、そういうと盃を置いて長煙管に火をつけた。この女は煙草も吸うのである。

理枝は、おせんの言葉に何だか気味悪さを感じて、

「今夜は調べ物がありますから、これで」

と食卓の前を立ちかけると

「まあさ、そないに慌てんでもええやろ」

と、ついと立って理枝の右手首を、ぐいと握んだ。

「あれッ、おばさま」

と思わず振りほどこうとするのを

「こっちへお出で」

と、ずるずると次の間へ引き入れた。

「あれ、おばさま」

と押されまいとする理枝を、抑えつけるように坐らせ、おせんは彼女の上膊部を両手で

握つたまま、眼を大きく見開いて、顔を近付けた。そして

「理枝はん」

と改めていうと、酒臭い呼吸を彼女の顔に吹きかけた。

「あんた、わてを水商売してた女や思つて、軽蔑してるンと違ふか」

「あら、そんなこと……」

理枝は思わずハッと息を呑んだが、慌てて打消した。だが、ずばりといったおせんの言葉は、決してそうではないと思ひ切れぬ理枝の心に深く突き刺さつたのである。

「なア、理枝はん。わてにはよう判つてンのやで。相手が自分にどんな気持を持っているかぐらい、お客相手の仕事をしていとな、自分の勘にぴーんと来るのや。なア、理枝はん。あんたは、わてを学問も何もない、つまらん女やと思つてゐるのやろ」

「いいえ、決して……そんな」

「ええわ、そんなに言い訳せんかて。そら、わて、あんたのように賢い事あらへん。幼ない時から子守したり、飯焚きしたりして追いまわされた。誰も学校なんかへ上げてくれよれへん。十六のとき、新地の質屋の女中になつたが、その旦那が、わてをなぶりものにしようつた。」

おせんは話の途中から理枝を抑えていた手を離して、その頃を追想するような面持にな



っていた。理枝は何だが手持沙汰な気持ちで、前で結んだ袴の紐をいじりながら、初めて聞くおせんの過去、理枝には覗いた事も、想像した事もない世間の裏話に、知らず知らず好奇の心を惹かれていた。

「今頃でこそ多少とも雇人の使い方が変わって来たが、その頃は雇われ人の人格など何もあれへん。まるで一匹の飼猫や。——朝から晩まで炊事、お掃除、洗濯と働き続けて、お店が閉まって通いの番頭はんが帰ると、旦那がきまって『お仙、ちよっと来い』や」

おせんは、そこで暫らく言葉を切って、理枝の顔を見た。

「隣りの部屋では、お内儀さんが長い病気で臥っていたんで、わては何時も気にかかって仕方がなかったが、旦那はそんな事にちっとも気兼ねもせんと、『お前の掃除の仕方は何や。奥の廊下の隅を見い、埃が一ぱい溜ってゐるやないか。そんな横着な事ではあかんよって今夜は罰や』——そういうて、わての両手首を紐で縛りよった。あまりきつうないので痛うはなかったが、その手に手箒を握らせて前へ、じっと伸ばさせて置くんや。わてをそんを恰好にしておいて、旦那はその前で晩酌の盃をチビチビ舐めてるねん。しんどうなつて腕がだんだん下がると『もっとしやんとせんかい』というて、わての鼻をつまんで、ぐいと捻った。その晩はそれで済んだけど、そ

れからは毎夜『いや飯を焦がした、汁の味付が悪かった、洗濯物の糊付が利いていない』とか何とか口実をつけては、わてを縛った。それも、わてが怖れて逃げ出さないように初めは、ほんの真似事程度の罰で済んでいたのが、度重なるにつれて次第に罰の仕方が変わり、気がついた頃には、わては、すっかり男に責められる事を心待ちにする女にされてしまっていたんや。そして同業者の旅行などで、一晩でも旦那が留守をして、わてを責めてくれないと、何だか桶のたがが弛んだようで、気が抜けたみたいになつてしまふんや。」

理枝は、おせんの話をききながら、今更のようにおせんの顔をうかがった。遊びの客を相手に、ただ浮かれ騒いでいるだけの呑気な水商売の女の中にも、色んな過去を持っている者があるものだと思つた。それにしても、現在、自分の父の妻として今、眼の前にいるおせんが、自分から語る過去は、あまりにも常道からかけ離れた数奇なものであった。

おせんは、ちよっと立って台所へ行つて水を一口飲むと、また理枝の処へ戻つて来た。そして煙管で一服吸いつけながら、また話を続けた。

「そのうち、おかみさんが亡くなった。それで当分の間、わては気兼ねなしで暮せたもんや。もうその頃になると罰も何もあれへん。仕舞湯を済ませると、きまつたように旦那に

貰うた質流れの派手な長襦袢を着て晩酌の用意を整え旦那の前へ坐る。そして黙つて両手を後ろに廻す。旦那は傍の細紐で先ずわての両手首を縛る。それから襟をはだけて胸を二巻きして、ぐいと緊めると、その緊縛感に、はじめはほつとする。変つた気持ちや。今度は両肩を掴んで、ぐいと仰向けに倒し、そのお腹の上に銚子と盃を載せた盆を静かに置いて晩酌を飲みはじめのやが、その間、わて腰布一枚で食卓にされる事もある。そんな時はきまつて後の責めも、きついんや。

馬上盃といつて、昔、武士が出陣のとき馬の上で飲んだという糸底の深い盃を、紐で緊められて鰯パンのように盛り上っているお乳の上へ、すっぽりと置いて酒を注ぐ。ちよつとでも身体を動かしたら盃が引繰り返つて、胸から頸筋へかけて酒浸しや。銚子二本、空けて酔いが廻ると、それから責めの時間や——先ず相撲。相撲といつても、わては両手を縛られているんやから初めから、てんで相手になれへん。旦那が両手を拡げて『さア来い』というから、身体ごとぶっ付けて行くんや、その胸をドンと押されると、弾みを喰つて後ろへドッと引繰り返る。ハアハア息をはずませながら漸やく起き上ると、腕と背と胸を交互に突いて、まるで車の心棒こはらのようにきりきり舞をさせる。もう足がもつれて、眼がかすんで、部屋がぐるぐる廻り、頭がくら



らッとなった頃——やッ——と突き放され、よろよろッと部屋の隅へよろけて倒れる。」

話しているおせんも、理枝が帰る前から飲んでいた酒の酔いが廻ったのか、眼のふちがぼッと染まって、熱い息を吹いていた。

理枝は、おせんが今話している通りの姿態を演じているような錯覚に捉われて思わず眼を伏せた。教師として日頃、無邪気な児童ばかりを相手にしている理枝には、あまりにも刺激の強い、妖気の漂うような話であった。

「そんな事が続いているうちに、いつの間にかそれが旦那の伯父さんに知れて、わては遂々その家を出てしまった。それからというもの旦那のような変わった人を探して、何年もあちこちを転々とし結局こんな港町まで流れて来てしまったんや。わてが『小柳』に勤めている時、たまたま、あんたのお父さんが遊びに来て酔うたまぎれの冗談だったかも知れんけど、『お前、一丁、縛ってやろか。縛られても酌が出来るかい?』といわれた事があった。そのとき『ええ、縛ってもいいわ。縛られたッてお酌ぐらいできまッさ』というようになことがきっかけで、遂々こんな仲になってしもたンや。あんたのお父はんは



そんなんやないやろけんど、わてと一緒に暮らしていたら早晚、変なことになるンやワ。それに、あんたかて、そんな女の世界を知った、

ら、今までのままでは済まんと思うね。どう理枝はん」

理枝は咄嗟には返辞もできなかった。先ほどのからのおせんの奇異な話で何だが頭の芯が呆けたようになっていたようであった。

おせんは先刻から、自分の身の上話を話しながら、理枝の心の動きを探っていたようであったが

「なア、理枝はん。わて、今夜、あんたに頼みがあるねン」

といって、今度は理枝の眼に喰い入るような視線を向けた。

「え？」

と理枝は、さり気なく訊き返したが、彼女の心には逸早く、おせんのこれからの言葉が予想せられるような気がして、思わず身体を固くした。

「理枝はん。これで、わてを縛ってくれへんやろか」

そういったおせんは、何時の間にか一束の細紐を取り出して理枝の膝の前へ置いた。

理枝は、——自分が縛られる——と思っていたのが反対だったので思わず、ほっとしたが、さればといって相手を縛るなどという事は到底できそうもなかった。一瞬ではあったが、縛る——ということに対し、意識的に罪悪感が動いたためであらう。

おせんは、しっこく理枝に迫ったが



「わたしには、とてもできませんわ」

と次第に膝で後しざりしながら断った。

「それじゃア、どうしても、わての頼みをきいてはくれへんのやな」

と、おせんは少し、むっとした口調でいうと、ついと立って部屋の中央に吊ってあるランプの灯を、ふッと吹き消した。

瞬間、真暗になった部屋の隅で、理枝は恐怖の声をあげた。肩越しにおせんに両手を捉えられて、逃げも走りもできなかった。彼女の頬に、おせんの後れ毛が気味悪く触れた。

「理枝はん。わて、あんたのお母さんや。なええか。娘は、お母さんのいうことを大人しうきくもんやで。よう覚えとき」

上ずったようなおせんの声が、理枝のすぐ耳許でした。理枝は、だまっただまま身体を小さく震わしていた。藻掻いても身動きのできない、意外に強いおせんの力が、ぐっと彼女の身体の上から押し被さっていた。

「なア、現枝はん。今夜はお父さんが留守やさかい、気兼ねする者は誰もいてへんで」

おせんは小さな声でそういうながら、理枝を横身に押し倒すと、手探りで先刻の紐を引き寄せた。

暫らく経って、おせんが再びランプに灯を点けた時には、理枝は袴を穿いたまま、後ろ手に縛られて畳の上に転がされていた。

「理枝はん。こんなひどい恰好にして悪かつ

たなア。今夜は、あんたを縛るつもりやなかった。でもあんた、わてのいう事を訊いてくれへんのやもん。かんにんしてや。」

おせんは、そういうながら理枝の横に、べったり坐って彼女の頭を膝に載せ、顔を近付けた。酒臭い息と脂粉の香りが入りまじって理枝の鼻を衝いた。

「どう、手首が痛い？」

おせんは覗き込むようにして訊いた時、理枝は微かに首を横に振った。窮屈ではあったが、痛くて耐まらぬという感じが理枝には起らなかった。おせんの行為を拒みながらも、それに抗しきれずに曳かれてゆく自分の姿を別な自分が、いとしんでいるような変な気持であった。

理枝はその夜、そうした姿のままで夜を明かした。おせんは理枝を縛った紐の端を、自分の左手首に結びつけると、いびきをかいて眠ってしまった。おせんが寝返りを打つ度に縛られた後手を引かれるので、理枝はまんじりともする事ができなかった。

ポツ、ポーツと汽笛を鳴らしながら連絡船が入って来た。

砂浜の舟に腰を下して、父と一緒に暮していた頃の、奇異な想い出に耽っていた理枝は汽笛の音に急に我に返った。

突堤の先の磯に杭を打って、歩み板を渡し

ただけの粗末な棧橋を渡って、島の人を籠を担いだり、大きな風呂敷包みを提げて帰って来た。

昨日の朝、港を出て行っただけ今日の午後、帰って来る。二日に一度、本土との間を往き来している島の唯一の小さな連絡船である。

「ああ、理枝はん。ええ処で逢うた。これから島の人に尋ねようかと思うていたンや」

「あら、おばさん」

突堤から磯づたいに来る道を、おせんが派手な浴衣を着て、風呂敷包みを抱えてやって来た。

——この人の妖しい誘惑から遁れる為に、わざわざこうして不便な島に転動して来たのに、何処まで追っかけて来るのだろうか——

理枝には、おせんの姿が恨めしかった。粗雑ではあるが、純朴な島の人達や清澄な環境を求めて来たこの土地。近頃、漸やく心も落ちて来て、教育の道に専念しようと思っていた矢先のことである。

「理枝はん、今日は着換えの着物を持って来たんや。送っても良かったんやけど、わても一ぺん島の景色が見たかったもん」

「あら、済みませんでしたわ。その包み、わたしを持ちましょう」

「なに、ええわ、重いことあれへん。そやけどこの辺、えらい汐の匂いやな」

海から吹き上げて来る風は、浜を掠めて汐



の香を漂よわせていた。

「やア、先生。暑うなりましたなア」

と行き違った漁師の親爺が、煩冠りのまま頭を下げた。

「ええ、いつもお元気ですね」

と理枝は挨拶を交したが、頭の中では別の事を考えていた。

——今夜は、この人を泊めなければならぬが、どうせおとなしく寝は、すまい。あれから後の、父の宿直の夜のように、私を玩弄物にするに決まっている。これは一体どうすればよいのか——

理枝の仮寓しているのは、この島の網元の家で、その裏の別棟に寝起きしていた。庭一つ隔てた本宅とは、声をすれば届く距離にあった。それに、小さな島の事とて平素は戸締りもせず、ことに夏は簾を掛けただけの明け放しの生活であった。

おせんは理枝に導かれて、彼女の仮寓に着くと、それでも母親らしく本宅へ行つて、理枝が世話になっている礼をいった。

やがて夕食も済ませ、理枝が本宅から貰つて来た湯をたらいに汲んで、おせんに行水すすめた。

「えらい厄介を掛けて済まん」

そういうながら、黄昏どきの仄暗い庭先で湯を使っているおせんの肌は、年増女特有の脂っこさと滑らかさが漲って、何だか白い蛇

を見るように思われた。

「理枝はん、お先きに。さあ、あんたも早う流しなはれ。さっぱりとして、ええ気持や」

そういうながら、袖垣に掛けた湯文字を取って腰に纏いながら理枝を促した。

理枝は、こうした戸外で、おせんに分身の素肌を見せるのが、何だか恐ろしい様な気がした。彼女は、そうでなくてさえ今夜のおせんの行動に気を遣っている折とて、なるべくおせんの気持を誘うような素振りを見せたくなかった。

「理枝はん。あんた、この島へ来てから少し肥ったようやないか」

おせんは縁側で立膝をし、その上に脇を載せて頬杖を突きながら、庭の宵闇に浮ぶ理枝の若さに張ち切れるような白い肌を、じっと見凝めていた。

「行水が済んだら、今夜は岬の方へ涼みに行つて見たいなア」

「ええ、案内しますわ」

「わての持つて来た浴衣、着て行きなさいよきつと、よく似合うと思うわ」

「ええ」

理枝が頷きながら手拭を絞って縁側に上り窓際へその手拭を掛けて部屋に戻ると

「理枝はん、ちよつとこれを締めてお見」

といいながら、黒い珠数を持って、おせんが傍へ寄つて来た。

——ああ、やっぱり今夜も——

理枝は、かねてから予期していたとはいえさすがに一寸、物怖じして簾越しに本宅の方を窺った。

「あんた、ほんまにええ肌しとるわ」

おせんはそんな事をいいながら、その珠数を理枝の胸に当てがった。それは、大きな眼鏡の縁のように繋いであって、背へ廻して締めると胸の双房が上下から圧されて、白いさつま芋を二つ並べたように盛り上がった。

「ああ、おばさん」

理枝は思わず小さい声を立て、おせんの手を遮らうとしたが

「ちいっとしたら慣れるンや。辛抱しいな」

といってその手を振り払った。

「こうした上から、新しい浴衣を着たら、とても恰好がええのや」

おせんは、そういつて理枝の白い胸に喰い入った黒い珠数の締め加減をもう一度改めてから、彼女の肩に雲形の模様の浴衣を、ふわりとかけた。

理枝は胸を気にしながら両袖に手を通して夏帯をきゅつと締めた。

「あら、帯がもう一本あるのね」

理枝の手に取った単衣帯は二本が一巻きになっていて、きゅつと締めたはずみに、中の一本がころろつと転げて展がった。

「ええ、今夜は理枝はんに帯を二本締めて貰



「おうと思うてな、わざわざ持って来たンや」  
おせんは意味ありげに、そういつて笑いな  
がら、その帯を袂に入れた。

「やっぱり、よう似合うやないの。理枝はん  
がその浴衣着ると、伊藤深水の美人画のよう  
な姿やで」

「あら、おばさん、そんなに冷かさないで」  
理枝が、はにかんで俯向こうとすると、急  
に胸にぎゅっと、こたえた。

——ああ、珠数で締められている——  
「さあ、そろそろ出掛けようか。理枝はんわ  
てに団扇、貸してんか」

おせんは、わざと理枝の胸を軽く押して杏  
脱へ降りた。理枝も続いて下駄を穿いた。

二人が浜へ出た時は日は、もうすっかり暮  
れて沖に漁舟の灯が点々とまたいた。  
月の夜ではあったが、雲が空一ぱいに拡が  
って、静かな海上に薄明の光を落していた。

「理枝はん、あれは何？」  
おせんが南の岬の鼻に明滅している灯を指  
した。

「あれは無人灯台ですわ。あの下に岩場があ  
って、船が通るのに危険なので、設けてある  
んです」

「あそこへ行って見よか」  
「ええ」

「夜は誰も磯へ出ておらんのかなア」  
「ええ、潮の加減で、夜釣りが出るときは人

が出るのですが」

二人の足許近く、ザ、ザサツ、と引潮の小  
さな波が戯れている。藻屑が二条、三条、砂  
浜に長い線となって打ち寄せられていた。  
砂浜を行きつくと岩と岩とが寄り合い、重  
なり合っている岩場である。

「おばさん、危ないから足許に気をつけて」  
大きな岩へ縋るようにして越えようと、その  
岩が屏風のようになった平岩の上に出た。

「ああ、いい風だわ」

理枝は浴衣の裾が風に翻えるのを押えるよ  
うにして海に真向いに立った。快よい夏の宵  
の汐風が、彼女の後れ毛を吹いていた。

「ああ、ほんまにええ風や」  
おせんも理枝と並んで、沖のいざり火を眺  
めていたが、急に理枝を振り返ると  
「どうや理枝はん、ここがええやろ」  
と訊いた。理枝が





「え？」

と、わざと訊き返すのへ

「そない裾ばかり押えんときなさい。どうせ脱ぐのやさかい」

と半ばからかうようにいつて履物を脱いで素足になった。そして岩の上へ腰を下すと

「理枝はん、済まんア、もう一べんその帯を解いて貰おうか」といった。

「おばさん、こんな処で」

「こんな処って、誰も見てへんやないか。お月さんも顔出しておらへんし、さア、どないする。それとも帰ってお部屋でしようか」

「ああ、それはやめて、自宅の人が……」

「そうやろ、わてもそう思うて気を利かしてんや。理枝はん、まだ早いよってゆっくりでもええけん」

「いいえ、おばさん」

理枝は、おせんに逆らう不利を知り過ぎる位知っていた。怒ると獣のようになる無知な女であった。

「そうかえ、じゃア」

「ああ、……お母さまの……お好きな……ようにして……」

港町にいた頃、父の宿直の夜には、きまってお題目のようにいわれた言葉。この島へ来てからは、二度という事はあるまいと思っていた言葉を、この島蔭の波の打ち寄せる岩の

上でいおうとは思わなかった彼女であった。

理枝は、途切れ途切れにそういうと、するすると帯を解いた。紅い縞の夏帯と、モスリンの腰紐が彼女の足許に、ばらりと落ちた。

「浴衣を、こちらへお貸しな」

「はい」

と肩を滑らせて軽く袖だたみにして、おせんに渡した。理枝が動く度に赤い湯文字が風にあふられて、ともすれば白い脛がこぼれようとする。

「どう、胸の締め具合は」

おせんは、そういうと理枝の解いた腰紐を取って立ち上った。理枝は、もう既に予期して両手を後ろに廻しているである。

「久し振りだよ、なア理枝はん。近頃は、あんたを縛る夢ばかり見ていたんや」

おせんは腰紐の端で理枝の両の手首をきっちり縛ると、余った紐を彼女の首に廻した。

「呀ッ」

と、眼を瞑って観念していた理枝が、初めての首縄に、思わず眼を開けて叫んだ。

「手首を上へあげていたら、そんなに苦しいことないやろ」

おせんはそういったが、理枝はもう下を向く事ができなかつた。胸には既に、家を出る前からの黒い珠数が、無惨に肌を締め付けているのだ。

「なア、理枝はん。今度は、この帯を締めて、

貰いましょ」

というと、おせんは袂から別の帯を取り出して、理枝の湯文字の上から一卷き、二巻きすると、力をこめて締めつけた。ぐいぐい絞られる圧迫に、理枝は

「あれ」

と叫んで、思わず腰をかがめようとしたが首縄のために、そのままの姿勢で仰向いていなければならなかつた。

「理枝はん。そうしたら、あんた綺麗な海女さんやなア」

おせんはそういうと、理枝を抱えるようにして岩の端へ寄って行った。

「あれ、おばさん、水が」

と、理枝が驚いてためらうのを

「そこへしやんで、首まで海に浸かるのや。ひいやりとして、ええ心持ちやで」

と、岩と岩の間の凹みに理枝の体を沈ませた。

「ああ、おばさん。きついわ、もう上げて」と、潮水に首まで浸りながら、眼を上げて

歎願する理枝に

「おや、艫の音がする。舟が通るのや。そのまま、じっとして」

といいながら、自分も身を屈して息をひそめた。

ぎいッ、ぎいッ、と次第に音が遠のいてまったく聞えなくなると、理枝は、やっと岩の



上へあげられた。

滑らかな平岩の上へ仰向けに、人魚のように寝かされた彼女の首と胸と腹の紐や珠数や帯は、海水で縮んで、むっちりとした肌に一きわ強く喰い込んでいた。べっとり濡れた湯文字が脛にまつわりついて、水滴が白い脛を、つ、つと伝わって岩にしみ込んだ。

おせんは右手を頭へやって木櫛を抜くと、それを理枝の口へ咥えさせた。

「理枝はん、声を立てると櫛が落ちるよってしつかり咥えていてや」

おせんはそうして置いて、持って来た団扇の紙を骨から剥がした。そしてバサバサになった竹骨ばかりの団扇を持って彼女の胸を突ツついた。

「う、うッ」

と櫛を咥えさせられた理枝は、声も立てられず身を藻掻いた。

「どうや、痛いんか。フッフ、それ、それ」おせん身悶えする理枝の若鮎のような肉体の動きを愉しむように、白い肌のおちこちを竹骨の団扇で、せせり廻った。しまいには団扇の丸い柄で突きしめたので、理枝は思わず「あうッ、やめてッ」

と櫛を口から離して叫び声を上げた。

「おや、理枝はん、ちっと、きつかったかいな」

という、理枝の頭を自分の膝へ乗せ、彼

女が吐き出した櫛を拾い上げ

「眼尻に涙がたまってるわ。理枝はんは、あかのやなア」

そういつて笑いながら、さもいといいという風に理枝の髪を二、三度、梳き上げた。

「すみません。もう声を立てませんから……」

「おや、そう、じゃアこんなにしたら」

おせんはそういうと理枝の胸を締めつけている珠数の真中に木櫛を潜らせて、櫛の歯を肌に向けて琴柱（ことじ）のように立てた。それではなくてさえ引緊っていた珠数は一層緊張して、櫛の歯と共に無惨に理枝の胸を責めて肌の肉に喰い入った。

「あうッ」

と耐えようとする理枝の口から、思わず呻き声が洩れた。

「さア、もう一度これで海へ浸ってから、宿へ帰ろう」

という、おせんは再び理枝の上体を抱え起した。

沖に点々と見えていた漁火もいつの間にか消えて、無人灯台の水色の灯だけが何も知らぬげにチカリ、チカリと点滅していた。

次の朝、理枝は、おせんを突堤まで送って行った。

——わたしを妖異な悪魔の世界へ引摺り込もうとする人だ。もう二度と来ないで欲しい

——そう思いながら、でも口では

「又、来て下さいね」

という、頭を下げた。おせんは、きちんと袴を穿いた清純な理枝の姿を見ながら、ちらと眼を岬の方へ移して昨夜の事を思い出した

「あんた、あの珠数、締めているやろ」おせんは、理枝の耳許に口をよせて、そっ

といった。

「ええ」

理枝は真赤に頬を染めて、うつむいた。

「お早ようさんで」

と、島の人々が挨拶をしては、連絡船の方へ急いで行く。

「それな、今はいややと思ってるやろが、きつと一人で又締めとうなる時があるンやで」

理枝は答えなかった。そんな気持になるとは考えられなかったからである。

「じゃア、ここだね」

「ええ、お元気で」

そういつて、おせんは棧橋の板を渡った。帰る際まで、私を拘束している人——と理枝は心の中で呟やいた。

ボツ、ボーツ。

と船は出航の汽笛を鳴らした。おせんは船の最後尾のデッキに立って手を振った。理枝も突堤の上で手を振って応えていた。



——誰も知らない。あの突堤の上の若い女教師が、きちんと着付けた着物の下に、肌を

囁む拘束の奇妙なブラジャーを締めつけているのを——

### 奇譚クラブ旧号の在庫案内

復刊第1号 (昭和30年10月号) △売切▽  
 復刊第2号 (昭和30年11月号) △売切▽  
 復刊第3号 (昭和31年4月号) △売切▽  
 復刊第4号 (昭和31年5月号) 定価二百円  
 復刊第5号 (昭和31年6月号) 定価二百円  
 復刊第6号 (昭和31年7月号) △売切▽  
 復刊第7号 (昭和31年8月号) △売切▽  
 復刊第8号 (昭和31年9月号) 定価二百円  
 復刊第9号 (昭和31年10月号) 定価二百円  
 復刊第10号 (昭和31年12月号) 定価二百円  
 復刊第11号 (昭和32年1月号) 定価二百円  
 復刊第12号 (昭和32年2月号) 定価二百円  
 復刊第13号 (昭和32年3月号) △売切▽  
 復刊第14号 (昭和32年4月号) 定価二百円  
 復刊第15号 (昭和32年6月号) 定価二百円  
 復刊第16号 (昭和32年7月号) 定価二百円  
 復刊第17号 (昭和32年8月号) 定価二百円  
 復刊第18号 (昭和32年9月号) 定価二百円  
 復刊第19号 (昭和32年10月号) 定価二百円  
 復刊第20号 (昭和32年11月号) 定価二百円  
 復刊第21号 (昭和32年12月号) 定価二百円  
 復刊第22号 (昭和33年1月号) 定価二百円  
 復刊第23号 (臨時増刊号) △売切▽  
 復刊第24号 (昭和33年2月号) 定価二百円  
 復刊第25号 (昭和33年3月号) 定価二百円

復刊第26号 (昭和33年4月号) 定価二百円  
 復刊第27号 (昭和33年5月号) 定価二百円  
 復刊第28号 (昭和33年6月号) 定価二百円  
 復刊第29号 (昭和33年7月号) 定価二百円  
 復刊第30号 (サド特集号) △売切▽  
 復刊第31号 (昭和33年8月号) 定価二百円  
 復刊第32号 (昭和33年9月号) 定価二百円  
 復刊第33号 (昭和33年10月号) 定価二百円  
 復刊第34号 (昭和33年11月号) 定価二百円  
 復刊第35号 (増刊号青い魔院) 定価二百円  
 復刊第36号 (昭和33年12月号) 定価二百円  
 復刊第37号 (昭和34年1月号) 定価二百円  
 復刊第38号 (悦虐小説と緊縛写真) 三百円  
 復刊第39号 (昭和34年2月号) 定価二百円  
 復刊第40号 (昭和34年3月号) 定価二百円  
 復刊第41号 (昭和34年4月号) 定価二百円  
 復刊第42号 (サド特集第二集) 三百五十円  
 復刊第43号 (昭和34年5月号) 定価二百円  
 復刊第44号 (昭和34年6月号) 定価二百円  
 復刊第45号 (悦特第二集) 定価三百円  
 復刊第46号 (昭和34年7月号) 定価二百円  
 復刊第47号 (昭和34年8月号) 定価二百円  
 復刊第48号 (昭和34年9月号) 定価二百円  
 御希望の年月号御指定の上、御申込次第  
 厳重包装の上急送申し上げます。御送金は  
 なるべく現金書留か振替を御利用下さるよ  
 うお願いします。

おせんは、手を振りながらいつまでも動こ  
 うとしない理枝の姿を眼で逐った。

やがて船が大きく旋回して外海へ出ると急  
 に風が変り、おせん胸に吹き入った。彼女  
 は襟を合わせると両手で軽く胸を抱いた。

おせん胸にも又、黒い珠数が、蛇のよう  
 にまつわりついているのだ。自分用に用意し  
 て来たのを今朝、理枝の手で、ギリギリに締  
 めて貰ったのだった。

——誰も知らない。すんなりとデッキに凭  
 れている中年の女が、そのふくよかな胸を、  
 珠数の綱で無惨なまでに締め付けられている  
 のを——

ボン、ボン、ボン、ボン——。

連絡船は香気に煙の輪を吐いて、穏やかな  
 海の上を走っている。船の中の人達は、三々  
 五々集まって世間話をしている。おせんは、

——こんな潮臭い島の人達の真中で、ぐっ  
 と肌を脱いで、この胸を見せてやったら、ど  
 んなに吃驚するだろう——

そんな事を考えながら、いつまでも、じっ  
 と胸を抱きしめていた。

舷側の直ぐ向うをびゅん、と飛魚が波の上  
 に躍った。

——完——

×

×

×



## ☆ 懸賞愛読者原稿入選作品 ☆

## 秘 め ご と

南 時 夫

竹のピンセットにつままれた一枚の紙の表に、うっすらと像が現れ、たちまち濃く鮮明な影像となった。赤ランプに染ったその像は異様な美しさをもって液中に漂っていた。一枚、二枚、三枚……と真白な紙に次々と画像が浮び上った。適度の濃度に仕上ると横の定着液パットに入れ、暫くすると洗面器の水で丁寧に洗い最後に乾燥器にかける。引伸機にネガを入れ、それを写して見る時から印画紙に影像が現れるまでの全身をゆるぶる様な興奮と緊張。彼の眼は熱っぽく充血し、ぎらぎらと光った。彼は、そっと周りを見廻した。勿論、暗室の中には彼一人しかいないのだが、誰かが彼の一部始終を見詰めている様で落着かなかった。それはもう一人の自分自身に見詰められている様でもあった。

落合信吾は、学界でも将来を属望された少壮物理学者であった。T大を卒業する時、教授の強いすすめと自分の性格を考えて彼は学者の道を選んだ。それから八年。彼は周囲の期待どおりに講師から助教授へと順調なコースをたどった。信吾が助教授になる時に書いた「共鳴の理論」はユニークな論文として学界の注目をひいた。彼が晴れて助教授になった三十才の年に妻の加勢子と結婚した。加勢子はY製薬の専務の令嬢であったが、父親が学究肌であったところから学者である信吾と見合し、そのまま妻の座についた。結婚前に一通りの花嫁修業をつんできたせいか加勢子は完全な妻であった。高校時代に映画のスカウトに眼をつけられた程の美貌と姿態をもっていたが、彼女自身はその様な事には心を乱されることなく父親の考え通り地味な信吾と一緒にになった。和服のときも洋服のときも一つの乱れもなく、髪毛や顔の手入れもいつも驚く程の完全さであった。学者は家庭環境の善し悪しが、その研究に大きなウエイトを持つ。多くの神経を家庭にふり向けなくてはならない学者は不幸だと云われる。その点、信吾は幸福であった。加勢子の父親から贈られた郊外のそう広くはないが造作のゆきとどいた自分の家を出てから







ねえ、土屋さん。宜しいですね」

彼女はこう言われて、頭をこっくりした。写真モデルの女というには、まだ未成熟の感がしなくてもなかったが、それだけ新鮮さもあった。次に現れたのは和服の女だった。小肥りの髪をアップにした水商売のマダム風の女。可成りの厚化粧で年令のほどは分らないが三十前後と思われる。全身から精一ぱいの色気を発散させながら皆の前に立った。

「立石信乃さんです。お年は……御想像下さいとのことですので……。新橋のバーのマダムでいらっしやいますが、今日は特に御多忙中、皆様のためにお出下さいました。御希望は立石さんからおっしゃるそうですので……どうぞ」

司会者に促がされると、女は色っぽい眼をして皆に頭を下げた。

「立石でございます。どうぞ宜しく。皆様の前ですので言ってしまうが、私はこういう事の大好きな女でございます。だから思う存分いじめて下さい。私の満足のゆくまで……」

マダムは、もう既に自己陶醉に陥っている様に身悶えした。水商売の女特有の脂粉の甘酸ばい香が漂って来た。しかし信吾の期待はポニーテールの乙女よりも、このバーのマダムよりも第三番目に現れるであろうある女性の上にかけられていた。その女性は今既に信吾の前に二度現れている。彼がこの様なクラブの存在を知ってから今夜で三回目であったが、その女性はずいといつてよい程信吾の前に現れた。職業的なモデルとも思われないが、その伸び切った姿態は適度の肉付きを見せて見事であった。この様な異常性を胸に秘めた三十数年であったが、信吾は妻の加勢子以外には女体を知らなかったし、この女性を眼前にした時、彼の胸に異様なよめきが湧き起るのを制することが出来なかった。姿態から、にじみ出る清楚な感じと、一方それとは反対の内に秘めた激しい情熱。恥らいの中に見せる自己を忘失させるまでの激情。それらのミックスされたも

のを内にたたえて皆の前に現れるこの女性に、信吾は加勢子に対すると違った血のたぐりを感じていた。もっとも信吾は彼女の顔を見たことはなかった。いつも容貌を隠すような何等かの方法をとって皆の前に現れるのである。最初の時は舞踏会でみる様な仮面をつけていたし、二回目の時には回教徒の女がするような面覆いをして出て来た。余程、顔を見られることが厭なのであろう。信吾も始めは会員の者と同様にその顔を見たい強い衝動にかられていたが、何かそうする方が神秘的な美しさをいつまでもたたえている様で、そのままの方が良いようにも思われた。

「さて、もう一人のお方を御紹介いたしますが、これまでの会で、もう皆様にはおなじみの方でございます。」

赤いカーテンから、それもいつもと同様に下を向いた儘、そっと司会者の背後に隠れる様にして立った彼女は、丁寧に頭を下げた。

「浅野ユリさんです。浅野さんは我々愛好者にとって、もう欠くことの出来ない人になってしまわれまして、私どももいたしまして深く感謝いたしております。今日、初めて御参集の方にお伝えしておきますが、浅野さんは或る社会的地位のある方の御令嬢でして、純然たる同好者でございます。したがって、お顔は余りお見せになりたくないとの御希望でして、その点、御留意下さい。それから着衣のまま少くとも下着だけはつけていたいとおっしゃっておりますので、その点もどうぞ」

この紹介も、いつもの変りがなかった。今日の彼女はグリーンのタイトスカートに純白のナイロン・ブラウスであったが、顔は大きなガーゼのマスクで隠していた。眉を極度に誇張しアイシャドウをぬり、眼ばりを入れ、マスカラーでまつげをぬらしているその化粧は、身体付きの清楚さとは比べて何か、ちぐはぐな感じであった。多分、手入れの良くゆき届いている髪毛なのであろうが、こと更、妖婦的に見せようとしている髪形、真赤にマニキュアされた爪。信吾



にはそれ等が本来の姿ではなく彼女が無理に自分を隠すためにほどこしている様に思われてならなかったし、又その様な厚化粧をしても決して下卑て見えないところにも強く魅かれるのであった。

撮影会は急激に熱気を帯びていった。狭いスタジオの空気は、撮影者達の荒々しい吐息と、被写体から発散する異様な、しかも甘美な体臭とで充満していた。床には赤い絨氈が敷かれその上に三人のモデルがそれぞれのポーズをとってレンズの前にあった。一番隅に一本柱が立っている。その柱を背に抱きかかえる様にして若い女が立ち、その周りを三、四人の撮影者がそれぞれの角度で狙いをつけていた。胸に三巻ほど細い縄が巻きつけてあって、それ程の緊縛ではないが恥しように下を向いたまま、じっとしている。先生に叱られて立たされているといった様子で、この世界の「少女趣味」の人々にとって、うってつけの材料でもあった。初めて聞いたせいしか撮影者側も別に注文も出さずおとなしくカメラを向けていた。絨氈の中央には立石信乃という例のマダムが横になっていた。自分からこの様なことが好きだと言ったこのマダムは、確にモデルという立場以上の強烈な緊縛を受けていた。

この三十女の脂肪肥りの肉体は、芋俵の様に中細の綿ロープで締め上げられてあった。施縄者も初のうちは手加減を加えたのであるが、マダムは納得しなかった。腰巻一枚になり自ら両腕を背後に廻した時から、マダムの悦虐の溜息は周りを取巻いたカメラマンを圧倒していた。後手に縛られ、それが両腕から首に廻された時、マダムは後手の吊上げ方がゆるいと不満な表情をしながら、自分から手首を引上げた。しかし小柄で、しかもたっているために水平以上には上らなかつた。両股から足首に縄が巻かれる際も、もっと強く強くとはたきをはかることなく叫んだ。棒のように括り上げられたマダムは尚も十分に屈らない全身を無理に折る様にして後手と両

足を縛り合せてもらおうと安心したように「猿ぐつわを……」と言った。猿轡も彼女の注文通りに多量の布を口に押入れ、その上を腰紐で縛り更に扱帯で覆った。マダムの顔は眼と鼻を出して奇妙にゆがんで見えた。紹介された時の粹に結上げた髪は無惨にくずれ、厚化粧の顔も吹き出した汗で浮き上っていた。信吾も人の背後に立ってそっとカメラを向けていたが、猿轡から覗いている、この三十女の眼を見ている中に、何かしら追いつめられた感情に陥込んでゆく自分をどうすることも出来なかつた。縦横に雁字搦目に縛り上げられ苦しい猿轡を噛まれた今、尚このマダムの眼の中には苦痛どころか愉悅の輝きしか現れてはいない。時々痛そうに身体をゆすり顔をしかめて見せるのだが、それも被虐の演出効果以外の何ものでもなかつた。信吾は、そっとマダムを取り巻く輪から離れ、自分の写真機フィルム番号を見た。残っているフィルムは全部、浅野ユリのために使う積りだつた。今夜の撮影会の人気はマダムがさらってしまつたことは確かだつた。撮影者といつても、あくまで同好者達の集りに、ほかならない。したがって容貌よりも年令よりも矢張り強烈な縛りが皆をひきつけることは当然であつた。普通のモデルではとうてい耐え得られない様な緊縛を眼の前にして人々の興奮は絶頂に達していた。したがってマダムから数歩離れたところに後手、首縄というポーズで座っている浅野ユリに対しては、四人ばかりがレンズを向けているだけだつた。信吾は、そっと背広の襟を立てて顔を隠すようにして近付いた。服装もすっかり変えて、顔も殆んど分らなくしていたけれど、大学助教授という肩書は信吾にとって重荷だつた。特にこの浅野ユリに対しては、なぜか気おくれがするものも妙だつた。自分の手で嵌めたのである。純白のデシンのネッカチーフで殆んど顔全体を覆う様な猿轡をした彼女は、眼を閉じ身動きもせずに座っていた。彼女のこの姿態はこの種のものとしては何等変てつのないものだったが、信吾にはその様な彼女の中に少女の清



純さとマダム以上の色気が感じられてくるのであった。いくら顔に厚化粧をほどこしていても育ちの良い上品さは隠せなかったし、その点が「縛られている」ことによって愛情のもてる美しさに変っていた。紹介された時のままの着衣の姿であったが、浅野ユリの受けている縄目も可成り厳しいものであることが、彼女の背後に廻ってそっと近付いた時に分った。定石通りの後手であったが、両手首は寸分の緩みもなく重ね合わされて固く括られ、この腕から胸に廻った麻縄も要所々々厳しく締め上げてあった。マダムよりも、むしろ高々と吊り上げられた両腕は、首縄と連結されて彼女の首筋を赤く染めていた。時々猿轡の中で大きく喘ぐような気配が見えるのも彼女の縄目が並ぶものでないことの証拠でもあった。信吾は正面から横から背後からと、色々な角度からその緊縛姿態をとらえていったが、フィルム以上に彼の胸奥深くに浅野ユリの姿態が焼付いてくるのをどうすることも出来なかった。

三人のモデルは、それから二、三回、そのポーズを変えて撮影会は終わった。マダムは逆吊りの悦唐姿態を要求したが、吊り下げる様な場所も見当らずに、その企画も中止になった。派手なマダムの態度に比べて、浅野ユリは自分から何の希望も口に出すことなく人の言われるままにポーズをとっていたが、最後に下着だけの縛りを注文された時だけは一瞬、彼女の身振りに固さが現れたことを信吾の眼には敏感に感じた。それが又、彼にはたまらない魅力であった。それにしても信吾はいつも考える。浅野ユリなる女性が彼の眼前に現れたのは今夜で三度目だ。しかし彼には何処かで逢った様な気がしてならない。きわめて身近なところでの様な気も、又、遠い学生時代の頃に逢った様な気もするのだ。或は信吾が長い間、抱いていた理想像を浅野ユリの上に見たにすぎなかったのかも知れない。

信吾と浅野ユリとの秘かな文通が始ったのは、その後、間もなく

であった。この同好会には機関誌の様なものがあった、会員同志の交流をあっせんし文通の取組もやっていた。機関誌には緊縛写真も挿入されていたが、浅野ユリの緊縛姿態も時々あらわれた。それからすると彼女は信吾の眼のとどこかない処でも縛られていることになり、それを考えると信吾の胸に妙な嫉妬が湧いた。顔もよく見ることが出来ず口もきくことも出来ないならば、せめて彼女自身の手で書かれた手紙でも手にしたい。信吾は或る夜、研究室で彼女宛の手紙を書き編集部あてに送った。

「私は随分と考えた末に、この様な手紙を貴女に差上げることにしました。私は貴女と、これ迄三回、お逢っております。いずれも貴女はモデルとして、私はこの道の愛好者として。私は社会的には地位の高いとみられている職業についてはいるものの、それだからこそ尚更自分の体内の異常な血の流れに人一倍の苦しさを感じている男です。血の流れの激しさに我を忘れ社会的に孤独になってもこの道のために——と思うこともあります。その様な時に貴女のお姿を心に浮べ自分を慰めております。と云っても、何も淫らなおもいにふけるのではなく貴女から受ける感銘の中に私と同じ苦しみと快びをみる事が出来るからです。貴女は常に顔を隠し心にもなく、くずれたスタイルをしておられるけれど、私にはそこに底知れぬ神秘性が感ぜられるのです。とりとめのないことを書きました。もし貴女からの御返事が戴ければ誠に幸甚です。」

月 日

小林辰雄 拝

浅野ユリ様

偽名を使った信吾の手紙が、浅野ユリの手は無事渡ったのである。彼女から第一回の返信が届いた。信吾の予感どおり美しい字体であった。

「貴方様がそうであった様に、私もこのお手紙を書くまで幾夜も考えました。今迄も随分愛好者の方からお手紙がまいります。大部分



は矢張り私と一対一でプレイをなさりたいからとの内容でございました。でも、その様なおたよりには私としましては、かえって気楽に御返事が出来ました。勿論、プレイ云々のことは常におことわりしておりますが、貴方様の場合には何故か御返事してよいのか私も迷わずにはいられませんでした。貴方様のお手紙を読ませて頂いている中に、その短いお便りの中に何かしら、どうしようもないお気持ちが滲み出ている様で、私のような女が、つたない御返事を差上げたなら、かえって貴方様のお苦しみを増すのではないかと思われたからでございます。貴方様は私が、とても神秘的な深みのある女性とお考えになっておられる様ですが、ただのつまらない女に過ぎません。縛られることのみに悦びを感じ、恥しい姿を皆様の前に晒している平凡な女なのでございます。私のことは今お話し申上げることが出来ませんけれど、これから先、急にお話ししたくなることもあるかも知れません。いずれにせよ、貴方様は立派な身分のお方とのこと、有意義なお仕事に精を出して下さいませ。私の様な女でも何等かの形でお力になれる様でしたら、お手紙だけなら差上げとうございませす。御元気で御活躍下さる様、祈っております。

月

日

浅野ユリ

小林辰雄様

二回、三回と文通は続けられていった。信吾の固苦しい表現に比べて、彼女の手紙の内容は次第にくだけた調子になっていったが、それでいて決して品は失っていないかった。「縛り」とか「猿ぐつわ」とかの文字も気楽に書いてあるのが信吾の心を優しくふるわせる様



であった。彼女が緊縛モデルになった今日までのいきさつが、ほんの一部であろうが、信吾のもとに書送られて来たのは第四回の会が行われる二、三日前であった。

「前略。……貴方様は御自分のことは何もお話し下さらないのに、私のことを知ろうとなさっていらっしやる。ずるいお方。今日は一寸だけ、のぞかせて差し上げましょう。司会者の方が私のことをどの様に紹介なさったかは分りませんが、あれは皆ウソ。私は



しがない本屋の娘でございます。もっとも父が可成り手広くやっております店員が六、七人おりますので、その点では「お嬢さま」かも知れませんが。一人娘で我儘に育てられたので小さい時から別に生活の苦労はいたしませんでした。ただ一つだけ私には不満がございました。それはどの様なものであったかは当時の私には分りませんでしたが、一種の欲求不満であったと思います。本屋ですの、いろいろの書籍が容易に読むことが出来ます。それはいろいろの本でした。ベストセラーになった有名本から所謂、ゾッキ本まで甘美な恋愛小説から夜怖くて眠れないスリラー小説まで。私は、その点で早熟であったかも知れません。ともあれ、私が自分の幼い時からの欲求不満がある程度、はつきりした形をもってきたことに気がついたのは、中学から高校にかけてでございます。ある日、学校から帰ってお客様のいないお店において映画雑誌でも見る積りでふと何の気なしに側にある雑誌を手に取りました。ばらばらとめくるかめくらない中に私はハッとしました。グラビアの写真を見てしまったからです。そこには殆んど裸に近い姿の女の人が荒縄で縛られて写っているではありませんか。私は悪いものを見た様に本を閉じて、そっと周りを見廻しました。店員達は別に気にも止めず雑談しています。私は尚、もっとゆっくり見たいと思い、それを映画雑誌に挿んで「一寸、これ読ませてね」と言いながら二階の自分の部屋に入りました。好奇心。怖いもの見たさ。その様な気持も確に大きく占めてはいましたが、それ以上に何か見ないではいられない強い力で引きずられてゆく自分を感じたのです。襖をびたりと閉め、机の上でその本を開いてみました。グラビアは二、三枚でしたが、どれもただのお芝居ごとではなく、両手首は厳しく縛り合わされ、縄の掛った二の腕は痛々しく凹んでいるのです。口と鼻に布が巻かれてよく顔は見えませんが、眼の綺麗な女の方でした。私の胸は、どきどきと早鐘のように鳴っています。自分自身、写真の中の女の人

の様に胸が締め息苦しくさえなりました。普通の人ならば無関心であるか、「厭らしい」と眼をそむけるかすることに強く魅かれるのも、私という女の体内に異常な血の流れがあったからでしょう。それから、その雑誌の発行日が待遠しくさえなりました。それらの写真に写っている女の方は大部分が裸に近いもので、同性である私にとっては恥しさに顔が赫くなる程でしたが、それが縄や紐で巻かれていると、不思議に女である私の眼にも美しく見えました。私も縛られたい。でも手も足も動かなくなったら何をされても駄目なんだ。恐しい。それは人に決して言うことの出来ない性質のものであるだけに私は悩みました。変な話ですけど、おしとやかな「お嬢さま」として通っている私にとって、もしこんなアブノーマルなことが人に知れたら死んでしまうかも知れない。私は一人で縄を身体に巻きつけて転びてみたりもしました。私一人が、こんな呪われた性格をもって生れてきたのだと思うと、悲しさを通り越して口惜しくさえなりました。しかしこのことは、ただ一人どんなに考えてもどうなるものでもありませんでした。そして彼虐の夢は夢でしかありえないと自分に言い聞かせていました。ところが高校卒業の年に、ある決定的な出来事が起り、それが私の夢を現実にしてしまったのです。その頃、私は洋裁学校に通うかたわら、お花のお稽古にも行っていたのですが、その日は店員が休暇をとったために手薄になったお店に座っていました。まだお客様も、ちらほら程度の時に、一人の女の人がいらっしやいました。年は私と同じ位でしょう。背のすらーとした美しい方でした。着ていらっしやるものも高価なもの様でした。その女の人が初めスタイル・ブックを手に取って見えていましたが、やがてその本の下に隠す様に別の本を重ねて私の方に歩いてお出になりました。私は、はっとしました。スタイル・ブックの他のもう一冊の本。それは例の縛られた女の人の写真の載っている本だったからでした。この女の方は、その内容を知っている



のか、知らないで誰かに頼まれたのだろうか。内容も見ずに、しかも隠すように買うところを見ると、多分この方は十分その内容は御存知なのだと私は感じました。今まで私一人だけがこんなことに興味をもっているという自己嫌悪と、たまらない淋しさ。それが、こんな美しい同性の方も同じなんだと知ってから、私は何か救われた様な気持でした。お客様の帰った後、残っている店員に『今の方、何処の方だか知っている?』と聞いたところ『婦人雑誌を毎月お届けしている××番地の〇〇さんのお嬢さんでしょう』と答えるのを聞いて、私の今日の姿が約束された様なものでした。私が、その方——会社重役のお嬢様のK子さんにお近づきになり、二人だけのプレイを楽しむ様になった経過は、省くことにいたしました。K子さんもマゾでしたので、縛る方は二人とも下手でしたが、写真を参考に研究し、どうにか満足出来るまでになったのです。いずれにせよ、こうしてK子さんという美しい、そして私などには及びもつかない上品なお方とお友達になれて私の夢は実現いたしました。二人で夢中に過ぎた数カ月。K子さんも私も男の方に一対一で縛られるのは何故か恐ろしかった。縄や紐で手足を縛られ身動き出来なくなれた時のせつなさ。胸を、ぐるぐる締められた時の息詰まる圧迫感。K子さんは鼻や口を覆う「猿轡」というものがお好きでした。美しいお顔が締められた布で醜くくゆがみ、吐く息も乱れておりましたけれど、眼だけはいつも澄んだ輝きをもっていました。K子さんのお宅に伺ったり、私の部屋に来ていただいたり、二人だけの世界。それも長くは続きませんでした。K子さんの御結婚は私を再び、もとの孤独にかえしました。でも夢から現実にと歩んだ私に又、夢へ帰れということは罪でございます。死ぬ程の決心で私はモデルを志願しました。K子さんはその後、御幸福の様でございます。私もK子さんも二重人格なのかも知れません。お互に家庭では、又、一般社会では良き「娘」であり、良き「妻」として生活しているのです。

私が顔を見せたがらないのも、もう一人の浅野ユリが別に健全な生活をしているからなのです。

貴方様に甘えて、つまらない告白をいたしました。もう忘れて下さいませ。今度の会も近ずきました。ほら、こんなに胸がときどきしておりますの。

では又。御身おいとい下さいます様。

小林 辰雄 様

浅野 ユリ

五月も、もう半ばの星空の美しい夜であった。

信吾はボロシヤツに背広を着て黒眼鏡をかけ、およそ学者らしくないスタイルで研究室を出た。その朝、いつもの様に妻の加勢子に言った。

「学会が近付いたので研究室に泊るから——もしかしたら二晩くらい帰れないかも知れない」

いつものことながら、とても厭な気持であった。自分を心から信じてくれているこの美しい妻を欺いてまで行かねばならない欲求の強さ。ゆるしてくれ加勢子! 心の底でこう叫んでも彼の脳裡には浅野ユリの姿は消すことが出来なかった。

「大変ですね、余り御無理をなさらないでね。私も同窓会がありますので行かせて頂きますわ。」

器用に自分でアップに結び上げ美しい襟足を見せた加勢子は、こう控目に言って、信吾を送り出してくれたのだ。その澄んだ眼を見ると、いつも信吾は何んとしてでも、このいまわしい異常性から逃げ出そうと思うのだったが、その度に欲求の根強さを思い知らされるのも、いつものことであった。

都心から少し離れ、静かな川に面した旅館の一室が、今夜の会場にあてられていた。信吾が着いた時には、もう既に十二、三人の会員



が集っていたが、受付に座っている十八、九の女の子の姿が何かその場の張りつめた空気を和らげていた。今夜の会のテーマは「女体緊縛美の探求」というものだったが、その内容は判らなかつた。多分、モデルを色々な型に縛って見せるのだらうと考えられた。会員も殆んど集ったらしく、前回と同様に主催者が型通りの挨拶をして

彼女はグリーン系のタイトのスカートの  
純白のナイロンのストッキングを穿てた。



から、今夜のプレイのやり方を説明し始めた。

「……今夜の会は緊縛を受けた女体の美しさを色々な角度から皆様にみて頂く積りなのですが、初めは私どもの方でいろいろな縄の掛け方や猿ぐつわの嵌め方、小道具を使った縛り方などを実演して、お眼に掛けます。又、のち程、皆様の中から御自分のアイデアにもとずきまして実際に縄を掛けプレイをしてみたいと言われる方がございましたら、その時間も予定しています。今夜はモデルになつて下さる女性の方を、二人程予定しておきましたのですが、一人の方が都合により来られなくなつたので、そのピンチヒッターとしまして、私の方の事務員である近藤貴子さんに出て頂きますので、その点、御容赦下さい。」

先程、受付に座っていた、髪を短くカットしスラックスをはいて男の子の様なスタイルをした娘が、皆の前に頭を下げた。耳に大きなイヤリングをつけ、黒々としたひとみの大きい仲々活発そうな娘であつた。十分肢体の伸び切った手足には健康的な美しさが溢れていた。学校時代には運動選手でもしていたのか、動作もきびきびして気持がよかった。

「私、近藤貴子です。こんなこと初めてですが、よろしくお願いします。」

これだけ言うと又、受け付け席の方に行つてしまった。この娘の態度だけでも信吾には何かほっとした和やかな気持ちにさらされる様な気がした。もう一人のモデル、それは勿論、浅野ユリであつた。今夜の彼女は可成り豪華な中国服を着ていた。黒一色で別に派手なものではなかつたが、彼女の身体の線をはつきり表し、肩から露出した美しい腕、スリットからちらつく脚は今迄にない妖艶さをみせていた。顔は相変らず大型のマスクで隠してあつた。二人のモデルと施縄者を取囲むように、ぐるりと円型に会員の男女が席を占めている。皆、



手にパンフレットを持ち、喰入る様にモデル嬢の緊縛姿態を追っていた。モデルが二人なので一人が縛られている間、もう一人は待っているわけだが、別に自由にされているのではなく、縄を掛けられたそのままのポーズでいるか、足が自由な場合は、ゆっくりと歩きながら会員の前に、その縄目を見せて廻ることにしてあるので、それだけでも皆の眼を可成り楽しませて呉れていた。それは縄のドレスを着た奇妙なファッション・ショーと言ってもよかった。

近藤貴子というポロシャツにズボンという男の子の様な恰好をした娘が、黒い紐で後手に縛られたまま信吾の前を歩いていった。本当に縛られるのが初めてなのか、さも痛そうな顔をしているのが、かえってサディステックな感じをもたせていた。一方では浅野ユリが縄を掛けられていた。真白い綿ロープであったが、それは彼女の黒い服とのコントラストが考えられたためであろう。いつのまにか大型のマスクの代りに、これも白い絹布で猿轡が嵌められてあった。「両手首を別々に縛って、それを結び合わせ、それからこう二の腕に廻して、ここで一つねじってから首に巻きつけて引締めます。そしてから、こう……」

浅野ユリの顔がじつと上向きになり、後手が背後に高々と吊られる。素膚の二の腕がぶつくりと凸凹になる様な厳しい縛りであった。この種の緊縛サディスト達にとっては既に縛り上げられた女性を見るより、今迄自由であった女体が次第に拘束されてゆく過程を眼にする方が、より心をゆさぶられる。それも、ゆっくり説明をしなから要所々々に、きっちり結び目を作って縛り上げるのだ。高手小手、首縄という姿で浅野ユリが立上ると、代って近藤貴子が今までの縄を一旦解かれてから上半身を十文字に縛り直され、更に縦に縛り上げられた。この娘の方はスラックスを穿いているので丁度よかったが、何分まだ慣れていないので、恥しそうに顔を真赤にさせ、それでも余程、気の強い娘なのか、顔を真直ぐに向けて皆の前を廻

っていた。

この様にして会は進行していった。あらゆる縛り方を一応終ると、クサリや荒縄が持出され、又、本式の手枷足枷の類まで使われた。全身を足の先まで雁字搦目に括り上げられた浅野ユリが眼の前に転ると、その側の椅子には大きく脚を開かされて縛り付けられた近藤貴子が居た。極めて苦しいポーズは主に浅野ユリがしていたが、もう既にその中国服の背には汗が浮いて見えた。二人の露出している膚の部分には縄のすり跡が無数に刻まれ赤く縞模様を画いていた。後手に縛ったまま鴨居に吊り下げられ、だらりと垂れたままぶらぶらとゆっくり揺れて廻っている浅野ユリの姿を見た時、信吾は、ふと彼女からの手紙の文面を想い起した。果して彼女はどんな気持ちでいるのだろうか。二重人格とも書いてあったけれども、もう一人の彼女が現在の浅野ユリを見た時、何んと思うだろうか。猿轡ぐつわの中をとおして、微かに呻声が聞えてくるのも矢張り、この様なポーズの苦しさが一様のものでないことが信吾にも察しられた。海老責にも、特別に組立てられた丸太の上に磔けられもした。

そこで休憩があり皆も緊張をといて各々の席を立った。信吾も煙草を啜え廊下に出た。彼は、ふと妻の加勢子のことに関心を馳せた。同窓会に行くと言っていたが今頃、もう家に帰っているだろうか。良人が、この様な秘密の会に、変装までして来ているなどとは夢にも思わないだろう。加勢子、許しておくれ！ 私のいまわしい宿命なのだ。信吾は深く頭を垂れ、呻く様口の中で呟いた。

大分、時刻も過ぎていた。緊縛美の探求も、ファイナレに近づいていた。

「これから猿轡のいろいろな型に移ります」

と云う司会者の言葉に、信吾は何がなんでもこの時だけは浅野ユリの顔が見えるだろうと、多くの期待を持ったが、彼女はこの場合だけはモデルにならず近藤貴子一人であった。後手、高手小手に縄



を掛けられたまたま椅子に座ると、豆絞りの手拭いやデシンのスカーフ、特別に考案された革製の箆口具で猿轡を嵌められた。唇を割って噛ませたものから、口中に布きれを押し込み、その上を紐で縛り更に巾広い布で覆う猿ぐつわ。鼻を出した場合、口鼻共に覆った場合、種々の表情の変化。その締め具合。モデルに何か言わせてその発声の度合をみたりした。近藤貴子の黒い大きな瞳が猿轡をかけられると一層ゆたかな魅力をもった。浅野ユリは自分がモデルにならなかったかわりに、近藤貴子の猿轡を直したり、自ら手を下して噛ませたりして手伝った。勿論、彼女は依然として彼女自身、猿轡を嵌めたままであったので、この取合せは奇妙なものだった。それよりも次々に厳しく締め上げられるので、近藤貴子の顔は特に頬のあたりにくっきりと布や紐で縞模様がつき、飲みこめない唾液がたらたらと流れ出ていた。

それから半月程たった。浅野ユリからの手紙が信吾のもとに届いた。彼女からの最後の手紙であった。

「これが、お別れの手紙になりました。貴方様との交通は無学な私にとって楽しいものでございました。私も、あと一カ月ほど後には、娘の終着駅につくことになりました。私の様な女でも求めて下さるお方があれば、喜んでゆくつもりでおります。ただ今後、もう緊縛モデルとしては皆様の前に出ることはないと思います。これからの人生は、どんなに苦しくとも自分一人の我儘は許せない。K子さんがそうであった様に、私も貞淑な妻として直向から太陽の光を浴びて生きてゆきたい。ただ、私のこの異常な悦びが、その人の悦びである様な万分の一かの期待を心の底に秘めながら、私はこれからの新しい生活に踏込んでまいりたいと思います。」

お手紙の上で、いろいろと有意義なお話を伺い有難うございました。尽きぬ名残りと共に貴方様の御幸福を祈らせて頂きます。尚、

お別れに際しまして、先便でお話しましたK子さんとの数々の想い出の写真を、数枚同封いたしました。私の素顔を同好の方にお見せするこれが最初で最後でございます。簡単な説明は裏面に書いておきましたので御笑覧下さいませ。

小林 辰雄 様

浅野 ユリ

便箋で包む様に五、六枚の写真が同封されてあった。素人写真にしては可成り良く撮れていた。浅野ユリの顔は信吾の想像通り上品な美しい顔だった。腰紐の様なもので後手に縛られて座っている。彼女の部屋でもあろうか、その背後に西洋人形が優しい色どりを添えていた。巨首まで、ぐるぐると巻かれ横になった姿もあった。信吾は撮影会のモデルとしての彼女よりも、何かこの写真の方に生々とした悦びが感ぜられた。三枚目に彼女の手紙にあった、お友達にK子さんの写真が信吾の眼に入った。手拭の様な布で猿轡をしてゐるため、顔はよく分らないが、全体から受ける感じが信吾の心を激しく揺がせた。

きっちりした後手に縄を掛けられたまま、顔をねじって見ている髪形の形。手足の表情。聡明そうな眼。彼は、あわてて次の写真を見た。そして、そこで激しく頭を振った。幻覚なのだ。疲れている。彼は静かにそして深く息を吸い入んだ。しかし無駄だった。猿ぐつわのかかっていない「K子さん」の顔は妻の加勢子のそれだったからである。加勢子なのか、それとも加勢子に似た人なのか。婚約時代に妻がよくきていた洋服。それもあくまで似ているだけのものなのか。そう云えば以前に浅野ユリなる女性にも逢ったことのある様な気がする。しかし、それも加勢子の友達の中に浅野ユリに似た人が居たに過ぎなかったのだろうか。信吾とて空想の中で幾度か加勢子を縛った。「K子さん」は現在幸福そうであるという。しかし、



はたして彼女は被虐の悦びを忘れてしまったのだろうか。信吾は、  
荒れ狂う感情を抑える様にゆっくりと席を立った。彼にとっては、

妻の待っている我家への道以外は無用なものになっていた。

終



## 私のイメージ

マ  
ダ  
ム

近 藤

◇ (30年3月号、中村加寿江さんの通信参照) ◇

◇ お彼岸のお中日でした。マダムは亡くなっ  
た御主人のお墓詣りに出かけて行きました。

（答）

和服が本当にぴったりと似合って、  
何処から見ても立派な奥様という感  
じのマダムが、御主人のお墓詣りに  
いそいそと出かける姿を見ると、初  
めのうちの妬ましさは何処へやら、  
今では、すっかりマダムに惹かれて  
しまいました。本当に羨ましい程仲の良い御  
夫婦なのです、いいえ、御夫婦だったのです。  
御主人は昭和19年に戦死なされたので、マダ  
ムは戦争未亡人なのです。短い御夫婦の生活、  
そして死別。それから今日迄の十余年、マダ

ムは独りぼっちで苦しみながら生きて来たの  
です。御主人との間に赤ちゃんが無かったこ  
とが、その頃のマダムには幸いでした。どん  
な時でもマダムは心の中に亡くなった御主人  
の面影を抱き締めて来たのです。マダムがこ  
の十何年の間、ずうっと孤独を守り続けて来  
たとはどなたもお信じにならないでしょう。  
私もマダムが男の方と仲睦じく語り合ってい  
らっしゃったことを知っています。でも、マ  
ダムのそんな一面が私には決して不潔には思  
えません。却って「ママ、よくやったワネ」



と褒めて上げたい位です。マダムは、唯、誠実なのです。惚れ惚れする程、真剣に恋をします。そして男の方に欺かれてしまうのです。マダムは心の中の御主人に哭いて謝るので、男の方の満足の中に幸福を見つけ出そうと努力するマダム。優しい御主人ですもの、可哀想なマダムを決して叱ったりなさらないでしようし、新しい幸せを自分の手で掴もうとした愚かなマダムを、きつと許して下さい。女筈です。マダムが悪いんじゃないのです。女の弱さ、哀しい誠実さがいけないのです。でも、そんなこと、誰が責められるでしょうか。マダムは決して淫蕩な女ではありません。戯れの浮気など、とてもできないのです。亡き御主人に対して、清浄な追憶を保持し続けていると云えると思います。御命日やお彼岸には、お墓詣りを欠かさないマダムなのです。

× × × × ×

お店は、こじんまりした酒場です。マダムの他に邦江さんと私、郷子の二人が働いています。経営はなかなか大変で、それがマダムの頭痛の種ようです。でも商売柄、いろいろ変った事があってマダムの気も紛れているようです。私の名前はサトコと読むのですが、お客様はキョウコと呼んで下さるので、最近では勝手に里子という字を使っています。もしたら、お客様の中で、サトコ、苛めをするんだと私を泣かせに通って来る方が現れたので

す。随分、酷い目に遭わされるのです。

お客様が「里ちゃん、こんな本、知ってるか？」と見せて下さったのは、女の人が縛られている写真のページでした。「いやっ！趣味よっ！」私は奥へ逃げ込みましたが、ちらっと見た写真の光景が頭の中にこびりついて、暫らくは心臓のドキドキが治まりませんでした。マダムが代りに、そのお客様のお相手をして下さいました。

それから二、三日たって、マダムが、あのお客様の持つていたのと同じ本を持つている処を見ました。ちらっと見たのは、やはり縛られている女の人の写真でした。私の気配を感じて慌てて本を伏せ、さり気ない風を装っているマダムの頬から、色白の胸許まで、ぼっと染まっているのを見て、私はマダムが可愛くなりました。三十を過ぎたマダムに感じた親近感、確かに可愛さだったのです。

——マダム、やっぱりドキドキしてんのね——でも、流石はマダムです。最初は、びっくりしたのですが、ゆっくり読んでみて面白くなったのです。それから毎月号を、ちゃんと買って来て、私にも見せてくれました。

マダムはいろいろのことを識ってみると、マダム自身にもマゾヒズムという気持があることが分つたと云うのです。そうかも知れま

せん。商売柄、お酒の上で私達はよく、お客様に縛られてしまいます。本当に死にたい程恥ずかしくて涙が出て来ます。でもマダムは、とっても落着いていて、あんまり嫌いじゃないさそうなんです。それに、おかしい云い方ですが、マダムの縛られ方は、とても綺麗です。私でさえマダムを縛りたくなる程ですから、ああいふ雰囲気を持つているマダムは、確かにマゾヒストだと思っています。年令が近いから、いって、古川裕子さんのファンになって、囚衣、続囚衣、長期刑、そして告白までの全作品を幾度も読み返しています。

お客様の中には「縛られたままで、お酌ができたなら、いい物を上げるよ。さあ、手を後に廻すんだ。」と云って、マダムや私達に命令する方がいます。いい物なんか欲しくありませんが、商売の手前、仕方なく縛って頂くのです。マダムが、やはり一番上手で、横目で見ながら、お銚子を指でつまんでお酌をします。マダムが失敗しないので、そのお客様は、とうとうマダムの眼を手拭で覆ってしまったのです。他のお客様の前で縛られるなんて、本当に情なくて泣きたくなります。私達を縛って前に坐らせておいて、幾ら頼んでも解いてくれません。私達が羞しさに真赤になって、身悶えるのを、お酒の肴にするかのように、一本のお銚子をたっぷり時間をかけて、チビチビやりながら私達を見詰めているのです。



何だか本当に晒し者にされているような気がして、項垂れてしまうのです。そして酒場女なんて本当に辛い商売だと思えます。

或る晩、お客様が里子、苛めをするんだと云い出しました。私の手を背中にキュウツと捻じ上げて、私の腰紐を抜き取って、胸を二巻き締めつけてから、後手を強く背中で縛り合わせました。苦しさで痛さと羞しさで涙がこみ上げて来ました。それなのにお客様は「今度は猿轡を嵌めてやろうナ。」と云って手拭を取り上げるのです。私は、もう半泣きになって「嫌！嫌！許して、御免なさい。やめて！いやッ！いやアン。」と涙をこぼしたのに、無理矢理、酷い力で口の上を縛られてしまいました。私は喉の奥から、ウォーン、ウォーンと大きな声を上げて、涙をポロポロ零しながら、本式に泣きました。

奥に居たマダムがやって来て「若い娘をこんな目に逢わせなくても、私がお気の済むように縛られて上げますよ。」と、お客様を一寸睨む真似をして、私の紐を解いて逃がしてくれました。私は奥へ駆け込んで、仕切りにかけた暖簾の陰から、しやくり上げながらマダムを見ていました。マダムは私より緊く縛り上げられました。お客様は「里ちゃんもいい娘だけど、マダムもそうすると一段と綺麗だよ。」なんて云いながら、背中を叩いたり、腕の辺りをつねったりしました。マダムは、

ウウツ、ウーツ、ウーウウツと身をよじって、とうとう縛られたまま、腰掛ごと横倒しになってしまいました。お客様が帰って、私はマダムの胸に顔を埋めて「ママ、御免なさい。済みません。」と云いました。ウフンと笑ったマダムは、「何云ってんの、いいのよ、心配しなくても……」と私を抱き締めてくれました。その夜、遅くマダムは私に自分の気持ちを話してくれました。

初め、いやいやながらお客様の無理に目をつぶっているうちに、そうされるのが苦痛でなくなったのだそうです。「男の人ってどうして、ああいう事が好きなのかしら。でも妾だって別にいやじゃないんだから、やっぱり変なのね。」と云ってマダムは笑いました。K誌を読んでいるうちに、麻縄か何かで身動きもできない程手足を縛られ、本式の猿轡を嵌められてみたいような気がするけれど、実際にそんな目に合ったら我慢できるかしら、と云うマダム。

猿轡というものは本当に声が出せないのでしょうか？又自分の手足を自分で縛る方法はあるのでしょうか？こんな疑問を心に抱くマダムなのです。里子、苛めの好きなお客様が暫く見えないと私は、ほっとすると同時に、マダムの力ない様子を感じて淋しくなります。知らない人には分りませんが、忘年会や新年宴会などに、女の人を縛ることの好きなお客様

が、きっと来て下さるだろうと、マダムは心の中で待ち焦がれているのです。

こんなになってしまったマダムを、私は可哀想に思うと共に、可愛く思い、大好きです。すらっとした私と違い、ほっそり肉づいたマダムなので、力では、かないません。深夜、マダムの熟睡を利用してウンウン云いながら縛り上げました。びっくりして眼を醒ましたマダムは、縛っているのが私だと判って、じっとされるままになっていました。小さいハカンチを二枚、口の中へ押し込んで、その上を手拭いで縛りました。私は汗びっしりよりで「ママ、どお？苦しい？」と訊きました。マダムは、こっくり頷きました。眼に涙が溜ってキラキラ光りました。でもマダムは、縄を解こうとした私に、ウウツと呻いて首を左右に振って、拒否の意を示すのでした。とってもし美しいマダムでした。

その時、以来、私はK誌と同じに、マダムにとってなくてはならないものになりました。私はマダムの気持が分るような気がします。でも私には、まだそういう気持が湧いて来たことがありません。きっと女らしさが足りないからです。やがては縛りたい女になるでしょうし、その時は、やはりマダムのように美しく縛られたいと思っています。

×

×





## 連載告白小説

## 或る倒錯生活 (一)

西村 憲 一

編集局長様へ……

編集局長様 突然、無礼をも顧みず本稿を送る事を御許し下さい。

先ず本稿は実話である事を冒頭に断つて置きます。私は長い間、何時かは此の原稿を送る事が出来るであろうと期待して居ましたが、やっと念願が叶い茲に第一話を脱稿する事を得た次第であります。ペンを取る事は容易であり、且、私の楽しみでもあったので何時でも書き出す態勢にありまし

たが、最も困った事は主人公である彼女？の同意を得る事でありました。私は戦後、次々と現れた雑誌の中にこの種の記事を数多く発見して、其の視界は急速に開けて行つたのであります。何故なれば、世に同好の士の余りにも多きを知って、私は私の従妹？の為に祝盃と応援を新に送ると共に、既に私の従妹？に依つて同好者の夢は実現し、美しき生活が展開して居る事実を多くの同好者に報らせ度い衝動を抑え兼ねたのであります。

が其れを発表するには、私の客観的事実では到底、深奥を表現する事は出来ず、主観的な心理の動きは把握し難く、物語りとしての形態は為し得ない事を思いしらされたのであります。本人の同意に依り、其日常の詳細を知り得ると共に、彼女の理念の動きを識らなければ筆を取り得ない事を知つた私は、私の考えを彼女に話して其の同意を得ようとして年余を経たのであります。が、仲々承諾して呉れず半ば諦らめて居た所、漸く承知して呉れた次第であります。



初めは顔色を変えて拒み、且怒り、且泣いて断り続けた彼女でありましたが、会う度に理を尽し情を展いて説いた私の執拗さと熱心さに負けて、到々承諾せざるを得なかったものでありましょう。

但し条件付で、曰く住所を書かない事。曰く全関係者に亘り仮名とする事。曰く場所と日時は明示しない事。の三つでありましたが、私は勿論承知したのであります。

そして私は、たまにしか会わなかった彼女に頻りに会い、顔を赤らめさせ、又言いしふる事柄迄、根掘り葉掘りして聞き出したのであります。彼女と私は従兄妹？同志であり、孤独な、且、秘密な生活を送る彼女の為に、彼女と彼女の父が選んだ彼女の為の渉外係である私は、税金の問題、家屋の問題、諸収支の問題等、対外的用件の凡てを処理する為、彼女が其の父のもとを離れて以来良き相談相手ともなつて、其の生活を支障なからしめて居るのであります。

## 枕行燈

コンクリートの坂道を登りきったタクシーは、高い塀をめぐるせた宏壮な邸の門前に静かに停った。降り立ったのは、華やかな和服姿の若い女性だった。ハンドバッグから鍵を取り出してクグリ戸を開け、運転手に手伝わ

彼女は文中にもある様に大阪近郊に邸を構え、私は岡山市に住んで居るので、其の日常の詳細は知り得べくもなく、定期的にしか出かけては諸般の事を処理する中に大体の事は想像し、又彼女も従兄と云う近親感と、自分の秘密を知る唯一の人間としての信頼感で、打明けても居たのでありますが、此の度筆を取るに当り其の全貌を知るに及んで、今更に私は驚きを新にすると同時に、彼女に対する肉親としての愛情を呼び起されたのであります。

本書は現実に存在する実話であります。私は其の事実たる事を、編集者にも、読者にもお目にかけける事が出来得ないのを残念に思うのであります。

私は作家でも文人でもなく、ありふれた市井の一市民であり、原稿用紙などへ字を書くのは学生時代以来始めての事で、文字も文章も体をなさず、非常に読みづらい事であろうと案じていますが、万一内容の持

つ事実としての現実的興味が、諸氏の共感を呼ぶとすれば、今後共一編宛彼女の日常を描写して、女でない女が如何なる生活を繰り広げるか、私達が想像もなし得ない日常と生活が、妖しくも美しく華やかに繰り出される興味を、赤裸々に伝え度いと思うものであります。

女性化願望者の夢も、女装に憧れる人達の夢も茲では完成されて居り、性の転換こそ行つては居ないが外観的肉体は女性にも稀な美貌と容姿に恵まれ、老成なる資力に支えられ、心理的にも完全なる女として生活する其の日常を次々と彩る男女の葛藤は、私の菲才では充分に描写出来ない事を危ぶむものであります。それは一応お許しを願ひ御鞭達を乞う次第であります。尚、出来る限り事実に従いましたが、多少の肉付けを致しました事を、御許し願うと共に、折を見て、写真をお送りしたいと存じて居ます。

せて、幾つもの買物包を邸内に運び入れた。最後に大きな花束の包を抱えると、美しい笑顔で車を降り、邸に入ると内側から再び施錠した。

嬉しそうに、尾を振り鼻をならす三頭のシエパードと二頭のコリー。女主人の御帰邸に甘えるようにまつわりつくのへ、

「いやよ、とびついちゃあ」

と、両の杖を持ち上げて、内玄関に置かれてある買物包の内の一つをとり上げ庭にまわる。ズラリと、立派な犬舎が五つ。

「サア、みんな、お腹がすいたでしょ。お留守番ごころうさま。ご飯をお上りなさい」

五頭の犬は、それぞれ写えられた焼肉の塊



りを行儀よく喰べ出した。

彼女は、そのさまをニコリと眺めて座敷に上る。部屋々々の襖、障子を開け放すと、広い屋内の澄んだ空気が忽ち外の大気と入れ替って、爽やかな微風が吹き込んでくる。

年令は二十四、五才か、一米五五、六種の小柄な躰ながら、すらりとして和服のよくうつる女である。彼女は慣れた手付で帯を解き、普段着に着替えると、白い割烹着をつけて、いそいそと立ち働き出した。風呂釜のガスに火を点ける。買物の包みを解いて、箆筒へ、戸棚へ、水屋へ、冷蔵庫へと片付けてゆく。挙措は淑かで、身のこなしは柔軟であった。幾つもの部屋に花を活け替え、広い庭木がホースの水を浴びて、しっとり落着きを見せてから彼女は浴室へ入った。

タイルで張りつめられた浴槽に、しっとりとし身を沈める彼女は、たしかに美しい。

しかし、もし、この場面を第三者の誰かが覗めていたとしたら、先程からの挙措と思ひ合わせて、信じかねる不審に眼を瞠って驚くことだろう。

彼女は男性なのだ。女性にも劣らぬ白い膚ではあるが。巧まずしてとる身のこなしは、どうみても女性の柔軟さではあるが。

湯から上った彼女、否、彼は脱衣場に置いた三竿の整理箆筒の一つからピンクの腰巻を出して纏うと、壁の大鏡の前に腰掛けて、沢

山の化粧品の中から下付けを取り上げた。次に溶いた練白粉を首筋から胸、背へ塗り、牡丹刷毛で押えて行く。臉から高頬へ紅を刷いて、その上へ濃い化粧をすると、粉白粉をはたき、再び頬紅を刷く。楽しそうに眉をひき口紅で彩ると、白さが一層きわ立ち、つばらな瞳と共に輝くような美しさである。

これが男の顔か？ つくられた女性の顔なのか？

綺麗にウェーブした長い髪を白絹で巻き締め、戸棚に並べられている幾つかのカズラの内から、丸髷のをとって静かに冠る。たんに生えぎわを合せず。実に楽しそうなくさである。幾度か合わせ鏡で衿足をたしかめた上、ピンクの上に燃えるような緋縮緬の腰巻を重ねて居間に帰ると、姿見の覆いをとって、白地の長襦袢を着る。赤い紅葉を染めた華やかな襦袢に、水色の扱帯を巻き、藤色の小紋の単衣に伊達巻を締め、鏡に向って衣紋を合せず。箆を描いた帯を慣れた手付で太鼓に結んですらりと立った姿は、どこから観ても水々しい若妻の美しい装いである。

更に割烹着に身を包んで炊事室に包丁の音を響かせ、いそいそと夕飯の支度をしていると、門の呼鈴が鳴り出した。急いで階段の下の私設電話のスイッチを入れる。

「どなた？」

「私だよ」

太く、年配を思わす女性の声が返って来て受話器を震わす。

「ハイッ、只今すぐ……」

彼女？は大急ぎで門へ小走りに出て錠を外すと、丁寧に頭を下げるのだ。

「お帰りあそばせ」

「ウン、只今」

上背のある、堂々たる体軀の女が入って来る。五十年配で、肥満体をスーツに包み、大きな鞆を提げている。

「お疲れになったでしょう」

嬉しそうに両手でその鞆を受け取ると、いそいそと後ろに従う。

「今日は暑かったナ」

この年配の女性の動作、言葉つきは、まるで男のそれである。

「お風呂を用意してありますけど、お召しになりませんか？」

女装の彼女？は、主人？に男物の浴衣を着せかけながら、若妻の如くいう。

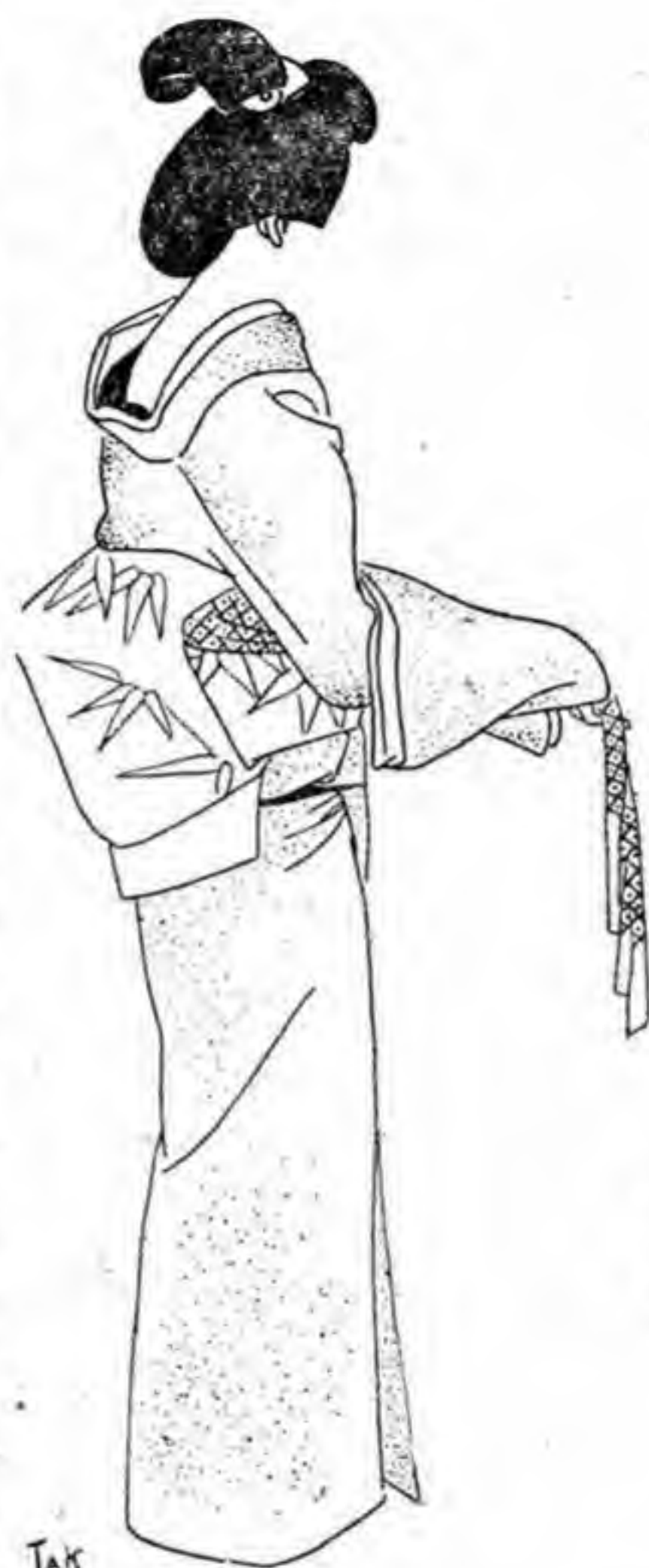
「そうか、有難いナ」

主人？が悠然として浴室へ行った後、若妻？は、いそいそと茶の間に夕餉の支度を整えるのである。

湯から上って、男物の浴衣に同じく男物の単衣を重ね、兵子帯を巻いて食卓に向った女は、台所に向った声をかけた。

「今日はビールがいいナ」





「あらッ、おビールになさるの」

「ウン」

「お酒のお肴にしていますのよ、宜しくって？」

「あるものでいいよ」

「海老でもお揚げしましょうか？」

「いや、手間はかけなくてもいい」

「じゃあ、済みません。これで我慢してくださいませネ」

盆の上に冷えたビールとコップ、栓抜きを

揃え、小皿にチーズを盛り、刺身の皿を食卓に並べると、割烹着を脱ぎ乍ら、

「一寸、着替えて来ますから召上って下さいませネ」

「それでいいじゃないか」

「アラッ、昨夜、明日は芸者になれっておっしゃったじゃありませんか。もうお気がお変わりになったんですの？」

「ああ、そうだったネ。しかし、又着替える

のは面倒だろう？」

「私はいんですのよ、そのつもりでお化粧もしているんですもの」

「そうか。そんなら着替えるかね」

「ハイ、すぐですワ。一寸お待ちになって」

「ついでに紐も持っておいで」

「アラ、その抽出しにありますけど、今からですの？」

「いやかい？」

見合わせた眼に、こぼれるような媚をたたえ、婉然と微笑して彼女？は茶の間を出た。

次の間ごしに見る庭の緑が、得もいえぬ程の爽やかさである。北に六甲の山波を背負い足元に低地の家の瓦を踏んで、海に至る景勝を坐して望めるこの邸の間取りは絶妙というべきであった。宏壮な庭園と相俟って自然の展望を巧みに採り入れ、観るものをして飽きさせなかった。彼女、否、彼と呼ぼう。彼はビールの温まるのも忘れて遠景にしばしば心を奪われていた。

暫くして引返して来た例の女？は、青地に竹を染め抜いた一越の裾を長く曳き、白地に金と漆で鯉を描いた帯を下ぶくれに結んで、髪も水々しい島田に変わり、思い切って抜いた衣紋は濃化粧の頸から背中を真白に匂わせて、先程の若妻姿とは打って変わった仇な姿であった。裾を捌いて彼の側に坐すると、

「ごめんなさい、遅くなって。アラ、おビ―



ルが温まってしまつて。替えて来ますワ」  
 スンナリと立って台所へ行く裾捌きの鮮やかさ。

「お待ちどうさま」

水玉を一面に浮べたビール瓶の王冠を、気持よい音をたててはねると、袖を押えて、しなやかな手つきでコップに注ぐ。

一気に飲み干した彼は、

「美味しいなあ……どうだ？お前も」

「ええ、あとで戴きますワ」

「あとで？」

「だって酔うと苦しいんですもの」

「ビールなんかで酔うものか」

「アラ、私のよわいのをご存知のくせに、意地悪ネ」

他愛のない応酬のうちに陽も傾いて室内も薄暗くなり初めた。庭の植込みも黒い影を増し、遙かに見える海上に、点々と光の見え始めたのは漁り火でもあろうか。

白い彼女の顔が、一際白く浮き出し、脂粉の香りが部屋一杯に満ちている。

「暗くなりましたワネ」

スラリと立って壁のスイッチを入れる。

「犬達にご飯をやったかい？」

「ええ、とくに」

首を傾げて肯く彼女の手首が、いきなり彼に掴まれてグイと引かれる。そのまま畳に引倒されて、肩口を彼の膝が、しっかりと押え

る。

「御飯は？」

と訊かれて彼女は、押えられたまま、いやいやをして見せた。

「お腹がすくぞ」

こっくりをする彼女。彼の手が抽出しに伸びて紐の束をとりだし、女の両手首を背に捻じ上げて合わせた。捌かれた紐がその手首に巻きつき、引き立てられて胸へ掛る。二巻、三巻そしてグイと絞られる。彼のなすままになつていた彼女も、思わず「あれ！」と悲鳴を洩らして、後手に完全に縛られた身を揉んだ。

「痛いかな？」と顔をのぞきこまれると、「痛いわ」と難じながらも、嫣然と微笑する。

「今夜は痛いぞ！」

「ええ、いいワ。たんと苛めて」

横坐りの膝が少し乱れて、下着の紅が艶かしくのぞいている。

「そうそう。今日ネ、松屋にチョットいい柄の反物があつたので、呂の襦袢と一緒に仕立て頼んでおいたよ」

「私のですの？」

「そうさ。寸法は変りなかったネ」

「マア嬉しい。エエ寸法は前通りでいいんですけど……どんな柄かしら」

「出来てくるまでのお楽しみサ」

「ウン、意地悪ネ」

縛られたまま、流し眼に怨ずる彼女の縄尻

がグイと持ち上げられた。

「立て、あっちへ行こう」

長く裾を曳いて、島田を前に倒して俯向き後手に縛られて追い立てられて行く彼女の姿は、哀れにも美しい一幅の絵のようだった。

彼は、この囚われの美女を、長い廊下を引廻して突当りの一室に追い込み、一杯に敷きつめた敷物の中央に突倒した。

十八畳程の広さである。正面に大きな床の間があり、ちがいが棚が続いている。高い組格子の天井に螢光灯が明るく、広い部屋の隅々まで真昼のような明るさである。

一隅に白布で覆った卓子があり、その横に黒檀の茶箆が並んでいる。彼は、しばし突倒されたままの彼女の美しさを見降していたが、やおら、地袋から竹鞭を取り出し、彼女の背中へ鋭い一撃をくれた。「アッ！」とのけぞるのへ、又一鞭、「アレー！」という悲鳴につられるように、縄尻を強く引いて、女の上体を引き起すなり、ピシリピシリと矢継早に打擦えるのだった。

忽ちにして島田の髪は乱れ、跳きにつれて着物の着つけも、しどけなく崩れていった。「もう、もうカンニンして……」

彼女が、鞭の下から苦しげに哀願する。

責め手の息も大きく弾んでいた。

縄尻をはなされると、彼女はグッタリと大輪の花が地に落ちたように、敷物の上に後手



の身をつつぶした。

彼は鞭を投げ捨てて、卓子の白布をはねのけて、葡萄酒の瓶をとった。

「一口飲め」

彼女の背に廻っている紐を掴んで引起し、顔を仰向けて紅い唇に注いでやる。白い喉が可愛いく動いて飲みくだと、眼を見開いて微かに笑みを浮べる。

「すみません」

白い頬に髪が二筋、三筋。凄愴な美しさを作り出していた。

「痛かったかい？」

当然のことであるが、彼女は微笑する。

「ハイ、でも、でも遠慮なさらずに宜しいのですのよ」

「まあ、一服しよう」

縛った紐を解いてもやらず、彼は、彼女を転がして、タバコを啜る。彼女が起き上ろうと不自由な身をよじる。

「どうした？」



「あの、一度解いて……」  
「まだ済んだんじゃないよ」

「ええ、でも着物を直させて……」

彼は、縄目を掴んで引起し解いてやった。

彼女は、しばし痺れた二の腕を揉んでいたが、じつと瞋めている彼の傍へすり寄って、震える指先でマツチをすって差し出した。

「イヤン」

甘い声で、吹きかけられる煙りを袖で払いながら、愛らしく睨むと、スラリと立って部屋の隅に行き、背をみせて静かに帯を解いた。着物を滑らせて、衣掛けに掛けると、長襦袢の衿を直して、伊達巻を音立ててキユツと締め直し、腰紐を口に啜えて振り向いてニコリ笑い。

「アナタ、このままではいけません？」

と問いかけた。着物を着る女の美しさが全身に表現



されていた。

彼は無言で頷いた。長襦袢姿の彼女は、チヨット髪を撫ぜ上げて、静かなすり足で彼の前に坐ると、

「お待たせ致しました」

と、三ツ指を突いて軽く頭を下げて、クルリと背を向けると、*「どうぞ」*という風に両手を後ろに廻して、うなだれた。

彼の手が、先程の紐をとり上げて捌いた。

キユツキユツと絹ずれの音と共に彼女の上体が、たんねんに縛り上げられていった。

「今度は、もっと酷いよ」

引絞られる縄目に、はや苦しげな表情を体に現わしながら彼女は、かすかにうなずいたのだった。

再び、身動きならぬように縛られた彼女を横倒しに突き倒すと、彼は床の間の横の観音開きの襖を開いて、中の把手を廻し出したのだ。それによって、天井から先に鈎のついたワイヤロープが上り降りする仕掛けになっている。

カラカラという滑車の音に、彼女は責めの内容を察して身を縮める。彼がその頭元に立った。彼女は薄眼をあけて、かすかにいやいやをする。彼はかまわず、彼女の後手の紐に鈎を掛ける。ロープが、キシミを立てて吊り上って行く。もうどうにもならない。彼女は観念して、ロープの速度に合わせるように身を

を起して行ったが、足が床を離れるとたんに、肌に喰いこむ縄目の痛さに呻き声を洩した。ロープの上昇は止ったが、足は宙に浮いて体がクルクル廻転するのだ。

「いくぞ！」

彼の声と共に鞭が飛んで来た。

「ツー！」

彼女は海老のように身を屈したつもりだったが、長襦袢の裾が少し割れて、足指が苦悶を現しただけだった。

「ソラッ、ソラッ！」

掛声と共に彼の鞭が情容赦なく音を立てて彼女を攻撃するのだ。

我身の重さと、加えられる鞭の苦痛は言語に絶するものがある。ものの二、三分の後は彼女は声もなく、ダラリと吊られまゝになつてしまった。今暫らく放置すれば失神するだろう。彼は打つ手をやめて、ロープを伸した。クタクタと崩れる彼女を抱き起し、彼は縄目を解き放して、ブドー酒を飲ませ、介抱してやった。

ややしばらくの後、彼女は眼を開いた。

「どうだい、こたえたかい？」

「……ひどいかた」

「茶の間に居るからネ、あとで来なさい」

「ハイ」

彼が出ていった後、彼女は両手を笑いて体を起し、立ち上ったが思わずヨロケた。

滄浪とした足どりで浴室に廻り、疲れた体を湯に侵すと、肌にクッキリとついている縄目の跡と、鞭跡に痛いほど湯は沁み渡ったが、体の奥から、さき程の苦痛を追い出してくれ何かが湧き上ってくるように思えて快かった。しびれていた二の腕も、揉んでいる内に縄目の痕も消えていった。

浴室を出て化粧台に向うと、人が変わったように元気になっている。湯化粧の上にホンノリと紅をさし、白粉をはたき、眉を引き、口紅を塗って上からアストリンゼンで押え、髪を夜会巻風に掲げて結うと、珊瑚の簪で留める。薄紅色へ落花の吹き寄せを染めた紗の長襦袢を着て緑色の伊達巻を締め、薄水色の上布に博多帯をした姿は、全く別人のような趣きをみせる艶姿で、僅かにのぞく匹田紋りの帯上げが、可愛いく似合っている。

手早く辺りを片づけ、肘と胸の衿裏に香水をつけて急ぎ足で座敷へ行く。

「ホウ」

テレビを覗いていた彼が、視線を移して感嘆を洩らしてみとれる。

彼女は羞しそうに眼を伏せて、三ツ指をついてチラッと流し眼をつかう。

「遅くなってごめんなさい」

「どうだい？ 気分はよくなったかい。」

「ええ、すっかり。でも、旦那様ったら、容赦ないんですもの。酷い方」



「ハッハハ……、しかしその姿もいいねえ」

「マア……いや！」

「いや？ もういやかい？」

「……そ、そんな意味では……」

彼女は袂で顔を覆って、台所へ逃げていったが、すぐ食卓を片付けて果物の鉢を運んで来た。

「ウン」

彼は果物の内、リンゴを一つ喰べると、自分で立って行って、茶の間の小簾簾から太い練絹の紐を持って来た。

彼女の頬がポツと赧らむ。

彼が無言で彼女の後に廻る。彼女も無言で両手を後へ組む。胸に太い絹紐が巻かれる。

「どうだ、これなら痛くはないだろう？」

「ええ、少しも……」

しっかと後手に縛られても、太い絹紐では苦痛はなかった。

彼は長い間、その姿を飽かずに眺めていたが、やがて、ごろりと彼女の膝枕で横になると、酔が出たのか、スヤスヤの寝息を立て始めた。

「もしアナタ、そのままではお風邪を……」

といいかけて彼女は口をつぐんだ。

折角、いいお気持ちになっていらっしやるのに、もう少しこのままにして置こう。

後手に縛られたまま、膝の主人の寝顔にみ入る。

「アナタ、私、とっても、とっても幸福ですわ」

彼女は小さな声で呟くのだった。

夜空に星が一面にまばたき、一陣の涼風がサツと吹いて軒の風鈴がチリリンと鳴った。

## 臨時増刊号

## 「青い廃院」

定価 二百円（送共）

……二大長篇異色読切りサド小説と四馬孝の豪華口絵集！……

### 「青い廃院」

弓沢俊二郎作、四馬孝画

美貌の踊子に執拗につきまとう無気味な男。婦女誘拐団の魔手に陥ったレビュースター。蒼白き灯影に照り映えて痺れるような甘美な悦虐の妖気が全巻を蔽い、淫虐な責めは頁を追う毎に愈々酸鼻をきわめ、息もつかせず一気に最後まで読了させずにはおかぬ弓沢俊二郎氏の才筆は、ここにサド文学の金字塔を打ち建てた。

### 「与那国奇談」

永山久美雄作、杉原虹児画

南支那海に浮かぶ与那国は世に云う女護ヶ島。女ばかり住むこの孤島に展開される男性共有の風習、漁船が難破して、この孤島に漂着した一日本人漁師の経験した世にも不可思議な体験記。巻頭から結末に至るまで緊縛と処刑シーンの連続。諸君を夢の国女護ヶ島パラダイスへ案内して暫しの粹夢に浮世を忘れさせる一大ドラマ。

### 四馬孝画「青い廃院」画廊

- 美貌の人
- 苦悶する美貌
- 踊り責め
- モデル責め
- 美女誘拐
- 屈辱の責め
- 廃院の中
- 救出

### ▲変ったレッスン（表紙裏）

### ▲受 縄（目次裏）

### 本文内容主な項目

### 青い廃院（弓沢俊二郎）

- 一、三人の男
- 二、地の底にあるもの
- 三、美貌の人
- 四、劇場に居た二人の男
- 五、忠告
- 六、美女誘拐
- 七、苦悶する美貌
- 八、屈辱の責め
- 九、踊り責め
- 十、探索行
- 十一、廃院の中
- 十二、モデル責め
- 十三、手繰りの綱
- 十四、救出
- 十五、勝者の心

### 与那国奇談（永山久美雄）

- 女護ヶ島与那国
- 股裂きになる女
- 人肉の炙り焼
- 筏流しの刑罰
- 女百人に男一人
- 股裂きと火焙り
- 孤島の殺人

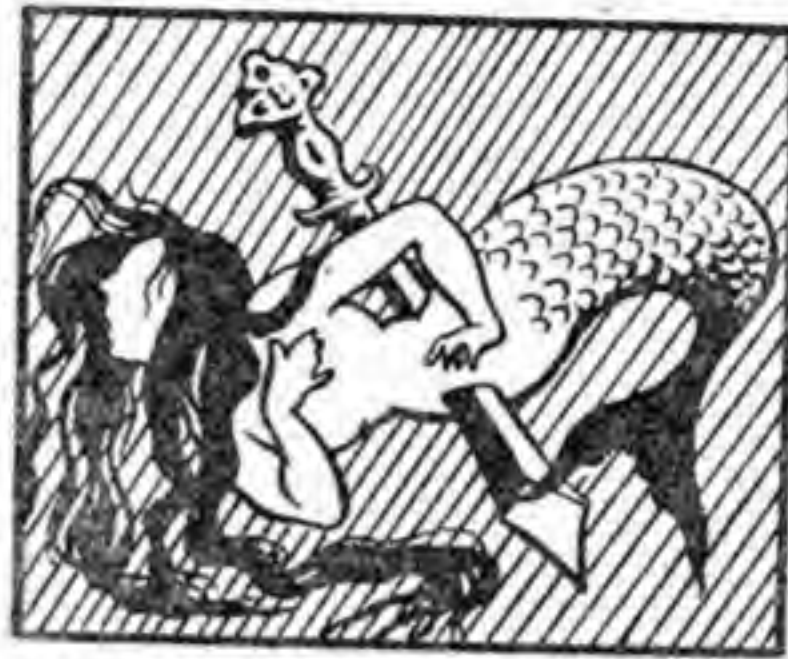


## 女性切腹に

ついでに

## 雑感

皆川波留子



中康先生、ついで田谷先生などの貴重な御発表から女性切腹についての話題が本誌の重要な一部分であった時代がありました。が、近頃では、だんだんその方面の記事が消え云って行くようで淋しい感じがします。私は現在、東京の女子短大の学生ですが、従前からこの面に関心を持っていますので、私の雑感を皆様にご披露したいと存じます。

## (一) 本当の切腹とは？

切腹の原始的な形が本当に自分の力で自分の腹部——腹部といっても心窩部から恥骨の上までの広い部分をいうのですが——に切傷を加え、それが死亡の原因の一部になる自殺の形式であったことは前からの解説でお分りでしょうし、それが徳川時代に入ると、まるで形式的になって切腹の作法だけ(?)が重

く見られるようになったことも御存知のことと思います。そのような見た目だけの切腹は歴史的に見て行けばともかく、本来「腹を切る」という行為と一緒に論ずることが無理であるように思うのですが如何でしょうか？

たとえば女性の切腹の場合について考えてみましょう。和服の女性が切腹しようとする場合、きちんとした服装で切腹しようとするれば、帯の位置がどのようであったにしろ、その襟を寬げて臍まで出すことは不可能であり心窩部が狭い巾に露出するだけに過ぎないでしょう。諸肌ぬぎになっても違う点は、心窩部の露出する巾が広くなるだけに止まるのです。私は素肌に腰巻だけで浴衣を着て細帯をしめ、諸肌ぬぎになってみました。が、上腰部でさえ十分に露出するのは難かしいことが分りました。つまり女性が切腹らしい切腹をするには、少くとも帯をゆるめ、時には腰巻さえ、ゆるめる必要があるのです。処が、そうすれば当然、その切腹には「慎しみ深くない」という批判が与えられてしまうでしょう。よく畠山勇子女史の切腹が女性切腹の華といわれますが、史実によると、この切腹は心窩部を皮切(二—三ミリ位?)で巾六センチ(二寸)位となっていました。これでも見事な切腹といえるのでしょうか。この場



合の自決の原因は九九%位まで咽喉を突いたことによるものです。

身だしなみよく切腹するためには当然、腹を切る行為は二次的になり、形の美しさが主体になります。腹を切ることを主体にすれば、どんな気丈な人でも形の崩れは避けられません。特に女では男よりも、それが極端になるのです。ですから形を主にした切腹では、形の美しさによって切腹を批判し、腹を切ることが主になっていると思われるものでは、切腹の様子を主にして批判しなければならぬはずで。

## (二) 切腹の実験

そこで私は、やはりこの方面に関心を持っている友人と大胆な切腹実験をやってみました。私たち二人は丁度、体格が同じ位(約五尺、四八—五〇キロ)で同じ脂肪質タイプなので特に実験に便利でした。

この実験の目的は、安全な範囲で二人が違う深さに切ってみて苦痛の程度を調べることでした。徳川時代の作法では高々深さ五分(約一・五センチ)までとなっていましたので、友人(Aさん)は約二分(七ミリ位)私は四分(一・三センチ)位の深さに切ってみることにし、鋭利なメス消毒用具、念のため縫合用具まで外科書を参考に用意しました。また確実のためAさんの腹部は

私が、私のそれはAさんが切ることになりました。これは昨年、盛夏のことです。

まずAさんが正座し、切りよいよう両腕を後に廻した後で逆に腕を組みました。こうすると体が反身になって比較的便利です。私はその右脇に座り、左手を後からAさんの左脇へ廻し脇壺を、ぐっと掴み、右手に刃先から七ミリの処に麻糸を巻いたメスを下腹の中央位の高さで、ぐっと切り込むように切入れました。Aさんはピクッと動いただけで平気でしたので、私は約四—五センチ右へ切廻しました。固い滑るような感じで真白な皮下組織がスーッと見えてくると、あちこちからポツポツ血がにじみ出し、ずっと傷全面に溢れて太ももへ流れ落ちました。Aさんは「ジーンと痛い」といいながら傷口をながめていました。しかし傷口は余り開きません。三分位で大体、血は固まってしまいました。一番痛かったのは、はじめ切り込む時で、引廻す時は重苦しい引つれるような感じだったそうです。Aさんは自分で傷口を消毒しガーゼをあてて繃帯をしました。

次に私が全く同じ様に実験しました。私の場合には、切り込んだ時より引廻す時がずっと痛く感じ、血の流出が早く大分多いようで十分位も出血していました。また傷口が私の場合、一センチぐらい開き黄色い脂肪がはつきり見られた点が違っていました。傷口が開

いたので二カ所、縫ってもらいましたが、これは慣れぬことでもあり本当に痛く脂汗を流し呻き声を立ててしまいました。二人とも治療は早く二週間位で治りましたがAさんの傷は縫わなかったためか却ってかなり跡が残ってしまいました。

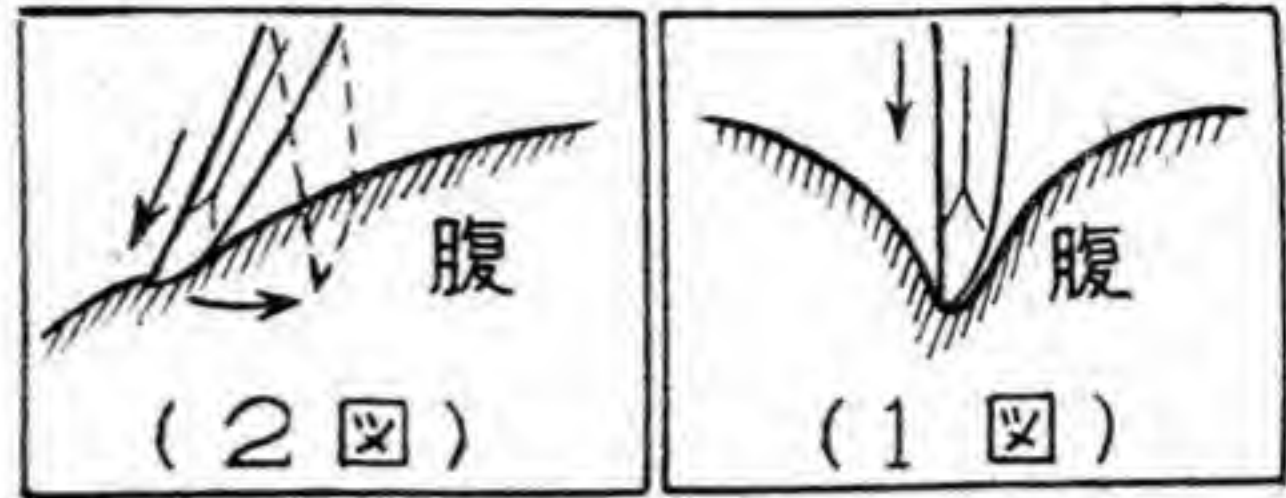
勿論、この実験の他に真一文字に右脇壺へ引廻す(一五—二〇センチ)ということと、その動作を自分でやるという精神的重圧も考えに入れるべきだとしても、私たちは五分位までの深さの切腹なら、切腹しようと思った人にとっては、それほど苦痛ではあり得ないことを確信しました。逆にいえば、それだから切腹の作法に高々五分までと決められたともいえるでしょう。私たちとしては二—三分(数ミリ)までの切腹は、いわゆる皮切の中に入れて別に考えるのがよいと思います。

## (三) 切腹の分類

そこで私たちは切腹を、その切り方の程度から次のように分類してみたいと思うのです。

(イ) 形式的切腹 腹部に全く傷をつけないか(扇腹その他)または皮切(二—三分まで)に止まり、生命に全く影響がなく苦痛の少ないもの、上記の畠山勇子さんの切腹はこれに属します。





## (ロ) 本質的切腹

ある程度以上の出血と苦痛を伴ない、時にはその傷だけが生命に重大な影響を与えるようなもの。これを二群に分けてみました。

## (ハ) 浅い切腹 傷

が脂肪層の深さに止どまっているもの。苦痛はあるが出血はそれほどなく、自然止血が早くて生命には余り影響がないもの。介錯しなければ絶命し得ない。

(ニ) 深い切腹 傷が筋層に達し、または腹壁を切断するもの。苦痛が強く出血もひどい。そのまま放置しても絶命し得る。

本質的切腹では女性の場合、脂肪層が厚いので広い範囲に引廻すのには浅い切腹でもかなり苦痛を伴うでしょうし、腹壁が柔いために切り悩むという苦しみが伴うだけ男よりつらいわけです。

なお私たち二人の経験では臍より上と下

腹部とでは、刀の当たった時の感が全く違っています。上腹部では、どちらかといえば尖鋭に、下腹部では一般にやや鈍に感じ、おそらく切腹の感じも、ある程度ちがうことでしょう。

## (四) 切腹の予想

私たちは自分がもし切腹するとしたらどうして切腹するか色々工夫してみました。次に、そのあらましを御紹介してみよう。

## (イ) 服装 勿論、私たちは本質的切腹を予定しますので出来るだけ着衣をつけないことを望みます。田谷先生などの切腹例でも腸が

溢出するほどののは殆んど全裸に近いようです。しかし私はブラジャーと浅いパンティ位(もちろん純白の)はしたいようにも思います。どちらか一方をとるのなら、むしろ全裸を望みます。Aさんは全裸がよいようです。

ただ問題になるのは、前にもいったように下腹部が柔かいので二人とも座ると少し下腹がくびれたようになり突立てるのに困ります。片手が左脇を握むとよいのですが、片手突きになって力が足りません。Aさんはガーゼ布で本誌にもあったように力士の締込み風に堅く下帯をするとういと主張します。

つまり、服装として

私——全裸(立ち腹)

ブラジャーとパンティ(立ち腹)

Aさん——全裸(立ち腹)

下帯姿(正座)

のどれかを選ぶわけです。

(ロ) 刃物 がないので、よく切れる細身の出刃を使います。

(ハ) 切り方 実験で分ったことは、刀を垂直に腹に押しつけても、なかなか突き入れられませんが、ちよっと刃を切るように動かすとプスツと楽に刃が入ります。切腹のはじめに突き立てられず悩むのがあるようですが、これはヤリで突くようにするため(図1)で切るようにすれば何度も突き直すことはありません。(図2)かえって引廻す時に、ちよっとでも力をぬくと、刃が皮膚を滑って皮切になってしまいますので片手引きは困難でしょう。

二人とも勿論、十分に腸を溢出させる覚悟でやります。十文字腹は、ちよっと自然に血が跳ねたのと違い腹一面、血の海になるので感心しませんから、真一文字に全力をつくすつもりです。

以上の雑感はいかがでしょうか。田谷先生はじめ皆様の御高評を頂きたく存じます。

(おわり)





探し  
たす  
ちび  
仲がよる  
猿ぐつわ

# 川柳雑記

三 条 卓 史

昭和四年（今から丁度、三十年前）講談社が発行した「川柳漫画うきよさまさま」という本の中に猿ぐつわを詠んだものが五首あったので茲に拾って見た。

探し出す度伸び上る猿轡さるもつわ

猿轡強盗の目をちらり見る（きん坊）

猿轡金のみならぬ慾があり（映 緑）

猿轡一番鶏を夢できき（剣花坊）

猿轡助けた奴がまた口説き（薦 雄）

前の四首は皆、家の中の状景だが、五首目のは野外の状景である。谷脇素文氏の漫画が

猿ぐつわ強盗の

目も

ちらり

見る

（きん坊）



面白いので、とても氏の筆力には及ばないが、大体の構図を模写して見た。五図のうち四つまでが日本髪であるのは、氏の好みによるものであろうか。昭和初期と云えば、平常は殆んど洋髪になっていた時代である。

ただ一冊の本にこれだけの句があるのだから、江戸爛熟期には大分詠まれていただろうと思つて、「誹風柳多留」に眼を通して見た



猿ぐつわ



金のみならぬ

慾があり（映緑）

て

川柳は十七音と語数が制限せられていたので、詠み難いけれど、出来た句には余韻があつて却つて面白い。即物即詠のものもあるが、その一句からさまざまな状景を想像する事が出来る。

一方、縛りの川柳というと、これも寥々たるものである。

「柳多留」の中からは、辛うじ

やむことを得ず生酔をしば

るなり

女房を縛つておいて奈良茶飯

の二句を拾うことが出来た。前者は即物即詠であるが、後者はこの一句から色んな場面が想像せられて面白い。

◇

一句一句独立した川柳を何首か並べて、一種の抒情的なものは出来ないだろうか、常々考えていたが、この機会に、或る夫婦の責めを主題にして試作して見た。句外の余情は一切、読者の想像に委せて、ただ時間的な推移の順に次に掲げる事にする。

縛られる女手足に化粧をし

猿ぐつわ

一番の頸もと

あやでききき

（剣花坊）



夏場所のテレビ見ながら衣服剥ぎ夏帯を出しあのように締めて見ろ小股揃い妻はもろくも膝をつき負けた罰今夜はちツときついぞよ存分に責めたと女に誓わせる四つ這いの背をしなわす十五貫立ってろと柱に倚せて綱を持ち苦しげな呻き洩すや人柱はりついた柱の背へ鞭の音悲鳴には用がないよと猿ぐつわ猿ぐつわ髪を乱して首を振り

が、これは案外に一向詠まれていないので、がっかりしてしまった。却つてそれを読んでいるうちに、ぼつりぼつりと句が浮んで来たので、それを掲げて徒勞の埋合わせにする事にした。

懐中電灯に照らし出された猿ぐつわ

猿ぐつわのうなじ見ている頬冠り

あきらめて顔を伏せてる猿ぐつわ

猿ぐつわ鬚が崩れて揺れている

夜が更けて帰れば妻の猿ぐつわ

猿ぐつわ背中合せに括られる

猿ぐつわ裾を乱して夜明けまで





猿ぐつわ

助けな奴が

またい説き

(芭蕉)

後手に縛り直して曳廻し  
猿曳きのように縁側歩むなり  
後手の背を突かれてツンのめり  
鏡台に哀姿映して引据える  
ぎゅちりと喰い込み見えぬ紐の生地  
チクチクとくぼみつくやペンの先  
小机をまないた代り美鯉一尾  
哀れやな荷物のように縄をかけ  
縛られた白い素肌にまぶしい灯



行水母縛られて庭の闇

にんまりと鞭振り上げる夫の眼  
柔肌あはだに二筋三筋鞭の痕  
グツタリと動きもやらぬ白い影  
休憩といえども紐はゆるみなく  
擦り込んだ薬に紅唇また歪み  
左右の手たんすの環に吊るされる  
猿ぐつわ針を持つ手に眼をそむけ  
一本の針が強いやこの狂舞  
問いかける眼顔に呻いて首を振り  
がたがたと簾箔を揺って身を悶え

美しい肌を落書帖にする  
紅棒で女の胸に輪を描き  
鮮やかな輪を金的に紙吹矢  
身をよじて呻けば美体なお美麗  
縛られたままうとうと空白む  
以上三十六句で構成した。称して「連鎖川柳」という。「言葉多きは実少なし」といわれるが、これもその類から免がれまい。  
最後に、幻想的な一句を掲げて皆様の御味解を俟つこととする。  
行水の母縛られて庭の闇



告

白

## エネマ・マニア

— 星 暗 水 清 —

## (一) 新婚旅行

元来、旅行好きな私は、かねがね一生一度の新婚旅行には、日程と金の許す限り豪華にやり度いと思っていた。世話をしてくれる人があって婚約もまとも、一月二十四日、いよいよ式を挙げる事になり、新婚旅行には七泊八日で北陸東北の温泉めぐりと決った。二等車の窓から見る雪景色、其の土地の名産の味、一寸恥かしい様な会話、何もかも楽しかった。山中温泉、片山津温泉、青森県の浅虫温泉を巡り、そして岩手県の花巻温泉に着いたのは、家を出てから六日目であった。旅に出ると便秘するのは誰もが経験する事。まして元来、便秘性の妻は一度の通じもなく、事が事だけに一人胸を痛めておったらしい。しかしだんだん食慾は無くなり、折角、旅館で出して呉れる山海の珍味も咽喉へ通らない有様になった。私も其の様子に不審を抱き「どうした？」と聞いて見た。新妻は赤くなって、もじも

じしていたが、遂に思い切って小さな声で「私、便秘して苦しいんです。」

私は心の中で「しめた」と手を打った。そして或るプランを思い付いた。しかし時計を見るともう九時過ぎである。雪は休む暇なく降っており、さすがの行楽街も熱海や伊東と違ってヒッソリ。店と云う店は殆んど戸を締めている。

「なあんだ、それなら浣腸すればすぐ直るよ。早く言えば良かったのに。しかし今夜は、もう薬屋は閉まっているから明日まで我慢しなさいよ。」

妻は小さく、うなずいた。

翌日、花巻温泉を後に仙台へと向った。午後三時頃、仙台のクーポン指定の旅館に着き、休憩してから二人で買物に街に出た。

間もなく一軒の薬局を見つけた。一つ妻に浣腸薬を買わしてみよう。一体どんな顔をして買うだろう。内心わくわくしながら

「ねえ、此の薬局で浣腸薬を買っておいで」「いやよ、恥かしいんですもの。下剤を買ってもいい？」

「駄目駄目。下剤なんか飲んでは何時トイレに行き度くなるかも解らない。明日、松島へ行って慌てても知らないよ。売っている物をお金を出して買うんだから、何も恥しが事なんかないさ。」

しかし、どうしても、もじもじして入っ



て行かない。残念乍ら期待した新妻の購薬光景を見るのを断念して私が入って行った。私自身も多分に恥しかった。『どうぞ男の店』

員が出て来ます様に』と祈った。ところが一番、苦手の若い女性が出て来てしまった。『いらっしやいませ。何を差し上げますか』



とにかく買って行かない限り、妻にああ言った手前、具合が悪い。思い切って

「浣腸薬下さい」

女店員は心持、目が輝いた様に思えた。抽出を明けてゴソゴソしていたが

「大人用ですか、子供用ですか」と聞く。

「大人用」と答えて、何んでも良いから早く呉れないかなあと思っていると、又

「お一つですか」と云われて、思わず、

「二つ」と答えてしまった。

薬局を出て他に二、三、買物をして旅館に戻った。未だ夕食には間がある。

「さあ、手当をして上げるから横におなり」

「いや、もっと遅くにして下さい」

「だめだ、今しないとまた夕食が喰べられないよ。すぐ終るから、一寸辛抱して」

半ば強制的に妻を横にさせて、買って来た軽便浣腸を取り出す。すぐポケットに突込んで来たので、どんな薬をよこしたかも見なかった。白いパラフィン紙の袋に『さくら浣腸』と書いてあった。ピンク色で可愛い。妻は手で顔をかくして、じっと私の手当を待っている。

ああ何んと素晴らしい光景。今迄、独身時代色々空想していた、どんなイメージより美しい。感激に手がワナワナとふるえた。

空になった浣腸器を鼻紙で包むと、  
「痛くなかった？」聞いてみたが、妻は「う



うん」とニッコリと笑って悪戯つ児のように両手で顔を掩うと、指の間から片目をニッと出すのだった。

其の晩の夕食は、さも美味そうに何杯も喰べていた。

「今日の浣腸どうだった？」と聞いたが、それには答えず

「私が小学生だった頃、学校の衛生室に行くと、何時もガラスの浣腸器が見えるの。そして、それを見るのが楽しみだった。何だか羨しい様な気がしたの」と小さな声で言った。

私は、やたらに彼女が可愛らしくなって、もう一生、離さないと言った。そして其の晩、私がエネマ・マニアである事を打明けた。

翌日は雪も止み快晴。雪の松島へ行く。

松島から塩釜までは遊覧船が出ているが、冬は殆んど乗客が無い。私達の乗った船も乗合船ながら私達二人きり。真中に火鉢を置いて窓に写る美しい岩や島に見取れていると、妻がハンド・バッグから何やら紙に包んだ物を取り出し

「あなた、これどうしよう？」と言う。

それを取って開いて見ると、昨夜の浣腸薬のカラだった。

「なんだ、君、まだ持っていたのか」

「ええ、何んだかあの旅館のおトイレに捨てるのが恥しかったものですから……」

そして、カラは塩釜の公衆便所に捨てられ

た。

これは今から六年前の話である。

そして、その時のもう一個の『さくら浣腸』は私の軽便浣腸薬コレクション第一号として今も大事に保存されている。

## (一) 浣腸ごっこ

私の家は周囲が畑で、隣家とも相当離れている。だから夜は無用心のかわり、プレイをするには持って来いの場所である。二年後に子供が生れたが、それまでは二人きりで何をするにも全く気兼ねのいない私達だった。

私達は時々、こんなプレイをした。浣腸用のスポイトにグリセリンを満し、二人の中央に置いて、腕力でそれを奪いあつて相手に浣腸するのである。そして、その時の私達の服装は、私がシャツとパンツ、ステテコ。妻はスリッパとパンティ。『用意ドン』の合図で浣腸器を奪いあい、先に奪った者が相手を浣腸するのだが、妻も必死になって抵抗するのでなかなか容易に目的を果すことは出来ない。しかし結局は妻が力尽きて負かされてしまふのだが、勝負がつくと今度は腸に入った薬はやがて、効めをあらわし出し、その強い効力は一秒の休みもなく妻をいじめる。「ねえ、早くお手洗いに行かせて」と、せがむ。妻は至って辛抱強くない。五分もすれば、もうたまらないらしい。十分も辛抱させると、

油汗をたらたららし、顔面が蒼白になる。もともと苦しませるのが目的でないからそのぐらゐで何時も離してやるが、足をばたばたさせて苦しむ姿を見ているのも悪くない。それでも三度に一度は負けてやらないと、妻の機嫌が悪い。だから少し力を抜いて負かされてやると、勝誇った様な顔をしているが、何んと云っても実力は私の方が強いものだから、辛抱し難くなれば、はね除けて行ってしまう。だから私は十分間なんか辛抱した事は無い。

## (三) 軽便浣腸薬

日本には誠に便利な物がある。イチジク浣腸」と云えば、恐らく知らない人はないだろう。そして一度や二度は必ずお世話になっている筈である。多少は海外にも輸出されているらしいが、外国ではこの様な軽便浣腸薬は聞いた事が無い。私は新婚旅行以来、この軽便浣腸薬に、どの様なメーカーと製品があるかと云う事に興味を持ち、蒐めてみる事にした。

市内、S薬局に他の事で交際しているAと云う娘がいる。或る日、思いきって軽便浣腸薬には、どんな種類があるかを尋ねて見た。勿論、その店には「イチジク」「アイデアル」「東宝」「ハート十字」「キク印」五種類しか無かったが、まだ数種類、聞いた事があると云う。其処で他の薬局へ行つて、さりげな



く「浣腸薬を下さい」と云うと「薬局浣腸薬」と云うのを呉れた。これは、どうもその店の問屋の関係で扱う品が違うのではないかと思い、旅行した時、その地の薬局に寄って買ってみて二・三の新種を発見した。これは面白い。旅行の土産にこけし人形など買うより、一寸恥かしい買物だけにスリルもあり、買った場所と年月日を記入しておけば記念にもなると思い、それから旅行をするに必ず軽便浣腸薬の買物をする事になっている。それでもその店での種類が全部、手持ちの品であっても、それでは結構ですと云って出て来る事も出来ず、仕方なし重複品を買う事もある。そして今迄に子供用（一〇〇〇）大人用（二〇〇〇）重症用（三〇〇〇）を別種として、五、六十種に上るコレクションが出来た。

薬務公報の公定規格外医薬品製造許可とか云う欄を見ていると、次々と新しい軽便浣腸薬の製造許可があり、新種が作られている事が解る。恐らく二百種近く現存しているのではないだろうか。

先日、親しい薬局で薬事日報という新聞を見せてもらっていたら、左記の様な、私達エネマ・マニアには興味ある記事が出ていたの

で、一部紹介する。

の座談会の記録です。

——前略——

小林 先ほど浣腸器の話が出ましたが、イチジク浣腸が草分けでして今では知らない人はいないくらいです。湯浅さん（イチ

ジク製薬の社長）今日までの苦心談を一つお願い致します。

湯浅 私の全部は浣腸薬であります。この浣腸薬は医者である先代の田村氏の発明であり、その動機は簡単に各患者に行っ





浣腸を嫌い、特に婦人の場合は、まったく嫌うので、何かよい方法はないものかということとで今の浣腸薬が出来るようになりました。

#### ——中略——

小林 湯浅氏の意見は一から十まで同感です。ああいう形態の浣腸薬は相当、類似品があるでしょうね。去年、房州へ孫を連れて行った時、波打際を散策したところ、浣腸薬のカラーが沢山打上げられており、中には名前を聞いたこともないものがありました。本舗としては同種品を調べておられるでしょうが、一度、波打際へ行ってみられたらいかがですか……。

湯浅 下水の終着駅にカラーが沢山あり、再生したらと云う話もありましたが、同種製品については三、五十もあり、何れにしても油断は出来ません。

片平 あれは形から出た名称ですか？

湯浅 先代がつけたのですが、恐らく形を採り入れたものでしょう。ただ有難いことには、「イチジク」はゴロがよいので、宣伝が行き渡りました。それに工員諸君も誠意と感謝の念で品質の向上に努めています。

#### ——後略——

#### (四) エネマ・シリンジ

よく、お祭りや夜店に行くと、何んと云うのか知らないが、薄い風船に三分の一ぐらい水を入れ、あとは空気を入れ、ゴムヒモを付けた物を子供に一コ十円位で売っている。その風船に水と空気を入れるのにエネマ・シリンジを使って作っていた。

つい、それに見惚れていたら、一緒に散歩に來た妻が戻つて来て軽く背中をつつく。顔を上げて妻の方を見たら、意味あり気に微笑していた。

最近ではエネマ・シリンジを使わないで金属性の大きな浣腸器型の空気入れを使っている。「A誌」の第一巻、三号にフランスの艶笑画として騎士がドアの鍵穴からのぞいている画で、其のドアのところをめくると、侍女が奥方に浣腸している写真が載っていたが、此の侍女が持っている浣腸器がどうも此の空気入れの様である。一回で優に三〇〇CCは浣腸出来るだろう。一度使ってみ度い様な気がするが、何処に売っているのか知らない。

人間用の硝子製唧筒式浣腸器（普通のローソク型浣腸器）では、一〇〇CCが一番大きい。それもある事は知っているが地方では必要性が無いのか入手出来ない。薬局に依頼するのにも恥かしいから今度、東京にでも行った時、買って来ようと思っている。

先日、動物用の医療器具の目録を見せても

らったら、五〇CCから三〇〇CCまであった。そして、その他、自動式浣腸器、ダマリソ式とか云う浣腸器等、一度実物を見度い品物ばかり載っていた。何かの本に牛に浣腸している写真が載っていた。それはバケツに石鹼液を入れ水道に使うゴムホースを使っていた。もうああなると、いくらエネマ・マニヤでも何の魅力も感じなくなる。

#### (五) 私の浣腸感

私の浣腸に対する魅力は何と云ってもそのものの光景である。そして其の対象は若い女性で無くてはならない。想像しただけでも、ぞくぞくする光景である。勿論、和服の場合も悪くない。そして、それを受ける女性の羞恥心が強ければ強いほど私達エネマ・マニヤにはチャーミングに写るのである。

浣腸液に依る効力は全く強烈である。どんな強がり云々している人でも、浣腸を受けて十分もすれば腸をしぼられるような苦痛を感じ油汗が出て来る。多少なりともマゾヒズムの性格を持った人ならば、この強烈な苦痛、そして排便してしまえば一瞬に開放される感覚に魅力を持つてしよう。勿論、浣腸液の種類に依って其の強弱の差はあるが、やはり私は一番グリセリンが好きである。

最近、鳥居薬品工業から売り出されている「ソルビチール」と云う浣腸薬はグリセリンに



勝るとも劣らないと云われているが、未だ私は使用した事が無い。一番強烈で後に不快感を残すのが濃い食塩水である。まるで腸の中に火が付いた如く腹痛を伴って、すぐに強烈な蠕動が起り、そして排便した後まで排便感と腹痛を残す。石鹼液は其の作用が固い古便を軟化させるにあるのだが、強い刺激もない

から、遊戯としての浣腸には一寸物足りない。もっとも大量注入を希望する人なら別だが……。

私は未だ一度も医師や看護婦さんに浣腸された事が無い。小さい時は何時でも母がして呉れた。皆さんの体験記や告白を読んで少々羨しい気がする。一度若い看護婦さんに浣腸

していただき度いものであるが、体は健康だし、便秘なら自分で解決してしまうので機会がなく残念です。私の日頃、常に念願している事は、浣腸の好きな皆様方と親睦会を開き大いに語り合えたらどんなに素晴らしいだろうと云う事。一日も早く実現出来る日を期待し乍ら終りとする。

# 〔新版〕女体緊縛フォトオンパレード

R組 百花撰 大手札判 (印画紙9×13種)

各組一枚一組 (全部送料共)

|        |       |
|--------|-------|
| 一組一枚   | 一〇〇円  |
| 五組五枚   | 四〇〇円  |
| 十組十枚   | 七五〇円  |
| 二十組二十枚 | 一四〇〇円 |
| 三十組三十枚 | 二〇〇〇円 |
| 四十組四十枚 | 二五〇〇円 |
| 五十組五十枚 | 三〇〇〇円 |
| 六十組六十枚 | 三五〇〇円 |
| 七十組七十枚 | 四〇〇〇円 |

|      |                 |
|------|-----------------|
| R 10 | 鎖しはり晒責 (萩千恵子)   |
| R 11 | 股間しはり正面 (伊吹真佐子) |
| R 12 | 女学生制服しはり (須川令子) |
| R 13 | 尻立後手しはり (萩千恵子)  |
| R 14 | 開股しはり (川辺砂登子)   |
| R 15 | 猿ぐつわの魅力 (伊吹真佐子) |
| R 16 | トイレでの縛り (須川令子)  |
| R 17 | 立木野外しはり (村田那美子) |
| R 18 | 緊縛横臥 (厚狭春江)     |
| R 19 | 足掲椅子ゼメ (伊吹真佐子)  |
| R 20 | いたぶり (春日ルミと伊吹)  |
| R 21 | 帆立しはり (萩千恵子)    |
| R 22 | 強烈な椅子ゼメ (伊吹真佐子) |
| R 23 | 逆さ本吊りゼメ (佐賀美智子) |
| R 24 | 後手吊りゼメ (伊吹真佐子)  |
| R 25 | 逆さ本吊りゼメ (同右)    |
| R 26 | 股間しはり後手 (中塚文子)  |
| R 27 | 逆さ本吊りゼメ (伊吹真佐子) |
| R 28 | 変型足手しはり (加賀利江子) |
| R 29 | 松樹後手しはり (村田那美子) |
| R 30 | くさりゼメ (伊吹真佐子)   |
| R 31 | 薄羅の後手緊縛 (加賀利江子) |

|      |                 |
|------|-----------------|
| R 33 | 股間タテしはり (中富綾子)  |
| R 34 | 首縛股間しはり (坂口利子)  |
| R 35 | 手足逆吊り (伊吹真佐子)   |
| R 36 | 和服の後手しはり (藤田節子) |
| R 37 | 仰向全裸悦虐責 (川端多奈子) |
| R 38 | 肉体美への折檻 (伊吹真佐子) |
| R 39 | お灸ゼメ (春日、伊吹二嬢)  |
| R 40 | 後手猿ぐつわ (萩千恵子)   |
| R 41 | 松樹縛り晒責 (村田那美子)  |
| R 42 | コルセット縛り (中塚文子)  |
| R 43 | 股間しはり (同右)      |
| R 44 | 手と足と緊縛 (萩千恵子)   |
| R 45 | 後手しはり (加賀利江子)   |
| R 46 | 御開帳 (萩千恵子)      |
| R 47 | くさりゼメ (川端多奈子)   |
| R 48 | 折檻の魅力 (須川令子)    |
| R 49 | 全裸の股間しはり (愛川悦子) |
| R 50 | 逆立の折檻 (大塚啓子)    |
| R 51 | 開股椅子ゼメ正面 (花坂道子) |
| R 52 | 振袖の緊縛 (村井知可子)   |
| R 53 | 腰元の吊り責 (愛川悦子)   |
| R 54 | ヌードしはり (田中芳代)   |
| R 55 | 本縛しはり (萩千恵子)    |
| R 56 | 股間しはり (村田那美子)   |
| R 57 | 落花狼藉の緊縛 (川辺砂登子) |
| R 58 | 樹間のハリツケ (益田房子)  |
| R 59 | 帆立舟のゼメ (益田房子)   |

|       |                 |
|-------|-----------------|
| R 72  | 逆エビ責め (愛川悦子)    |
| R 73  | 変形全裸股間縛 (花坂道子)  |
| R 74  | ヌード縛り (萩千恵子)    |
| R 75  | 全裸横臥緊縛 (村田那美子)  |
| R 76  | ビクニツク (須川令子)    |
| R 77  | ハイヒール (萩千恵子)    |
| R 78  | 湖畔の宿にて (須川令子)   |
| R 79  | 尻立逆しはり (大塚啓子)   |
| R 80  | 下着の色模様 (田中芳代)   |
| R 81  | 目隠し開股縛り (愛川悦子)  |
| R 82  | 後手高小手 (花坂道子)    |
| R 83  | 乳房しはり (愛川悦子)    |
| R 84  | 開股ベッド縛り (萩千恵子)  |
| R 85  | 全裸床柱縛り (愛川悦子)   |
| R 86  | 亀ノ甲縛り (愛川悦子)    |
| R 87  | ヌード股間縛り (大塚啓子)  |
| R 88  | 全裸乱れ髪 (川辺砂登子)   |
| R 89  | ガンシガラメ (愛川悦子)   |
| R 90  | 背負責め (中塚文子)     |
| R 91  | 後手股間しはり (伊吹真佐子) |
| R 92  | 腹部丸出し猿轡 (坂口利子)  |
| R 93  | 破れたシユミース (須川令子) |
| R 94  | 女学生のしはり (萩千恵子)  |
| R 95  | 仰向開股しはり (村田那美子) |
| R 96  | 乳房くさりゼメ (川辺砂登子) |
| R 97  | 野外バンド責め (村田那美子) |
| R 98  | トイレ正面排世縛 (中塚文子) |
| R 99  | 開股正面いじめ (伊吹真佐子) |
| R 100 | 乳房搾りゼメ (佐賀美智子)  |





# 汚辱地帯

楨村 奏青木 審画

(この小説の登場人物はすべて架空であること、まえもつてお断りしておきます。 作者)

小谷裕吉は、もうさっきから永いこと橋の上に佇んだきりだった。

運河のドス黒い水は澱んで動かないように見えるが、さまざまな塵芥や、ときには猫の死骸などがゆっくりと流れてくるので、それによって、やはり水が流れていたのだと気がつく。

正午のサイレンをいまだ少し先に聞いたようだったから、時計はなくても時間は大体判った。食物は昨日の朝、パンを一個口にしたら

けだったので腹は空ききって、空腹のことを考えるのも億劫なほどだった。

大都会のはきだめ、ドヤ街は橋を渡ったすぐのところにある筈で、そこには食いつめ者が集っていたが、裕吉には未だ馴染みのない世界でもあるし、素直に入っていけないものが、彼の中には残っていた。

「オイ、兄さん。大分考え込んでるようだな……」

そういきなり声をかけられたとき、裕吉は確かに警戒した。それが男の後に従っていく気になったのは、男がまともな身形をしてい

たし、眼つきも優しそうに見えたからだ、正直にいった薬をも掴みたい気持ちでいた裕吉に、正常な判断のできるわけもなかった。

男は、まず裕吉を銭湯へ連れていった。開いたばかりの銭湯は浴客もまばらだった。明るい脱衣場で、裕吉は汚れた下着を気にしながら裸になった。背広を脱いだ男が、晒の六尺褌に胸まで腹帯を巻いていたのは、一寸意外な感じがしないでもなかったが、色の白い体は綺麗で、傷痕一つなかった。ただ左の二の腕に、いやにベタベタと痛め止めの膏薬が貼ってあるのが目についたが、疑問をもつた



けの注意はひかなかった。

「ホウ。思ったよりいい駄をしてるじやないか。それにその若さだ。いくら人間が余ってるからって遊ばしておく男じやアない。好条件とはいかなかったって、四コ半の日はオンの字だ」

そういわれて、裕吉は自分の駄を見回してみた。小学校でも中学でも体育が得意だっただけあって、筋肉はよく締まっているし、上背も充分あり、我乍ら逞しい体軀だと思えた。

（ようし。働くぞ！……）裕吉は子供のようにはしやいだ気持ちになり、空腹も忘れて、

「背中、流しましょう」

と男の後へまわった。

そのとき、ガラリと境の硝子戸が開いて、背の高い青年が入って来た。浅黒い健康そうな皮膚をして、肩巾が広く、胸板が張っている。腰の柔軟さに比して、腕は太く殊更に筋骨が発達していた。真直に浴槽へ歩いて来る貌は、精悍に引き締って眼が鋭い。

「もういい。出ようか」

男が急にソワソワしだしたので、裕吉は驚きながらも、それが入って来た青年のせいだとは思わず、自分も急いで洗うのもそこそこに脱衣場に出た。

服を着ながら、裕吉が何とはなしに浴場のほうを見ると、さっきの青年もこっちを見ていて視線が合った。

「おい。どこを見てるんだ。早くしろ」

男は邪慳にいうと、もう靴をはこうとしている。裕吉は慌てて上衣を纏んだ。

銭湯を出ると、男はずんずん先にたって歩き、何軒目かのそば屋へやっと入って、ラーメンを二つ注文した。食べおわるとすぐに通りへ出てタクシーを拾ったが、男はあれきり殆んど口をきかなくなっていた。

腹ができると、裕吉はいくらか不安を感じだしていたが、いまさら男を疑ったところでしょうがなかったのである。

自動車を下りて少し歩くと、赤堀工務店と書かれた木造モルタルの瀟洒な事務所があり、男は裕吉を待たせて中へ入っていった。

暫くして男は、ジャンパーを着た頬に傷のある男と出て来ると、

「じやア、よく頼んでおいたからな。しっかり働くんだぜ」

と、足早に立ち去っていった。

「おう。こっちい入えンな」

ジャンパーの男に促されて中へ入ると、そこは、コンクリート床のガラシとした事務所、他に人はいなかった。

男は入口の戸を閉めると、乱暴にカーテンを引いて、

「俺は、この現場世話役で関根ってんだ。よく覚えとけよ」

といい、意識的に頬の傷を歪めてニタリ

とした。

「はい。小谷裕吉と申します。よろしく願います」

「よし。じやア、服を脱ぎナ」

「服を？アノ、服を脱ぐんですか？」

「そうヨ。裸になるんだ」

「はい……」

裕吉は、何が何だか判らぬまま、逆うこともできずに裸になった。そうしながら、或いは、働ける駄かどうかを見るためかもしれないと考えたが、そうではなかった。

「オイ。何をモゾモゾやってやがんだ。そんな汚ねえ猿股ア棄てちまえ」

「……？」

「心配いらねえよ。ホラ、この褌をやるんだ。新品だぜ」

渡されたものを見ると、いう通り褌には違いないが、五十糎ぐらいの晒布に紐をつけて横で結ぶようにした簡便なものだ。裕吉は、刑務所で囚人が色のついたそんな褌をさせられると誰かに聞いたのを思いだして、フト嫌な気持ちをした。

「褌をしたら、こっちイ来ナ」

「アノ、服は——？」

「そのまま来るんだ」

着るものも支給してくれるのかと思いいながら従っていくと、裏の夫婦宿舎に連れていかれ、



「ここがおまえの寝起きする部屋だ。今日はもう仕事はいいから、みんなが帰って来るまで体を休めていな。ナニ、様子はじきに判らア」

といって、関根は出ていこうとする。

「あの、私の服を——」

「服を着るなア仕事にいくときだけだ。部屋じや襦だけにいるんだ。社長の命令だからしようがねえサ。寒かったら、そのへんの布団をだしてかぶってな。じや俺は事務所にいるからナ」

一人取り残されると、裕吉は急に体が震えてきた。十月だから裸でも堪えられぬほどの寒さではない。それなのに、止めようとすればするほど震えはやまなかった。

部屋は十畳ぐらいの広さで、壁は荒壁のままだし、床にはゴザが敷いてあるだけだ。隅のほうに積みあげられている布団は、脂で黒光りし、ところどころ綿がはみだしている。そうして、部屋全体に犬小屋のような醜れた臭いが充満していた。

夕方になると、ダンプカーに乗せられた二十人余りの人夫が現場から戻って来た。彼等は事務所で作業衣から地下足袋まで脱がされ襦一つになって人夫部屋に入る。大抵は二十代の若者だったが、誰の皮膚もツヤを失い、明らかに衰弱している弛みが見られた。作業から解放されても、談笑する者は一人もなく、

新入りの裕吉を見てもまるで無関心だった。

次々として来る仲間を、恐る恐る上眼づかいに眺めていた裕吉は、三十過ぎらしい年嵩の男の貌を見ると、思わずアツと叫びそうになった。似ている。しかし、まさか——旦は否定してみたが、それは余りに似すぎていた。裕吉の記憶に間違いのないならば、その男は、裕吉の中学時代に体育担任教師をしていた溝口である。そして、裕吉は、溝口が学校を辞めたとか辞めさせられたとかいう噂を耳にしてもいたのだ。

裕吉は暫く躊躇<sup>ためら</sup>っていたが、思いきってその男のほうに寄っていった。

「アノ、違っていたら赦してください。溝口先生じやありませんか？」

瞬間、男の顔色が確かに変った。そして、ものもいわず裕吉を瞞<sup>た</sup>めていたが、

「君は……？」

とかすれた声でいった。

「やっぱりそうだったんですね！ 僕です。」

中学でお世話になった小谷裕吉です」

「ああ、小谷。思ひだしたよ……」

体育の成績のよかった小谷の名を、溝口は忘れていなかったが、少年時代の面影は一寸見たくらいでは判らなかつた。

「小谷。どうして、また、君はこんなところへ——？」

「僕はしかたありません。それより、先生こ

そ！……」

「俺も——そうだ。しかたなかったんだ」

溝口は、昏い眼の底をキラリとさせて、自嘲するように笑った。

溝口の退職願には「一身上の都合により」と書かれていたが、勿論それは形式であり、事實は、校長をはじめP・T・Aの圧力を受けた結果だったといっている。理由は、教師としての適格性を欠くというのだったが、彼自身それを認めざるを得なかった。さすがにマゾヒストだと指摘する者はなかったが、それにもかかわらず強度なものであることは、彼が一番よく知っていたのだ。もっとも、十年近くも大禍なく教員生活を続けてきていたのだから、それは魔がさしたようなものだったかもしれない。

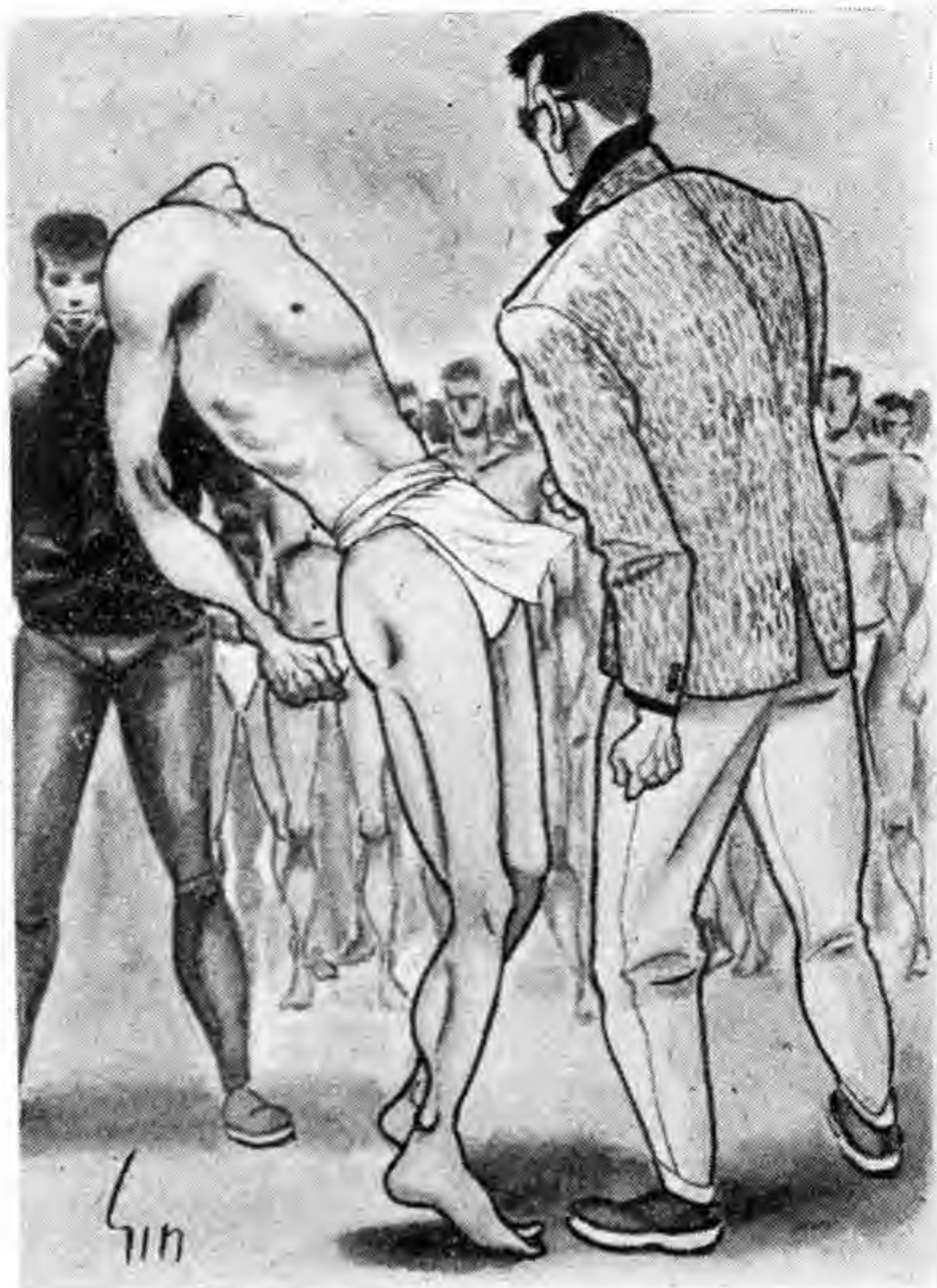
一年生の体育の時間だった。予定の教材を終了してまだ時間が余っていたので、徒手体操でもやらせようかと思つたとき、フト悪魔の囁きを聞いたのがいけなかつた。溝口の脳に浮かんだのは、何とも奇妙な遊びだったのである。

「さア、みんな、いいか。時間がまだ少しあるから、一つ面白い遊びをやるう。鬼ごっこだ。しかし普通の鬼ごっこじゃない。みんなが全部鬼で、先生を捉<sup>つかま</sup>えるんだ。捉えるだけじやアだめだゾ。先生が『参<sup>まゐ</sup>った』というま



でやるんだ。どうだ。時間がくるまでに先生を参らせることができるか。先生は仲々参ったとはいわん。いいか。では、始め！」  
 いいおわると、溝口はサッと駆けだした。五十人余りの生徒は、ワアッといってその後を追う。溝口は巧みに追手の間をすり抜け、

右に左に逃げまわる。男生徒も女生徒も、我こそは先生を捕えんと、真剣な顔をして一心に追い駆ける。それはまるで暴れ馬を大勢が鎮めようとして追いまわしているような光景だった。そのうちに勇敢なのが溝口の脚にしがみつくと、はずみを喰って見事に転倒する。



それから後は、もう男生徒だけの領分で、女生徒達は周りをとりまいてキヤアキヤアと囃したてる。男生徒達は、子供ながらに意地になって、倒れた溝口の腕や脚をよってたかって押えつける。砂埃で眼も開けていられない溝口は、それでもまだ「参った」とはいわず、満身の力で撥ね返えそうと腕いた。一人が茶目ツ気のつもりか溝口のトレーニング・パンツを引っぱると、二、三人がそれに加勢して、勿ちズルズルと脱がしてしまった。それと一緒に靴も抜け落ち、溝口はサポーターをさらけ出した。女生徒達の喚声が一段と高くなる。それに勢をえて、男生徒達は溝口のシャツをも剥ぎにかかった。そして、とうとう、溝口はサポーターだけを残して、殆んど裸形に等しい姿にされてしまったが、途端に終業のベルが鳴り響いた。「やめイ！」といって起ち上った溝口は、汗と砂にまみれた軀を拭いもせず、倉皇としてトレパンをはいた。  
 「ベルが鳴ったから今日はやめるが、先生はまだ『参った』とはいってないゾ。しかし、みんな勇敢だった。大いによろしい。また今度機会をみてやるから、そのときは先生に参ったといわせるんだ。いいか」  
 そうして、その次のときには、六尺褌を締めた。溝口の密かな悦しみも、その程度ですんでいたなら、他愛ない遊びで通ったかもしれない。だがそれが導火線となって、彼の永



年抑圧されていた性向が一時に現れ、遂に特定の生徒を宿直室へ呼ぶようになると、当然のことながら急速に破滅へ近づいていったのである。

## 二

夕食になると、人夫達には銘々に、アルミの容器に入れた麦飯と味噌汁が配られたが、その日に入った裕吉には与えられなかった。溝口が半分わけてくれようとするのを、遠慮して少しだけ食べると、もう布団をひっぱりだして寝支度をする人夫に做って、裕吉も寝床を作った。布団は殆んど部屋いっぱい敷き並べられたが、それでも二人に一組のわりしかなかった。裕吉は溝口に誘われるままに夜具へ入ると、垢の臭いを不快に思いながらも、じきに寝息をたてはじめた。だから他に楽しみのない人夫達が、その後どうしていたかは、その晩だけは知らないで過ごすことができたのである。

朝になると、顔も洗わずに、麦飯とたくわんをかつこみ、世話役と称する男達に嘔吐られながら作業衣を着けて、ダンプカーに詰め込まれ工事場へ送られていく。

工事現場は、都心のビル構築だった。そこでは、昼休みが四十分だけ与えられ、午前も午後も休憩なしに、息つくまもなく働かされた。しかし、若い裕吉には体力もあったし、

仕事のない辛さに比べたらよっぽどましだった。しかし、彼が「タコ部屋」の実体を知るまでに、そう長い時間を必要とはしなかったのである。

人夫部屋には、たった一つ窓が開いていたが、それには普通、盗難予防に使われる鉄格子がはめられていた。しかし、この場合には、それが如何にも大袈裟であることからみても、人夫の逃亡を防ぐためにしつらえられた物であるのは明らかだった。そのうえ、出入口にはさりげないふうでいつも監視がついている。単独外出は勿論厳禁、便所へいくのにも見張りの眼は光っていた。全員が、食い抜き、だが、食べものの悪いのは論外で、刑務所以下だ。こんな食事で重労働が続いたら、魅を毀すのは判りきっていた。賃銀はもっとひどい。日当僅か二百円で、しかも日払いをしてくれないうえ、休みや雨の度に、二百円ずつが逆に借金となって残っていくのである。そして、大半の人夫は、働く気力ばかりか逃げる気力さえも失って、牛馬の如く酷使され、虫のようにただ生きていくだけだった。

裕吉が逃亡を考えるようになったのは、三日目に仲間の一人が私刑されるのを目撃してからである。

その男は、石井という二十五、六の比較的元気のある人夫だったが、便所にいく振りをして脱走を企てたという理由から、私刑部屋

になっっている事務所で、数人の赤堀の子分に暴力を振るわれた。

他の人夫達も全員事務所に集められ、私刑に立ち合わされたが、いうまでもなく、それは今後のみせしめのためだった。

コンクリートの床の真中に立たされて、恐ろしさに顔の色をなくしている石井は、幹部の平出からいきなり突き倒された。

「ヤイツ。てめえ、よくも図々しく脱走しようとしやがったな！ 便所へいく振りをしようまくやろうたってそうはいかねえんだ。フフ、逃げようとして捕った奴がどんな目に遭わされるかは、てめえも承知の筈だよ。それをヨ。フフフフ。仲々いい度胸だ」

「違う！ 俺は、逃げようとしたんじゃない。ただ——」

「ただ——何だ？」

「違うんだ！ 俺は何も——赦してくれ！ お願いだ。勘弁してくれ——」

オロオロと石井は、床に両手をつき泣きかきばかりに哀願する。

「ふざけんな！ シラをきるのもいい加減にしろ。いまさら泣きごとをいって何になる。それより男らしく覚悟するんだナ」

平出は薄い唇の端を残忍に歪めると、ニタリと笑った。

事務所の窓や硝子戸は既に閉めきられ三、四人の子分達が「外張り」に立っていた。



石井には、もう絶望があるだけだ。大勢の悪童から苛められようとする野良犬のように、体を縮め、怯えた眼を焦点の定まらぬままにキョトキョトさせている。

私刑に当たった幹部は、平出の他に、大島と夏目の二人の世話役で、社長の赤堀は顔をみせていない。

十八、九才の夏目は腕をウズウズさせて待ちかまえていたように、最初のパンチを浴びせた。石井は本能的にそれをよけようとする。相手にはそれが抵抗にみえるから、かえって刺戟する結果になる。肉の鳴る鈍い音と荒い息使いが長らく続き、石井の呻きが細っていく頃には、部屋の空気も殺氣立ち、見まいとする意志に反して、人夫達の眼も異様な光を帯びてきた。

その晩、一晩中、唸り通しだった石井は、翌朝、熱のある体を無理矢理ダンブカーに積まれ作業に連れだされると、現場でも仕事が遅いといつては何度も殴られて、子供のよう泣きじやくった。

溝口は、昔の教え子である裕吉が新入りで入って来たときにはさすがにショックを受けた。恩師のあまりにも変りはてた姿を見て、彼は何と想っただろうか。マゾである筈の溝口だが、一時は正常な屈辱感で憂鬱にさえなっていた。しかし、それも、いつのまにか被

虐的な快感にすりかわってくると、今度は一つの欲望となつて彼を捕えた。溝口は、裕吉の見ている前で半殺しの私刑に遭う己を想像するようになっていったのだ。

### 三

機会は案外に早くきた。偶々居眠りをしてた監視の隙を窺って、溝口は深夜、疑装脱走に成功したのである。勿論、彈一枚のままだった。人夫をそんな姿で監禁しておくのは、一つには逃亡を防ぐためだったが、(だから石井の場合も、果して事実逃亡しようとしたのかどうかは疑しい) 溝口にとっては、むしろ逆の意味をもっていた。もう少し判りやすくいうなら、彼は裸で街の中を逃げることに誘惑を感じていたのである。

溝口は、夜の街路を、風に吹き散らされるように走った。夜気の冷たさは妙と感じなかつた。ときどき自分自身を確かめては、小路へ駆け込んだり、大通りを横ぎったりした。異常な神経のたかぶりで脳がカッカとしていたが、通行人やパトロールの警官に見えぬよう注意は怠らなかつた。

もう追手の来る頃だと思い、溝口は事務所の近くまで引き返した。銀行の蔭に身をひそめていると、まもなく入り乱れた足音が聞えてきた。頃あいをみて車道へ飛びだした溝口は、三十米もいかぬうちに捉まると、手とり

足とり事務所に連れ戻された。

叩き起こされた人夫達は、何事かと驚きながら、眠い眼をこすって集った。

床に引き据えられている溝口を見たとき、裕吉は複雑な感情に襲われた。石井のことがあつた矢先に脱走を計った無謀さにも呆れたが、それよりも、黙って一人だけで逃げようとしたことに拘った。彼は、もし逃亡の機会に恵まれたら、そのときは最後まで溝口と行動を共にしようと考えていたのだ。裕吉は冷たい眼で溝口を見ると、(やるときは俺一人だ!) と腹の中でいった。

溝口の身にグルグルと巻かれている縄目。今夜の「ヤキ入れ」は相当に凄まじいことが窺われ、人夫達はひそかに顔を見合せた。

溝口をとり囲んでいる幹部は、この前のメソバに磯西というのが一人加っている。

夏目がデスクの上に椅子を上げ、それに乗ると天井のテックスを押した。するとテックスがずれて、その間から大型の滑車が現われた。

「オイ、溝口。てめえ石井ぐらいのことで済むと思つていたら大間違いだぞ。てめえみてえな野郎は、ちつとやそつとのヤキじやアこたえねえだろうからナ、特別に念入りにやってやるぜ」

平出が憎々しげにいうと、大島と磯西が溝口の脚を括りにかかる。



溝口は、裕吉にこの姿を見られているという意識で、湧きあがる被虐感に全身が戦いた。そしてそれは、足首に繫いだ縄が滑車にかけられるに及んで頂点に達したが、三人がかりでその縄が引かれ、ズルズルと逆さに吊られて頭が床を離れた刹那、骨を砕くような激痛だけがそれにとってかわった。

「うううう……ツウ！あッ、あ、イ、痛い！ああああ……。タ、タ、ス、ケテ……助け、くれ……」

夢中で叫ぶと、溝口は、後悔と苦痛に号泣した。彼が己のマゾの限界を測定できなかったことが、大きな誤算を生じたのだ。もう裕吉の存在も意味を失っていた。

大島が乗馬ズボンから脱した巾の広いベルトを鞭にして、逆吊りになった溝口を打ちにかかった。「グワァ……」という動物のよな悲鳴があがる。磯西が合の手で棍棒を打ちおろす。色を失った人夫達は、恐いものみたさで目は離さずにいるものの、生きた心地でいる者は一人もなかった。

裕吉の脱走の決意は、そのことがあってから愈々固くなったが、決行は偶然の機会がそれをさせた。

現場からの帰り、ダンプカーの前を走っていたトラックが、横から出てきたオートバイをはねとばし、ダンプカーも危うく急停車した。監視役の現場監督が事故に気をとられて

いる一瞬に、裕吉は滑るように車からとび降りると、停車している車の蔭から蔭へ逃げながら走った。それは、仲間の人夫達でさえ気づかぬくらいの早業だった。裕吉はどこをどう走ったか、とにかく無事に交番へ駆け込むことができると、やっと我に返った。

一通り事情を聴取した若い巡査は、まだワナワナ顫えている裕吉に煙草を与え、警察電話で所轄署を呼び出したが、その精悍な横顔は、裕吉に見覚えがあった。はじめは誰かに似ているのかと思ったが、どうもそうではない。確かに一度どこかで会っているのだ。裕吉は妙に苛々して思いだそうと焦ったが駄目だった。

翌早朝、武装私服刑事、制服警官の団を乗せたトラックは、薄明をついて赤堀工務店を急襲した。そして、その日の夕利は一斉にシヨッキンゲンな見出しで、現存していた監獄部屋をトップ記事にした。

裕吉は、赤堀一味の報復を受ける危険性から、当分の間身柄を警察に保護されることになったが、それも予算のないところからまもなく打ち切られ、部長刑事のはからいで、下町の鉄工場に住み込みで雇われた。

漸く気持も落着いてきた裕吉は、何日ぶりかで銭湯にいくと念入りに垢を落した。裕吉のすぐ横では、やくざ風の瘦せた男が、兄哥株らしい年長の男の背中を流していたが、

「兄哥、こないだのポリ公が入ってますぜ。チッ、嫌な野郎だ。裸になってもあの横柄なことアどうだい……！」

と囁くのが耳に入った。

それで裕吉はつられるように四辺を見まわしてみたが、大勢の男の中からそれを見分けられる筈もなかった。しかし、そのことで彼は、不意に思いだす事ができたのである。あの交番の若い巡査は、彼が見知らぬ男に連れられて銭湯へいったとき、後から入って来た遅い駄の青年だったのだ。

それから裕吉は、仕事をしていてもその巡査のことが脳を離れなくなり、どうかするとボンヤリ考え込んでいたりして、よく嘔吐された。どうしてそうなのか、彼は自分の心を訝ったが、想いは日に日に募るばかりで、とうとう或る晩、交番を訪ねる決心をしてしまった。

見憶えのある建物が見えてくると、裕吉は何だか胸がキュッと締めつけられるようになった。霧が湧きはじめたのか、赤い電灯が潤んでいるのさえ、彼には遺瀨なかった。

裕吉の足は自然に遅くなる。気弱い逡巡が頭をもたげてきたのだ。彼は気を鎮めるために暫く立ち止った。

交番から警官が一人出て来て自転車に跨った。裕吉は直感で、それがあの巡査だと知ると、思わず駄を固くした。



巡査は裕吉に気づかず走り過ぎた。暗い中で肩の白い紐が鮮かに眼に残った。

裕吉は動悸の鎮まらぬままに立ちつくしていた。別の警官が出て来て、裕吉のほうをすかすようにして見た。怪しまれないように裕吉が頭を下げると、警官は近寄って来た。

「どうしたンかね? そんなところで」。用があるんならこっちへ入りたまえ」

「はア……」

「遠慮はいらんよ。霧が出てきたから外は寒い」

人の好きそうな中年の巡査にいわれて、裕吉は素直に交番の中へ入った。

「アノ、いま自転車でいかれた方は、何といわれるんですか?……」

「名前かね? 三上ってンだが——何か?」

「いえ、今度の事件で大変お世話になったンで、一言お礼をいいたいと思って……」

「というと、ああ、君があンときの——」

「ええ」

「そうかそうか。そりやア……で、いまは、元気かね?」

「ええ、おかげさまで、何とか——」

「まアまアよかった。三上はじきに戻って来る。待つかね?」

「はア。そうさせていただけたら……」

「いいとも。こっちへかけてなさい」

裕吉が椅子にかけると、巡査は机に向って



何か調べものをはじめた。すると暫くして、グレーの合オーパーを着た三十五、六の紳士が戸を開けて入って来た。

「やア、いらっしやい。三上君ですか?」

「ええ。ここンとこ忙しくて逢っていないンでね。どうしているかと思って、一寸寄ってみたんですよ。今日は彼、当直でしょう?」

「ええ。いま生憎出てますが、もう戻る時分です。どうぞお上りください」

「そう。じや待たしてもらうかな」

紳士は、裕吉には一瞥も与えず、高価なシガレット・ケースをとりだすと、いかにも上品な手つきで抜きとり、如才無く巡査が擦ってさしだすマッチの火を受けた。



「どうでした。箱根は？」

「ハハ、仲々愉快でした。それにしても三上君って純真ですな。あの剣道の達人が子供のようににはしゃぐんだ。私も嬉しくなってるね。誘ってよかったと思いましたよ」

「いまの若い巡査はいいですよ。あなたのようないまの若い巡査が可愛がってくれます。私の若い頃はそんなことはなかったし、望んでもみなかった」

「いや……」

聞くまいとしても、二人の会話は耳に入ってくる。裕吉は不意に立ち上ると、フラフラと表に出ようとした。

## 忘れ得ぬ

### 被縛女優達

良夫 銀幕

#### ▽光岡 早苗

ずっと以前の雑誌に紹介されたと思うが「寛永御前試合」という喜劇で捕えられる場面があって、その時に使用された猿ぐつわがナイロンだった。映画に使われたナイロンの猿ぐつわは、恐らくこれが最初だったろうと思う。猿ぐつわの序でに、印象の深かった場面に、東映の「チャンバラ手帳」

「帰るのかね？」

「ええ。その辺を少し歩いています。また来ますから——どうも、すみませんでした」

「そうかね。もう戻ってもいい筈だがな。じやア、また来なさい。私からもいってやるが」

裕吉は駆けるように歩きながら、涙が溢れそうになるのを休めた。夢はあとかたもなく毀れて、苦い自嘲だけが残っていた。あの遅く美しい警官が、自分のような賤しい男を相手にしてくれる筈はない。そんなことは最初から判りきっていたんだ。それに彼には教養もあり金もある立派な後援者がある。当然

がある。名前は失念したが、一女優が部屋の柱に縛られて、更に猿ぐつわをされそうになる。苦しげに首を左右に振り続け、必死に抗うが及ばず、遂に無惨に噛まされてしまうのだが、眼がひきつれ気味で全く真剣そのものだった。猿ぐつわだけのシーンでは、恐らくナンバー1と云える名場面であつたと憶えている。念のために記しておく、その場合の猿ぐつわは、上下の歯の間に噛まずもので、邦画では余り現れぬ式のものだった。監督は河野寿一。

#### ▽長谷川裕見子

ベテランといえる程、よく素晴らしい被

だ。彼には何と相応しい後援者じやアないか。俺みたいな男が、何て馬鹿げた夢をみたものだ。俺はもともと甘いんだ。甘すぎるんだ。俺なんかも此の世に生きていたってしようがない。死んだほうがいいんだ。そうだ死んじゃおう！……

悲しみにうちひしがれていた裕吉は、死のうと思ったとき、それだけが唯一つの希望のように心が昂ぶった。そして、死ぬ前にもう一度、三上巡査の顔を見るのだ、と自分にいきかせると、急いで引き返しはじめた。

明るい灯の下で、三上巡査は紳士に何かいっていた。中年の巡査の姿は見えない。紳士は微笑しながら三上の肩に手をかけた。

見てはならないものを見てしまったように裕吉は慌てて窓を離れると、逃げるように走った。

走って走って息がきれると、電柱に撞って膝を支え、そのあとは病人のように踡踞とした足どりで石に頭きながら歩き続けた。――

突然、何かにぶつかって地面に投げだされた裕吉が顔を上げると、いつのまにか数名の黒い影に取り囲まれていた。

「おいッ、小谷。てめえ、よくも俺達を売ってくれたな。いまからたんまりと礼をさせて貰うぜ！」

その声が終るか終らぬうちに、裕吉は激しい打撃に呻きをあげた。



縛姿態をみせてくれる大女優だが、大映の「どくろ隊」での被縛場面が特によかったと想い出される。画面一杯のアップで彼女の後手が現れる。胸より廻った縄が背中、十字に組まれ、後手の両手首に巻きついてきたが、かなり緊縛感をもっていた。勿論本縛りで、その迫力に圧倒される程の感じを受けたものだった。僅かに1カットだけだったが、読者の中でも御覧になられた方は沢山居られることと思う。

### ▽呉羽 寿美

宝塚映画「快傑鷹」で1カットながら縛り上げられる。縄目からの緊縛感に余り感じなかったと思うが、グイと顔をひき上げられた時の無念そうな表情が印象に深い。

### ▽田代百合子

「謎の百万両」にて、胸の上をグルグル巻きにされて、引き立てられる場面があったが、ういいういしい羞恥を現して首うなだれた姿には、何ともいえない情が感じられて、激しい縛りでなかったのにもかかわらず、深く脳裡に刻みついている好場面だったと思うのである。

### ▽ドロシーハート

洋画では「ターザンの憤激」での、彼女の縛られ姿が非常によかった。土人に捕えられるのだが、半裸で岩の上に大の字に縛

られ、仰向けの身に幾重にも縄がかかり、胸や手足に見事に喰い入っている様子が、よく画面に現れていた。大胆なポーズで、時間はさして長くなかったが、思わず固唾を呑んだことが、懐かしく想い出される。

### ▽ジーナロブリジータ

仏映画の「花咲ける騎士道」にて、走る馬車の中で、狼ぐつわを噛まされて、前手ながら縛られて悶える姿が圧巻であった。

### ▽アーリントール

「恐怖時代」で半裸の儘、秘密警察員から吊り責めに遇う場面があった。洋画の吊り責めはリアルな描写で見応えがあるが、見事に拷問の凄じさを感じた映画だった。吊り責めに就いて、縄を胸の中央でX型に交又させた後手縛りもあって、洋画には珍しい縛り方だと惹かれたものだった。

### ◇ ◇ ◇

私のメモには、以上の他にもまだまだ幾人かの女優名と、題名が記されてあるのだが、私が想起してみても、その場面が想い出されるのは大体こんなところだ。他はいくらメモとにらめっこしていても、判然とした画面が浮び上って来ないのだ。あるいは私の思い違いで、好場面を逸しているかも知れないが、今後、このメモに書き入れ得る様な映画の出現を心待ちにしている。

(もう駄目だ。殺される!……) そう思ったが、不思議に恐怖感はなかった。

(殺せ。殺せ。殺してくれ!……) 裕吉は、火のような痛みにもたうちながら、心の中で絶叫した。

パトカーが駆けつけたときは、既に赤堀の子分達は散ってしまったあとだった。

制服の警官が、血まみれの裕吉を抱き起こすと、腫れあがった唇が微かに動いた。

「おいッ。しっかりしろ!」

「ア、三上さん……!」

裕吉は苦しい息の下から、そう嬉しそうに叫ぶと、ヒシと制服の胸にしがみついた。

「俺を誰かと間違っているようだ」

巡査は裕吉をしっかりと抱えながら、もう一人の警官にいった。

「三上といったな」

「うん」

「三上巡査のことじゃアないか?」

「さア……?」

「オイ、大丈夫か?」

「いけない! 急ごう」

霧が深くなっていた。

サイレンの尾を引いて、パトカーは忽ちにその中を消えていった。



白

告

## 自分をハダカにする

(最終回)

松井 籟子

この間、東京へ行ってさし絵画家の喜多玲子さんに会った。

喜多玲子と女名前だが、実は男性なので、私がこの前、この手記の中で、どっちにでもとれるような書き方をしたのは、何となく、御本人の迷惑になるといけないと思ったからだ。

ところが

「どうせ僕が男だということは、この道の人なら大抵知っているから、かまわないのに……」

というのである。

「その方がかえってさっぱりしていいでしょ

う」

と、向うから今度書く時は男性として書いてくれという始末に、私は私を裸にするついでに、喜多玲子さんを裸にしてしまう始末になった。

もっとも、裸になるとはいうものの、やっぱり人に知られたくない羞恥は、喜多さんとはかく、私は持っている。私はやっぱり自分がどんな女か、はっきり人に知られたくない。ただ、あくまでも松井籟子という女として私の素顔の、もう一つ中の素顔で、ものがいえることに喜びを感じているだけなのだ。だから、この文の冒頭に、「東京へ行って

……」と書く時、ふっとためらった。何故なら、それは、東京以外の所に住んでいることをあきらかにしているようなものだからだ。

「僕のことを書いてもかまいませんよ」

と喜多さんはいうが、向うのことを書いて「私のことは書かないでね」というのはどうも身勝手すぎるように思う。

しかし、そこが男と女の違いで、喜多さんのように、そういう趣味があるということと正々堂々と披露して、その資格(?)で同じ趣味の人との交際をもっているのは、うらやましことだが私には出来ない。

女は嘘つきだといいうが、嘘をつかなけれ



ば生きられない所に、女の弱さがあるのかもしれないと思う。

作家にしてもそうだ。

男の作家は堂々と自分の中にひそむアブノーマルへの好みを書いて名を売っている。サジズムやマゾヒズムだけではなく、ホモにしてもそうだ。

しかし、女の作家で世の中に出てくる人で誰一人、そうした好みを筆の中へ見せている人はいない。女の作家に関しては、たとえゴシップでも「あの人アブノーマルなのよ」ということをきいたことがない。

何と女とは装うことの好きな動物か。

しかし、いくら戦後、女が強くなったとはいっても、まだまだ女の立場は封建的な殻をお尻にくっつけているようなものだ。

誰かひとり位、いさましい名乗りをあげてくれないかと思うのだが、私自身は私の好みを発表することは、裸体を見せるより恥しいのだからしょうがない。

喜多玲子とのつきあいも古い。

向うにその趣味があり、こっちにその趣味があるなら、男と女なのだから、浮気の一つ

ふんは長髪をおさげのふうになんて

たばねて



もしそんなもののなのに、私にはそれが出来ない。

いつかも彼に

「あなたはいいたい、サジストなのマゾヒストなの？」

ときいたことがある。

「どっちにでもなれますよ」

と、いきなりズボンをまくりあげて、胸に残っている痕をみせてくれた。

私はどきっとして、つばをのみこむような気持がしたが、それをこらえる為に、自分の火をことさら消してしまいうような結果になった。

いつでもそうなのだ。



「一度縛られてみませんか」

そういわれると、それを望んでいるくせに、二重にも三重にも衣を着てこわばってしまうのだ。

本当は、いわれる通りに手を後へまわし、一と巻き、二た巻きと、縄がかかっていく快感を夢みているのだ。

いったん縛られてしまえば、あとは何をされようと抵抗出来ない。

普通のモデルでは、到底、出来そうもないポーズで、長いこと彼の目をうけていることも快いことではないかと思う。

体中がミシミシなり出す程苦しくなつて、汗が玉になってしたたりおちて

「もうといて、お願いだからといて」

と、きれぎれに訴えても、皮肉っぽく笑つて非情に絵筆を動かされていたら、私はその苦痛がどんな風になっていくだろうと夢想している、実際はひどく苦しいだろうに、まるで極楽のピンク色の霧が自分の身を取りまくような感じしか想像出来なくなるのだ。

そして、もし現実には苦しい目にあつたら、私のたのしい夢がこわれてしまうようなおそれを感じる、どうしても喜多さんの誘いに「ええ」とうなずくことが出来ないのだ。まるで恋に恋をしている少女趣味としかいえない。

そしていつも、今度こそ、今度こそ思いながら喜多さんと飲みに行ったりして、その度に惜しくも別れて帰えってくる。

そして今では、彼とはじめて知り合った頃の私と、今の私では、年令的衰えがあることを自分自身感じる、尚更ふみこめない。

おそらく私の一番近くに、一番よろこばせてもらえる人の存在を知らず、どうにもならないだろう。むしろ、全然知らない人か、いいと思うが、それもどうだかわからない。

私は女学生の頃から縛られるということに願いをもちはじめたので、よく、せめて夢の中で縛られないかと思つて眠りについたこともある。

しかし、夢というものはなかなかうまく合にいかない。縛られることを夢の中ではおそれ逃げまわったりして、目がさめて、さめた瞬間には「ああ、よかった」と思う。そしてその次には「しまった」と思うのだ。あんなに逃げなければ夢の中で縛られることが出来たのに残念で、もう一度目をつむって夢のつづきを見たいと思い、起きなければいけない時間なのに寝床の中でぐずぐずしていることもあった。

私のおぼえている中では、縛られた夢は一度しか見なかった。

それも二十代の時で、夢の印象が強かったの、でいまだに覚えているのだ。

それは何か私が山賊のようなことをして、山の洞窟の奥に住んでいる。

洞窟のまわりには藪がしげり黒い穴がぽっかりとあいて、奥へ細く通路になっている。

フロイド学者に云わせたなら、大変意味深長な夢というだろう。

そこへ当時の私の恋人が私を捕えにやって来た。

私は髪をおさげのように後で一つに束ね元禄袖の和服で細い帯をしめていた。丁度、歌舞伎でやる室町時代の女の風俗に似ていた。

そこへ捕手がかかつて、私は縄をかけられて、てしまうのだ。後手に高手小手に縛られて、

その縄尻を恋人がとった。私は恋人にとらえられたことに對する羞恥と、彼に縄尻をとらえられていることの快感を感じながら、その暗い洞窟の道を歩いていく。そうして他にも人がいて、縄尻をとる人が私の恋人であることを知られてはいけないうような状態だった。

夢といつても、ただそれだけの夢だった。けれど目ざめて、しばらくはその夢をたのしくかみしめていた。

私は、その恋人にいじめられたかったのか、もしれない。

そして、つい近年になって、若い日の恋人



人  
るのオブリジェー！

私はおかしな  
目  
かしげ  
をせられる

によく似た人を好きになって靴のさきで、い  
じめられている夢を見た。それもマゾヒズム  
のあらわれだろう。

あとにもさきにも、私はその二人の人ほど  
に深く愛した人はいない。随分、愛したつも  
りでも、しばらくして振返ると、一寸も愛  
してなかったような恋の経験もあるけれど、

私が人を本当に愛したら、私はマゾヒズムの  
願望が強くなるのだと思う。

私は、くもの巣にかかった蝶のように、と  
えられてみたいと思う。  
部屋の真中に立たされて、順に縄をかけら  
れて行くのだ。



先ず後手に縛った縄は、そのまま天井の梁  
にかけられる。梁が出ていないような座敷の  
天井なら、天井板と棧の間へ箸一本、通して  
結んだくらいでもいい。それで天井から吊る  
というのではなく、縄尻が固定されればいい  
のだ。

次は胸をまわした縄を、一応背中と結んで  
床柱へ結える。すると私はそれだけでも、も  
うその座敷の真中から動けないことになる。  
次は縁の柱へ結ぶ。

その次は反対側の鴨居へ通してもいい。  
一と巻き、二た巻きと、私を縛った縄は順  
に部屋の方々へ張りめぐらすように結ばれて  
いく。

首を巻いた縄は電灯と結んでもいい。  
足首に巻いた縄は卓の脚と結んでもいい。  
四方八方に結ばれて、私は一寸も動けなく  
なる。下を向くことも、上を向くことも出来  
ない。自由になるのは口だけだ。その口も手  
ぬぐいの猿ぐつわではなく、何か木か金属を  
くわえさせられて、その木か金属についてい  
る紐を、両側へ張るように結ばいいだろう。

私は、そんな姿を人に見られたくないと思  
う。私を縛った人と、二人きりの秘密にして  
おいてくれるのだと思って自由にさせたのに  
身動きも出来ず、物もいえず、してしまつと、  
相手は人をよびに行く。



私は、さらし者にされてしまうのだ。

「この女はもう一寸、胴が細い方がいい」と、誰かがいう。

すると私の胴には、さらに縄がかけられてギューギューと細く廻わされる。

「この女の腰は、もう少し大きくならないだろうか」

と、誰かがいう。

「よし、大きくしてやろう」

と、ひとりが鞭をふる。

ピシッ、ピシッと、鞭の下でお尻がふくれ上ってくる。痛いということも出来ない。私は涙をポロポロと流すだろう。しかし、その涙も拭くことは出来ない。

痛いので身をもだえると、かるく結んである天井の箸などは折れてしまう。すると、それを折ったといって責められる。

「ただ立っているだけでは、つまらないからこっちの足は上へあげさせよう」

誰かがいう。

すると、私の片一方の脚を結んでいた縄は引張りあげられて、高い所へ結び直される。

「首は、こっちへまがった方がいい」と誰かがいう。

「よし、きた」

と、首の縄をとかれて、あらためて髪の毛を、別の方角へ結び合わされて私は、おかし

な風に首をかしげさせられる。

わざと体をくの字にまげさせられたり、片方の乳の上を縄できつく押さえて、片方だけをとり出たせたりする。

人間のオブジェ——。

奇妙なオブジェが出来上る。

「花を飾ろう」

と誰かがいう。

すると、縄の間へ花がさしこまれる。

しかし、むき出しの丸い肩などは花をさす縄がない。すると注射針のさきに花を結びつけて、肉の上へじかにプスッと射されるのだ。肉へ射すなら場所は方々にある。

花を飾っている人々は

「やあ、きれいになった」

と、手を打ってはやすが、私は針の痛さにあえぐ。悲鳴もあげられない。

そして私は、なかなかといってもらえない。

「自分で、といてごらん」

そういつて皆、出ていってしまう。

どうやってとけるのだろうか。私は私の体を見廻すことさえ出来ないのに……。

筋肉がミシミシと音をたてて、私自身が苦痛を私自身に訴える。

どの位の時間そうしていられるのだろうか。

或いは、こんなことは到底、不可能なことなのかもしれない。

しかし、昔の拷問の方がよっぽどすごい。私は痛がり屋だから、あまり痛い責め方を考えるのは恐い。

マゾヒストが、痛いのは厭だというのは変だが、普通に医者へ行って注射してもらう時でも、私はどうしても注射針をさす所を正規出来ないのだ。人が怪我をした時でも、その傷痕をみられない。血の色を見るのは、ぞつとする。

それなのに白い浴衣を見ると、それに血がとび散ったらきれいだろうと思ったりする。こういう矛盾は何のだろう。もしかしたら、これこそ変質者の性質なのかもしれない。

第一、真夏に汗を流しながら、こんな手記を書いているのはどうも常人ではないと思う。

何かしら私の血が狂っているのだ。

この間、テレビの外国物で、赤ん坊を火の中へ投げこもうとする精神異常者をとりあげていたが、私は停留所で電車を待っていて、急行がすごい速さで通過すると、思わずとびこみそうなおおそれを感じる。そして、自分とびこむのなら犯罪にはならないだろうが、前に立っている人を、ふっと押してみたいようなおおそれを感じる時がある。

だから、ものすごく美しく燃えさかる焰を見たら、もし私が赤ん坊を抱いていたら、そ



の火の中へ放りこみそうなおそれを感じるかもしれないと思った。

ただ、私はそれをしないし、その恐怖心が病的に強くないだけだ。

精神病者と紙一重の心理状態を、理解出来る程度に感じているのは精神病者ではない証拠だと自分で安心している。

ただ神経が多少どうかしていることは、たしかなのだろう。

そして、同じサジズムやマゾヒズムに興味を持つ人にも二通りあることを知った。

私のように、先天的とはいえなくても、幼い時から、縄というようなものに、異常な興味を持って来た者は、セックスそのものにはいわゆる助平ではないのだ。むしろ、絵や写真にしても、好色家を喜ばすようなものには顔をそむける。

それは喜多瑤子さんも、画家として人の好みをいろいろ聞いた経験から、私の考えを裏付けてくれた。

だから、先天的アブニストは案外、純情で浮気者ではない人が多いらしい。どうも我田引水みたいだが、これも自分を裸にする一つだと思って許してほしい。

ところが、浮気をしくつし、セックスを享樂して、普通ではつまらないから、何か変わったことをという気持ちから、後天的にアブノ

マルに興味を抱き出す人がある。

こういう人は純粋派にいわせれば邪道としかいえないのだ。

そして往々、セックスというものを真面目に考えず、享樂しているような人に限って、アブノーマルな好みを、さもいやらしいことのようにいうのだ。そして、そんな好みをもっている男や女は、どんなに好色なのかと思うらしい。

これが違うのだということを、私はどうやってその人達に知らせたらいいいのかいつも思う。

結局は世界の違う人なのだが、いくら口で説明しても、わからないことなのだ。

私はサジズムやマゾヒズムは決して、性を享樂する胡椒や化学調味料の役をするものだとは思っていない。

セックスというものは、愛情を表現し、深め合う為の手段ではあっても、遊びだとは思えない。

そして、アブノーマルな希求は直接セックスに結びつくものではなく、精神的に求めるもの——いわば愛情だが、その愛情に結びつくもので、愛情がセックスに結ばれる為、アブノーマルな希求もセックスに結びつくということになるのだ。

それが、精神的なものを深め合うのは、お

ろそかにして、ただ変ったことをするという意味だけに、一つの技巧としてアブノーマルなものをもてあそぶのはやめにしてほしいと思う。

そういうサジストが中にはいるので、そういうあそびで自分がけがされたくないマゾヒストもいるのだ。

本当はマゾヒストであっても、サジズムの根底に流れるものが違ふと、女は抵抗を感じる。そして本物と偽者の見きわめはなかなかむずかしいし、偽者も又動機は何にしてもアブニストであるとしたら、偽者よばわりするのがおかしいということにもなるのだろう。

最近、風俗取締とかで、書くことも発表することも、むずかしくなってきたらしいが、アブノーマル純粋論という変なロジックでも、アブニストの望むものが決して劣情につながるものではないということを、その筋の人理解してもらおう為に、こうした雑誌の存在は貴重なのだと思う。

私自身も折があれば、出来るだけ世の中の誤解をといいていく為に筆をとりたいたいと思っているが、この暑さでは、自分を精神的に裸にするより、現実的に裸にして、水風呂へでも、とびこむ方がよさそうなので、一と先ず半年に亘ったこの稿を終わりたいと思う。

読者の方達に厚く御礼申し上げます。(終)



☆懸賞募集〔告白と手記と体験〕原稿入選作品☆

## “私は女性の自刃を見た”

東 福 次 郎

当時、私は二十八才で、居りました処は、満洲の桃安（タオアン）という、まあ片田舎の方の小さな町でした。

桃安は、奉天と新京との間にある四平街（スーピンチエ）から汽車で北西へ向って約一日位の処です。そこで私は終戦を迎えたのです。私は、そこで開拓民や満人に農事指導をしていました。無論、独身で官舎住いをしていたのです。

この官舎の近くに、左右田という官吏夫婦が住んでおりました。私は、よくそこへ貰い湯に行ったりして、私とは極く親しい間柄の夫婦だったのです。

夫人の名は律子といいまして、当時たしかに三十一才だったと思います。細っそりとした顔立ちで、色の白い婦人でした。私には、よく夕飯などを作ってくれて、とても親切にしてくれました。

昭和二十年の七月、太平洋戦争も終りに近づいたころ、この左右田家へ、律子の姪がやってきて、ずっと同居していました。名前は美枝子、二十才でした。当時の女性にしては、かなり大柄の、がっしりとした身体つきで、顔はしかし理智的で眼鏡を掛けておりました。色は白く、豊かな胸をしておりました。

一月ほど、美枝子はここで居るうちに、どうも私を好きになったように思えるのです。これについては、律子も冗談まじりに私を冷かしたこともありますので、まず間違いないと思います。

でも、私はそちらには臆病でしたので、美枝子とは、二人きりになつたこともありませんでした。しかし、私も美枝子を憎からず思っていたことは事実です。

そして、八月の暑い盛りでした。私たちは、この桃安でソ連の参



戦を聞きました。ついで、南の四平街がソ連機によって爆撃されたことも聞いたのです。まことに不幸なことに、この時左右田氏は公用で、その四平街に出張しておりました。そして、美枝子の実家へ泊っている際に、爆弾で美枝子の一家は全滅し、左右田氏も、一緒に亡くなられたのです。

私は、夫を失った律子、家族を失い孤児となった美枝子を、なくさめる言葉もありませんでした。二人は、まったく茫然として、寝食も一切忘れ切ったようです。泣く涙もないようでした。

ついで終戦。そして、さまざまな怖しい流言が飛び始めました。ソ連軍の進入。そして虐殺が行われているとか。南からは国府軍が進入してくるとか。いや国府ではない八路軍だとか。私たちはまったく不安のどん底に落ち入ったのです。

そんな、ある日、律子は私を呼び、頼みたいことがあるから来てくれといったて来ました。それで、午後の三時ごろ訪れると、膳部が用意してあって、私に酒をすすめ



るのです。私は呆氣にとられました。というのは、律子も美枝子も、かなりほがらかな様子で、先日の打ちしおれた面影は全然、見当たらないのです。

「どうしたことでするか？これは」と私は膳部を指さして尋ねました。律子と美枝子は笑いながら、

「お別れの盃なのよ」といいます。

「へえ、どこへ行かれるの？」と私が尋ねても、ただ二人は笑っているのです。この時、私はまさか……と思ひながら、酒の酔いも手伝って、

「まさか、十萬億土への旅立ちではないでしょうね？」といひますと、律子は真顔になって、

「実はそうなの」といいます。私は驚いて、美枝子の顔を見ますと、美枝子も真顔になって、ゆっくりとうなずいたのです。勿論、ここで私は言葉をつくして、いさめたのです。しかし、彼女たちの静かな言葉ながら固い決心を聞いているうちに、段々、無理もないと思ひ始めました。私だって、明日の生命はどうなるか解らない状態なのです。彼女たちは、頼る身寄りもなく、そして家族を失って、生きていくことは、むしろ苦痛なだけなのです。遂に私は、それも仕方があるまいと思うようになってしまいました。



「それで、Sさん。あなたには、私たちの最後を見守って頂きたいのよ」と律子は、いいました。

「私、もし失敗したら、Sさん手伝って下さる？」と美枝子は私に尋ねます。

「勿論よ、ねえ」と律子は私の方へ向いて笑って見せました。

「二人とも、女ですもの、死に切れないかも知れないわ。Sさんに介錯して頂くのよ」

「どうやって決行するんですか？」と私は尋ねました。

「刃物よ、それしか方法はないわ。短刀と軍刀があるのよ」と律子は、いいました。私は、最後の盃を呑み干し、

「いいでしょう。いつやるんですか？」とききました。

「今、これからよ」と美枝子が微笑しながらいいます。そして、立ち上りながら、「じゃ、叔母さん、仕度しましょう」と律子に呼びかけます。

「ええ、じゃ、少しお待ちになってね」といって律子も立ち上がりました。しばらくして、二人は薄化粧をし、髪をきっちりとかねて出てきました。二人とも、モンペをはいております。律子は黒のかすり、美枝子は、紺無地の木綿でした。私は、その場の座敷で自刃するのかと思ったのですが、実は、二人は家を出て、郊外でするというのです。

「死骸をさらしておきたくないのです。あとで満人たちのなぐさみものになるかも知れませんか……。あなたに、死骸を地面に穴を掘って埋めて頂きたいのです」と律子はいいました。

私たち三人が家を出たのは午後の六時、真赤な夕日が西の草原に落ちる時でした。

満洲の夕暮れは非常に長いのです。夜の九時頃までは、薄暮といって、周囲がまるで明るく見えます。

私たちは、背丈ほどもある草の間を抜けて川岸に出ました。この

# 新作『血紅使用切腹フオート』分譲

モデル 絹川文代嬢 (大中判印画紙焼付)

第一集 五枚一組 八百円

略号(によ1)

第二集 五枚一組 八百円

略号(によ2)

## 禪美切腹

大手札判(9×13種)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

二枚一組 二五〇円

略号(こせ)

## 切腹のプレイ

大手札判(9×13種)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(れい)

## 女性自刃三態

大手札判(9×13種)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(じじん)

## 豊麗切腹三態

大手札判(9×13種)印画紙

焼付 モデル 愛川悦子嬢

三枚一組 三〇〇円

略号(ほう)

川は松花江の上流の支流です。夏のことで、水がかれていて、三尺幅ほどの水が、さらさらと流れているばかりで、人影は全くありません。風が少し強く吹いており、律子と美枝子のおくれ毛が、はらはらと乱れそよいでおりました。対岸も背後の土手の上も、背の高い雑草でおおわれていて、まったく静かで、風の音しか聞えませんでした。

私は、シャベルで、その柔い土を深く掘りました。三尺に六尺、そして深さ五尺も掘ったでしょうか。

「もう、それでいいでしょう」と律子が微笑して声をかけました。



私は、穴から上って、律子の渡してくれた手拭いで汗をぬぐいました。穴から少し離れた場所に、荒ごもが三枚敷いてあります。私は、そこで少し息を休めました。律子も美枝子も、そこに坐り、しばらくは三人とも黙って風の音を聞いていたのです。

「では、そろそろ」と律子が居ずまいを直していました。私は心臓が躍り出すのを感じました。いよいよ、二人は自殺するのです。

「美枝子ちゃんが先きにね」と律子はいつて彼女に白鞘の九寸五分を手渡しました。美枝子は鞘を払い、じっと、その細く薄い刃を見つめ、やがて私に向かって、

「Sさん、私、臆病だから、とても自分では死ねそうもないわ。あなたが殺して頂だい」といいました。私は狼狽しました。

「仕様のない子ね」と律子は、いいましたが「そうね、Sさん。じや、あなたが手を下してあげなさい。美枝子ちゃんの最後をお願いなんだから」といいます。

美枝子は短刀を私に持たすと、静かに立ち上がり両手で、えりをぐっと左右に引き開けました。真白い胸のふくらみが、ぐいと現われ、ついで、みぞおち辺りの白肌が眩しく私の眼に映しました。美枝子は、右の手を伸して、私の手にある短刀の刃先を掴むと、左手の指先で、胸の肋骨の間をまさぐり、心臓の位置をよくたしかめ、静かに刃先をその骨のすき間にあてがいました。

そして両手で、私の肘の上を掴み、じっと私の眼をみつめて、「お願い」と一言だけ申します。律子が美枝子の背後から、彼女の両肩を、ぐっと抱きかかえて、

「さあ、早く」といいます。私は、ちゅうちよしました。

「早く!」と美枝子は、ぐっと両手で、私の肘を握りしめます。私は、思い切って一気に突き込みました。しゅるっというような音が聞え薄い刃は、ほとんど手ごたえなしに、白い肌の中に吸いこまれました。そして、美枝子は「アッ、イタイッ」と眼を閉じて叫びま

した。私は柄を、ぐいとこね上げ、ついで、ぐるりと刃の先きを一まわし挟りました。美枝子は、かっと眼をむき、私の肘を掴んだ両手は、ぶるぶると激しく震えております。そしてすぐ、がくんと白いのどをのけぞらせて、ぐったりとしてしまいました。即死です。指先が細かに、けいれんしておりますが、眼は半眼に開かれて黒眼はつり上がり、唇を開いたまま、もう動きません。私は茫然として立ちすくみました。美枝子は仰向けに白い胸を見せて荒ごもの上に寝ております。胸の傷口は意外に小さく、細い血の一筋が脇腹の方に流れているばかりです。

ふいに律子が、私の手から短刀を取りました。私は、はっとして彼女を見ました。律子は微笑して

「あなたは剣道二段でしたわね?」と尋ねました。

「ええ」と私が答えますと、律子は軍刀を私に手渡し、「これで、私の首をはねて下さい。私、お腹を切るつもりです」といいました。

「ええっ、腹を切るのですか?」

「そう。しっかり落ちついて首をはねるのよ」そういうと律子は、荒ごもの上に正座しました。そして手拭で、美枝子の血のりでぬれた刃先を、たんねんにぬぐいます。

もんぺのひもとときほどき、両手を袖の中に入れふところ手をする、律子はぐいと双肌を押しぬいだのです。着物の前合わせを、なおも掻き上げ、へその辺りを広く充分に現わしました。

私は息を吞みました。真白な肌、ふっくらと薄く盛り上がった胸、すんなりと流れる体の曲線は、凄愴な自決の場に似合わぬ程の美しさなのです。

「さあ、軍刀をお抜きなさい」律子の声で我に返った私は、ずっしりと重い軍刀を抜きはなしました。律子は両手で、うなじのおくれ毛をかき上げ、自分の首をさすりながら、私を見上げ、平手で後首



の付け根を、びしやりとたたき、

「ここを力一杯に斬るのよ」といって笑いました。私は、この美しい女性が一度決意すると、かくも平然と死に立ち向えることを、信じられぬもののようにみつめていました。

律子は、短刀に巻紙をくるくると巻きつけ、切先きを三寸ほど出し、ひざの前に一たん置きました。そして両掌で、お腹とへその周囲を強く押しさすります。

風がはたと止み、今、周囲はまったく静かです。やがて律子は右逆手に短刀を持ち、私を見上げ、強く刺すような眼つきで私の眼を眺め、

「私が介錯というまで待って下さい」と落ちついた声でいいました。「大丈夫です。どうぞ充分に」と私は、ひきつったような声でいきました。律子は身体をぐっと伸ばし、息を吸い込んで下腹をぐうとふくらますと、切先きをへその左下にあてがい、一呼吸します。

あごを、ぐいと引き、眼は切先きを見つめつつ、右手で、ぐっと押し込みました。切先きは、ぐうっと腹を凹ませます。プツツと皮ふの破れた音が微かにしました。腹はまだ凹んでおります。律子は、左脇腹にあてがっていた左手を一たんはなし、その掌で、切先きを越えて、腹の中央辺りを押さえつけ、ついで、その部分を右方へぐうっと押し、左腹の皮ふをびんと張りました。それから、右手の短刀を、ぐっと左右にゆすりました。瞬間、ブスッと大きな音がすると、短刀は深く刺し込まれ、腹の凹みはなくなり、刃は完全に律子の腹中に入ったのが解りました。律子は眼を閉じ

「クローッ」というような無声音を、くいしばった歯のすき間からもらしました。

刃は白いふくらみに刺さっておりますが、まだ血は出て来ません。二呼吸の後、律子は再び眼を開き腹を見つめながら、右方へ両手で短刀を力一杯押ししました。へその部分が刃に押されて、立てじわが





一寸寄ったと思うと切り口から血が一筋、ツツと流れ落ちました。真赤なその細い筋は白い皮膚の上にくっきりと浮き出し、私は痛ましい緊張の内にも美しいと感じました。

ついで、切り口が右に太い白糸のように裂かれたと思った瞬間、ぷうとそこに血の糸がふき出しモンペの下の腰巻の白木綿に吸い込まれて行きます。「くううっ」と声を、また洩しました。律子は、もうおのれの腹を見ておりません。宙を、眼をむいて見つめながら、腹を左方によじりつつ、刃を全部刺し込んだまま、死につかれたように右へ切り割って行きます。

血が切り口から激しく吹き出しました。下腹は、もう真赤です。遂に右脇腹まで、約六寸はども切り裂きました。そこで刃を抜きとると、刃はべつとりと血でおおわれています。律子は苦しそうに、はっはっとな喘いで、腹の傷口を眺めています。

傷口は、上下にはじめて、白い脂肪が盛り上がり切り口を厚い白い肉二枚で糸のように合わせて見せています。血はその白い肉からにじみ出しては流れているのです。切り口はまだ開いておりません。これは、律子が肩を丸め、腹部にゆるみをもたせているためでしょう。

思い切ったように、ぐいと律子は腹を伸ばしました。瞬間、律子は「ああっ」と低く短い声をもらしました。私は思わず眼をそらしました。あの優しく、朗らかな女性、律子に、こんなにも剛氣に、壮烈な自決方法に耐え得る一面があったとは、その事実を目前にしながらも、尚、信じがたい気持ちでした。しかし、再び眼を移すと、そこに動かせない、すさまじい自決の事実があったのです。

再び律子は少しく前かがみになり、はっはっとな喘いでおります。「奥さん、実に見事です」と私は上ずった声をかけました。律子は、前を見つめたまま私の方へは向きませんでした。が、ゆっくりと、うなずいて見せました。

「介錯をしますか？」と私が尋ねると、激しく首を横に振ります。そして身体をまた、ぐっと起しました。切り口は、もうすっかり開いています。

律子は刃先を下へ向けて、へその一寸ほど上へ、もろ手突きにはっしと突き刺しました。腹部を緊張さすため、後方へそり氣味になったので、へその下の切り口は二寸余りも上下に開きました。「むううっ」と気合いの様に一声うめくと、顔をゆがめて両手に全身の力をこめて、下へ押し下します。カリカリと、肉を裂く音がしました。ついで、ブツツと横の切り口まで割り、その下の切り口を、ぐうっと押し下げるのですが、切り口は下に押し下げられるばかりで、なかなか切り割れないのです。

律子は蒼白な顔に汗を玉のように浮べ、両腕を内側へ引きしほり入れるようにして、遂に下腹の方の切り口をブツとたてに切り割りました。刃は深く沈んだまま、その位置を徐々にかえて行きます。彼女の全身の表情で、それがいかに苦しいものであるかがよく判ります。ぐらつく上体を、もはや氣力だけで持ちこたえているようです。律子は、わなわななど震える手で刃を抜き取りました。血の氣のなくなった顔を私に向けて、かすかに笑ったようでした。けれど、それは苦痛に唇がひきつったのかも知れません。

何たる凄じさでしょう。モンペはぐらしよりと血にぬれています。律子は身体をぐっとそらし、背をシャンと伸ばすと、

「介錯ッ」と叫んだようでした。しかし、はっきりした声ではありませんでした。私は軍刀を下げて、すぐ律子の背後へ廻りました。律子は眼を見開いたまま、齒をくいしばり、ぐっとあごを上につきあげ、細いその首を伸ばそうとします。私は、その後首を目がけて力一杯、軍刀を振り下ろしました。

その瞬間の手ごたえは、そう、薪を割った時とまったく同じ衝激のようでした。



ガツンというような冴えた音と共に、律子の頭部は三尺ほど前方にはね飛び、そして、胴体の方はといえば、ぴよんと両ひざでパネのように飛び上がり、どっと右斜め前方に倒れ、そして奇妙なことに仰向に転がったのです。

どすんと落ちた頭はごろりと一回転して、首の切り口を上方にして逆さまに止まりました。胴体と首の切り口からは、おうと血がふくれ上がり、ついで凄い勢いで吹きだしました。予想もしなかったほどのおびただしい量です。後から後からと血は柔い土に吸い込まれて行きます。

美枝子の死体を見れば、その傷口は小さく、血の量のごく少ないのにくらべ、この律子のあまりにも多量の血液は、一寸信じられないほどでした。

私は律子の髪を掴み、両手でその首を抱き上げました。話に聞いていたほどそれは重くはありませんでしたが、それでも、ずっしりとした重みを感じられます。私は手拭いで、丁寧に顔の血のりを拭き取りました。顔色は、まったくの蒼白なロウ色になり、眼を開き口もぽっかりと開いておりますが、私は美しいと感じました。

胴体は、長々と土の上に延び、下穿きが、やはり真赤というよりドス黒く染ってみえていました。

私は告白します。この時、私は、自分が好きだったのは、二十才の美枝子ではなく、三十一才のこの夫人律子であったことに気がついたのです。

私は、律子の首を抱き、思い出したように声を上げて号泣しました。そして、やがて、遅い満洲の夕闇がせまってきた頃、やっと、この美しい胴体と首、そして美枝子の死体を、残り惜し気に取り片づけ始めたのです。まず、死体の切口からハミ出している内臓物を宝石でも扱うようにもとに還し、用意の水でドロを流し、白布を拭いて、二人の死体をそれぞれ、丁寧に包みました。

女体

『切腹風景十二態』

(9×13センチ) 印画紙焼付  
十二枚一組 九百円

モデル

大塚啓子嬢

略号(せふ)

女体

『浣腸風景十二態』

(9×13Cm) 印画紙焼付  
十二枚一組 九百円

モデル

大塚啓子嬢

略号(ちふ)

祖国を遠く離れて、私以外に誰一人として知らぬ異国の空の下に壮烈きわまりない自決を遂げた健気な美女二人。埋葬の準備を急ぐ私の胸には、いい表しようのない感激に似た気持が一杯に湧き上つて、得体の知れない涙が、次から次へと溢れ出てくるのでした。

私は静かに、血のにじみ出た二体の包みを、私自身が掘った墓穴に運び入れて並べました。お二人とも立派な御最期でした。どうぞ安らかに眠って下さい。私は二体の屍の枕元に跪ずいて、心からそう祈らずに居られませんでした。

やがて思い切つて私は、シャベルで、その上に土を落して行きました。よく土を踏みならした私は、長い間、ぼんやりとその上に坐っていました。もう二度と、この地へ、この場所へ来ることはあるまいと思っていたのです。

それからの私は、何か魂の抜けた人間のように、ボヤーンとしてしまいました。気をとり直したのは、ソ連軍に収容されてしばらく経ってからでした。その時には自覚しませんでした。敗戦という大事件のために、狂人じみた神経になっていたのでしょうか、やはり、彼女達の自決のさまは、私の心に大きなショックを与えていたのです。あれから、もう十四年、律子と美枝子の死体は、あの松花江の上流の川岸にまだ埋まって、安らかに眠っていることでしょう。





暑さが毎日続きますが、編集部の皆様お元気ですか。毎月貴誌の発売日が楽しみでなりません。口絵やグラビア頁も毎号読者が満足していることと思いますが、私が希望することは、その中の一頁でよいから男性の六尺褌を締めた写真載せていただければと思います。毎号貴誌の読者通信欄をみる度に、愛媛家のたくさんいることに驚きます。私も褌マニヤの一人ですが、褌の記事をどしどし掲載して下さい。私のような褌マニヤにとって、貴誌の植村泰氏の小説が一番楽しみです。慣れた筆の運び

に毎回息もつかずに読んでしまいます。出来れば誌上で男性の褌美コンテストなどを写真で載せてほしいものです。今なら夏ですから海岸などで出来ると思いますが。私は女性のヌードには全然興味がもてず、もっぱら男性の六尺褌を締めた姿に生甲斐を感じて居ります。又、私自身も六尺褌を着用する事に無上のよるこびを感じるものです。(東京 今野正志)

東京SK生様。会結成大賛成。

小生トクビコンクラブ、略称、徳美会々員です。個人の秘密を守るこれが第一条件で、愛情と理解がこれに次ぎます。文字通り褌中心の会で会合は月一回で、研究？発表と実施の朝から翌朝まで十二時間間が普通です。これ以外の会員同志の個人の連絡は別です。皆、K誌に褌男の写真版がないのが最大不満で、八月号通信欄には褌の文字も消えている情なさです。でも世にいられないサガに、人にかかれて、鞭と縄のおしえにかたまる四人です。(一時八人でしたが、変動がありました)集まるとすぐに褌着用を誇示。首、腕、鼻、足の輪の用具も揃ったので、それぞれ褌姿に飾る。時に山林、河原、

都心の旅館が舞台で、そこに応じてのスケジュールを組む。鞭と縄はエビ責、サカサ吊り、極端に走ることを避けての、時間を置いて行うプレーは、苦痛の限界までは達しないような明るい顔、顔。着衣も集まるまでのものは一括してふれず。赤いクツ下、シャツ、デニムのズボン、帽子の幾種類かはまた色が違う。別の生活の人間がそこに生れる。褌も、ビニールから麻縄(これは殆んど使わない)赤、黒、黄、紫、桃色、青と幾通りもある。サポーターも海水パンツ水泳褌まで揃えたこれは太陽責めで真夏の河原にアゴの下まで日焼けし褌の跡だけをくつきりと白く浮き出させる為。朝九時頃から日没まで、厳重な監視のもとに河原の石の床に転々と寝返る。只水をかけられるだけの川には、はいる事は許されないプレーだ。と書くとは残酷なように聞えるが、この看手は実に親切で、日焼けをさす以外は至れり尽せりの保護をする。東京の柏山多津夫、倉田武男、清水フンドシ男の諸氏に声を

#### ◎写真特写引受◎

特別に変った着衣、ポーズ、アイデア等によつて写真の特写を御希望の方は写真部に於てお引受致します。詳細なる趣向を御連絡下されば費用其の他に付いてお返事いたします。(返信料同封下さい)

かけた、ここに記したがこんな会はいかがですか。

(東京 八百拾吾)

古い記事で思い出せないが、羽村京子、花村美智子(?)の小説や告白文。それに寄宿舎の女学生が病気になる、洗腸される小説。辻村隆の「みだら虫」花村氏を空想の対象とした羽村京助の空想談死んだ角リエ子の告白小説。その外、「アヌスいじめ」や継母からオシメをされる物語りの掌篇も想

田良二の「気違いにされた令嬢」も欠かせない。復刊以後にも、「ナースの浣腸日記」や、「オシメと私」などいろいろあつた。それらは散発的に掲載されるので、特集として集成できたら楽しいと思う。尚「王宮の浣腸室」は楽しめる小説である。前にも意見を述べたが、縛り写真の小道具として浣腸器などを登場させて欲しいものだ。そこに置いてあるだけでいいのだから、縛りの鑑賞の妨げにはならないと思う。以前、生



理バンド着用の分譲フォトがあつたが、オシメカバー使用のものも作って欲しいものだ。類似のコスチュームでもいい。(八幡九一)

○ 東京の田中一郎様、僕ではいかがですか。きつと田中様の御希望に添えることと思いますが。僕は二十一才、身長百六十六センチ、十人並といったところです。僕はコイルチンのズボンに大変興味を持っていますが、このことについて話し合いたいと思います。田中様と末長く交際出来たらこのせち辛い人世も楽しくなると思います。お便りをお待ちしています。

○ (横浜 中谷 保)

藤山さん、僕は今休暇で旅行しています。藤山さん、僕は楽しいんだ。此の間、円山の馬場で白い乗馬ズボン姿の女性の写真を撮った。僕は夢中だった。その子が藤山さんではないかと思っていた女性だ。藤山さんではありませんか、と問うと赧くなった。藤山さんでしよう。ともう一度押すと、違いますと答えましたが、出来上った写真を送ったら、礼状に沢のようなことが書いてあった。曰く「私も藤山という人はご本で読んで知

っています。乗馬服マニヤの方でしよう。切腹も最初は恐しかったけれど、今では楽しい思いで読んでいます。こんな趣味は私一人かと思つたら、大勢いらつしやるよう嬉しくなりました。私のような者でもお友達にしてくださいませるか」と。その後、幾度か逢つてゐるが、彼女はいつも乗馬ズボン姿だ。近く彼女に結婚の申し込みをしようと思ひます。藤山さん、ありがとうございます。(藤山覚)

○ 過ぎ去りし幾年月。小生、国鉄に奉職してより早くも三十七年間に五十四才のたん青を前にして、現在は一小駅の助役として楽しく勤めて居りますが、十八才の頃、可憐なる美少女の女給型の「エプロン姿」に魅せられ、以来何十年間、各型の女給エプロンを十五枚も求めたり注文して作って貰つては、人知れず服の下に終日かけて楽しんで居りました。その後、一度、列車中にて囚人の手錠姿を見てよりは克己出来ず毎夜の如く、女給エプロン「を」かけては、(昔の女給エプロンの紐は蝶結びをするため一米半もあったので、古くなつた女給エプロンを利用しては嚴重な猿ぐつわをして声一つ出ないよ

## 緊縛フォト新作発表

大手札型印画紙 焼付  
各組三枚一組 二五〇円

聖壇の裸女

略号(けい)

開股三番勝負 (その一)

△モデル

絹川文代

△モデル

略号(けと)

カーテンの翳

略号(けろ)

開股三番勝負 (その二)

△モデル

大塚啓子

△モデル

略号(けち)

艶姿色模様

略号(けは)

開股三番勝負 (その三)

△モデル

絹川文代

△モデル

略号(けり)

浴場の欲情

略号(けに)

開股三番勝負 (その四)

△モデル

大塚啓子

△モデル

略号(けり)

いけにえ

略号(けほ)

開股三番勝負 (その四)

△モデル

絹川文代

△モデル

略号(けぬ)

のぞき見

略号(けへ)

開股三番勝負 (その四)

△モデル

絹川文代

△モデル

略号(けぬ)

うにしたうえ)両足首、その他二三カ所を縛つて、辛じて神田の一商店より、兄の巡査に依頼されたといつて、現在警察にて使用の、自動式の新式両手錠を、当時三円八十銭にて求め、胸かけ猿ぐつわ及び足しばりの上を自分で後手になつて手錠をはめ、余りの楽しさ夢心地に青春時代を一人秘かに楽しんで過しました。結婚後一カ月位経つてより克己出来ず、妻に打ち明け、一夜を眠りもせず、女給エプロンをわが胸にかけ後で緩な

し蝶結びにさせたる上に猿ぐつわをかけられ、足縛りの上、後手錠をかけさせては、その上に長いエプロンの紐を利用して嚴重に足首と後手錠間を引きつけ、更に、首と後手錠を引き張りされて、一晩中、解かせず、夢うつつの間に余りの苦しさ、びっしりと脂汗を流して呻きつづけたこともあり全く常人とは思えぬ自分の二重人格に吾ながら呆れたものでした。年月が流れて書籍や新聞に度々猿ぐつわ姿や、縛られた姿の絵が載



り、映画などでもよく出てくるようになり誠に楽しいのですが、私の「女給エプロン」に対する憧れは、現在でも、ますますつのるばかりです。三年程以前に、小さな書店にて貴誌を手にした折は、夢かと思うほど嬉しく、その後は一冊も欠かさず毎月求めて、自分を慰めていますが、出来れば、世の中のかくれたる心ある女性から、前記のように女給エプロンを利用して、種々の方法で責めて戴きたいものです。如何せん、老いたる身の人を得るに由なく、淋しい気持です。最近では、近所の女性や、駅に遊びにくる女性に女給エプロンをかけて貰っては写真を撮らせてもらい、今ではその数が五十枚ほどあります。尚、現在でも助役の身で、私自身毎日のように制服の下に女給エプロンを一、二枚、三枚とかけ、多い時には五枚も着込んだ上で楽しく勤めに出ています。自分では「交通事故防止」のために役立っているつもりです。同封の写真は、私が撮ったものです。後手にするのを忘れた失敗のものです。別にモデルを苦しめる気などは寸豪もなく、只外見だけに魅せられています。猿ぐつわ、後手のものもあります。

で、御希望でしたら焼増してお送りしてもいいと思っています。ただ私は、常は清く、正しく毎日を送っており、以上の如き趣味は、あくまでも趣味であり、満されぬ気持を晴らし、交通事故を起さぬための手段のためです。尚、制服の下に女給エプロンをかけると、気持ちさがサッパリし、厳寒でも寒さを感じず、夏は反対に涼しいので実に不思議です。以上、私の告白と共に、初めて通信致します。暑さの折、皆々様の御自愛を祈ります。  
(神奈川 早堅杉風)

次々と新しいモデル嬢の出現で楽しい。それにつけても、益田さんはその後如何していられるのでしょうか。彼女のよく伸びた四肢に激しい縄目、美貌も台なしの厳しい猿轡……が分譲品に現われるのを楽しみにしていたが一向に現れません。又、昨年九月本誌に載せられた大塚嬢、乱れ髪、屋外の正坐縛りが分譲品にないのが残念です。寡聞にして承知しないのなればお教え下さい。又「悦特二集」にある愛川嬢のローブ・ブラジャーも分譲品にお加え下さい。

(京都 T・S 生)

私の駄文「Hと自称する女」を塵々しく掲載して下さいまして有難うございました。まことに汗顔のいたりであります。今後も、よろしくお願い致します。私が、このような告白的な小説を書いたかと言つて、私をマゾヒストだとか決めないで下さい。幾分かマゾの血潮も流れてはいるのですが、

実際の処、自分がどのような傾向を有しているのか、自分でも明確には判っていない錯乱した気持なのです。だから私は、あらゆる傾向の人々の文章が毎月掲載されているKK誌を欠かさず読んでいます。だが、それらの文章の中でも、やはり一段と光輝を放つて胸に迫るのは、サジズム小説です。

## ニューモデル未発表緊縛フォト集

### ヌード初縛り

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 平野笑子 略号 (みい)

### 全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 岩井知子 略号 (みは)

### 観念の座

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 平野笑子 略号 (みほ)

### 開股縛くらべ

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 絹川文代 略号 (みと)

### ヌード初縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 田原美佐子 略号 (みろ)

### 全裸後手くらべ

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 平野笑子 略号 (みに)

### 全裸股間縛

大名刺 五枚一組 三〇〇円

ニュー・モデル 絹川文代 略号 (みへ)

### 椅子開股縛

大名刺 三枚一組 二〇〇円

ニュー・モデル 絹川文代 略号 (みち)



ね。近藤一氏、蒼野礼氏、松井頼子氏、三条卓史氏、藤木仙治氏、以上の方々の中でも、とりわけ、蒼野礼氏と近藤一氏の創作が私の胸を打ちます。これは、おそらく好みによるのでありましょう。特に近藤一氏などはサジストとしての立派な理論をお待ちのようですね。マゾヒストの沼氏の論文は非常に文学的な香りが高いが、それに反して近藤氏の論文は、いかにもサジストらしく科学的で直截です。私は近藤氏の見方が好きです。蒼野氏の創作は全く素晴らしいです。今までの中では「ナオミ」と言うのが一番秀麗であったと思います。これからも、どしどし書いて下さるよう祈ります。松井頼子氏の告白も、なかなか考えさせられます。倒錯の甘美なる美酒を味わった以上、もう死ぬまで止められないような気がします。そんな私は、きつと異常なのです。時折、誌上で、やがて女権の天下がくるとか、男女それぞれどんな服装をしても構わぬ世になればいいとか、と言うような楽観論を主張しておられる方々をお見受けしますが、その事に関しては私は絶望的です。異常な性癖を有する者は常に少数な

が故に異常なのです。私の如き倒錯者は決定的に異常者なのです。こればかりは、どうする事もできぬ事実なのです。だからこそ尙更、異常な性癖に溺れる結果となるのでしようね。まさしく魔の美酒に酔い痴れてしまっているのです。そして、それは私の勝手なのです。他人に迷惑さえかけなければいいではないか。これが只一つの逃げ口上です。少数者のかすかな抵抗なのです。だが、兎もすれば正常な多数者の形成する社会の強大な圧力に私は押し拉がれそうに感じる事がしばしばあります。ノーマルな愛情の持主なら、どうして我が恋人を、我が妻を縛ることができましよう。それは相手に対する最大の侮辱です。しかし私は、そんな事は百も承知なのに、なだらかで美しい、ふくよかな曲線と陰影を有する女体を、ロープでもって、きつちりと縛りあげ、ギニツと力いっぱい抱きしめてキッスの雨を降らしてみたい欲望にかられる事があります。そのぶりと盛りあがった、お尻に軽く鞭をふるってみたい。恥しい姿態で緊縛して、エネマ・シリンジカイルリガートルで悶えさしてみたい。私の妄想は際限もなく拡がって行くのです。この時の私は完全

## 新人モデル嬢新作緊縛姿態集

愛川悦子嬢の巻  
大手札型(9×13センチ) 印画紙焼付

☆ベッド変型縛り(略号1)

四枚一組 三〇〇円

☆全裸強烈縛り(略号2)

四枚一組 三〇〇円

大塚啓子嬢の巻

☆股間縛り(略号3)

☆全裸縛り(略号4)

五枚一組 三五〇円

田中芳代嬢の巻

☆セーラー服縛り(略号5)

五枚一組 三五〇円

☆股間しばり(略号6)

四枚一組 三〇〇円

なるサジストであり尻フェチシストであり、流腸フェチすら含んでいる始末です。妄想の中で、その女体を責めているうちに、一体、自分が責めているのか、責められているのが自分か、判然としなくなってきました。こうなってくると異装症とマゾヒズムの合併症が頭をもたげてくる事になります。その癖、それは妄想中の出来事で、現実には、そうした事もされた事も皆無なのです。結局、何だか凡ての根元は私の自己愛にあるのではなからうかと言う疑念も浮んで参ります。これが私と言う人間のありのままの実体なのです。切腹とか男性マゾを除いて、他の一切に私は魅了されます。だからKK誌は、すみからすみまで読破します。近頃は、藤山秀緒という女性の身の上、告白を読みまして、切腹にも少からず心を引かれるようになりました。きつと彼女がレスボス患者でナルチシストであるからだろうと思います。私は、それらの告白や創作を読み、自分なりに理解し、自分なりに分析します。けれども、どんなに苦心して解釈しようとしても、やはり少しづつ異質のものを感じます。部分的に



激しく刺戟されることもあります。そして、その登場人物の皆を愛するのです。私と同じ悩みを有する人々であるが故に、愛するのです。特に責めしいたげられるヒロインをこそ……。愛と苦痛は同質なのでしようか。緊縛のロープは抱きしめる腕の代用であるのでしようか。私は誰かを、そのように愛したいし愛されたい。でも、それは果して愛情といえるものでしょうか。どなたか、私にその真実を教えてください下らないでしようか。

(真崎伸一)

最近、本屋にて貴誌を初めて見つけました。他の雑誌と、かけはなれた内容、写真、すべて素晴らしいの一語につき、以来、二カ月の間に古くは昭和三十一年から八月号までの内、十冊以上、本箱の奥に揃えました。ところで、素晴らしい本の内容では有りますが、少々不満もあります。それは最近、ほとんど流腸に関する記事、小説等が見られなくなった事です。俗に、あちら立てればこちら立たずと云いますが、あまりに少なすぎると思います。投稿者が少いのかもしませんが、流腸マニアの方々は決して増えはすれ、減ってはいた

いと信じてますが……。小生、いや小生等、生意気な事はまだまだ云える年じやありませんが、流腸歴？は相当古く、五年以上になるのです。流腸の他に、どう云うものか「アメ色ゴム」とでも云うのでしようか、うすく弾力性のあるゴムに心をひかれます。僕の持つて居る器具は、まだまだ少く、三〇C Cガラス製流腹器、大型スポイト等です。注入液はグリセリン、石鹼水、それに牛乳やコーヒ、塩水も試した事があります。流腸マニアの方々の便りお待ちしております。又、エネマ・シリンジは当地で見受けられません。もし、大阪、尼崎、神戸方面で売って居る所あれば、お教え下さい。最後になりましたが、岩村様、久利須様、月岡様、花村様、羽村様、諸氏の皆様に再び本誌で接する事を願って止みません。

(尼崎 S・Y生)

九月号、今日、入手しました。先ず御病氣回復の懐しい北原純子さんのお便り拝見しまして、心底からお喜び申し上げます。病後の御体故、余り無理をされずに尙一層、御自愛の程を。一頃の冴えた描き方が何か鈍った様に感じら

## 実写 硯

(ハリツケ) 三態 略号(はり)

大判判印画紙焼付 三枚一組 四〇〇円  
モデル 大塚啓子

れたのは、御病氣の故かも知れません。どうか、つめて書く様な無理はされない様に、何か一頃に比較して、せち辛くなった世相に飽きたらない今日、本誌が永続してゐるといふことは、わたしたちにとって、どれだけ力強い事でしよう。編集後記でも唱えられておりましたが、やはり現在のままの小ざっぱりした白地の雑誌体でいかれた方が無難の様です。全く本誌は心をほのぼのとさせてくれますやはり軽くて上品な(?)アブ物的存在であってほしいものです。探偵物や悪質なアブ物とは異なる故です。さて九月号では本文もバラエティに富む様になり、面白く拝見したのも多かったです。水沢雅美氏の「痛ましき緊縛の女性達」は佳作でした。四十一頁の看護婦の挿画はよかったです。左腕の注射針が、ぐっと深く突き刺さった処なんかは印象に残るものです。菅良太氏の「猩紅罪」もアブ戦記物としては秀れています。後篇が待たれてなりません。七十四頁の挿画も文句ありません。真崎伸一氏の「Hと自称する女」を読みますと、かえって健全な女性の方がHの様な気がします。アブの世界

甲斐仁参案 「涙のダイヤモンド」 略号(なみ)  
四馬孝画 大判判印画紙焼付 二枚一組 三百円

○胃の洗滌 ○ヒマシ油責

甲斐仁参案 『涙のダイヤモンド』 略号(かん)  
四馬孝画 大判判印画紙焼付 三枚一組 四百円

○申し責 ○苦悶のコルセット ○流腸責



の方がノーマルの様な錯覚を起し勝ちです。久米栄氏の「謎の緊縛フォト」は、いよいよ佳境に入って来ました。縛られた婦警の挿画もよかったです。(東一郎)

貴社、愈々御清栄の御事とお喜び申し上げます。さて、私達、男性マゾと致しまして今まで数多く読破しました本誌の内容が余りにもサド傾向の多いものばかりで実に、なげかわしく落たんすることしばしばです。同じサド傾向のもので女性サドの記事なり体験記なりを、もっと数多く発表していただきます様おねがい致します。又、代理部の分譲品の広告が出ていますが、女体緊縛フォトとか写真、責絵とか女体切腹フォトとか浣腸フォト、磔フォト、鼻責めフォトとか残酷なるものばかり出ている様ですが、こちらあたりで全国の男性マゾ諸氏のために女性サジストの男性マゾに対する責め悦虐小説、体験記等、盛沢山の特集号、並びに男性マゾの女性サドよりの被虐小説、奴隷体験記等、いずれも挿画入りにて刊行されたいら、どんなにか素晴らしいことでしょう。ぜひ実現の程を！

(米子 馬曾漢)

いつも最初に読むのは読者通信で、その中に同好の方の文章があると忽ち目を輝かせながら読みます。又、毎号、植村氏の輝シリズを読むのが楽しみです。しかし私は生来の気弱で輝を締めていることが知人にわかることは死にも等しい恥だと思っております。それだけに心から語り合うことの出来る輝友をほしいと思います。読者通信を最初に読むのは、そのためです。私は白輝より赤輝を好みます。布地は晒より天竺のようなごわごわした布地を好むです。いつか読者通信で輝の交換をしたいといっておられました。が、気心のあった友達と交換をする気持はアブニストでなければわからないと思います。私は昨年の夏、やっと自分の夢を実現しました。それは赤輝をしめた姿をカメラにおさめたことです。赤輝姿を人目にさらすのは、あだかも人身御供の様で恥しいけれど、恥しく思いながらも嬉しく感じるのはマゾかも知れない。今年カラーで写したいと思っています。カラーですと白黒にないほど美しく感じさせることでしょう。それを今から楽しみにしています。又、津田進氏の相撲は

### 絹川文代緊縛姿態集

大手札印画紙焼付

○全裸緊縛集 略号(きぬ)

三枚一組 二五〇円

○股間縛三態 略号(きこ)

三枚一組 二五〇円

○全裸高手小手略号(きた)

三枚一組 二五〇円

○緊縛全裸立姿略号(きり)

三枚一組 二五〇円

とても出来ないけれど相撲取りの様に一日中、稽古輝を締めたなら、どんなによいだろうと思います。あの、ごわごわした雲齊稽古輝を思いきり締めてもらったら、どんなによいだろう。いつか週刊誌に江戸川乱歩氏と鴨居羊子嬢の対談で、日本人は赤輝が一番美しいと江戸川氏がいったら、鴨居嬢も、あれはデザインパーとしても美しいと書いてあったのは嬉しかった。もっとも鴨居嬢のスキヤンデイのヒントも、このあたりから生まれたのかも知れない。

(赤井輝樹)

七月号のS・D生氏や水野氏のアクロ同好者の投書を毎月楽しみに貴誌を購読しているとさえ云える小生は日夜、アクロの夢を抱き続けて居ります。それも水野氏の様に訓練中のアクロダンサーのことが大部分です。短い総ゴムのキヤロット・ブラジャー一枚きりの若いアクロダンサーが脂汗を流しうめき声を上げながら猛訓練に耐えている処を想像しております。どうか一日も早くアクロバットの説物を掲載下さる様おねがいいたします。東京の柏山多津夫氏のサ

### 花坂道子緊縛フォト集

大中判印画紙焼付

○全裸緊縛 略号(はな1)

八枚一組 八〇〇円

○股間縛集 略号(はな2)

八枚一組 八〇〇円

○ヌード縛 略号(はな3)

二枚一組 三〇〇円

○股間緊縛 略号(はな4)

二枚一組 三〇〇円



ポーターに関する投書の中に「サポーターでは癖のような緊縛感が味わえませんか」とありますが、普通のサポーターではなくパンツ型のサポーターを着用されては如何でしょうか。小生は永らくパンツ型のものを使用してあります。これは運動具店で買ったものですが形は女物のブリーフの様に前あきがありません。大きさは胴廻り五十二センチ、深さ二十五センチ、裾廻り三十二センチ、股下の巾八・五センチ、横ワキの深さ十四センチという非常に小さなもので、サイズはこれ一種類しか無いものです。生地は綿糸とゴムの細いものとを合わせてメリヤス編にし、裾廻り及び胴廻りにはハコールのゴムテープを縫いつけたものです。そうして、このゴム糸と綿糸で編んだ外に、腰廻りには少し太めのゴムを二本ずつ揃えて二・五ミリ間隔に七十本、縦には臍の両側の部分に二本ずつ揃えて二・五ミリぐらいの間隔で六本、その少し外側に五本、又、後の方にも二本揃えて二センチか二・五センチおきに十四箇所ゴムが編みこんであります。これを御使用になつてみればサポーターでは味わえぬ緊縛感が分り過ぎるほど良く体にこた

えます。小生は着ていますので胴廻り六十七センチですが、このサポーターパンツを半日も着用しますと、胴廻り裾廻りのゴムテープの跡が、くつきりと肌に残り又、メリヤス編みの部分の跡も、はつきりと下腹部に残ります。普通の胴廻り七十五センチぐらいの方でしたら、もっと緊縛感が味わえることと思います。サポーターパンツは、この分と外に綿糸とゴムでメリヤス編みにしただけの薄手のものがありますから、この分を買求めになれば良らしい。どこの運動具店でも売っておりますし、頼めば直ぐ取り寄せてくれます。店によつてはサポーターパンツと云わずにスポーツパンツと云つて居る処もあります。どなたか変わったサポーターを着用になつて居られる方がありましたら誌上で御紹介下さる様おねがいします。

(一愛読者)

○ 猛暑の折にもかかわらず我々に夢と希望を与えてくれるKK誌の編集に日夜奮励努力されている皆様方に心より感謝いたしております。いつも貴誌の新作を手にした時の喜びが余りにも大きいので翌月の分が待遠しく一カ月が非常に

長く感じられます。月刊でなく週刊であつたならと思う程です。(勿論これは無理な話でしょうが) 前から臨時増刊は大変な魅力で毎月でも増刊を出してほしい位で今後発行される増刊号を大いに期待しています。今年は増刊号が多いので大変嬉しく思っているのですがまだその上に、まことに勝手なお願ひですが今後の増刊号の企画の折に、もし出来るものでしたら外国人(特にアメリカ人)の写真や挿絵の特集号を考へていただきたいのです。アメリカでは相当多くの雑誌が出版されているそうですが、私はまだ一度も見る機会に恵まれません。著作権の問題などがあるでしょうが許される範囲内で外誌の写真や絵を転載できぬものでしょうか。(増刊が無理な場合には毎月のグラビヤページの一ページ分でも) 私は白人に対する劣等感が無意識のうちに働いているのでしようか、外国映画に縛りの場面があると、日本のそれよりほるかにつまらぬものであつても、ものすごく興奮をおぼえます。特にアメリカには敗戦による劣等感がある故にか、アメリカ物では特に激しいようです。外国人だ、よそ者だという無責任さや安易な考

えなども手伝つてか、白人の女が縛られ苦しむ情景に優越感を持ち何ともいえぬ快感をおぼえるようです。勿論色々の問題があると思います。たとえば印刷の鮮明さなどですが、外人の縛り、ちよつと毛色の変つた縛りが見られる喜びに比べれば少し位の不鮮明さなど問題にならぬと思います。勝手なお願ひで恐縮ですが御尽力下さい。期待しています。皆様の御健康とKK誌の御発展とを祈ります。

(徳島 KK熱狂生)

○ 毎月毎月本誌の発売される日を待ちわびて二十日すぎには何度か本屋へ見に行き、新刊が出ていると中も見ずに買って帰り一人こっそり楽しんでおります。以前には一カ年分の購読料を送り家へ直送して頂いていたのですが、現在家の事情でそれも都合が悪く毎月本屋へ行くことにしています。今度発売になりました(略号「緊縛」)を是非入手したいのですが、本屋に出で居らず、家へ郵送してもらふ事も出来ずといつて、あきらめきれませんが、入手出来る好い方法はありますか、都合によつては大阪駅まで出向いてもよいのですが、好い方法があればお教え下



さる様に御願ひ致します。

(明石 K・H生)

△お返事▽御住所を書いておられないので誌上にて御返事いたしません。近くの郵便局を利用になつて局当になさると御便利です。御送金の節、〇〇郵便局止にて送れ、と指定下されば私の方ではその郵便局の局止として御送りします。郵便局の当置期間は十日間ありますから、その期間中に局にてお受取り下さればよいのです。その期間中にお受取りにならないと差出人へ返戻されます。

写真部へ、女性でも男性でも、どっちのモデルでもいいですからパレートのタイツ姿の責めをお願い致します。肉体の線が美しく出ているようなモデルでは全裸よりも、その方が興味が深いと思います。それから外国の写真も是非のせて下さい。(東京 O・U生)

〇 八月号の口絵で、四馬孝先生の「ビル街夜景」の縛りはズロース・マニアの私にとっては感激ものでした。美しい女のズロース姿の責め、それも凄惨な光景を南村先生か四馬先生にお願い致します。画の世界でなら全く可能です。それ

がイヤな感じになるのも読者を感じさせるのも作者の芸術感によつて左右されるものと思いますが、貴誌に活躍される先生方でしたらいかなる題材を取り扱つても心配ないと信じます。私も美しい婦女子のズロース・マニアなので、それを主題にした縛絵を是非見たいのです。実際的には御免こうむりたい様な無惨な責め立派な面に昇華できれば決して見づらいものではありません。南村先生の去年の「いけにえ」又、悦特第二の「女体強制浣腸機」もすばらしいものでした。先生の今後の美しい少女のズロース姿を主題にして責めを切に期待致します。それからズロース、それも少女のズロースを沢山面にして下さるよう御願ひ致します。(群馬 峯岸一美)

〇 私は当年二十七才の男です。先日、ある書店で何気なく手に取つて見ました一冊の雑誌、頁を繰つてゆくにつれて私の頬は紅潮し、胸は怪しく騒ぎ始めました。私のことが書かれていた。いや私ではありませぬけれど、私と同じ心を持った人の生息が、さまたまに表現されているのです。物心ついた頃からの私は、死のような孤独感

## 女体緊縛フォトE組

9×13印画紙焼付

- |       |           |        |           |
|-------|-----------|--------|-----------|
| E S 1 | ヌード緊縛集    | E S 6  | あわや寸前     |
| モデル   | 佐賀美智子嬢    | モデル    | 佐賀美智子嬢    |
|       | 三枚一組 二五〇円 |        | 二枚一組 二〇〇円 |
| E S 2 | 全裸悦集      | E S 7  | 剥れたズロース   |
| モデル   | 須川 令子嬢    | モデル    | 佐賀美智子嬢    |
|       | 四枚一組 三〇〇円 |        | 五枚一組 三五〇円 |
| E S 3 | 腎蓋        | E S 8  | 乙女のすべて    |
| モデル   | 佐賀美智子嬢    | モデル    | 花坂 道子嬢    |
|       | 三枚一組 二五〇円 |        | 七枚一組 四五〇円 |
| E S 4 | 酒宴の弄者     | E S 9  | 女学生の縛り    |
| モデル   | 佐賀美智子嬢    | モデル    | 須川 令子嬢    |
|       | 二枚一組 二〇〇円 |        | 二枚一組 二〇〇円 |
| E S 5 | 脱がされる娘    | E S 10 | 緊縛のベッドシーン |
| モデル   | 須川 令子嬢    | モデル    | 佐賀美智子嬢    |
|       | 五枚一組 三五〇円 |        | 六枚一組 四〇〇円 |

に責めさいなまれながら暗い灰色の日々を送つてまいりました。私は早速、その雑誌を買求め、胸躍らせながら一気に読みました。そして私の心は読み終わった瞬間から、死のような孤独感が、すうと消滅しました。私だけではなかつたのだ。友達がいたのだ。同志が呼びかけていてくれたのだ。私は希望の光が、きんさんと私の周囲に輝いているのを、はつきりと感じた。私はアブノーマルな人間ですが、それなりに真実に生きたい願いは絶えず抱いています。どうか私と同じ世界に住んでいらつしや

る多くの方々のお文通をおねがいいたします。(M・K生)

〇 初めてお便り致します。半月程前の事、散歩ついでに古本屋へ入りました。そして店内を見渡す内に目に止つたのが本誌でした。パラパラと頁をくつて居る内に次第に僕の目は本文に吸いつけられたのです。それこそ一目で気に入つたのです。二冊ばかり買って帰りました。僕は五年程前から浣腸に興味を持って居ます。丁度、二年程前に入院中、手術の時、石鹼浣腸を三〇〇〇C程されましたが、その



## 女体浣腸連続フोट

略号(ちよ)

(9×13センチ) 印画紙焼付 十二枚一組 九百円  
モデル 愛川悦子嬢

後の手術に対する不安も忘れた程です。素直に有ったのだらうと思います。さて本誌の内容は素晴らしいですが、以前とくらべますと近頃、浣腸に関する読物が少くなつた様に思います。編集方針が変つたのか、それとも投稿者が無いのでしようか？やはり毎月、一編でも無ければ同マニアの方々も淋しいだらうと思います。初めて

(兵庫 山中生)

七月号をやつと入手、久方振りに同好の志の投書があり、いさゝか喜びを感じました。春先からデニム・ズボンに地肌ワイシャツを着た若い人々が次第にふえ、街を歩くたびにたまらない誘惑を感じます。あのはちきれん様な肉体を責めて見たい。いやあのだくましい肉体に思ふ存分責められたい。そんな空想が脳裏をかすめ、そのたびに独り顔を赤らめてしまうの

です。然し、しばらくとだえていた同好の志の投書を見てもうこの通信欄では男性同士の責め等を求める人の投書は掲載しないのではなかつたかと、諦めて居ただけに本当にホッとしました。植村氏の筆は益々冴え、男貴小説の只一人の作者として奮斗されている事については心から感謝して居ります。益々御健筆をふるわれん事を祈つて居ります。夏も近づき海辺に住む方々は今年も裸姿を満喫される事でしょう。真白な六尺裸をきりりと締めて赤銅色に日焼けした筋肉隆々たる男性に縄尻を取られて砂浜を追い立てられ、松林に吊るされ責められたらと、こんな考えが浮ぶのも、夏を目の前にしたためでしょう。本当に思ふ存分、責められて見たい。こんな思ひを本誌を愛読することでも少しでも満たさねばならない淋しさは、本当につらいものです。同好の友よ、せめて文通だけでもしたいものです。では皆様の健康を祈つて。

(愛知 山本)

昭和三十四年七月号を手にとつてみて、その続後感といったところを書いてみました。強いて掲載を望むものではありませんがその代りに私のみならず全読者の希望を貴誌に反映するよう編集方針の一助として頂きたい。読者あつてこそKKもその存在価値があるといふべきでしょう。特に貴誌のよくな特種な存在である雑誌にはそれが言えましよう。さて二大特集のうちの一つ「謎のフオート」はそのストーリーから、東映の「警視庁ものシリーズ」か、又は「ラジオ東京」の「犯人(ホシ)」を挙げる」を範にとつたとも思える好読物で、今流行の推理小説の味も多分に入つて、大ヒットというところ。久苗木栄氏の御健筆を祈ります。それに比較して「満月の島」は雲泥の差で、この種のものには食傷気味なのです。続いて藤木仙次氏の「恐怖の悪戯」も仲々現実的で日活の麻葉ギヤング映画を思わせる感じがします。いずれにせよ私は実際にありそうな点に興味をもつて読むのです。最後に松井頼子さんの「自分をだかにする」の二十七頁の最下段の左から十四行目の「この人が酔うと下地

つ子を柱に縛りつけて、いじめる癖があつたのだ。裸を長く引いた出の衣裳で、つぶし島田のびんが乱れたその人が美しい目を酔いでトロロとさせて半玉をいじめている姿を想像すると、身がしまるような思いがしたが、現実に見たことはなかつた。「裸にして赤い紐で縛ってやるのさ。すると若い妓何だかよけい憎らしくなつて、ヒイヒイ泣かせてみたくなるのさ」そんなことを云っていた」の文章は三十頁の挿入絵と共に、私のもの

## 【G】組 緊縛フオート

|           |         |       |
|-----------|---------|-------|
| 判紙焼付      | 一枚一組    | 一五〇円  |
| 中画焼付      | 五枚五組    | 六〇〇円  |
| 大印        | 十枚十組    | 一〇〇〇円 |
| G1 鉄鎖と柔肌  | (高瀬 忍)  |       |
| G2 股間縛り正面 | (高瀬 忍)  |       |
| G3 海老晒し   | (萩千恵子)  |       |
| G4 羞紅の椅子  | (菅登紀子)  |       |
| G5 量感の帯   | (伊吹真佐子) |       |
| G6 アイデア   | (萩千恵子)  |       |
| G7 叫喚の森   | (伊吹真佐子) |       |
| G8 全裸目隠し  | (村田那美子) |       |
| G9 優すがた   | (花坂道子)  |       |
| G10 開股一番  | (萩千恵子)  |       |



とても好むところです。私が仮に女に生れていれば、半玉として、やれ三味線のひき方がまずい。長唄の稽古不足だ。お客の接待が下手だという理由でキレイドコロに折檻されてみたい。とにかく、この挿入絵は私のそういう気持ちで満ちたし、私はこの絵の半玉に自分になりきって、姉さん芸者にいじめられてみる空想を貴誌によって味わうのである。誰かが、このような花柳界の事を、やや誇張したストーリーにして読ませて頂けるとよいのですが、私は、そのようなものを書くより、読んで楽しむ側の方に席を占めたい。

(東京 阿倍能磨)

読者通信にも屢々見られるように最近のKK本誌は多分にサド的嗜好が強く打出されています。そのことは私にとつては有難い傾向なのですが、いろいろの傾向の人達の心の拠り処であるためには、マゾ、浣腸、切腹等の記事も誌面を飾るべきでしょう。私はKKがサド傾向を強く示すのは読者層の反映と共に特殊の傾向の人々の意志の発表が乏しいせいだと思つてです。原稿のないものは載せようもないでしょうし、あつても掲載

を憚るものでは仕方がないでしょう。公開の限度まで欲求を昇華させた原稿がどんどん寄せられればよいのだらうと思うのですが。8月号もまたサド中心の出来栄で私は満足しています。松井縊子さんの告白「自分をハダカにする」は毎号魅了される作品です。奔放な筆致の中に心をひたす潤いがあり、共感を得たり反発を感じたり常に最も印象に残る記事なので、柴崎黎子さんの「王宮の浣腸室」は浣腸からはいささか離れたようですが正に佳境というべき好調さでした。牧高志氏のスナップ・シリーズが全巻の終りというのは淋しい気がします。近々に装を新にして再登場して下さいよう期待しています。この他、藤山秀緒、海野繁朗、三条卓史、久苗木栄、嵯峨紀世、藤木仙治の各氏の充実した名文には大いに愉んだものでした。グラビヤフットでは絹川さんが変らぬ容姿を誇っており、又花坂さんの腹部にはドキリとする情感がありました。目次カットの良さはいうまでもありません。今回もまた私の文章が十六ページもの誌面を頂戴しており感激しております。続きを繰めねばと思つてい

## 代理部案内

☆最新作女体緊縛写真

大手札(9×13)印画紙焼付

凌辱 略号(れん)

愛川悦子、辻村 隆

連続12枚1組 八〇〇円

浴室股間縛

愛川悦子 略号(よく)

3枚1組 二五〇円

悦虐雨さらし

愛川悦子 略号(あめ)

3枚1組 二五〇円

剥れた腰巻

花坂道子 略号(まき)

3枚1組 二五〇円

全裸強烈股間縛り

花坂道子 略号(きよう)

5枚1組 四〇〇円

ヌード縛り五態

益田房子 略号(ふさこ)

5枚1組 四〇〇円

寢室の苦悶

益田房子 略号(くもん)

3枚1組 二五〇円

腰元拷問

村井知可子 略号(もん)

5枚1組 四〇〇円

湯上りの折檻

大塚啓子 略号(せつ)

3枚1組 二五〇円

行燈(アンドン)

愛川悦子 略号(あん)

3枚1組 二五〇円

いたぶり

略号(いた)

春日ルミ、愛川悦子

3枚1組 三〇〇円

妖艶閨の縛しめ

田中芳代 略号(ねや)

5枚1組 四〇〇円

太股縛り三態

大塚啓子 略号(ふと)

3枚1組 二五〇円



て途中で浄書をやめています。今月の末にはお送りできるかと思いますが、何卒あしからず御了承願います。  
(東京 近藤一)

○ 小生三十才になるマゾヒストで女性の下着にあこがれをもつものです。サディストの御婦人の方で小生の女主人として厳しく命令し又優しくリードして下さい方がおいででしたらお呼びかけ下さい。小生体に自信のないせいか、ムチ打や吊り責等は好みませが、縛られる事は好きです。荒縄やクサリ、腰紐、伊達巻、しこき等でガシガシに縛られたいと思っています。次に服装ですが全裸にもむろんなりますが、出来ればパンティ、ブラジャー、コルセット、メンスパンドを着用してプレイを行いたいと願っております。次に小生の好きな責められ方を参考までに述べますと 一、パンティ（又はメンスパンド）を穿かせられる。二、エプロンをして女主人監視の下に雑巾がけや洗濯、炊事等をいちいち口汚くのしられながらさせられる。三、コルセットで胸をしめられて人間馬、人間犬としての厳しい調教を受ける。四、後手に縛られて踏みつけられたり

足舐めや足蹴にされて、逆さに吊られて汚物をぶっかけられる。五、パンティでサルグツワをされてエビ責、擦り責、ローソク責等のお仕置を受ける。六、柱に縛りつけられて便器として使用される。七、御婦人の方の下着類を色々着用して女主人の好みの御仕置を受ける  
(名古屋 酒井二三夫)

○ 私がいつから肥満体に対する強い憧憬と郷愁を感じるようになったかは自分自身にも、よく分らない。唯一つ考えられることは亡き父への潜在意識がはたらいている様に思えることを否定することは出来ない。私の父は以前、地方で数々の役職についており、堂々たる肥満体の持主であった。父は未だ子の私を特別可愛がってくれた然し戦時中、ふとした病がもとであっけなくこの世を去った。当時兵役にあった私は父の死に目に逢うことが出来なかった。そのことが父を思い出し、私の情に一層の拍車をかけることになったのではなからうか。父は亡くなった。然し私の胸には生きた第二第三の父への郷愁が脈々と生きている様に思われる。例えば今でも街の行きずりによくみかける中年や初老の

## 腰元全裸折檻

村井知可子 略号(せつかん)

3枚1組 二五〇円

## 振袖哀歌

花坂道子 略号(ふり)

3枚1組 二五〇円

## 股間縛り三態

大塚啓子 略号(こか)

3枚1組 二五〇円

## 股間縛り五態

益田房子 略号(ます)

5枚1組 四〇〇円

## 全裸高手小手

愛川悦子 略号(たか)

3枚1組 二五〇円

## 女学生凌辱図絵

川辺砂登子 略号(りよ)

5枚1組 四〇〇円

## 賭 機(カケニエ)

愛川悦子 略号(かけ)

3枚1組 二五〇円

御注文次第厳重包装の上急送申し上げます。

お申込は 天星社代理部へ

堂々とした恰幅の人を見る時、私はきまって父に対すると同じようなつかしきとしたしきを感じるのである。真の男の魅力、それは単純に言えば清潔感、健康感、そして重量感にあるのではなからうか。例えば湯上りの浴衣、ランニングシャツ、きりりとした純白の褲、小麦色に日焼けした膚や顔。そしてそれが重量感にあふれたダイナミックな肥満体であってこそ真の男の魅力が発揮できる。こんな夢を満してくれる人の通信を望むや切である。私はこのような人と今のような殺バツな世の中に真実と理解と友情をもって楽しく過ごすことができれば、どれ程幸福かと思えます。私は中年の商事会社員、中肉中背、趣味は旅行、映画、音楽、写真、園芸です。何卒よろしく。  
(神奈川 S生)

○ 九月号読者通信にて登場された大阪の山川さん。私が縛りマニア



を自意識したのは勿論小学校時代  
若い女の足のフェチを感じたのも  
その頃。中学時代は専らメモリス  
トでした。映画雑誌(大正時代)  
大学時代は案外平凡で専ら映画演  
劇でした。(法科、心理、哲学、  
行政)よく勉強しました。一番華  
やかな頃は、終戦というボロ負け  
の時でした。「ボクの責め方」は  
この頃を基調とした作です。会社  
は約七社創立時代が頂上で三年前  
病(恥かし乍ら高血圧、中風の一  
種)を得てからも、一心身半人前  
でも、グングン延びています。もう  
五十才を越してゐるのですが、今後  
はますます合理的発展をする決心  
只今車はありません。(オーズモ  
ビル、ノンクラッチ49年が最後、  
英ポビニラーホードも昨年入院と  
共に手放しました。)カメラは永  
年キネエクザクタ、メーヤ1.9、  
先月8ミリヤシカEIIIと映写機を  
買わされました。テーブはマクセ  
ル。プレーヤーはG・E(米)と  
ガラード(英)アンブーは2A3  
WP(ダブル・プシユブル)目下  
カラー・トーカー・ワイドと取組  
中、エリコンはビクター一台(米  
国)一台(日本ビクター三菱)面  
白いものを作りましょう。御協力  
下さい。劇団は一つ私が持ってま

す。(勿論マニア向)只今北海道  
巡業中(ドウトンポリ・ヌードシ  
ョー、東京日舞ヌードショー)家  
族は母(75才)と妻との三人暮らし。  
目下の商売は喫茶、食堂、旅館、  
会社はたつた一つになりました。  
(装飾金物)気が向いたらデンワ  
下さい。又来て下さい。喫茶の方  
は東映のニューフェイス(ミス・  
コットン)がいます。従業員十四  
人皆若い女です。但しマニア関係  
はありません。それが私のイデオ  
ロギーであり信念です。  
(大阪 宝塚二三夫)

「第二伸」大阪、山川生氏へ――  
現在私のマニア行動ゾーンと嗜好  
変遷をおしらせして貴殿へのレポ  
ートと供御参考。私はいつでも逢  
います。参考資料供示します。一  
番手近な話。今日のマニア相手の  
女、「ボクの責め方」の相手です  
が、あの当時の文子(17才)が本  
年21才で相不変いかなれば秘書的  
役割を果たしてくれそうです。その後、  
中絶中の「天は知っている」の孝  
子が同じく22才になって文子のあ  
とを追隨して尽してくれています。  
今一番新しい女、かよ子(24才)  
これは私のマニア氣質を十分知り  
足のマニアも理解した娘です。他  
に劇団の中、看護婦(入院中に)

## 美貌汚辱

△鼻責めを中心とした▽

大手札型印画紙焼付

略号(はせ)

三枚一組 二五〇円

誇高き美貌の中心である鼻に  
対する責めの中、足の指にて鼻を  
ひねり上げ、踵にて鼻を押しひ  
しぐという侮辱のテーマを取り  
上げました。これは「鼻責」二  
十数枚の中から選んだ素晴らしい  
フォトです。(モデル絹川文代)

人妻の(「ボクの責め方」に出て  
いる私のビジネス・ワイフ和子)  
等々は追って書きます。N  
子が人妻になって、又ボンボン腹  
をつき出して――の等々。私の嗜  
好変遷)のマニア道昇華レポート  
ですが。(宝塚生)

暑中御見舞申し上げます。「奇  
ク」を毎月楽しくよんで居ります。  
こう暑いと編集の方々も大変だろ  
うと御察し致します。以前に生活  
合理化グループの女性の方からパ  
ンティについての報告が、この欄  
にありました。昨今のように暑  
いとパンツにステッコにズボンと  
いう男性のスタイルには全くだ

## 特高拷問

△破られた  
ズロースから▽

大手札型印画紙焼付

略号(とく)

三枚一組二五〇円

椅子の上に坐らされ足を高々  
と挙げて八の字に開いて左右に  
固定された美貌の若い女が、特  
高の拷問を受けている場面。只  
僅かに身に残ったズロースさえ  
もズタズタに引き裂かれた哀れ  
な姿。(モデル絹川文代)

やになります。今まであまり女性  
の下着には興味はなかったのだ  
が、思いきってスリッパを着てみ  
ましたら大変快適です。特に寝巻  
は一切やめてスリッパを用いてい  
るのですが、これは大変合理的だ  
と思います。恥しいなんて考えな  
いで合理的なものは、どんどんと  
り入れてゆくべきだと思います。  
マゾものも近々分譲するという編  
集部のお知らせを長くして待つ  
ています。(大阪 中瀬一夫)

○  
僕は会社に働いているろう学校  
出身の二十五才の体格のよいサラ  
リーマンです。毎号本誌を楽しく  
愛読していますが、仕事の関係で



海水浴や温泉へも行けず、耳が聞えないためかムードを楽しむ女性の話相手もないので日頃悶々の日を送っております。ろう者の味気なさを慰めて下さる下着デザイナー鴨居羊子さんのファン、特に七色パンティ愛用の方居ませんか。下着フェチズムに興味ある若い女性との文通交際を望みます。

(東京 川瀬照昭)

○ 夜毎のプレイに疲れ果てて私は眩血してしまいました。でも幸に大した事もなく再び立ち直り、それまで以上に激しいプレイへの熱情をつのらせています。やまと筆をとる事が出来るようになりまして、近いうちにドイツ人の混血娘が母の国日本の作法に従って地下壕に切腹する物語りをお送り致します。これには英人の女スパイも登場させ、責め、鞭打ちから銃殺、それに切腹への幻想などを織り込むつもりです。

(東京 藤山秀緒)

○ 奇巧の発展を心から喜んでおります。私はかなり以前からの読者で此の欄へも二、三回投書させて頂いた事もあります。男性への責めに興味をもっているS傾向の

者です。最近では横村奏氏の御作を楽しく拝見しておりますが、九月号の菅良太氏の御作「猩紅匪」はいかにも我が意を得たりと喜ばしく拝見し次号をより楽しみにしています。想像の世界だけでは、とても淫虐な責めを好んでいますが、実際のプレイに於ては、あまりひどい肉体への苦痛を加える事は好んでいません。それより精神的なものを好んでいます。例えば相手の方は手足の自由を奪った上で、其の方の好んでおられるような人物が、むごい拷問に逢っている絵等を二、三枚見せつけて「どうだ、貴様もこんな目にあわしてやるぞ、いいな」といったようにして恐怖心を起させたり、屈辱感を抱かせたりするのです。然しその楽しみみの為には家庭人、社会人としての在り方をなおざりしたり度を超して傷を負わしたり血を見たり、あとで病気を引き起す因となるような事は決して致しません。守るべきはよく守って楽しみあうものと心得えています。尚私はすでに五十二才という初老の年輩ですが、それだけに又自制心も強いと自負しています。

(四日市 江木清)

本誌の内容は、中々最近とみに活況を呈して、名作も多く大いにたのしみものと思えます。それにもまして口絵や写真に於ては全く独特の妙味があり、全くモンクのつけようもありません。とくに喜しいことはモデル諸嬢が近來非常にアクチングが上手になったことです。(サルグツワをはめることによつて表情が一そう美化される)むかしは只目をつぶっているだけのものが多くて味もソツケもなかったものですが、今は面目一新して、その心理描写まで表現できる

## ○ 浣腸フオート

大手札型印画紙焼付

四枚一組三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちせ)

紅白まんだらの扱帯が後手の手首に喰い込んで苦痛にゆがむ文代嬢の美貌。身動きもできない捕われの姿態に襲いかかる三〇〇Cの硝子製浣腸器。空しい抵抗をあざ笑うエネマシリンジのゴム球。イルリガートルの嘴管。浣腸が終って便意の苦痛と戦う表情。文代嬢熱演の浣腸責フオート。

## ○ 浣腸責アツプ

大手札型印画紙焼付

四枚一組三〇〇円

モデル 絹川文代 略号(ちあ)

浣腸芸術という言葉があるとしたら、浣腸の苦痛に悶える姿態に美しさを発見するという狙いが、それに該当するかも知れない。紐と浣腸器のかもしれない。美しきコントラスト。白い肌に妖しくまといつく黒色のゴム管。若い女性の生理に激しい変動を期待するグリセリン溶液。夢の如き浣腸責アツプ。

ようになったのは御同慶にたえません。そこで欲をいうわけですが筆画と写真の結婚画？などは如何でしょうか。背景は普通の絵で描いて、そこへモデルさんのそれぞれすぐれた演技のものを適当に配置するわけです。写真ばかりですと、つい撮影する「場」に制限されて「旅館の一室」であつたり、人目なき山野であつたり、どうもドラマ的気分がしません。背景を絵にすれば、ありとあらゆる情景が創作されるわけです。そして是非共適切な説明文をつけることで



## 懸賞原稿募集

☆ 規定 ☆ ☆ 賞金 ☆

## 告白と手記と体験記

|    |      |     |     |
|----|------|-----|-----|
| 優作 | 一篇に付 | 一万円 | 若干篇 |
| 秀作 | 一篇に付 | 五千元 | 若干篇 |
| 佳作 | 一篇に付 | 二千元 | 若干篇 |

- 一、必ず未発表の自作であること。
- 一、枚数に制限はありません。
- 一、原稿の第一頁に「懸賞告白」と朱記して下さい。原稿の返却は勝手ながら致しかねます。
- 一、締切は別に定めません。入選作は順次最近号誌上に発表いたします。
- 一、賞金は発表と同時に送りたいします。

す。アラベスタを求めた時、どうもタイトルがつまらなかつたので一枚一枚自分好みの小説的説明をつけてみました。ものすごく写真の内容が出てきて面白いものになりました。それから口絵（写真可）で「職業別縛り方教室」といったシリーズをのせて下さい。バスガール、カンゴ婦、アルサロ等のウエイトレス、ダンサー、歌手、女優、婦警等々、それぞれの特長を生かしていかにか想定し、どんな風に縛り上げ、どう責めるか、興味シンシンです。バスガールなどは悪運転手にカラのバスにのせ

られて、どこかへさらわれて行く所などは絵になりませんか。ウエイトレスは映画でもよく出ます。麻薬団に囚われた等は平凡でしうか。婦警などはそっくりスリライ小説です。まだいろいろ考えもありますが、手近な所で行かしようか——。（東京 小原良）

二伸

すのです。本誌にもよくのります。が、ガンジガラメとか亀甲シバリとか、彼女等を荷物のようにジャカジャカ縛るのは「ニワトリを裂くに牛刀を用いる」といった不自然さを感じることがあります。といて否定しているのではありません。縄目の美しさは充分愛しております。これでもこれでもか、と括弧でどうにもならない状態にしてしまおうという所にも男性としての喜びは充分にあるものです。ことに現今のように女性が強くなりますと、余計そのレジスタンスとして、コテンコテンに縛って（必要以上に）もう逃げられられない（どうなとかってにして）というアキラメの形になっていてこそ、ザミミロといったダイゴ味を味えます。（ムチで打たなくても、それだけで充分責めている）そこで（前文元長深謝）右の反対にサラリと縛った美しさにアコガレています。たとえばハンカチ一枚、ネクタイ一本で後手にまわした手首をしつかりと括れば、もう彼女は逃げられない姿になってしまします。革ベルト（バックルがよい）でクッリと胸を一捲きしただけで、すつかりカンネンしてしまします。そこで彼女の体の線の美しさが生

き生きた表れてきます。勿論全裸体であるべきです。（サルグツワは絶対忘れないこと）サルグツワは女性を縛ったらずはめなければならぬ憲法です。ガンジガラメ式ともう一つ至極簡素な材料で縛る方式をも御一考頂ければ幸いです。（ハダカに限らず和洋諸装工夫されて然るべきです）終りに女性を責めるといふと、馬鹿の一つ覚えのように、やたらにムチで打ちまくりますが、あまり芸がなさすぎます。捕えて、縛って、脱がされるといふ希望？をもたせて、さんざんもがかせて（これがタマラナイ）ついに、もうダメですと観念してグツタリとなつたシンカン（花坂さんがウマイ）こそ最上の「責」だと思っております。縛りの鉄則、「後手であること」「サルグツワをはめること」

（小原 良）

△伝言板▽各種マゾフォト撮影してありますので、御希望の方には焼増いたします故、返信料同封の上御照会下さればお返事いたします。男性モデルを募ります。略歴身長体重記載、写真同封にてお申込願います。折返し詳細お便りします。

（編集部）